岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第580集

飯岡才川（いいおかさいかわ）遺跡第16次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

2011

盛岡市都市整備部盛岡南整備課
(財)岩手県文化振興事業団

飯岡才川遺跡第16次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、盛岡南新都市土地区画整理事業に関連して平成21年度に発掘調査された盛岡市飯岡才川遺跡第16次調査の成果をまとめたものです。

今回の調査では、縄文時代の陥し穴、平安時代の村の跡などが発見されています。

特に注目されるのは、平安時代の村の跡で、７ｍを超える大型住居跡や、それを囲うかのような立派な溝跡が発見されました。これまでの調査結果から、今回の調査区が当時の飯岡才川村の中心であったと推測されます。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成23年２月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　　池　田　克　典

例　　言

1　本報告書は、岩手県盛岡市飯岡新田２地割39－3ほかに所在する飯岡才川遺跡第16次発掘調査の結果を収録したものである。

2　今回の調査は、盛岡南新都市土地区画整理事業に伴う事前の発掘調査である。調査は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と盛岡市都市整備部盛岡南整備課の協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。

3　岩手県遺跡台帳に登録される遺跡番号はＬＥ16－2291、遺跡略号はＩＳＷ－09－16である。

4　発掘調査期間、担当者、調査面積は次の通りである。

平成21年９月１日～12月４日／金子昭彦・藤原大輔／5,921㎡

5　調査箇所は二地点に分かれ、西区（4,552㎡）、東区（1,369㎡）と呼称した（第３図）。

6　室内整理期間と担当者は、次の通りである。

平成21年11月１日～平成21年11月30日（作業員のみ）

平成22年２月１日～平成22年３月31日　藤原大輔

7　報告書は金子が執筆したが、第Ⅰ章は委託者の原稿を元に作成した。

8　遺構名は、盛岡市教育委員会の命名方法に準拠した。略号は以下の通り、番号は三桁で付け、第15次調査からの続き番号である。

ＲＡ→竪穴住居跡、ＲＢ→掘立柱建物跡、ＲＤ→土坑、ＲＧ→溝跡。

9　遺物の鑑定および保存処理は、次の機関に委託した。

石質鑑定：花崗岩研究会、炭化材樹種同定：阿部利吉（前岩手県木炭協会）、

鉄製品保存処理：岩手県立博物館

10　報告書作成にあたり、次の方々に御協力・御指導いただいた（敬称略）。

小林　克（秋田県埋蔵文化財センター）、室野秀文・神原雄一郎・菊地幸裕・今野公顕（盛岡市教育委員会）

11　調査成果はこれまでに現地公開資料や略報（「平成21年度発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第571集）に発表してきたが、本書の内容が優先するものである。

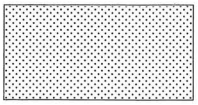
12　調査で得られた一切の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

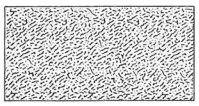
13　遺構等の平面位置は、平面直角座標第Ⅹ系を利用している（座標値は第３図参照）。座標値は、日本測地系に基づく。基準杭は、当方の希望の場所に委託者に設置していただいた。

14　土層の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を参考にした。

15　参考文献は、それぞれの章、節、項の後に記している。

16　遺構内出土遺物も、遺物の章で記載したが、縮尺を落とした集成図も別に示した（第38～44図）。


焼土・黒色処理


スリ面

Ｐ：土器

Ｓ：石

目　　次

報告書抄録

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　立地と環境 …… 1

1　位置・地形・調査範囲・現況 …… 1

2　基本層序と検出・出土状況 …… 1

3　これまでの調査と周辺の遺跡 …… 3

Ⅲ　調査・整理の方法 …… 6

Ⅳ　遺　　構 …… 7

1　概　　要 …… 7

2　竪穴住居跡 …… 7

3　掘立柱建物跡 …… 16

4　土　　坑 …… 17

5　溝　　跡 …… 29

Ⅴ　遺　　物 …… 72

表目次

第1表　新旧遺構名対応表 …… 6

図版目次

第1図　遺跡の位置 …… 2
第2図　地形分類図 …… 3
第3図　これまでと今回の調査範囲 …… 4
第4図　これまでに検出された遺構 …… 5
第5図　東区周辺の遺構 …… 32
第6図　東区全体図 …… 33
第7図　西区全体図 …… 34
第8図　RA008・018住居跡 …… 35
第9図　RA045住居跡（1） …… 36
第10図　RA045住居跡（2） …… 37
第11図　RA046住居跡 …… 38
第12図　RA047住居跡（1） …… 39
第13図　RA047住居跡（2） …… 40
第14図　RA047住居跡（3） …… 41
第15図　RA048住居跡（1） …… 42
第16図　RA048住居跡（2） …… 43
第17図　RA049住居跡（1） …… 44
第18図　RA049住居跡（2） …… 45
第19図　RA050住居跡（1） …… 46
第20図　RA050住居跡（2） …… 47
第21図　RA050住居跡（3） …… 48
第22図　RA051住居跡、RB009掘立柱建物跡 … 49

第23図　ＲＢ019掘立柱建物跡（１）…… 50
第24図　ＲＢ019掘立柱建物跡（２）…… 51
第25図　ＲＢ020掘立柱建物跡 …… 52
第26図　ＲＤ160・161土坑 …… 53
第27図　ＲＤ162・163土坑 …… 54
第28図　ＲＤ164・165土坑 …… 55
第29図　ＲＤ166・167土坑 …… 56
第30図　ＲＤ168・169土坑 …… 57
第31図　ＲＤ170・171土坑 …… 58
第32図　ＲＤ172～175土坑 …… 59
第33図　ＲＤ176～179土坑 …… 60
第34図　ＲＤ180～185土坑 …… 61
第35図　ＲＤ186～190土坑 …… 62
第36図　ＲＧ039溝跡（１） …… 63
第37図　ＲＧ039溝跡（２）、ＲＧ062溝跡 …… 64
第38図　ＲＡ008・018住居跡出土遺物 …… 65
第39図　ＲＡ045・046住居跡、
ＲＡ047住居跡（１）出土遺物 …… 66
第40図　ＲＡ047住居跡（２）、ＲＡ048住居跡、
ＲＡ049住居跡（１）出土遺物（土器・礫石器・土製品・鉄製品）…… 67
第41図　ＲＡ049住居跡（２）出土遺物 …… 68
第42図　ＲＡ050住居跡出土遺物 …… 69
第43図　ＲＡ051住居跡、ＲＢ019掘立柱建物跡、
ＲＤ171・173～176土坑出土遺物 …… 70
第44図　ＲＤ177・178・181・183・189・190土坑、
ＲＧ039溝跡出土遺物 …… 71
第45図　土師器（１）…… 73
第46図　土師器（２）…… 74
第47図　土師器（３）…… 75
第48図　土師器（４）…… 76
第49図　土師器（５）…… 77
第50図　土師器（６）…… 78
第51図　土師器（７）…… 79
第52図　土師器（８）…… 80
第53図　土師器（９）、須恵器（１）…… 81
第54図　須恵器（２）…… 82
第55図　須恵器（３）…… 83
第56図　須恵器（４）…… 84
第57図　須恵器（５）…… 85
第58図　須恵器（６）…… 86
第59図　須恵器（７）…… 87
第60図　土製品、石器、鉄製品…… 88

写真図版目次

写真図版１　遺跡遠景、西区全景 …… 91
写真図版２　東区遠景、東区全景 …… 92
写真図版３　調査前風景（東・西区）…… 93
写真図版４　ＲＡ008・018住居跡 …… 94
写真図版５　ＲＡ045住居跡（１）…… 95
写真図版６　ＲＡ045住居跡（２）…… 96
写真図版７　ＲＡ046住居跡（１）…… 97
写真図版８　ＲＡ046住居跡（２）…… 98
写真図版９　ＲＡ047住居跡（１）…… 99
写真図版10　ＲＡ047住居跡（２）…… 100
写真図版11　ＲＡ047住居跡（３）…… 101
写真図版12　ＲＡ047住居跡（４）…… 102
写真図版13　ＲＡ047住居跡（５）…… 103
写真図版14　ＲＡ048住居跡（１）…… 104
写真図版15　ＲＡ048住居跡（２）…… 105
写真図版16　ＲＡ048住居跡（３）、
ＲＡ049住居跡（１）…… 106
写真図版17　ＲＡ049住居跡（２）…… 107
写真図版18　ＲＡ049住居跡（３）…… 108
写真図版19　ＲＡ050住居跡（１）…… 109
写真図版20　ＲＡ050住居跡（２）…… 110
写真図版21　ＲＡ050住居跡（３）、
ＲＡ051住居跡 …… 111
写真図版22　ＲＢ009掘立柱建物跡、
ＲＢ019掘立柱建物跡（１）…… 112
写真図版23　ＲＢ019掘立柱建物跡（２）…… 113
写真図版24　ＲＢ019掘立柱建物跡（３）、
ＲＢ020掘立柱建物跡（１）…… 114
写真図版25　ＲＢ020掘立柱建物跡（２）…… 115
写真図版26　ＲＤ160～162土坑 …… 116
写真図版27　ＲＤ163～166土坑 …… 117
写真図版28　ＲＤ167～170土坑 …… 118
写真図版29　ＲＤ171土坑（１）…… 119
写真図版30　ＲＤ171土坑（２）、
ＲＤ172・173土坑 …… 120
写真図版31　ＲＤ174～176土坑 …… 121
写真図版32　ＲＤ177～179土坑 …… 122
写真図版33　ＲＤ180～183土坑 …… 123

写真図版34　ＲＤ184～187土坑 …… 124
写真図版35　ＲＤ188～190土坑 …… 125
写真図版36　ＲＧ039溝跡（１） …… 126
写真図版37　ＲＧ039溝跡（２） …… 127
写真図版38　ＲＧ062溝跡、旧河道（才川） …… 128
写真図版39　調査区全景（１）…… 129
写真図版40　調査区全景（２）…… 130
写真図版41　土師器（１）…… 131
写真図版42　土師器（２）…… 132
写真図版43　土師器（３）…… 133
写真図版44　土師器（４）…… 134
写真図版45　土師器（５）、須恵器（１）…… 135
写真図版46　須恵器（２）…… 136
写真図版47　須恵器（３）…… 137
写真図版48　須恵器（４）…… 138
写真図版49　石器（１） …… 139
写真図版50　石器（２）、土製品 …… 140
写真図版51　鉄製品 …… 141

報告書抄録

ふりがな	いいおかさいかわいせきだいじゅうろくじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	飯岡才川遺跡第16次発掘調査報告書
副書名	盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第580集
編著者名	金子昭彦
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL(019) 638－9001
発行年月日	2011年2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
いいおかさいかわいせき 飯岡才川遺跡 (第16次)	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 いいおかしんでんにちわり 飯岡新田2地割 39－3ほか	03201	LE16－2291	39度 40分 45秒	141度 08分 04秒	2009.09.01～ 2009.12.04	5,921㎡	盛岡南新都市 土地区画整理 事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
飯岡才川遺跡 (第16次)	狩猟場	縄文時代	陥し穴状遺構10基	石器剥片1点	飯岡才川に沿って、東西方向に連綿と続き、対岸の細谷地遺跡にも認められる。
	集落	平安時代	竪穴住居跡9棟 (2棟は既調査分の続き) 掘立柱建物跡3棟 (1棟は既調査分の続き) 土坑21基 溝跡2条 (1条は既調査分の続き)	土器大コンテナ3箱 (土師器30,996g、須恵器9,027g) 土製品6点(羽口1点、不明1点、焼粘土塊4点) 砥石12点 鉄製品3点(刀子2点、釘？1点)、鉄滓2点	本遺跡の平安時代集落跡の中心。一辺7mを超える大型住居跡。総柱掘立柱建物跡1棟。大型住居跡を区画するかのような溝跡。墨書、刻書土器多数。

要約

飯岡才川遺跡は、東流する飯岡才川を南限とし、周囲を湿地、旧河道に囲まれた沖積段丘上に立地する東西に長い遺跡である。

これまでの調査で、飯岡才川に沿って縄文時代の陥し穴が掘られ、東端を中心に平安時代の集落が営まれ、さらに、奈良時代を中心にした時期には、北側に隣接する飯岡沢田遺跡の続きで、遺跡の北端に古墳が作られたことがわかっている。

今回の調査区は、遺跡南端の中央(西区)と東端(東区)に相当し、これまでの調査結果に符合する、縄文時代の陥し穴と平安時代の集落跡が検出された。

平安時代の集落跡は、今回調査区の北側を調査しないと全容がつかめないが、湿地に隣接する東区付近は、南側に隣接する細谷地遺跡も含めて、多数の竪穴住居跡が検出されており、この地域の中心的な場所であった可能性が高い。

Ⅰ　調査に至る経過

盛岡南新都市土地区画整理事業は、平成２年９月に岩手県、盛岡市、都南村（当時）の三者が地域振興整備公団（現、独立行政法人都市再生機構）に対して事業要請を行い、これを受けて公団が実施計画を作成した。平成３年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可が下り、平成３年度から面積約313haを対象とした土地区画整理事業が実施されることとなった。

この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取扱についても協議が重ねられた。その結果、本調査に関しては、盛岡市教育委員会が試掘調査を行って本調査を必要とする範囲を確定した上で、（財）岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。

飯岡才川遺跡第16次調査については、岩手県教育委員会が協議の結果、平成22年度の事業として確定した。これを受け、平成21年５月１日に盛岡市長との間で、委託契約を締結した。

Ⅱ　立地と環境

１　位置・地形・調査範囲・現況

盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅から南に約２kmに位置し（第１図）、雫石川によって形成された沖積段丘上および周囲の旧河道に立地する。推定面積は約62,000㎡、標高は120～124mである。

本遺跡は、東流する飯岡才川を南限とし、北東～東限は湿地、北西限は旧河道とする沖積段丘上に立地しているらしいが（第２図）、沖積段丘上にも小規模な旧河道痕跡が認められる。

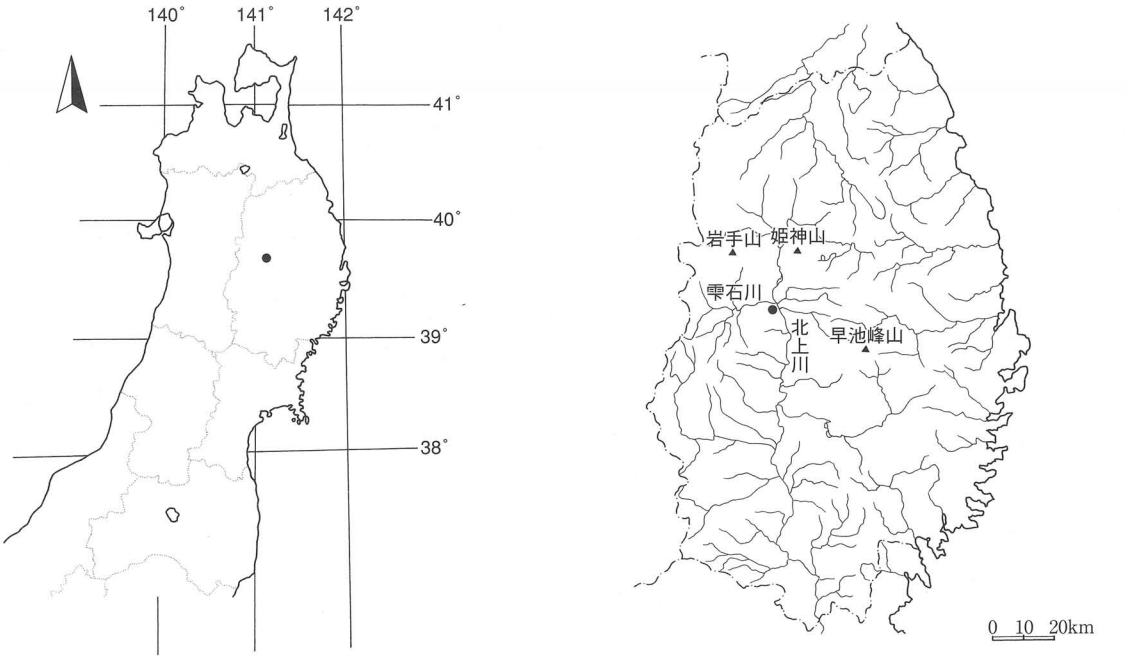
今回の調査区は第３図に示した範囲で、南端の中央付近（西区と呼称）および東端（東区と呼称）に位置する。西区は4,552㎡、東区は1,369㎡である。宅地（一部畑？）跡だが、以前は水田だったらしい。カクランが多く、特に西区の北西側、東区の南東側は、住宅があったため地中深くまで入る。

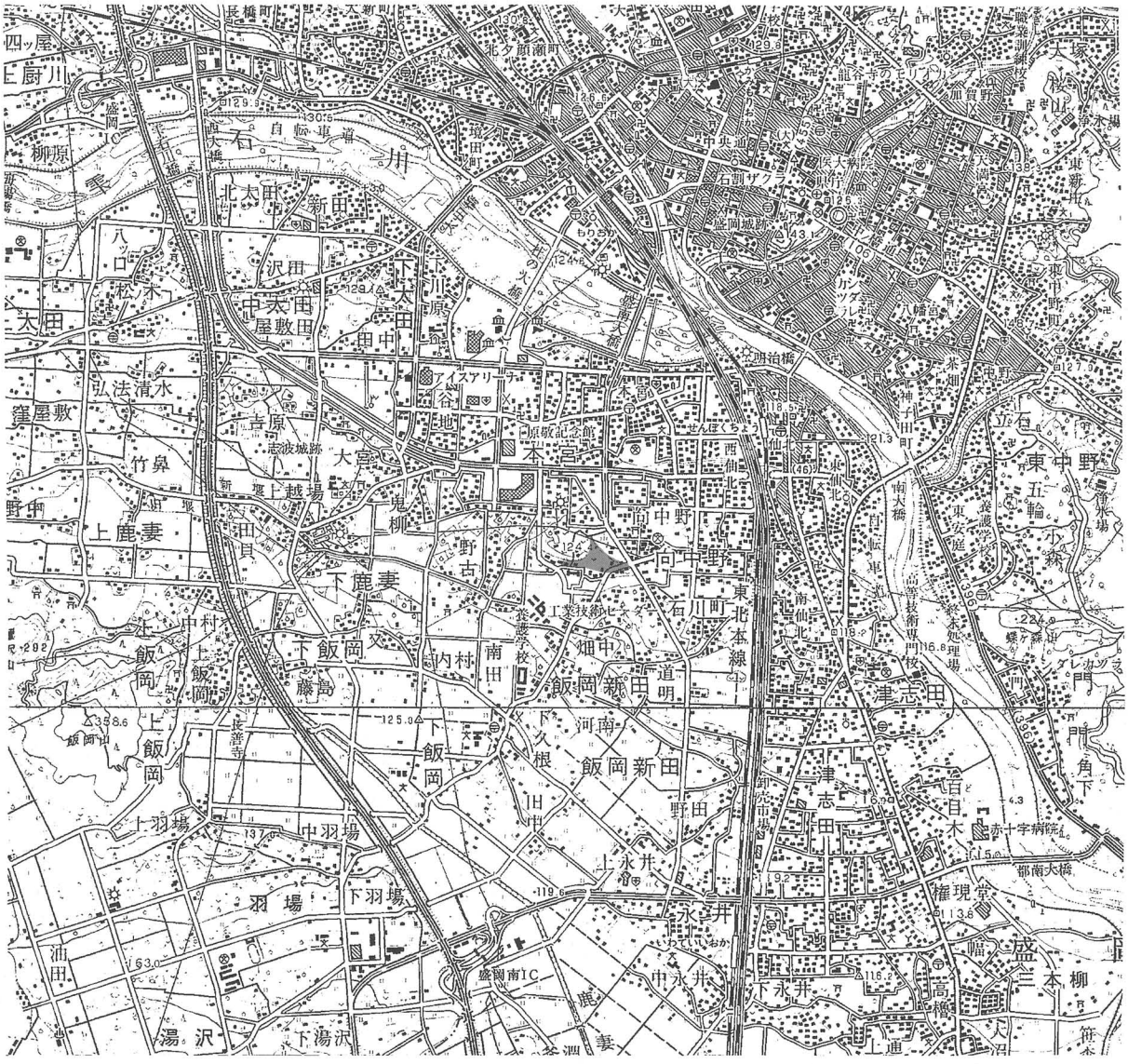
２　基本層序と検出・出土状況

本遺跡では、概ね次のような土層堆積を示している。

Ⅰ層　表土　　層厚20～30cm。
Ⅱ層　黒褐色土　　クロボク土。旧河道で厚く、層厚0～40cm。本来の古代遺構検出面。
Ⅲ層　暗褐色土　　漸移層。層厚0～20cm。実質的な遺構検出面。
Ⅳ層　黄褐色土　　粘土質あるいは砂質。層厚30～40cm。実質的な遺構検出面。
Ⅴ層　黄褐色砂礫　　地点により黒褐色を呈する。層厚不明。

今回調査区は、みな削平されて、Ⅰ層の下は、かろうじてⅢ層が残るといった状態であったため、遺物の出土量は少なく、遺構内も全体的に少なかったと言える。東区の北端は、Ⅰ層下がⅣ層あるいはⅤ層という状態で、遺構も大きく削平されていた。宅地跡であったためカクランが多く、西区北西隅は地中深くまで住宅基礎が入り、東区南東隅は汚土で検出できず全て剥がざるを得なかった（約40cm）。さらにその南側には防火水槽があって地中深くまで壊されていた。





第１図　遺跡の位置（1：50,000盛岡・日詰）

3　これまでの調査と周辺の遺跡

紙幅の関係で文献を引用するにとどめざるを得ない。飯岡才川遺跡は、これまで15次の調査が行われ（第３図）、第２（311集）、第３（393集）、第４（370集）、第５・６（455集）、第７・13（508集）、第８・９（494集）、第12（515集）、第15（546集）次は、当センターで調査し（括弧内は報告書集数）、それ以外は、盛岡市教育委員会で調査し、第１次（試掘）調査のみ報告書が刊行されている（2009）。

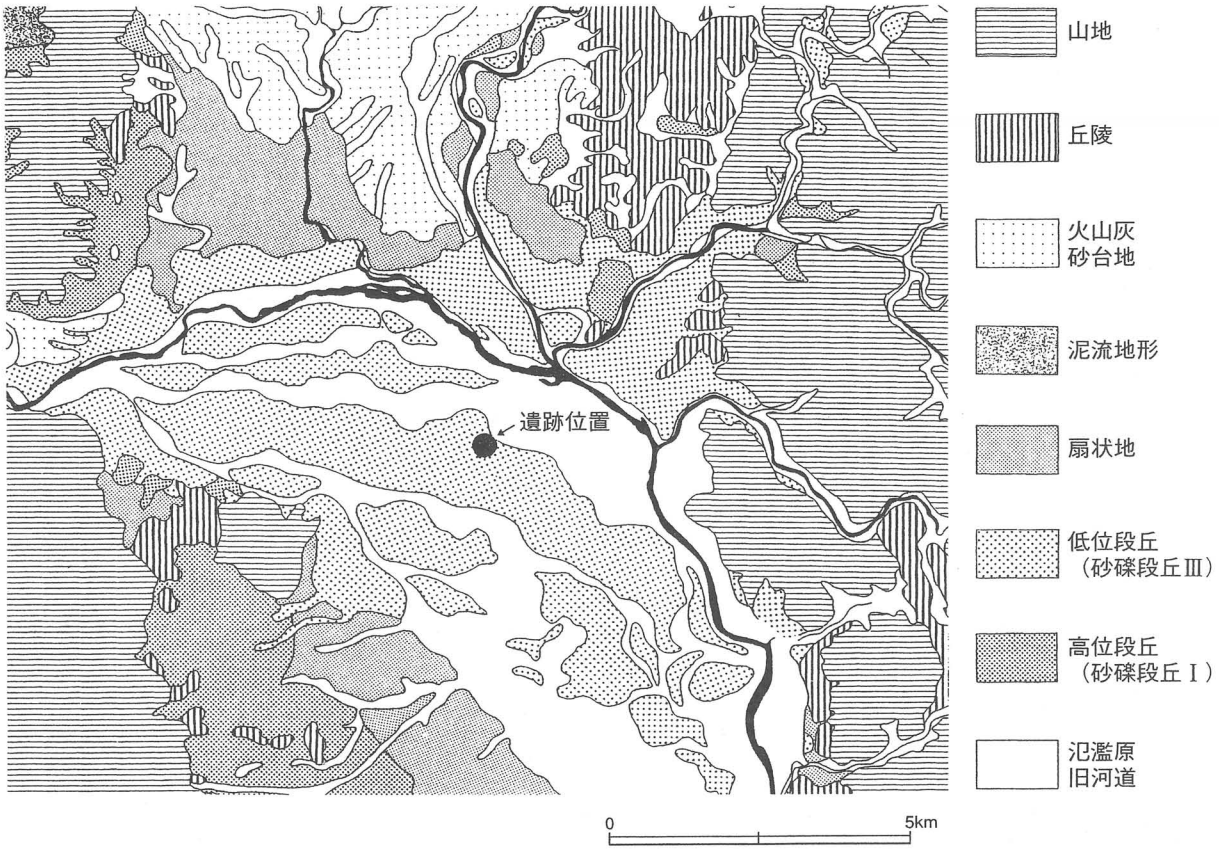
これまでの調査で、主として飯岡才川に沿って縄文時代の溝状陥し穴が見られ、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭中心）の集落は、東端を中心に北西方向に広がり、北端には北側に隣接する飯岡沢田遺跡から続く奈良時代を中心にした古墳群が認められることが分かってきた（第４・５図）。

周辺には、古代の集落跡が多く、才川対岸に位置する細谷地遺跡では、縄文時代の陥し穴も含め、本遺跡と似た様相が認められ、湿地を挟んで東側に隣接する向中野館遺跡は、中世の館跡だが、平安時代の封緘木簡など貴重な遺物が出土し、３遺跡が接するこの付近は平安時代に地域の中心的な役割を果たしていたのかもしれない（水辺の祭祀？）。遺跡、文献名は、当センター報告書第555集等を参照願いたい。また、平成21年度にも発掘調査が行われている（(財)岩手県文化振興事業団　2010）。

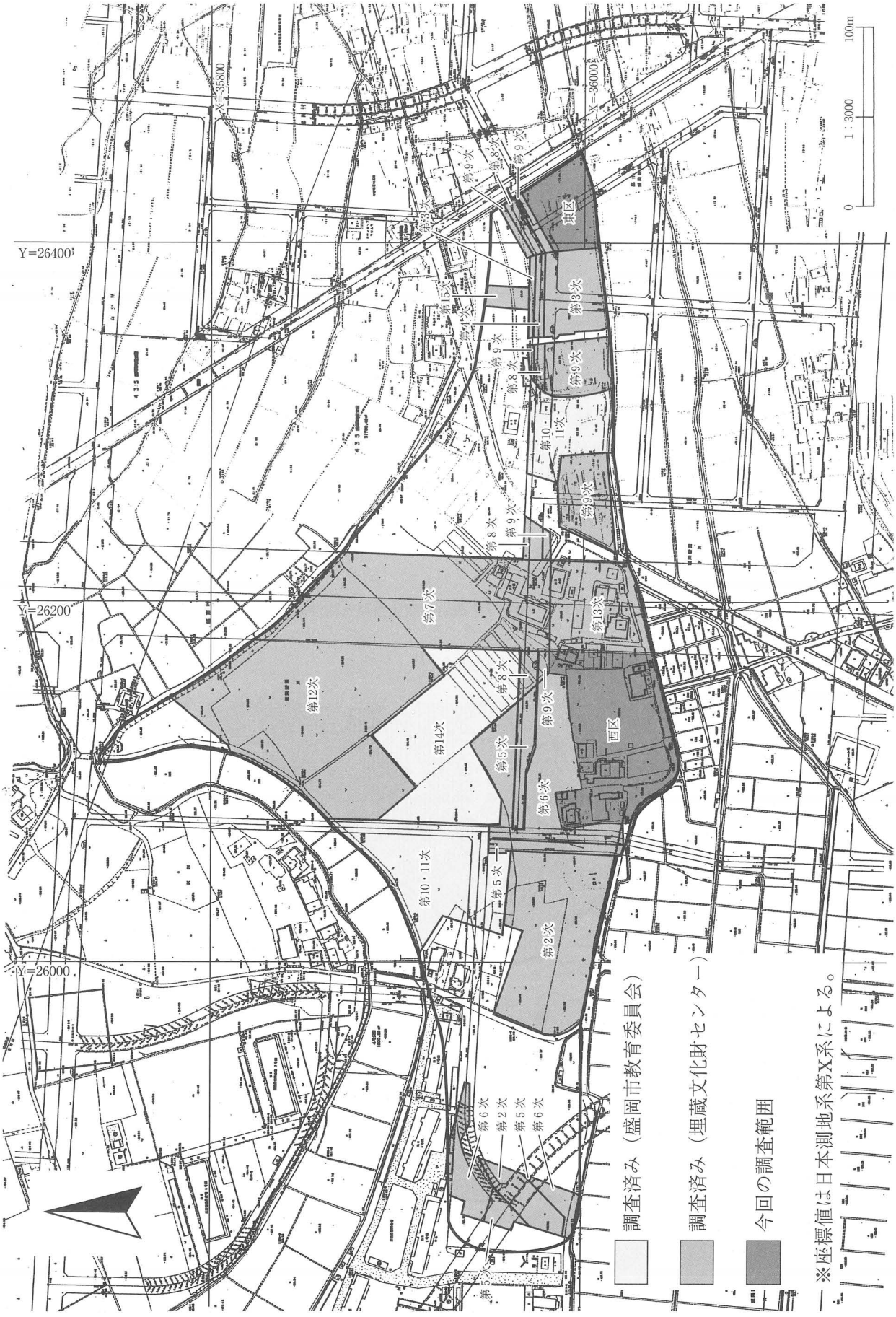
参考文献

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2010『平成21年度発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第571集

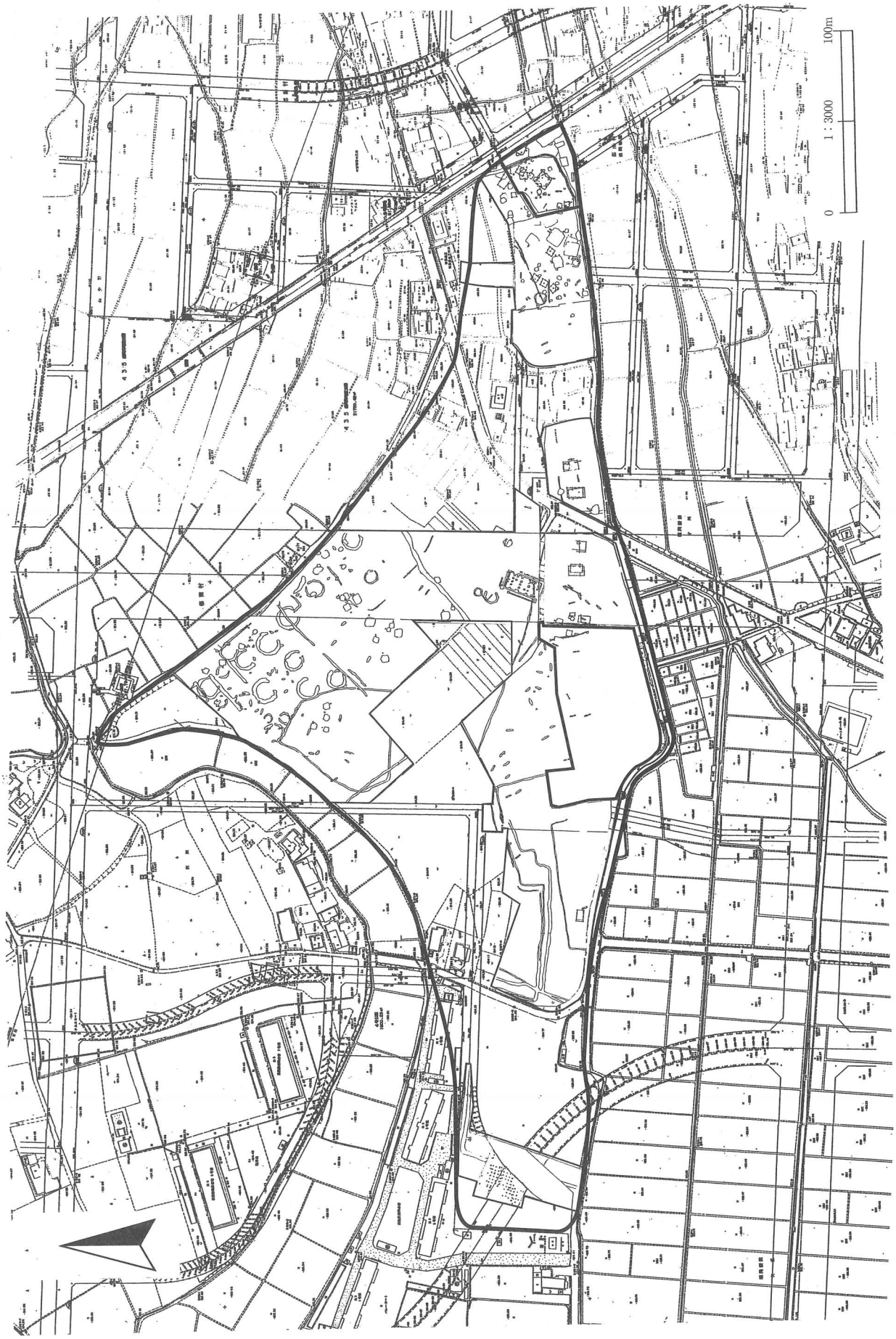
盛岡市教育委員会ほか　2009『盛南地区遺跡群発掘調査報告Ⅱ』



第２図　地形分類図



第3図　これまでと今回の調査範囲



第4図　これまでに検出された遺構

Ⅲ　調査・整理の方法

整理期間の関係で遺物接合中の段階で報告書頁数を積算せねばならず、紙幅が大幅に足りなくなってしまったので、概要のみ述べる。なお、同様の理由で、第Ⅱ、Ⅴ章も短縮、まとめは割愛した。

野外調査は作業員約20名で行ったが、この年盛岡地区の調査が多く同時並行で行われていたため、遅れて入った本班は新人が主体である。９月中旬、11月末に他班の熟練作業員と数名交替してもらったが、調査の進行に影響があったのは否めない。主として９月は西区、10月以降東区の調査を行った。この年の気象は、９月が記録的少雨で広い西区の検出に悪影響、11月は雨が多く東区の精査に悪影響を及ぼした。滑りやすく、むしろを敷いて対処した。また、前回調査区との境が不明瞭で、西区では一部土山の下に延びていたため10月半ばに追加調査、東区では北端を10月末に再度重機で剥いだ。

室内整理は、11月と２～３月と断続的に行われ、12月まで野外調査がかかったため、遺物水洗の一部も２月に行わざるを得ず、２月半ば過ぎまで石膏入れにかかり、かなり苦しかった。作業員数は平均４名である。

以下、特記事項。グリッド、遺構名は、盛岡市教育委員会の指示に従った。平面直角座標（第Ⅹ系）に合わせ、大グリッドは50×50ｍのメッシュで、小グリッドは大グリッドを25等分、座標値は、第３図に記したが、数値は日本測地系である。遺構名は例言に記したとおりだが、野外では便宜的に名前を付け、報告時に全て付け直した。新旧遺構名対応表は、第１表。

平面図は、基本的には一般的な簡易遣り方で縮尺1/20で作成したが、大きな遺構や調査範囲については、光波測量機による測距を基に小縮尺で図化している。

平面図と断面図の照合等の図面点検は、原則として現地で行った。合わない場合は計り直したが、どうしても合わない場合やセクション・ポイントがないなどの不備は、そのままにし、本文中にその旨記している。ただし、1/20の縮尺で１㎜（原寸では２㎝、報告書では0.5㎜）の違いについては誤差範囲とし、特にふれていない。

遺構、遺物図版の凡例は、例言の下にある。遺構出土の遺物も第Ⅴ章で掲載・記載しているが、遺構図版の後に遺構内遺物集成図として縮尺を落としてまとめてもいる（第38～44図）。引用参考文献は、それぞれの節の最後にまとめている。その他の整理方針などは、金子（1998）参照。

参考文献

金子昭彦　1998「埋蔵文化財センターの考古学」『紀要』ⅩⅧ（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

第1表　新旧遺構名対応表

・竪穴住居跡

旧	新
	RA008
	RA018
第１号	RA048
第２号	RA049
第３号	RA047
第４号	RA045
第５号	RA046
第６号	RA050
第７号	RA051

・土坑（旧名は、土坑以外に、陥し穴状遺構、住居状遺構としたものがある）

旧	新
第１号陥し	RD168
第２号陥し	RD165
第３号陥し	RD164
第４号陥し	RD166
第５号陥し	RD167
第６号陥し	RD169
第７号陥し	RD163
第８号陥し	RD162
第９号陥し	RD161
第10号陥し	RD160

旧	新
第１号住状	RD171
第２号住状	RD170
第１号	RD177
第２号	RD173
第３号	RD181
第４号	RD180
第５号	RD182
第６号	RD183
第７号	RD184
第８号	RD179

旧	新
第９号	RD185
第10号	RD176
第11号	RD175
第12号	RD172
第13号	RD189
第14号	RD174
第15号	RD186
第16号	RD188
第17号	RD187
第18号	RD190
第19号	RD178

・掘立柱建物跡

旧	新
	RB009
第１号	RB020
第２号	RB019

・溝跡

旧	新
第１号	RG062
第２号	RG039

Ⅳ 遺　　構

1 概　　要

東側調査区では、縄文時代陥し穴状遺構４基、平安時代竪穴住居跡９棟（周囲の調査区からの続き２棟含む）、掘立柱建物跡２棟（周囲の調査区からの続き１棟含む）、土坑21基、溝跡１条（周囲の調査区からの続き）、西側調査区では、縄文時代陥し穴状遺構６基、平安時代掘立柱建物跡１棟、溝跡１条検出された。なお、以下の記載では、陥し穴状遺構は土坑に含めた（土坑冒頭）。東区の飯岡才川に面した部分のⅡ層にトレンチを入れたが、遺物は稀で、遺構は検出されなかった（写真図版38）。

2 竪穴住居跡（第８～22・38～43図、写真図版４～21）

東区のみの検出である。９棟検出されたが、周囲の調査区からの続きである２棟（ＲＡ008・018）、大部分をカクランによって失っている１棟（ＲＡ051）を含み、後者はカマドが確認されなかったため竪穴住居跡であるか定かでない。出土位置の欄の住居に続く“①～④”は、住居を四等分した区画を意味し、土層ベルトを基準に、北西区画が①、北東が②、南西が③、南東が④となる。

ＲＡ008住居跡（第８・38図、写真図版４・50）

＜位置・検出状況＞東区北西端、－１Ｈ20ｘ～ｙグリッドほか。本住居の大部分は、西側の第３次調査区にあり、今回検出されたのはカマド煙道～煙出のみ。Ⅳ層面で検出作業中調査区境付近に柱穴状の黒褐色土を確認。覆土中に礫が露頭し、カマド煙出と予測、第３次調査区報告書（当センター報告書第393集）に照らして、ＲＡ008住居跡らしいとわかった。以下の記載は、今回調査部分のみに限定したい。**＜重複関係＞**今回調査した部分にはない。**＜図・精査状況＞**Ａ側のセクションポイント、水糸ラインからの高低差が大きいためか、断面図と平面図合わない。Ａ´側の下場、完掘時掘りすぎて合わない。前回調査区との境をクリーニングして煙道の伸びる方向を確認してから半裁した。**＜カマド＞**煙道～煙出のみの調査である。くり抜き式で、煙出方向に向かって緩やかに下がり、煙出部分の底は、上部より一回り広く壁はオーバーハングする。煙出の底北側の一部のみ礫層で、他は砂質Ⅳ層中に掘られている。煙出部分の覆土には礫を多く含む。なお、第３次調査範囲はカクランが多くて住居の残りが悪く、カマド袖部分および焚口は確認されていない。報告書第18図にある「焼土」は覆土中のものであるようだ。**＜遺物＞**土師器１ｇ、須恵器1,408ｇ（第38図１～３掲載）、不明土製品（写真図版50の６）出土。**＜時期＞**出土遺物から９世紀か。

ＲＡ018住居跡（第８・38図、写真図版４）

＜位置・検出状況＞東区北東端、－１Ｉ11ｊ～10ｋグリッドほか。重機での掘削時からＲＡ018住居跡の続きが検出されるはずだと意識していたが、なかなか確認できなかった。人力による検出で、かろうじて薄い黒褐色のプランをぼんやりと確認できたが、煙出かと考えていたものは柱穴状のカクランであった。結局、ほぼ床面まで削平されていたため十分に確認できなかったということらしい。ただし煙道部分は他より深く掘られていたため、明瞭に黒く検出された。ちなみに、前回調査範囲でも削平が著しく、カクランも多かったようである。なお、前回の記載は、第８・９次調査区報告書（当

センター報告書第494集）を参照いただきたい。＜**重複関係**＞東側、ＲＧ039溝跡と重複。覆土を通して半裁したが（写真図版４）、住居覆土が極めて浅く、重複部分は掘り方しか残っていないので、はっきりしないが、前回調査では、ＲＧ039の方が新しいとされている。西側、ＲＢ009掘立柱建物跡と重複。今回検出された柱穴とは重複していないが、前回調査では重複し、本遺構の方が古いとされている。＜**図・精査状況**＞ＲＧ039溝跡の上場が、断面実測後に崩れたため、平面図と断面図で合わない。カマド断面、カクラン穴のＢ´側の上場、半裁してみたら検出面での認識と異なったため、合わない。＜**平面形・規模**＞前回調査範囲と合わせると、約5.7×5.4m程度のひしゃげた隅丸方形か。＜**覆土**＞底しか残っておらず地点ごとに違って、はっきりしない。前回も残りが悪いが、底付近は黄褐色土粒子をまばらに含む黒褐色土が水平に広がっている。＜**床面・掘り方・貼床**＞砂質Ⅳ層を床とするようだが、削平のため礫が露出したり（柱穴？付近）、砂利層の部分（南東隅のほとんど）もある。掘り方は確認できなかった。前回も同様である。＜**壁・壁溝**＞壁は、残っていない。前回は３～６cmほど残っていたようである。＜**柱穴**＞１個それらしき窪みを確認した。覆土は、10YR3/1黒褐色砂、Ⅳ層粒子混じる。前回に柱穴は検出されていない。＜**カマド**＞住居南壁中央よりやや東寄りに当たる部分に煙道のみ検出され、袖や焚口焼土は残っていなかった。煙道は、崩落しているためか煙出との区別はないが、“煙出”方向に向かって比較的急傾斜で下がる。覆土上半部には礫や比較的大きな須恵器破片を含む。煙道の検出面～その下15cmまではⅣ層、その下は礫混じりのⅣ層、底は砂利（Ⅴ）層。前回調査では、北壁ほぼ中央にカマドが検出されたが、袖は残っておらず、焚口焼土と煙道のみである。＜**その他の付属施設**＞検出されなかった。＜**遺物**＞土師器283ｇ（第38図１～４掲載）、須恵器1,307ｇ（同４～６掲載）出土。＜**時期・所見**＞出土遺物から、前回同様「平安時代（９世紀後半～10世紀初め）」に位置づけられる。

ＲＡ045住居跡（第９・10・39図、写真図版５・６）

＜**位置・検出状況**＞東区南西隅、－１Ｈ25ｙ～１Ｉ２ｂグリッド。人力による検出作業中にⅣ層面黒褐色土で明瞭に検出した。カマドが２つあるのも確認。＜**重複関係**＞重複する遺構はないと思う。南側の所々カクランを受けている。＜**図・精査状況**＞カマド１のＤ－Ｄ´断面のＤ´側の上下場が、完掘時掘りすぎて平面図と合わない。伏せた坏のＤ側の範囲、平面実測時埋まっていたため、合わない。Ｅ－Ｅ´断面、焼土のＥ´側の範囲、上面でみた状態（平面図）と断面で見た状態異なり、合わない。カマド２の焼土、平面図に入れ忘れ、断面実測後雨で水につかった後に付け足したので、形が変わって合わない。＜**平面形・規模**＞約3.1×2.8mの隅丸方形。＜**覆土**＞壁際崩落土以外、黒褐色土でほとんど違いはなく、本来は単層か。２、３層はカクランを受けているか。＜**床面・掘り方・貼床**＞砂質Ⅳ層を床面とし、周囲ほどではないが、稲株痕多い。掘り方は、南カマド手前およびその西側ではやや深い不整形の土坑状を呈し（西側はカクラン？）、北東隅のカマド手前は、掘り方を持たず、そのまま床面としている。＜**壁・壁溝**＞砂質Ⅳ層を床面とし、周囲ほどではないが、稲株痕多い。＜**柱穴**＞後述する土坑以外明瞭に床面で検出されたものはない。第９図カマド脇に見える小穴は、記録が残っていないので一応図化したが、カクランの多い南壁近くにあることとこの付近の覆土から、カクランと判断した方が良いと思う。＜**カマド**＞南壁東隅に一つ（カマド１）、東壁北端に一つ（カマド２）検出した。カマド２は、煙道と焚口焼土のみ検出された。カマド１は袖芯となる礫も残っているが、それを覆う土は南側から流入した住居覆土４層であり、袖自体はほとんど残っていないと思う。カマド１は、床面より高い棚状の部分に火床面がある。掘り方も認められ、黒褐色土を多く含む砂質Ⅳ層土を貼って焚口底としている（第10図）。この上に、礫を東西両側端に立て、その上に長い角礫を橋

状に渡して芯としていたらしい。写真図版６の長い礫およびその東側の礫は火を受けて赤く焼けている。第10図の焚口と推定される円形の焼土範囲の南側の三角部分の焼土は、あまり明瞭に焼けていない。その部分の煙道中央に土師器坏がほぼ水平に伏せて置いてあった。煙道は、そこから急傾斜で下がり煙出に向かう。カマド２は、カマド１と異なって傾斜せず、また壁に対して斜めにとりつくが、床より一段高い場所から始まるのは同じである。＜その他の付属施設＞住居床面北西隅から土坑が検出されている。底付近から比較的残りの良い土器が出土した。両方ともほぼ水平で、下には黒褐色土が広がる。No.９は台底が逆位で、No.10は坏が糸切底を上にして同じく逆位で出土した。＜遺物＞（出土状況）出土量はそれほど多くないが、南カマド付近を中心にやや大きめの破片が住居内に点在して出土した。第９図北東隅の礫（７層）、前述の煙道に伏せた坏、土坑内出土土器を除いて、おそらく全て４層から、住居外側から中央に向かって出土している。No.１は、内面を上に向け底面を南側に北から南に傾斜して、No.３は坏が伏せてつぶれたような状態で西に向かって傾斜、No.６は内面を上にほぼ水平で、No.７は外面底を上にしてほぼ水平に、No.８（須恵器）の西側の大きな破片は北に向かって急傾斜で、東側の大きな破片は内面を上に向けて出土している。（遺物）土師器1,705ｇ（第39図５～11掲載）、須恵器1,406ｇ（同７～11掲載）出土。＜時期・所見＞出土遺物から、平安時代（９世紀後半～10世紀初め）か。

ＲＡ046住居跡（第11・39図、写真図版７・８）

＜位置・検出状況＞東区南西端、－１Ｈ23ｘ～－１Ｉ24ａグリッド。西側一部過年度当センター第３次調査区に続く。検出時Ⅳ層上面黒褐色土で明瞭に検出したが、カマドの位置は特定できなかった。精査時にカマド焚口を確認し、煙道の方向が特定されたが、そのほとんどが第３次調査区に入っている。工事も既に済み削平されていたが、建物はそこまで広がっていなかったので、念のため表土を除去すると煙道の底が残っていた。＜重複関係＞重複する遺構はない。検出時、北壁に溝状の黒いシミが重なって見えた。陥し穴状遺構の可能性もあったので、半裁してみたが、底が不整形であり、倒木などの自然現象と思われた。＜図・精査状況＞Ａ側の上場が、完掘時掘りすぎて、平面図と断面図で合わない。カマド断面Ｄ－Ｄ´、礫のＤ´側、平面実測した時埋もれていたため、断面図と合わない。調査に余裕なく、縮尺の違う図を十分に点検できなかった。＜平面形・規模＞約2.7×2.7ｍの隅丸方形。＜覆土＞今回調査した他の住居跡と異なり、明瞭に分層できる。Ⅳ層粒子多く含む黒褐色土の上層、黒褐色土の下層、黒褐色土と黄褐色土の霜降り状混土（埋め戻し？）の壁際土の三層に分かれ、いずれも硬く締まる。＜床面・掘り方・貼床＞砂質Ⅳ層を床面とし、稲株痕多数見られる。掘り方は、南西隅はそれほどでもないが、四隅とカマド手前、穴のように下がる（写真図版８の中央左）。床中央より東寄り付近は高く、掘り方を持たない。＜壁・壁溝＞砂質Ⅳ層を壁とし、稲株痕多数見られる。＜柱穴＞床面で検出した結果、四隅にぼんやりとした黒いシミを検出した。断ち割ってみたが、柱穴とはならず掘り方埋土と思われた（第11図半月形のトレンチ）。＜カマド＞覆土掘り下げ時に確認した際には、袖上部は残っておらず、焚口焼土と袖芯を構成する礫２点のみであったので、平面図は別途作成しなかった。煙道の大部分は、前回調査区にあるため底しか残っていないが、かろうじて残った東側部分からくり抜き式とわかる。不明瞭だが、焚口部分は、砂質Ⅳ層を貼っているようで、今回調査した他の例と同様、煙出方向に向かって登り傾斜である。焚口は強く火を受けているが、焼土には混入物も認められる。礫は焼土側を中心に火を受け赤く焼けている。煙道は、それほど明瞭ではないが、煙出方向に向かって下がる。＜その他の付属施設＞検出されなかった。＜遺物＞土師器54ｇ（第39図12掲載）出土。＜時期・所見＞出土遺物から、平安時代前半か。

ＲＡ047住居跡（第12～14・39・40図、写真図版９～13・50・51）

＜位置・検出状況＞東区中央、－１Ｉ18ｅ～19ｊグリッド。重機で剥いでいる最中にⅣ層面黒褐色土で明瞭に検出した。**＜拡張＞＜重複関係＞**陥し穴状のＲＤ160・161土坑、規模が大きく円形のＲＤ171土坑、浅く方形基調のＲＤ176土坑と重複。ＲＤ160・161土坑は、住居と重複する部分の覆土が全く認められなかったので、明らかに住居より古い。なお、ＲＤ161は検出時に重複に気づいていたが、ＲＤ160の重複に気づいたのは、住居調査の終盤、ＲＤ161土坑の精査が終了しつつあったころである。それは、写真図版26に見るように確かに土坑上面は黒いのだが、その下はすぐ黄褐色土になって、重複する住居壁部分では、ほとんど区別できず（壁は、カマド探しのためかなり念入りに検出したつもりである）、この黒土は、周囲にあるのと同じ疑似現象と考えていた。しかし、ＲＤ161・162の精査で、陥し穴の下半部が周囲の地山とほとんど区別できないような土に覆われていることを知り、もしやと思って壁の重複部分にトレンチを入れて初めて重複に気づいたのである。ＲＤ171土坑とは、煙出のみの重複で、重複部分がほぼＲＤ171土坑覆土中に入ってしまっていること、煙道が通常よりやや長く、ＲＤ171土坑まで届いているとは想定できなかったこと、また深く地中にあって検出面では全く確認できなかったことから、重複に気づいたのは両遺構を精査してからであったため、新旧関係は把握できなかった。ＲＤ176土坑は、検出面で新旧は確認できず、また、上面にカクランを受けていたせいか検出面でのプランが不整形で、周囲に同様の疑似現象も認められたことから、土坑の可能性は低いものと予測していた。そのため、新旧関係を確認するというより土坑か否かを確認するために半裁箇所を設定したので、新旧関係は不明である。南東隅上面を中心に宅地時の排水管で壊されている。北西隅は上水道でＶ字状に床下まで壊され、北壁北西端は砂礫層まで至る大きなカクランを受けている。そこから南東側やや離れ箇所の壁上には柱穴状のカクランがあった。**＜図・精査状況＞**覆土断面Ａ－Ａ´、Ｂ－Ｂ´、大きすぎて平面図と断面図で照合しにくく、調査に追われ余裕がなかったため点検できなかった。カマド１断面のセクションポイントＨ´実測時に抜かれていたため、平面図にない。セクションポイントＩも同様である。カマド３、Ｋ側の上場、検出時に引いた線が間違っており、合わない。**＜平面形・規模＞**約7.8×7.4ｍの隅丸方形。**＜覆土＞**壁際三角土（焼土）を除くと基本的に黒色土単層（２層）に見える。Ⅳ層ブロックが混入したりして所々異なる個所もあるが、漸移的で、層としてまとまるところはなかった。単層ならば故意の埋め戻しが予想されるが、上面にカクランが多いこと、覆土に根が多く入っていることから、後世の改変による可能性がある。壁際三角焼土（４層）は、詳細に観察すると、10YR2/1黒～10YR3/1黒褐色砂層（Ⅳ層粒子含む）が燃えて変化したようで、下部の大半はこの土で、土山として残した部分の頂部のよく焼けているところは7.5YR4/4褐色焼土、その周囲は7.5YR3/1黒褐色砂層の漸移層である。この壁際焼土は、西壁～南壁下部に顕著であり、北壁カマド東側や東壁北半にも残っているが、概して残骸的である。南壁中央付近の焼土上面には炭化材も認められた。この他、東壁中央付近の壁際三角土には大量の砂利が認められた（写真図版９）。検出時にはカマド崩落土なのかと考えていたが、そうではなかった。ただしカクランではないと思う。**＜床面・掘り方・貼床＞**砂質Ⅳ層あるいはそれに黒褐色土の混じったものを床面とするが、稲株痕が多数認められる。壁に沿って帯状に（柱穴より壁側）掘り方を持ち、南西隅を除いた隅は、穴のように他より下がる。南西側は、隅から北東側にやや離れた部分が下がり、覆土は掘り方の他の部分と同じだが、完形の坏が出てきたので、土坑として別に扱った（後述）。掘り方の底は砂質Ⅳ層だが、陥し穴と重複する北東隅の下がる部分の底は、酸化鉄が付着している。掘り方の写真は、調査最終日で余裕がなかったため撮っていない。掘り方と柱穴に囲まれた住居中央部分は、砂質Ⅳ層をほぼそのまま床にしており、床面からほとんど下がらないが、ＲＡ050住居跡のように硬

く締まりもしない。＜**壁・壁溝**＞砂質Ⅳ層を壁とするが、稲株痕が認められる。＜**柱穴**＞主柱穴４個と柱穴の可能性のある１個（柱穴５）を検出した。主柱穴は、北東の１個を除いて床面で検出半裁し、カマドの残存状況から建て替え（柱穴の変更）が予想され、周囲に検出された黒いシミも全て半裁したが（第12図トレンチ）、全て疑似現象で柱穴ではなかった。北東の１個も、残りの３個から位置が推定できたので、想定される部分を丹念に検出し、さらには床面も若干下げてみたが見つけられなかった。焼土や土器が周囲の覆土に含まれていたり、水道管によるカクランのせいもあろうが、床面自体が黒く検出しづらかったことが大きい。当の主柱穴は、想定していたより少し南で、床面を下げ掘り方を確認する際に検出したが、指示が徹底しておらず、若干下げてしまった後に半裁している。柱穴５は、床をはがした後検出し、比較的整形であったため、位置はそれほどふさわしくないが柱穴に認定したものである。後述する床下土坑？の南東壁付近で柱穴５と対になるような位置にも同じ規模の穴が検出されていたのだが、こちらは不整形であったため柱穴と認定しなかった。前述のように、カマドの残存状況から竪穴の北西側への拡張が想定されるが、それに符合する柱穴は検出できなかった。少なくとも、北西側の２本は、拡張前では壁に寄りすぎてふさわしくないと思われるのだが、相当するものは見つけられなかった。また、住居の規模、カマドの数（建て替え）から、検出された柱穴が少なすぎるように思えるが、確認できなかった。＜**カマド**＞北西壁の中央～南西寄りに三つ確認した（南西から中央に向かってカマド１→２→３と仮称）。ただし、床を剥ぐ前に確認できていたのは、最も南寄りの一つだけである。調査終盤に差し掛かり残りの調査日数を算出する必要があって、壁際焼土を除去した後、壁と壁上面を丹念に検出してカマドを探した。住居規模から二つ以上あって当然と予想していたが、袖が比較的良く残っていて調査のかなり早い段階からカマドとわかっていたカマド１の他には見つけることは出来なかった。カマド２は、床を下げているときに焼土を検出し、もしやと思い、相当する壁をクリーニングした結果、壁に半円形に残った煙出を検出し、カマドと認定したものである。前述のように、この部分も丹念に検出していたつもりだったが、拡張を全く想定していなかったので煙出が壁際にあるとは全く考えていなかったこと、カマド１に隣接していたためクリーニングが甘く、煙出の黒いシミは周囲に広がるのと同じカクランと考えていたこと、これだけの規模の竪穴に近接して別カマドを作ることはないだろうという思い込みもあったことは確かである。カマド３は、カマド２の確認を受けて、もしやと思いクリーニングした結果、水道管埋土に切られて半周残る煙出を検出した。焚口焼土は、既に住居内で水道管埋土を除去した後に確認していたが、周囲の床面より下がった位置に認められ、また袖が全く残っていなかったため、カマド焚口焼土との認識が全くなかったのである。カマド１は、ドーム状の袖の中央が落盤したような状態で検出された。ラグビー・ボール大かそれより小さい礫を幾つか並べて芯とし、それにⅣ層土を塗って袖としていたようだが、中央に渡したと思われる長い礫は検出されていない。焚口焼土は、ＲＡ045・046住居跡と異なり、窪んだ部分に形成されている。煙道は急傾斜で下がって煙出に向かい、天井は赤く焼けていた。煙道はＲＤ171土坑と重複するが、煙道が地中深く掘られていたこともあって、検出面では全く確認できず、新旧関係は不明である。煙出の覆土からは極めて多数の礫が出土した。カマド２・３は、前述のように、床面を下げている途中に確認したので、焚口焼土と煙出の間の様子は定かでない。カマド３は、残存状況と煙出の形の関係から、煙道を通して断面図を作成できなかったので、ちょっと異和感のある図になっている。＜**その他の付属施設**＞床面を下げている最中に、住居南西隅近くの溝状の掘り方の中から土坑らしきものが検出された。覆土は、全く掘り方埋土と同じで、平面形もやや不整形で、掘り方の一部が窪むだけなのかと考えたが、残りの良い坏が出土したので一応土坑と認定することにした。土器と反対側からは柱穴状の小穴が検出されたが、上述のように疑似現象と判断し

た。＜遺物＞（出土状況）壁際４層～床面、カマド崩落土を中心に比較的多くの遺物が出土している。床面中央から出土した（第13図）No.６・12～14・25・26は、２層から出土したようである。No.１～５・７～10・15と27（レベルは床面だが４層最下部の上）、16・18・19・28はほぼ４層、No.11・17はほぼ床（拡張部）、No.20～24・29はカマド崩落土からの出土である。第13図No.30は床下土坑から出土した。No.４と28は、砥石かと思われる礫、No.25・26は鉄製品で、その他は土器である。No.25は、床上５cmからほぼ水平の状態で出土、No.26は、西から東に若干下がって出土し、西は床面から20cm、東は18cmである。以上とは別に、炭化物のうち比較的残りが良く出土位置を記録したものをＣ１～４とした（第13図）。Ｃ３はカマド崩落土、その他はほぼ４層の出土である。Ｃ１の炭化材は、４層のほぼ上面にあり、壁から床面中央に向かって下がる。Ｃ２は、カヤか、レベルは床だが４層中にある。以下、各土器の出土状況。No.１は、４層が覆うが床面からほぼ水平の状態で坏が逆位でそのまま潰れたような状態で出土。No.２は、なぜか違う個体が一括で取り上げられてしまったが、北西側は台が正位で床面から７cm、南東側の個体は須恵器で、逆位に底面を上に向けてほぼ床面から出土し、No.３と同一個体らしい。No.３は内面を上に向け床面より上から出土し、No.２と同一個体か。No.７は床面から５～６cmで内面を上に向け、８は同じく３cmで外面を上に向け、９は同じく６cm正位で内面を上に向けて、いずれもほぼ水平の状態で出土。No.11は、内黒の坏で、内面を上に向け正位で完全に床から出土しているが割れている。No.14は、外面を上に向け床面から13cmほぼ水平の状態で出土。No.15は、水平に甕がそのまま潰れて開いたような状態で内面を上に向け、北西側の破片は底部である。No.16は、床上９cm、内黒の坏が正位で内面を上に向けて出土。No.18は、床面から４cmで内面底を上に向けて出土。No.19は、壁から住居中央に向けてやや下がり（床上６cm→４cm）、内面を上に向けて出土。No.21は、甕の底部付近が横倒しになったような状態で、ほぼ床面レベルから出土。No.22は、煙道覆土から出土。No.30は、床下土坑下部の床上１～４cmの出土で、壁から土坑中央に向かって若干傾斜している。（遺物）土師器6,291ｇ（第39・40図13～30掲載）、須恵器519ｇ（第40図12～15掲載）、フイゴ羽口（第40図１）、焼粘土塊（写真図版50の３）、砥石（第40図２・３）、鉄製品（刀子第40図１・２、釘？同３）、鉄滓（写真図版51の４）出土。Ｃ１～４の樹種はクリ、その他に、北東壁中央付近壁際から検出された礫群下に確認した炭化材もクリ、カマド１内から出土した炭化材もクリで、南東隅焼土下から出土した炭化材はナラであった。＜時期・所見＞出土遺物から、平安時代（９世紀後半～10世紀初め）と思われる。

ＲＡ048住居跡（第15・16・40図、写真図版14～16・49・50）

＜位置・検出状況＞東区中央、－１Ｉ15ｉ～16ｋグリッド。重機で剥いでいる最中にⅣ層面黒褐色土で明瞭に検出した。＜重複関係＞重複する遺構はないと思う。北側を水道管が東西方向に横断して壊されている。＜図・精査状況＞Ａ´側の上場、Ｂ側のカクランの上場が、完掘時掘りすぎて、平面図と断面図で合わない。カマド２の礫、焼土の位置が、合わない（理由不明）。＜平面形・規模＞約2.9×2.8mの隅丸方形。＜覆土＞浅いせいか、黒褐色土単層に見えるが、混入割合によって五層に分けた。２～３層が広がりを持つ層で、２層は住居のほぼ中央に円形に、３層（Ⅳ層ブロック多い）は２層を取り囲むように住居南半分に弧状に広がる。１層はカマド崩土、４層はカマド前の炭化物多く含む土。５層は均質の黒色土。＜床面・掘り方・貼床＞砂質Ⅳ層を床面とし、特に硬く締まらない。細かい凹凸を持つ一般的な掘り方で、住居南西、南東隅は他より少し下がる。ここは床面ではモヤーと暗く見えた（写真図版14）。＜壁・壁溝＞砂質Ⅳ層を壁とする。＜柱穴＞半裁した結果人為によると判断された三つの小穴があるが（第15図）、あまり柱穴らしくない。柱穴１は、やや深めで近い形をしてい

るが、他の二つは皿状である。覆土は、よく似ていて、10YR2/1黒土砂質シルトを基本とし、柱穴１と２はⅣ層粒子が多く、３はⅣ層ブロックが多く、より黒く見える。＜カマド＞東壁北寄りに一つ（カマド１）、北壁東寄りに一つ（カマド２）検出した。カマド２は、煙道の途中を水道管で壊され、袖もなく焚口焼土のみ検出された。カマド１は袖崩落土も残っており、残存状況から判断すると、カマド２→カマド１という変遷を読み取れる。カマド１の袖崩落土は焼土粒が全面に点在し、また、袖底に敷いてあったらしいⅣ層を基本とする土に黒褐色土が多く混じっていたため、覆土と火床面との区別がつきにくく、掘りすぎてしまった。注記にあるように、調査時に５層は袖崩落土と考えていたが、敷いた土に焼土粒が混じっていただけかもしれない。煙道部は、比較的強く煙出に向かって傾斜し、煙出部覆土には礫が多く入る。＜その他の付属施設＞検出されなかった。＜遺物＞（出土状況）出土量は少ないが、カマド南側の住居区画④の窪んでいた場所から少し出土している。第15図の礫ｓ１は１層、その西側の土師器坏小片は床面に埋まったような状態で出土している。（遺物）土師器530ｇ（第40図31～33掲載）、須恵器124ｇ（同16・17掲載）、焼粘土塊（写真図版50の４）、砥石？？（写真図版49の４）出土。＜時期・所見＞出土遺物から、平安時代前半と思われる。

ＲＡ049住居跡（第17・18・40・41図、写真図版16～18・49）

＜位置・検出状況＞東区中央北寄り、－１Ｉ13ｈ～15ｊグリッド。重機で剥いでいる最中にⅣ層面黒褐色土で明瞭に検出した。＜重複関係＞ＲＢ019掘立柱建物跡の柱穴4・7・8が重複するが、検出面では確認できなかったので（詳細はＲＢ019の項）、新旧関係は不明である。なお、柱穴精査時には掘立柱建物跡の一部との認識はなかった。＜図・精査状況＞カマドＥ－Ｅ´断面のセクションポイント、下が砂利層で地面に落としにくかったせいか、平面図と断面図で合わない。＜平面形・規模＞約4.2×4.1ｍの隅丸方形。＜覆土＞基本的に黒褐色土層で、混入物によって分層できるが、大きな違いはない。１層は礫、３層は土器、２・４層はⅣ層粒子多く、5a～b層もⅣ層粒子多く5a層上面には灰白色火山灰が認められる。Ｂ－Ｂ´断面の３層と１層の境が層順に合わない。この部分の１層内に礫が特に多いが、３層は他と同じに見えた。分層時にはわからなかったが、後にＲＢ019の柱穴が重複していたためとわかった。つまり、ここには柱穴の覆土が含まれていることになる。＜床面・掘り方・貼床＞概ね北東隅～南西隅を結ぶ線を境に、北側がⅤ層砂利層、南側が礫混じりⅣ層を床面とするが、住居中央付近の砂利部分にはⅣ層を貼っているようである（第18図焼土部分、Ⅴ層面まで約３㎝）。この部分のみ掘り方が存在することになるが、他はそのまま床となっている。＜壁・壁溝＞北壁～西壁の北側一部までⅤ層砂利層、東壁の南半～南壁～西壁の南側一部までⅣ層で、その間は礫混じりのⅣ層である。＜柱穴＞床面の性質によるものか、床面では検出しづらく、明瞭に確認できたのはＲＢ019の柱穴だけであった（精査時点では気付けず、後に住居外の柱穴を検出してから掘立柱建物跡の続きとわかる）。Ａ－Ａ´ベルト南半中央付近のすぐ東側に10YR3/1黒褐色土シルト（Ⅳ層粒子含む）の長楕円形の小さな浅い窪みを確認したが、柱穴ではないと判断した。調査終了後に“貼床”も剥がし床面全体を下げて再度検出を試みたが、やはり確認できなかった。＜カマド＞西壁南寄りに検出。写真図版17に見るように、袖（礫混じり砂質Ⅳ層で構築）も比較的しっかり残っていたが、砂礫～砂利部分を火床面としていたらしく、焚口焼土を面的に確認することはできなかった（６層）。煙道は、焚口背後でいったん上がり、その後煙出に向かって比較的急傾斜で下がる。＜その他の付属施設＞住居中央貼床部分に焼土が形成されている。長楕円形で最大長40㎝。表面はカリカリとしっかり焼け、最大厚５㎜の焼土だが、この厚さで広がるわけではなくブロック状を呈していたので、実測はしなかった。＜遺物＞（出土状況）住居中央から北西（①）区画に比較的多くの土器が出土した（第17図、

写真図版16）。住居覆土がみな黒褐色土で良く似ているので明瞭ではないが、全て３層から出土しているように見えた。自然傾斜ではなくゴチャッとつぶれたような状態で出土し、故意に投げ込まれた可能性が高い。（**遺物**）土師器6,198ｇ（第40～41図34～51掲載）、須恵器634ｇ（第41図18～20掲載）、砥石（写真図版49の５～７）出土。＜**時期**＞土器から、９世紀後半～10世紀初めか。

ＲＡ050住居跡（第19～21・42図、写真図版19～21・49～51）
＜**位置・検出状況**＞東区東端、－１Ｉ13ｏ～15ｒグリッド。東側、調査範囲外（舗装道路）に続く。人力による検出によりⅣ層面黒褐色土で検出したが、南半分が宅地時の汚染土で検出面ではプランを確認できなかったこと、また北側も汚染されていたのか覆土が硬く黒すぎるのが気にかかっていた。東側の舗装道路に沿うコンクリート製の側溝（写真図版19は側溝の底だけ残存）の掘り方埋土を掘り起こして南側の立ち上がりを確認し、規模から竪穴住居かとの見通しは持った。しかし、ベルトをかけて精査し始めても、他の住居に比べ、深く、異様に、壁が垂直、底が平らであり、近代以降のカクラン穴との思いをぬぐい去れなかった。しかし、南側に明瞭にカマドが検出され、また新しい遺物も全く出土しなかったことから、竪穴住居跡と認定した。＜**重複関係**＞北側にＲＤ172土坑が重複。両方とも黒褐色土で覆われており、検出面では区別できなかったが、通して半裁し断面を観察した結果、住居跡の方が新しいと判断した。なお、土坑の南側に住居床面より一段高い段のような部分がある。別遺構の重複の可能性もなくはないが、底が特に平らで床状を呈することがないことから別住居とは思われず、住居南西隅からスムーズに直線状にこの範囲が伸びることから、住居の一部と判断した。住居床中央に検出した“黒土”は、床下土坑かと考えていたが、半裁した結果浅く、また底が不整形であり、住居時の穴にしては覆土が極めて黒く（N2/黒色地に7.5YR5/6明褐色土のブロック）輪郭が極めてシャープであることから、最終的にカクランと判断した。床下土坑によくあるように、覆土上面には黄褐色土のブロックが点在する。なお、住居覆土５層も、現在ではカクラン穴と考えている。＜**図・精査状況**＞セクションポイントＡ´の位置が、平面図と断面図で合わない（断面実測後にポイントの落とし方に問題あり？）。柱穴３のＥ側の上場、完掘時掘りすぎて合わない。カマド断面、作図者が描いている途中で1/10と1/20を所々間違えたため、合わない（調査終盤で忙しく、気づいたのは完掘後であった）。＜**平面形・規模**＞約5.7×5.7？ｍの隅丸方形。＜**覆土**＞上（１）層黒色土、下層（概ね２層。Ⅳ層ブロック、粒子含む土）にはすぐ分層できた。その後熟視し、下層から、上部黒褐色土（３層）、より明るい下部層（４層）を分離した。下層はさらに分かれるような気もしたが、層としての広がりを確認できず、断念した。３層は、南西隅から流入したようである。＜**床面・掘り方・貼床**＞概ね砂質Ⅳ層あるいはそれに黒褐色土を含む土（掘り方埋土６層）を床とする。水につかることがあったのか酸化鉄含む。壁際は帯状に掘り方を持ち、特に角は穴のように窪む。掘り方底はほぼ砂質Ⅳ層だが、西壁の中央および南西隅は黒っぽい粗砂が露出している。帯状の掘り方に囲まれた住居床中央は、非常に硬く締まる。なお、ＲＤ172土坑南側の棚状部分の底は、砂質Ⅳ層だが凹凸が著しく、壁も汚れており他と違い傾斜する。＜**壁・壁溝**＞砂質Ⅳ層を壁とするが、上から25㎝より下には酸化鉄が付着。前述のように、壁は他の住居と異なり極めて垂直にたちあがるが、西側の棚状部分ではそうでもない。なお、床面で柱穴を確認した際に、南西隅に幅10㎝程度の周溝状の穴（黒褐色土）を検出したが、浅く、すぐ下から床がでてきた。写真図版19には、その痕跡が写っている。＜**柱穴**＞三個登録した。柱穴１と３の間にも小穴を検出し、覆土は柱穴３に似ていたが半裁した結果柱穴にはならなかった。登録した三つの柱穴も、住居規模の割に浅く、あまりそれらしくない。柱穴１は、覆土がⅣ層粒子混じりの黒褐色土のはっきりした土で、柱穴検出作業の前から確認できていた。

柱穴２の覆土は、根カクランのような褐色土で、下部は掘りすぎか。柱穴３の覆土は、埋め戻したような土でわかりづらく、検出作業を繰り返した結果見つけたものである。なお、本住居跡の南側にあるＲＤ190土坑は、覆土や形状、深さから柱穴に間違いないと思われるが、本住居に関係あるかどうか不明である。＜カマド＞東壁南端に近い場所に検出。煙出も含めギリギリ調査範囲内に納まる。袖の天井が抜け落ち、袖を構築していた土の一部が南側に流出したような状態で検出した。その下および周囲には炭化物を含む多量の灰が認められる。カマドの検出時と断ち割り時の写真を比べてわかるように、袖の構造を入口がトンネル状に開いて天井部に穴が開いているドーム状のものと想定しておくと、芯となる礫は、天井を支える立石を手前から見てトンネルの内面と外側に間を開けて置き、主にその間に粘土を入れて壁とし、さらに天井の礫は、長いものを手前と奥に間を開けて平行に置き、二つの礫の間の一部を天井穴として開けていたと推測される。写真図版20の下に落ちている長い角礫（床上５cm出土）が、天井手前にわたしてあったものと推測される。手前から見て、焚口内左側の壁は非常によく赤く焼けていた。カマド袖と北東側のカクランの間の床面にはカクランが認められた。煙道は、焚口奥で一旦上がった後急傾斜で下がり煙出に向かう。カマド検出時には、袖およびその周囲から多くの土器が出土したが、出土状況については、遺物の項参照。＜その他の付属施設＞カマド北東側に隣接し床面に検出された“穴”は、東側舗装道路下に続くこともあって土坑と認識できず、掘り方の一部として掘ってしまったが、住居内の位置と底の形状などから土坑と思われる。こうした経緯のため断面図は作成していないが、覆土は10YR3/2黒褐色シルト（粘性あり、大きな礫を多量に含み、炭化物、焼土粒を含む）で、掘り方埋土より明らかに黒かった。壁～底は砂質Ⅳ層だが、底には酸化鉄が多く付着していた。また、住居床面中央に検出した“黒土”は、重複の項に記したように、床下土坑ではなくカクランと判断した。＜遺物＞（出土状況）カマド袖付近から比較的多くの土器が出土している（No.４～）。No.１は、ほぼ床面から台付坏が正位でそのまま潰れたような状態で出土。No.２は、須恵器大甕の破片で床面から30cmの高さ（２層？）から内面を上に向けてほぼ水平の状態で出土した。No.３は、床上２cmからほぼ水平に内面を上に向けて出土した。No.４～は、カマド袖およびその周囲からで、みな黒～黒褐色土内の出土である。No.４の南西側の破片、No.６・14・17以外のほとんどは、土器内面を上に向けて出土している。No.４は逆位で底面を上に向けて出土し、No.８と９は床上７cmから出土、No.16・17は、カマド袖内に含まれているか。No.19は、カマド上から住居内に流入する状態で出土。（遺物）土師器5,674ｇ（第42図52～65掲載）、須恵器1,413ｇ（同21～27掲載）、砥石（写真図版49・50の８～12）、鉄滓（写真図版51の５）出土。＜時期・所見＞出土土器から、平安時代（９世紀後半～10世紀初め）と思われる。

ＲＡ051住居跡（第22・43図、写真図版21）

＜位置・検出状況＞東区南東端、－１Ｉ21ｑ～22ｒグリッド。東側の大部分が防火水槽構築時に壊されている。厚さ20～30cmに及ぶ宅地下汚土を除去後、グライ化したⅣ層面で黒褐色土のはっきりした南西隅を確認。一部を調査できただけで、カマドを持つかどうかは不明であるが、今回の調査では住居状遺構（竪穴住居と同じ規模・形だがカマドを持たない遺構）は検出されておらず、カマドを持つ可能性もある本遺構を、あえて「住居状遺構」として別に区分する理由も見当たらないので、住居跡として扱った。＜重複関係＞調査できた範囲では、ない。＜図・精査状況＞カクランの範囲、平面図と断面図で合わない（断面図で奥に描きすぎたためか）。＜平面形・規模＞規模は不明だが、隅丸方形か。＜覆土＞やや変色した黒褐色土の上層と酸化鉄を多く含む（おそらく水がたまっていたため）下層の、二層に分かれるが、下層は上層と同じものであった可能性も高い。＜床面・掘り方・貼床＞

砂質Ⅳ層を床面としていたと思うが、水につかっていたせいか、酸化鉄がつき青白くなっている。掘り方は、今回調査した他の住居と同様、隅が穴のように下がる。＜壁・壁溝＞砂質Ⅳ層を壁としていたと思うが、床と同様変色している。＜柱穴＞調査できた範囲では、検出されなかった。＜カマド＞調査できた範囲では、検出されなかった。＜遺物＞（出土状況）比較的残りの良い土器が二箇所出土した（第22図No.１・２）。No.１は、ほぼ完形の土師器坏で、正位で壁から中央に向かって傾斜して出土し（写真図版21）、床上６cm、おそらく１層中にある。（遺物）土師器347ｇ（第43図66・67掲載）出土。＜時期＞土器から、９世紀後半～10世紀初めか。

３　掘立柱建物跡（第22～25・43図、写真図版22～25）

ＲＢ009掘立柱建物跡（第22図、写真図版22）

＜位置・検出状況＞東区北東寄り、北側の大部分が第８・９次調査区（当センター報告書第494集）にあり、今回調査したのは残りの柱穴２個のみで、－１Ｉ10～11ｉグリッド付近に位置する。当初表土剥ぎ足らなかった部分にあり、ジョレンによりⅣ～Ⅴ層面黒褐色土で検出。＜重複＞今回の調査区にはないようである。＜図・精査状況＞セクション・ポイントＡ´が抜かれてしまっていたため、現地で平面図と断面図の照合を行えなかった。＜平面形・規模＞柱間桁行３間、梁行２間、約６×４ｍの長方形である（第５図）。＜方位＞軸方向はＮ－33°－Ｅ。ＲＢ019掘立柱建物跡とほぼ同じである。＜柱間寸法＞第８・９次調査区では、210cm（７尺）とされる。＜柱穴＞９個だが、今回調査したのは２個のみである。ただし、柱穴２は、位置があまりふさわしくなく（第５図）、深さも極端に浅い。柱穴１は、壁上10cmがⅣ層、その下８cmが礫混じりのⅣ層、その下～底が砂利Ⅴ層。柱穴２は、壁上５cmが礫混じりⅣ層で、その下～底は砂利Ⅴ層。＜出土遺物＞なし。前回出土もなし。＜時期＞「柱穴の掘り方が近世のものより一回り大きいことと、柱穴の埋土の様相から古代のものと推測される。ＲＡ017・018竪穴住居跡を切っているので、10世紀以降に位置づけられる」（前回報告書）。

ＲＢ019掘立柱建物跡（第23・24・43図、写真図版22～24）

＜位置・検出状況＞東区北東寄り、－１Ｉ13ｉ～13ｌグリッド付近に位置する。本建物跡は９個の柱穴から構成されているが、柱穴５と６にはカクランが絡み、柱穴８と９はＲＡ049住居跡と完全に重複していたため検出面ではその他の５個の柱穴しか確認できず、当初は掘立柱建物跡との認識はなかった。柱穴１～７は、Ⅳ層面黒褐色土でジョレンによる検出時に確認し、半裁したが、５・６は上面が広がる上に浅く、他も柱穴然としておらず、遺構と認定するには躊躇するような状態であった。そのような時にＲＡ049住居跡床面で柱穴８と９を検出し、柱穴１～４、７～９が並んでいることに気づき、柱穴５・６も含めれば、総柱の掘立柱建物跡になるとわかった。＜重複＞ＲＡ049住居跡と柱穴４・８・９が重複するが、住居検出時にその認識はなく、新旧関係不明。＜図・精査状況＞柱穴１の覆土断面Ａ側の上場、完掘時掘りすぎて平面図と断面図合わない。柱穴２のＢ´側の上場、完掘時掘りすぎて合わない。柱穴３の両側上場、完掘時掘りすぎて合わない。柱穴５・６のＥ´側の上場、完掘時掘りすぎて合わない。柱穴７完掘時掘りすぎて合わない。空断面のＩ－Ｉ´のセクションポイントＩ、下が砂利のためか合わない。これも含め、全ての空断面は、柱穴が浅く砂利層で底が認識しにくいためか、底の位置が平面図と合わない。＜平面形・規模＞柱間２間×２間、約4.5×４ｍのほぼ正方形で、各柱列交点全てに柱穴を持つ総柱である。＜方位＞軸方向はＮ－29°－Ｅ。ＲＢ009掘立柱建物跡とほぼ同じで、さらに第３次調査区の総柱建物跡ＲＢ002～005にも近い（当センター報告書

第393集）。＜柱間寸法＞1.7m前後のところもあるが、２mが多い。＜柱穴＞９個で、規模は大体似通っており、不整形のものが多い。全体的に浅く、竪穴住居跡床面で検出された柱穴８・９を除外しても、柱穴５～７は顕著に浅い。砂利層を底とするためであろうか。柱穴１・２は、壁上部10cm、柱穴３は15cmが、Ⅳ層に礫を含む土で、その下～底は砂利（Ⅴ）層、柱穴７は壁がⅣ層で底が砂利層、柱穴４～６・８・９は、壁底とも砂利層。覆土に砂利再堆積層が入っていると壁～底が見極め難く、掘りすぎも多い。＜出土遺物＞柱穴３から土師器85ｇ、５から土師器84ｇ、７から土師器４ｇ出土（第43図68～70）。＜時期・所見＞軸方向、覆土から平安時代。柱穴５が浅いのは、構造上は不可欠ではなく、床を支えるためにある方が良いという程度の必要性で、ここの地山が砂利で掘りにくかったためか。

ＲＢ020掘立柱建物跡（第25図、写真図版24・25）

＜位置・検出状況＞西区東端、－１Ｄ22ｉ～24ｊグリッド付近に位置する。第25図の柱穴番号は、ほぼ検出順で、当初は柱穴１～４の認識しかなかった。ジョレンによる検出作業で、柱穴１～４に気づいた。覆土が比較的締まっており、周囲に多く認められた近世以降のカクランとは明らかに異なり、古代のものとすぐわかった。実は、この時点での検出面はやや高く、黒く円い根穴が大量に認められ、“見づらい”状態であったのだが、調査が遅れ気味で、作業員のほとんどが初心者であったため何回かやりなおしてもそれほど改善されず、また柱穴が４本検出されて建物跡の最低限の構成は満たしていたので、それ以上の柱穴をあえて追求しようとは思わなかったのである。そのまま半裁し、完掘後平面写真を撮ろうとしてベテランの作業員がクリーニングした後、柱穴１～４の構成がひしゃげているなと思い、改めて良く見て柱穴５・６・８が見つかった。このままの構成のはずがないので、想定される溝底付近の古いカクランを除去クリーニングして柱穴７も見つけた。その結果、正しく正方形になった。＜重複＞ＲＧ062溝跡と柱穴６・７が重複するが、上述のように検出面汚く、重複に気づかなかったので、新旧関係不明。＜図・精査状況＞上記検出状況のため、柱穴を通して断面図をとることができなかった。また、後から検出された柱穴５～７にしても、通して並んでいないので同様であった。総柱建物跡の可能性もあるので、中央付近を丹念に検出したが、柱穴を見つけることはできなかった。Ａ－Ａ´断面は、柱穴７のＡ´側の上場、柱穴１のＡ´側の下場、柱穴２のＡ側の上場、完掘時、掘りすぎて合わない。Ｂ－Ｂ´断面、柱穴４のＢ側の上場、両下場、柱穴３の両側の上場、両下場、完掘時掘りすぎて合わない。Ｃ－Ｃ´断面、柱穴６・８、いずれもＣ´側の上場、完掘時掘りすぎて位置が合わない。＜平面形・規模＞柱間２間×２間、一辺約３mのほぼ正方形であるが、柱穴はあまり正しく並ばない。＜方位＞軸方向はＮ－11°－Ｅ。ＲＢ019掘立柱建物跡に近い。＜柱間寸法＞1.5m前後。＜柱穴＞８個で構成され、検出状況は上述の通り。規模は大体似通っており、小さい。覆土はそれぞれ異なるが、柱穴４を除くと、いずれもⅡ層再堆積土にⅣ層再堆積土混じりで、単純にⅣ層の混じり方の違いで分けられる。柱穴４は柱痕跡が残る。壁と底は、いずれも砂質Ⅳ層で、底が凹凸なのは根穴カクランも掘ってしまっているためか。＜出土遺物＞柱穴６から、人差し指の先くらいの土師器小片が出土したが、精査中の大雨の後見えなくなってしまった。＜時期・所見＞覆土および出土土器から、平安時代の可能性がある。

４　土　　坑（第26～35・43・44図、写真図版26～35）

縄文時代の陥し穴状遺構10基（ＲＤ160～169）、平安時代（およびそれ以降）21基（ＲＤ170～）

である。陥し穴状遺構は、西区にも6基検出されたが（ＲＤ164～169）、それ以外は東区のみである。

平安時代（およびそれ以降）のものは、大型（ＲＤ170～172）、土師器焼成坑の可能性があるもの（ＲＤ173・174）、ＲＤ173・174にやや似て土器が顕著に出土するもの（ＲＤ175～178）、ＲＤ175～178にやや似て比較的規模が大きく浅いもの（ＲＤ179～188）、規模が小さく平面形が円形（ＲＤ189）、柱穴と思われるもの（ＲＤ190）がある。

陥し穴状遺構に出土遺物はなく、時期は、形と類例からの推測である。調査した陥し穴状遺構は、いずれも下半が非常に狭く拳が回らないほどであったため、全て中央部にサブトレンチを入れた。

ＲＤ160土坑（第26図、写真図版26）

＜位置・検出状況＞東区中央、－１Ｉ19ｉ～20ｊグリッド。ＲＡ047住居跡のカマド位置を確認するため住居壁周辺をクリーニングしたところ、壁上～壁にかけて黒いシミが僅かに検出された。陥し穴のクロボク土に似ているなと思ったが、その後住居床面を下げて掘り方を出しても陥し穴の続きが明瞭に確認されなかったので、ただのカクランかと思っていた。ところが、ＲＤ161土坑の精査時念のため思い切り下げてみたところ、認識していたよりはるか下から底が確認され、その間は自然堆積Ⅳ層とほとんど変わらない土であった。これを受けて、このシミも住居壁のところで思い切り断ち割ってみたところ、はっきりした底が確認され、やはり陥し穴だとわかった。＜重複＞ＲＡ047住居跡と重複し、検出状況と覆土の残存状況から本土坑の方が古い。＜図・精査状況＞Ａ側の上場崩れて、平面図と断面図合わない。＜覆土＞１・４・６層黒土、２層黒土と黄褐色土混土、３・５層は汚れⅣ層再堆積土（黒土混じり）。＜平面形・規模＞溝状の長楕円形。北側の大部分が削平されているため定かでないが、残存部は約3.5×0.6m。＜断面形・深さ＞長軸方向は両側にオーバーハングし、特に残存している南側はオーバーハングが大きい。短軸方向はＩ字に近く、底少し上が膨らみ、逆に上はあまり広がらない。約111cm。＜壁・底＞記録した調査最終日の前夜雨が降り水がたまったので十分に確認できなかったが、壁は砂質Ⅳ層で、底上20cmから下は酸化鉄が付着し白色化。底は礫が露頭している。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞形と類例から、縄文時代の陥し穴の可能性が高い。周辺の地形から、縄文時代後～晩期の可能性が高い。

ＲＤ161土坑（第26図、写真図版26）

＜位置・検出状況＞東区中央南、－１Ｉ21～23ｈグリッド。ジョレンによる検出時Ⅳ層面黒土で明瞭に検出。＜重複＞ＲＡ047住居跡と重複し、検出状況と覆土の残存状況から本土坑の方が古い。＜図・精査状況＞Ａ－Ａ´の下場掘りすぎて、平面図と断面図合わない。当初４層の途中を底と考えた。覆度の様子からはとてもこれ以上下がらないと思えたが、あまりにも浅すぎる。一応トレンチを入れてみたところ黒っぽい土がでてきた（５層）。しかし、周囲にカクランが見られ黒い土は周りにも認められる。さらに下げてクリーニングしたところ明瞭な立ち上がり（壁）のラインを確認できたので、間違いないと分かった。本土坑のこの確認により、ＲＤ162土坑の精査のやり直し、ＲＤ160土坑の発見につながる。＜覆土＞１層黒褐色土、２層汚れⅣ層再堆積土、３層は２層に黒土が混じるが、周囲の壁にも黒いポツポツのカクランが認められるので壁とほとんど区別できない。４・６層は、Ⅳ層再堆積土で汚れもほとんどなく周囲の壁と区別できない。５・６層は黒褐色土混土だが、５層の場合は周囲にも黒いカクランが認められるため壁との区別は明瞭でない。＜平面形・規模＞溝状の長楕円形。北側が削平されているため定かでないが、残存部は約2.9×0.8m。＜断面形・深さ＞長軸方向は両側にややオーバーハングする。短軸方向はＹ字に近く、下半部は極端に狭くなる。上半部の壁ははっき

りせず、図ほど開くかどうか定かでない。約90cm。＜壁・底＞壁～底は砂質Ⅳ層で、底上20cmから白色まだら化している。酸化鉄も付着しているが、それほどでもない。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞形と類例から、縄文時代の陥し穴、周辺の地形から、縄文時代後～晩期の可能性が高い。

ＲＤ162土坑（第27図、写真図版26）

＜位置・検出状況＞東区南西寄り、－１Ｉ23ｄ～24ｅグリッド。ジョレンによる検出時Ⅳ層面灰色がかった土でぼんやりと検出。検出時基準杭が重なっていたので、その土山を除去してから半裁。検出面および土坑上部は、稲株痕と思われる黒ポツが多量に見られ、わかりづらい。＜重複＞ない。南側上面カクラン受けている。＜図・精査状況＞半裁した結果、当初４層を底と考えていた。あまりに浅いが、覆土の様子からはとてもこれ以上下がらないと思え、ＲＤ163土坑も浅かったことから、未完成の陥し穴なのかと漠然と考えていた。念のため、さらに下げてみたが、ほとんど変わらず、やはり地山と思えた。平面実測まですべて終了していたのだが、調査の終盤ＲＤ161土坑の精査の教訓を受けて、やはり下げ足らなかったのではないかと思いなおし、再度Ａ－Ａ´断面にトレンチを入れてみた。しかし、なかなか様子は変わらない。６層まで下げてやっと下げ足らなかったことを確信したのである。＜覆土＞１層黒色土、２と７層はⅡ層とⅣ層混土、６層汚れⅣ層再堆積土と陥し穴によく見られる土であるが、３層は、土層注記に示したように、「砂質Ⅳ層が根によるカクランを受けたもの」としか思えない土で、どこまで掘れるか正直わからない土であった。そして、４・５層のⅣ層再堆積土は、全くⅣ層そのもので、周囲のⅣ層とほとんど区別がつかない。＜平面形・規模＞溝状の長楕円形。約3.6×0.8m。＜断面形・深さ＞長軸方向はオーバーハングしないようである。短軸方向はＹ字に近く、下半部は極端に狭くなる。上半部の壁は、覆土の項に記したように、はっきりせず、図ほど開くかどうか定かでない。約113cm。＜壁・底＞壁～底は砂質Ⅳ層で、北半分は礫が露頭している。底上20cmに酸化鉄が水平に広がり、その下～底は白色化している。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞形と類例から、縄文時代の陥し穴、周辺の地形から、縄文時代後～晩期の可能性が高い。

ＲＤ163土坑（第27図、写真図版27）

＜位置・検出状況＞東区北西寄り、－１Ｈ19ｙ～－１Ｉ20ａグリッド。ジョレンによる検出時Ⅳ層面黒土で確認。＜重複＞ないと思う。今回と隣接する前回調査区（当センター報告書第393集）の状況、本土坑の平面形と深さから考えて、北西側は大きく削平されているようである。＜図・精査状況＞Ａ側の下場、平面図と断面図の認識の違いで合わない。Ｂ－Ｂ´断面の底の形を見れば、北西側が掘りたらないように見えるが、底は礫層であり、礫が壁の中にも入り込んでいることから、そうではないと思う。＜覆土＞上面（１層）黒色土少し残り、概ね、Ⅱ層（黒土）とⅣ層混土と、Ⅳ層あるいは汚れⅣ層再堆積土の互層である。＜平面形・規模＞溝状の長楕円形。片側が膨らむように見えるのは地点によって削平の度合いが異なるからである。約3.25×0.55m。＜断面形・深さ＞短軸方向は削平されているためｖ字に近い。削平されているため浅く約50cm。＜壁・底＞壁は砂質Ⅳ層。底の南東半分は砂質Ⅳ層（緻密）で礫が露頭。北西半分はⅤ層砂礫層で、礫多量に認められる。砂礫層は砂の色が黒く、再堆積の可能性がうかがわれるが、ためしに掘ってみた結果下だけでなく横方向にも広がるので自然堆積層と考えて間違いないと思う。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞形と類例から、縄文時代の陥し穴の可能性が高い。周辺の地形から、縄文時代後～晩期の可能性が高い。底が平らでないのは、底の特に北西半分が硬く締まった礫層で掘りづらかったためと推測される。

ＲＤ164土坑（第28図、写真図版27）
＜位置・検出状況＞西区北東寄り、－１Ｄ20ｆ～18ｇグリッド。重機による掘削時から見えていた。土坑の東側は近世墓やその上にあった木根によるカクランが認められるが、西側はⅡ層が残っていたようである。＜重複＞ないと思う。東側のカクランにより上部が影響を受けている。検出面および上部は黒い小さな円い植物痕（稲株？）が多数認められ汚れている。＜図・精査状況＞Ａ－Ａ´断面の部分底確認のためトレンチを入れた。今回調査の他の陥し穴状土坑と同様下半部が極端に狭く、掘り上げに苦労した。＜覆土＞上部（１・２層）Ⅱ層再堆積土（黒色土）、下部2/3は、Ⅱ層（黒土）とⅣ層混土と、汚れⅣ層再堆積土の互層である。＜平面形・規模＞溝状の長楕円形。中場（底に向かって狭くなる変化点）が逆ｓ字状にねじれているように見え、南端は開く。約3.65×0.55m。＜断面形・深さ＞長軸方向はオーバーハングする。短軸方向は削平されているためＹ字というよりｖ字形に近い。約103cm。＜壁・底＞壁～底は砂質Ⅳ層だが、底付近は、水がたまっていたのか、シルト質。壁も底も、凹凸あまりなく滑らかである。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞形と類例から縄文時代の陥し穴、周辺の地形から縄文時代後～晩期の可能性が高い。南側のＲＤ165土坑と軸方向そろわない。

ＲＤ165土坑（第28図、写真図版27）
＜位置・検出状況＞西区東寄り、－１Ｄ24ｄ～25ｅグリッド。重機による掘削時から明瞭に見えていた。＜重複＞ない。検出面および上部は黒い小さな円い植物痕（稲株？）が認められ若干汚れている。＜図・精査状況＞今回調査の他の陥し穴状土坑と同様下半部が極端に狭く、掘り上げに苦労し、一部掘りすぎた。＜覆土＞上部（１層）Ⅱ層再堆積土（黒色土）、中部Ⅱ層（黒土）とⅣ層混土、下部Ⅱ層再堆積土（あまり黒くない）とⅣ層再堆積土の互層である。＜平面形・規模＞溝状の長楕円形。中場（底に向かって狭くなる変化点）がＡ－Ａ´断面北側の西側部分が極端に突出し、両端少し開く。約3.3×0.5m。＜断面形・深さ＞長軸方向はオーバーハングし、特に南側は顕著である。短軸方向は不整形なＹ字形。約95cm。＜壁・底＞壁の大部分は砂質Ⅳ層だが、南半の底上10cmは砂利層。底は砂利（Ⅴ）層だが、北半は礫少なく、粗砂層に近い。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞形と類例から、縄文時代の陥し穴の可能性が高い。周辺の地形から、縄文時代後～晩期の可能性が高い。北側にＲＤ164土坑があるが、軸方向そろわず、むしろ離れたＲＤ167・168土坑に近い。

ＲＤ166土坑（第29図、写真図版27）
＜位置・検出状況＞西区中央北、－１Ｃ23ｐ～22ｒグリッド。重機による掘削時から明瞭に見えていた。＜重複＞ない。検出面および上部は黒い小さな円い植物痕（稲株？）が認められ若干汚れている。＜図・精査状況＞Ａ´側の上場完掘時掘り広がって断面図と平面図合わない。今回調査の中で最も下半部が狭く、Ａ－Ａ´断面の東側にもサブトレンチを入れざるを得なかった。＜覆土＞上部Ⅱ層再堆積土（黒色土）、中～下部は、他の陥し穴に比べて黒く、いずれもⅡ層（黒土）とⅣ層混土だが、その割合が逆転する層が互い違いに連続する。＜平面形・規模＞溝状の長楕円形。中場（底に向かって狭くなる変化点）が細かく変化して蛇行し、両端一部開く。一部上場も蛇行する。約3.4×0.55m。＜断面形・深さ＞長軸方向は若干オーバーハングする。短軸方向は、上場があまり広がらず、Ｙ字というより底が広がらないＩ字形に近い。西半分の下半部が特に狭く、西側にもサブトレンチを入れざるを得なかった。約113cm。＜壁・底＞壁～底砂質Ⅳ層だが、西半の底若干掘りすぎ、砂利層が露出。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞形と類例から、縄文時代の陥し穴、周辺の地形から、縄文時代後～晩期の可能性が高い。西側のＲＤ167・168土坑とは軸方向は直交し、ＲＤ165土坑に近い。

ＲＤ167土坑（第29図、写真図版28）
＜位置・検出状況＞西区中央北、－１Ｃ23～24ｌグリッド。重機による掘削時から確認されたが、他の陥し穴状土坑ほど明瞭ではなかった。＜重複＞ない。検出面および上部は黒い小さな円い植物痕（稲株？）が認められ若干汚れている。＜図・精査状況＞底が狭くて十分に確認できず、Ａ－Ａ´断面箇所掘りすぎてしまった。＜覆土＞上部Ⅱ層再堆積土（黒色土）、中～下部は、Ⅳ層再堆積土と汚れⅣ層再堆積土（Ⅱ層混土）の互層。＜平面形・規模＞溝状の長楕円形。中場（底に向かって狭くなる変化点）が蛇行し、両端開き南側は円く広がる。一部上場も蛇行する。約3.15×0.75m。＜断面形・深さ＞長軸方向は若干オーバーハングする。短軸方向はＹ字形で、中場が他と比べて顕著に狭い。約86cm。＜壁・底＞壁～底砂質Ⅳ層だが、南半の底上10cm～底は粗砂。中場が特に狭く、また３層付近の壁（自然堆積層）が根によってカクランされていたせいか、まったく壁のライン（立ち上がり）が見えなかった。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞形と類例から、縄文時代の陥し穴、周辺の地形から、縄文時代後～晩期の可能性が高い。南側にＲＤ168土坑があり、軸方向が一致する。

ＲＤ168土坑（第30図、写真図版28）
＜位置・検出状況＞西区中央北、１Ｃ２～３ｌグリッド。重機による掘削時に明瞭に検出。＜重複＞ない。検出面および上部は黒い小さな円い植物痕（稲株？）が認められ若干汚れている。＜図・精査状況＞Ａ－Ａ´断面、セクションポイントＡと、Ａ´側のサブトレンチの上場、断面図と平面図合わない。底が分かりづらく、南半掘りすぎの可能性がある。＜覆土＞上部Ⅱ層再堆積土（黒色土）、中～下部は、Ⅳ層再堆積土とⅡ層混土の互層。＜平面形・規模＞溝状の長楕円形。中場（底に向かって狭くなる変化点）が蛇行し（特に北側は顕著）、両端広がる（特に南側）。一部上場も蛇行する。約3.55×0.7m。＜断面形・深さ＞長軸方向は若干オーバーハングする。短軸方向はＹ字形。約93cm。＜壁・底＞壁は下部10～20cmを除き砂質Ⅳ層。概ね壁の下部～底は砂利（Ⅴ）層だが、底の一部に砂質Ⅳ層が残る（Ａ－Ａ´断面付近）。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞形と類例から、縄文時代の陥し穴、周辺の地形から、縄文時代後～晩期の可能性が高い。北側のＲＤ167土坑と軸方向が一致。

ＲＤ169土坑（第30図、写真図版28）
＜位置・検出状況＞西区北西端、１Ｂ21ｘ～23ｙグリッド。本来は第６次調査区に入るが（報告書：当センター報告書第455集）、その南端が調査時に見え（Ⅳ層面ジョレンによって黒シミを検出）、若干下げてみたところ陥し穴状土坑に間違いなく、また精査していないことがわかったので、この部分の盛土を除去して全体を露出させ、精査した。この部分の表土は残っていなかったので、調査時の見落としらしい。＜重複＞ないと思うが、近世末以降の柱穴状の黒いシミが周囲に点在し、Ａ－Ａ´断面のサブトレンチ東側にもかかっている。また検出面および上部は黒い小さな円い植物痕（稲株？）が認められ若干汚れている。＜図・精査状況＞Ａ－Ａ´断面のＡ´側のサブトレンチの上場、断面図と平面図合わないが、これは、根の汚れで不明瞭であったため、断面実測時に実際より外側に立ち上がりの線を引いてしまったためである（平面図の方が正しい）。＜覆土＞上半部（１～３層）、最上部（１層）は黒色土、その下２～３層は漸移的に明るくなる（Ⅱ、Ⅳ層混土）。下半部は、概ねⅣ層汚れ再堆積土とⅡ層混土の互層。５層部分は、壁（自然堆積層）との違いが色では全く区別できず、覆土（５層）がシルト質、壁が砂質という違いだけである。＜平面形・規模＞溝状の長楕円形。中場（底に向かって狭くなる変化点）、上場が若干蛇行する。中場の両端広がり、特に南側は比較的顕著である。中央付近上場広がる。約3.8×0.65m。＜断面形・深さ＞長軸方向は比較的大きくオーバーハ

ングする。両端が傾斜しているのは掘り足らないせいではないと思うが。短軸方向はＹ字形で、下半部は極端に狭い。約90cm。＜壁・底＞壁は砂質Ⅳ層。底は、両端の傾斜する部分は砂質Ⅳ層で、それ以外は砂利（Ⅴ）層。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞形と類例から、縄文時代の陥し穴、周辺の地形から、縄文時代後～晩期の可能性が高い。やや離れたＲＤ167・168土坑と軸方向が概ね一致する。

ＲＤ170土坑（第31図、写真図版28）

＜位置・検出状況＞東区中央南、－１Ｉ21ｊ～22ｋグリッド。Ⅳ層面ジョレンによるダメ押しの結果、ぼんやりとした霜降り状の汚れⅣ層再堆積土を検出した。平面は四角形で、一部炭化物を含む黒い土が認められたが（１層）、あまりにも淡いので疑似現象の可能性が高く、下げればなくなってしまう可能性が高いと考えていた。半裁したところ、霜降り土がどこまでも続き、立派な竪穴になった。＜重複＞ないと思う。検出面および上部20cmほどは黒い小さな円い植物痕（稲株？）が多数認められ、一部は底にまで達している。＜図・精査状況＞覆土がわかりづらいこともあって、半裁時（Ａ－Ａ´断面）掘りすぎてしまった。調査終盤で遺構かどうか早く判断したかったため作業を急がせたせいもある。＜覆土＞最上部（１層）は黒色土、その他はⅣ層再堆積土に黒土の混じる霜降り状混土で、２～４層の違いは黒土の包含率の違いに過ぎない。性状から、２～４層は埋め戻した土の可能性が高い。＜平面形・規模＞約２×２ｍのほぼ正方形。不整形な部分は掘りすぎ。＜断面形・深さ＞約45cm。＜壁・底＞壁～底は砂質Ⅳ層。壁は、垂直に近く鋭角的に立ち上がる。＜出土遺物＞土師器327ｇ、須恵器２ｇ出土。上面から出土した炭化材の樹種は、イタヤカエデだが、本土坑に帰属しない可能性も高い（カクラン）。＜時期・所見＞形と出土遺物から、平安時代と思われる。

ＲＤ171土坑（第31・43図、写真図版29・30・50）

＜位置・検出状況＞東区北西、－１Ｉ18ｃ～19ｅグリッド。重機による掘削時からⅣ層面黒色土で確認していた。大きな円と小円の二つの土坑の重複に見え、上面では大きい円（黒い土）が小さい円（淡い土）をシャープに切っているように見えたが、念のため通して掘って断面でも判断することとし、この時点では、規模の大きさから壁が崩れて円くなった古代の竪穴住居跡の可能性も考慮に入れていたので、四分法で精査することにしベルトを設定した。その結果、覆土は小円から大きい円の方に流れ込んでいるように見え、重複ではなく一連のものと判断した。カマドなのかとも思ったが、全く焼けておらず、そうでもないようである。＜重複＞ＲＡ047住居跡と重複する。カマド煙出のみの重複で、検出面では見えず、本土坑を精査して（底を下げた時）初めて壁に煙出があるのを確認したので、新旧関係は不明だが、煙出に多量の礫が入っているのに、本土坑検出時には礫の集中に全く気づかなかったことから、本土坑の方が新しい可能性もある。検出面～底に黒い小さな円い植物痕（稲株？）が多数認められる。＜覆土＞上層（１層）と下層に分けられ、上層は黒色土、下層（２～７層）はⅣ層ブロック多い淡い土で、地点によって異なり、張り出し部は比較的大きく異なり上面に焼土粒なども認められるが基本は同じと考えてよさそうである。＜平面形・規模＞直径約2.7ｍの円形に直径約1.2ｍの不正円形の張り出し部がつく。＜断面形・深さ＞約28cm。張り出し部は10cm弱。＜壁・底＞壁～底は砂質Ⅳ層。壁は、上部上記植物根で汚れ、底は所々礫が露頭し、所々酸化鉄が認められる。底はあまり平らではなく、壁に向かってだらだらと立ち上がる。底をはがしてみたが掘り方などは確認できなかった。＜出土遺物＞（出土状況）張り出し部の土器は、大きな竪穴の方に向かって傾斜し、No.１は２層、No.２・３は３層の出土である。竪穴内のNo.５・７は北西側に傾斜し、いずれも１層の出土である。（遺物）土師器935ｇ（第43図71～75掲載）、須恵器463ｇ（同28掲載）、砥石？？（写真図

版50の13）出土。＜時期・所見＞出土土器から、平安時代（９世紀後半～10世紀初め）か。

ＲＤ172土坑（第32図、写真図版30）
＜位置・検出状況＞東区東端、－１Ｉ12ｎ～13ｏグリッド。Ⅳ層面ジョレンによる検出で黒土がきれいな円を描いているのを確認。住居跡と重複していたが、上面では新旧関係を確認できず、住居と通して半裁し、土坑と確定した。＜重複＞ＲＡ050住居跡と重複し、覆土断面堆積状況から、本土坑の方が古いと思う。検出面～底まで黒い小さな円い植物痕（稲株？）が認められる。＜覆土＞クロボク土にⅣ層粒子混じる単層。＜平面形・規模＞直径約1.6m程度の円形というより隅丸正方形。＜断面形・深さ＞約16～25cm。＜壁・底＞壁～底は砂質Ⅳ層。底はほぼ平らだが、南側に若干傾斜し、中央より東寄りに深さ10cm弱の略円形の窪みを持つ。底まで植物根が認められる。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞覆土から古代の可能性がある。

ＲＤ173土坑（第32・43図、写真図版30）
＜位置・検出状況＞東区西寄り、－１Ｉ19～20ｄグリッド。Ⅳ層面ジョレンによる検出で、だるま形の黒土を確認。遺構覆土にしては黒すぎる気がし、不整形なため、この時点では遺構とは必ずしも考えていなかった。とりあえず南側を半裁し、南側にあったカクランと土が極めて似ているように思われた。しかし、１層の底は平らである。ベルトを設定し、今度は北側を掘ってみた。その結果、大きな土器片や焼土、炭化物が出土し、またＲＤ177土坑の検討結果から、この調査区では黒すぎと思われるような覆土を持つ土坑があるのだとわかり、土坑と認定した。＜重複＞ない。形からは二つの土坑の重複も示唆されるが、底を共有し段差のないことから一つの土坑と考えている。検出面～底まで黒い小さな円い植物痕（稲株？）が認められる。＜覆土＞上部2/3はクロボク土で底は平ら（１層）、その下は薄い層の連続で、Ⅳ層再堆積土で埋め戻した土（２層）、炭化物、焼土粒を含む土（３層）、非常に薄い層の連続で突き固めたか水成堆積土と思われるもの（４層）である。なお、これは断面図を作成した地点のもので、１層以外は地点によって異なるが、他地点でもレベルを変えながら大体同じような層が認められる。＜平面形・規模＞約2.15×1.6ｍの不正楕円形。＜断面形・深さ＞約38cm。＜壁・底＞壁～底は砂質Ⅳ層。壁～底は、凹凸があり不整形だが、１層下部は比較的整形である。また、南側は、土坑中央（焼土や炭化物が顕著）に向かってやや傾斜する（スロープ状）。＜出土遺物＞（出土状況）焼土、炭化物周辺から比較的多くの土器が出土し、No.１は土師器甕胴部片、No.２は須恵器甕で、いずれも内面を上にし、ほぼ水平だが若干土坑中央方向に傾き（底から18cm程度の高さ）、２層上部から出土しているようである。（遺物）土師器1,147ｇ（第43図76～80掲載）、須恵器93ｇ（同29・30掲載）出土。＜時期・所見＞出土土器から９世紀後半～10世紀初か。焼土の高さは様々だが、いずれも現地性と思われ、灰・炭化物の層と水平堆積を繰り返している。また純粋な覆土と思われる１層の底が平らであることから、何回もの使用の結果焼土と灰・炭化物の層が繰り返し、また上面を埋めて平らにするという使用方法が窺われる。こうした特徴をもとに周辺の遺跡を探せば、類例として土師器焼成坑が挙げられる（当センター報告書第514集ほか）。今回の調査では、土師器焼成に使う道具や焼成失敗品、土師器製作に使う遺構や遺物が見つかっていないので、可能性にとどまるが、スロープ状の傾斜という特徴も含めて、本土坑は土師器焼成坑の可能性があろう。

ＲＤ174土坑（第32・43図、写真図版31）
＜位置・検出状況＞東区中央東、－１Ｉ16ｍ～ｎグリッド。南側の汚土を除去後Ⅳ層面ジョレンによ

る検出で確認。＜重複＞ＲＧ039溝跡と重複するが、重複部分汚土で覆われていたため新旧関係不明。検出面～底まで黒い小さな円い植物痕（稲株？）が認められる。＜図・精査状況＞セクションポイントＡ´の位置が、平面図と断面図合わない（理由不明）。＜覆土＞上下層に分かれ、上層は黒土、下層（２層）はⅣ層粒子、焼土粒多く含む土で、両層の間に焼土、炭化材が認められた。残しておいた焼土は、クリーニングの際に掘りとられてしまった。＜平面形・規模＞1.4×1.2m程度の隅丸長方形。＜断面形・深さ＞底が平らでないため、底から壁にかけて弧を描く。約22cm。＜壁・底＞壁～底はⅣ層。底は平らでない。＜出土遺物＞土師器243ｇ（第43図81～83掲載）出土。図示した炭化材（１層と２層の間から出土）は、鑑定の結果クリ。＜時期・所見＞出土土器から９世紀後半～10世紀初めか。平面形と深さ、底面の形、覆土から、ＲＤ173土坑同様、土師器焼成坑の可能性がある。

ＲＤ175土坑（第32・43図、写真図版31）

＜位置・検出状況＞東区中央、－１Ｉ19ｊ～ｋグリッド。Ⅳ層面ジョレンによる検出で確認し、平面形や覆土は土坑らしいと思ったが、半裁結果は、浅く芳しくなかった。しかし、既にＲＤ173・177・181土坑を認定していたため、これも土坑に認定。＜重複＞ないと思う。検出面～底まで黒い小さな円い植物痕（稲株？）。＜図・精査状況＞Ａ側の上場、完掘時掘り広がって平面図と断面図合わない。＜覆土＞上層は砂利混じり黒褐色土、下層（２層）は霜降り状の土で埋め戻したものと思われる。＜平面形・規模＞約1.08×1.04ｍの隅丸方形。＜断面形・深さ＞約12cm。＜壁・底＞壁～底はⅣ層。底はやや凹凸あるがほぼ平ら。＜出土遺物＞（出土状況）No.１は、内面を上にしてほぼ水平に出土し、底からの高さは９cm。（遺物）土師器53ｇ（第43図84掲載）、須恵器６ｇ（同31掲載）出土。＜時期・所見＞土器から９世紀後半～10世紀初めか。位置、規模や形、深さなど、ＲＤ176土坑に似る。

ＲＤ176土坑（第33・43図、写真図版31）

＜位置・検出状況＞東区中央、－１Ｉ19ｊ～20ｋグリッド。Ⅳ層面ジョレンによる検出で確認し、南側を半裁したが、浅く覆土も黒すぎるように見え、また２層の下のラインから、土坑と思えなかった。そこで、ベルトを設定し北側も掘ってみたが、あまり変わりない。しばらく放置しているうち、ＲＤ173・177・181土坑を認定し、これも土坑に認定。＜重複＞ＲＡ047住居跡と重複。検出面では新旧関係を確認できず、精査の途中まで遺構であるかどうか疑問に思っていたため、新旧関係を把握しないまま完掘してしまった（土層ベルトは残っていたが）。検出面～底まで黒い小さな円い植物痕（稲株？）。＜図・精査状況＞Ａ側の上場、完掘時掘り広がって平面図と断面図合わない。＜覆土＞１層はカクランらしく、上（２）層はⅣ層粒子混じる黒褐色土、下（３）層は汚れⅣ層再堆積土。＜平面形・規模＞1.4×１ｍ程度のやや不整な隅丸長方形。＜断面形・深さ＞約10cm。＜壁・底＞壁～底はⅣ層。底はほぼ平らだが、上記植物根で汚れている。＜出土遺物＞（出土状況）No.１は、土師器坏で底外面を上にして伏せたような状態でほぼ水平に出土し、底からの高さは５cm（２層中らしい）。南東側に同一個体破片があったが、精査中雨で水につかり動いてしまった。（遺物）土師器117ｇ（第43図85掲載）出土。＜時期・所見＞土器から９世紀後半～10世紀初めか。形など、ＲＤ175土坑に似る。

ＲＤ177土坑（第33・44図、写真図版32）

＜位置・検出状況＞東区西寄り、－１Ｉ18ｃグリッド。Ⅳ層面ジョレンによって黒土で明瞭に検出したが、覆土は、南側にあった、底がはっきりしないカクランと同じであった。半裁したところ、混入とは思われない土器が多く出土し、底が明瞭であったことから、土坑と認定した。疑わしい覆土を持

つこの穴が土坑となることがわかり、土坑とすることに躊躇して放置していたＲＤ179・181土坑なども認定されることになった。＜**重複**＞ないと思う。西側の落ち込み部分は別遺構の可能性もなくはないが、調査時には確認できず、少なくとも覆土に大きな違いはなかったことだけは確かである。検出面～底まで黒い小さな円い植物痕（稲株？）が認められる。＜**図・精査状況**＞上場、掘りすぎて平面図と断面図合わない。土器が大量に出土したため、土器の下の部分は断面図を作成することができなかった。＜**覆土**＞クロボク土単層だが、後に確認された柱穴状の落ち込みの部分は不明である。＜**平面形・規模**＞1.15×0.8m程度の不整な楕円形。＜**断面形・深さ**＞25cmのところが多いが、西側の落ち込み部分は約40cm。＜**壁・底**＞壁～底Ⅳ層。底は、西側で柱穴状に落ち込み、東側は平らである。＜**出土遺物**＞（**出土状況**）西側の柱穴状の落ち込みの南半分から多量の土器が出土した。土坑検出面に近い高い位置で１層上～中部から、北側の落ち込みの中心方向にやや傾斜して出土し、大きな破片はほとんどが内面を上に向けている。壊れた土器を一括廃棄したような状態である。（**遺物**）土師器1,741ｇ（第44図86～88掲載）出土。＜**時期**＞出土土器から９世紀後半～10世紀初めか。

ＲＤ178土坑（第33・44図、写真図版32）

＜**位置・検出状況**＞東区南西端、１Ｉ２ｂ～ｃグリッド。撤収日前日、調査区南西端の汚れた灰色粘土をクリーニングして溝の続きを探している時に、Ⅳ層面黒土で明瞭に検出し、ほぼ円形に見えた。半裁して、間違いないと土坑に認定した。＜**重複**＞南側、近現代の溝跡（０層）に壊されている。検出面～底まで黒い小さな円い植物痕（稲株？）が認められる。＜**覆土**＞０層はカクラン。１・２層が相当するが、通常と逆で、上にある層の方にⅣ層ブロック、粒子が多く、１層もこの土坑の覆土ではないかもしれない。いずれもⅣ層粒子、ブロック含むクロボク土である。＜**平面形・規模**＞溝に壊され、不明。＜**断面形・深さ**＞約18cm。＜**壁・底**＞壁～底砂質Ⅳ層だが、底は、酸化鉄が付着し白色化している。底はほぼ平ら。＜**出土遺物**＞（**出土状況**）２層中から比較的残りの良い土器が出土した。No.１は、実際には二個体で、内面を上に向けほぼ正位の内黒坏の上に別個体の破片（須恵器？）が外面を上に向けて出土している。土坑の外から中に向かって若干傾斜し、北側は土坑底から５cm、南側は４cmの高さから出土している。No.２は、内面を上に向けてほぼ水平に土坑底から２cmの高さで出土している。（**遺物**）土師器281ｇ（第44図89～91掲載）、須恵器68ｇ（同32掲載）出土。＜**時期・所見**＞出土土器から、平安時代（９世紀後半～10世紀初め）と思われる。

ＲＤ179土坑（第33図、写真図版32）

＜**位置・検出状況**＞東区南西寄り、－１Ｉ25ｅグリッド。Ⅳ層面ジョレンにより黒土で明瞭に検出。半裁した結果、覆土は北側にあった底がはっきりしないカクランと同じだった。底も傾斜して土坑然としておらず、また、２層が植物根の土とほとんど同じで覆土に含めて良いかわからず、もし１層までが覆土なら、底はさらに不整形になる。サブトレンチを入れてもみたが、迷い、しばらく放置していた。その後ＲＤ173・177土坑のように明らかに遺構である穴も、同様の覆土、底を持つことが分かり、平面形が整形であることから土坑と認定。＜**重複**＞ない。検出面～底まで黒い小さな円い植物痕（稲株？）。＜**図・精査状況**＞疑似現象かどうか悩んだため、サブトレンチを入れた（上述）。＜**覆土**＞上層はクロボク土（Ⅱ層再堆積土）、下層はクロボク土にⅣ層再堆積土の混土。＜**平面形・規模**＞１×0.85m程度の楕円形。＜**断面形・深さ**＞約17cm。＜**壁・底**＞壁～底Ⅳ層。底は、若干傾斜する。＜**出土遺物**＞なし。＜**時期・所見**＞覆土と今回の調査の類例から、平安時代の可能性がある。

ＲＤ180土坑（第34図、写真図版33）
＜位置・検出状況＞東区西寄り、－１Ｉ20ｃ～21ｄグリッド。Ⅳ層面ジョレンによって黒土で明瞭に検出し、半裁したが、覆土は、南西側にあった、底がはっきりしないカクランと同じで、底も平らでない。サブトレンチを入れてもみたが、迷い、しばらく放置していた。その後ＲＤ173・177土坑のように明らかに遺構である穴も、同様の覆土、底を持つことが分かり、平面形もまあ整形であることから土坑と認定した。＜重複＞ないと思う。検出面～底まで黒い小さな円い植物痕（稲株？）が認められる。＜図・精査状況＞Ａ´側の上場、完掘時掘りすぎて平面図と断面図合わない。上述のように、疑似現象かどうか悩んだため、サブトレンチを入れている。＜覆土＞クロボク土単層。＜平面形・規模＞1.05×0.85m程度の不整な小判形。＜断面形・深さ＞約20cm。＜壁・底＞壁～底Ⅳ層。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞覆土と今回の調査の類例から、平安時代の可能性がある。

ＲＤ181土坑（第34・44図、写真図版33）
＜位置・検出状況＞東区北西寄り、－１Ｉ17ｃグリッド。Ⅳ層面ジョレンによって黒土で明瞭に検出した。ＲＤ182・183土坑と並んでいるように見えたが、建物を構成する他の柱穴を見つけることはできず、単独の土坑として扱った。覆土は、南側にあった、底がはっきりしないカクランと同じで、底も不整形であり、半裁はしたが土坑と認定することには躊躇を覚えた。その後ＲＤ173・177土坑のように明らかに遺構である穴も、同様の覆土と底を持つことが分かり、平面形もまあ整形であることから土坑と認定した。＜重複＞ない。北西隅がカクランを受けているようである。全体的に削平されているようであり、特に北側はひどい。検出面～底まで黒い小さな円い植物痕（稲株？）が認められる。＜覆土＞上層はⅡ層（クロボク土）再堆積土、下層は汚れⅣ層再堆積土（あるいはⅣ層がカクランを受けたもの）。＜平面形・規模＞１×0.9m程度の不整な楕円形。＜断面形・深さ＞約15cm。＜壁・底＞壁～底Ⅳ層。底は、やや凹凸あるが、ほぼ平らである。＜出土遺物＞（出土状況）図に示したように、須恵器の小片が内面を上に向けて底から５cm、ほぼ水平の状態で出土した。（遺物）土師器25ｇ、須恵器26ｇ（第44図33掲載）出土。＜時期＞土器から、９世紀後半～10世紀初めか。

ＲＤ182土坑（第34図、写真図版33）
＜位置・検出状況＞東区北西端、－１Ｉ16ｄ～ｅグリッド。Ⅳ層面ジョレンによって黒土で明瞭に検出した。ＲＤ181・183土坑と並んでいるように見えたが、建物を構成する他の柱穴を見つけることはできず、単独の土坑として扱った。半裁したところ、浅く平面形もそれらしくなく、土坑と認定するには躊躇を覚えたが、ＲＤ173・177土坑などを認定した後であり、あえて疑似現象とする理由もないので土坑とした。＜重複＞北側大きく削平されて消失している。検出面～底まで黒い小さな円い植物痕（稲株？）が認められる。＜覆土＞黒褐色土単層だが、他よりⅣ層粒子多く、明るい。＜平面形・規模＞北側が削平されて不明だが、直径0.8m程度の円形か。＜断面形・深さ＞約10cm。＜壁・底＞削平されていない南半分は、壁～底砂質Ⅳ層だが、底は北側に向かってやや傾斜している。北半分の壁は削平されて、なく、底は、Ⅳ層だが礫が露頭している。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞覆土と今回の調査の類例から、平安時代の可能性がある。

ＲＤ183土坑（第34・44図、写真図版33）
＜位置・検出状況＞東区中央北端、－１Ｉ14ｅ～15ｆグリッド。Ⅳ層～Ⅴ層（砂利）面ジョレンによって黒土で明瞭に検出した。ＲＤ181・182土坑と並んでいるように見えたが、建物を構成する他の柱

穴を見つけることはできず、単独の土坑として扱った。半裁したところ、平面形も整形で深さもそれらしく、土坑と認定した。＜**重複**＞ないと思う。周辺の地山の状況から、削平されている可能性が高い。＜**覆土**＞クロボク土に砂利混じる単層。＜**平面形・規模**＞95×68cm程度の小判形。＜**断面形・深さ**＞約25cm。＜**壁・底**＞壁～底Ⅴ（砂礫）層。＜**出土遺物**＞土師器96ｇ（第44図92～94掲載）、須恵器20ｇ（同34掲載）出土。＜**時期・所見**＞出土土器から、９世紀後半～10世紀初めか。

ＲＤ184土坑（第34図、写真図版34）

＜**位置・検出状況**＞東区中央北端、－１Ｉ14ｅグリッド。Ⅴ（砂利）層面ジョレンによって黒土で明瞭に検出。並んでいるように見えたＲＤ183土坑に近接し、当初柱穴の建て替えかと考えたが、ＲＤ183土坑自体建物跡の一部にならず、単独の穴として扱うことになった。土坑とするには規模が小さく、半裁してみても浅く、躊躇を覚えた。しかし、覆土自体は、ＲＤ183土坑と全く同じであり、既にＲＤ179・180土坑などを認定していたため、あえて疑似現象として扱う理由もなく、土坑と認定した。＜**重複**＞ないと思う。周辺の地山の状況から、削平されている可能性が高い。＜**覆土**＞クロボク土に砂利混じる単層。＜**平面形・規模**＞0.67×0.6m程度の不整な円形。＜**断面形・深さ**＞約15cm。＜**壁・底**＞壁～底Ⅴ層（検出面一部砂利層、他は砂礫層）。壁は崩れているので不明瞭、底は若干弧を描く。＜**出土遺物**＞なし。＜**時期・所見**＞覆土と今回調査の類例から、平安時代の可能性がある。

ＲＤ185土坑（第34図、写真図版34）

＜**位置・検出状況**＞東区北東端、－１Ｉ11ｉ～ｊグリッド。掘削が当初足りなかった地点である。Ⅳ層面ジョレンによって黒土で明瞭に検出したが、形があまりそれらしくない。半裁したが、底もそれらしくなく、さらにサブトレンチも入れてみたが、土坑とするには躊躇を覚えた。その後ＲＤ179・180土坑などを認定したため、この穴をあえて疑似現象とする理由もなくなり、平面形はまあまあで、焼土や炭化物も出土しているので、土坑と認定した。＜**重複**＞ない。検出面～底まで黒い小さな円い植物痕（稲株？）が認められる。＜**図・精査状況**＞上述のように、疑似現象かどうか悩んだため、サブトレンチを入れている。南側の突出部は掘りすぎかもしれない。＜**覆土**＞周辺の土坑と異なり、浅い割に多くの層に分かれる。１層はクロボク土再堆積、２層も同様だがⅣ層粒子が多く、より明るい。３と４層は、Ⅱ層とⅣ層の霜降り状混土で、３層には焼土粒、炭化物を含む。＜**平面形・規模**＞１×0.8m程度の不整楕円形。＜**断面形・深さ**＞不整形である。15cm程度だが、南側の突出部分は約20cm。＜**壁・底**＞壁砂質Ⅳ層。底は大部分が礫が露頭する砂質Ⅳ層だが、掘りすぎかと思われる南側の突出部は砂利（Ⅴ）層（礫露頭）。底は変化が著しい。＜**出土遺物**＞なし。＜**時期・所見**＞覆土と今回の調査の類例から、平安時代の可能性がある。全体図では、ＲＢ009やＲＢ019掘立柱建物跡の柱穴と並んでいるように見えるが、建物の構成としてはおかしく、偶然と思う。

ＲＤ186土坑（第35図、写真図版34）

＜**位置・検出状況**＞東区北東、－１Ｉ14～15mグリッド。Ⅳ層面ジョレンによって黒土で明瞭に検出したが、覆土は根カクランそのもののような土であり、平面形も不整形である。半裁後も悩んだが、その後ＲＤ179・180土坑などを認定し、この穴をあえて疑似現象とする理由もなくなり、平面形も南側部分は比較的しっかりしているので、土坑と認定した。＜**重複**＞ＲＧ039溝跡と重複するように見えるが、これは、上面の黒土（カクラン含む）を全て掘ってしまった精査の方法に起因し、実際

には重複していていなかったと思う。検出面～底まで黒い小さな円い植物痕（稲株？）が認められる。＜図・精査状況＞上場は完掘時掘りすぎたため、断面図と平面図合わない。セクションポイントＡの位置が合わない（理由不明）。壁の北半分は完掘時の掘りすぎである。＜覆土＞二層に分かれ、1層は他土坑と同じクロボク土再堆積にⅣ層粒子混じるもの、２層はⅡ・Ⅳ層霜降り状混土で埋め戻している可能性がある。根カクランと考えたのは２層である。＜平面形・規模＞北半分掘りすぎたので不明だが、1.1×0.85m程度の円～楕円形か。＜断面形・深さ＞比較的整形で、逆台形。約27cm。＜壁・底＞壁～底Ⅳ層。壁はわりと直線的である。底は平らだが、稲株痕や酸化鉄、白色化している部分なども見られる。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞覆土と今回の調査の類例から、平安時代の可能性がある。全体図では、ＲＢ019掘立柱建物跡の柱穴と並ぶように見えるが、建物の構成としてはおかしく、偶然と思う。本土坑よりさらに南東側の溝跡の中に見えるものは、崩落部分で、遺構ではない。

ＲＤ187土坑（第35図、写真図版34）

＜位置・検出状況＞東区北東、－１Ｉ15ｋ～ｌグリッド。Ⅳ層面ジョレンによって黒土で明瞭に検出したが、大部分が水道管に壊され、覆土もそれらしくなく、カクランの可能性を考えた。しかし、ＲＤ179・180土坑などを認定し、この穴の場合は平面形も整形で、半裁した結果底の形も比較的整っていたので、土坑と認定。＜重複＞ないと思う。前述のように南側水道管によって壊されている。検出面～底まで黒い小さな円い植物痕（稲株？）が認められる。＜図・精査状況＞Ａ´側の上場は完掘時掘りすぎたため、断面図と平面図合わない。完掘時の掘りすぎで（稲株痕等全ての黒いものを除去）、平面形は検出時に比べて不整形になってしまった。＜覆土＞二層に分かれ、１層は他土坑と同じクロボク土再堆積にⅣ層粒子混じるもの、２層はⅡ・Ⅳ層霜降り状混土で埋め戻している可能性がある。細かい色調などは異なるが、ＲＤ186土坑とほぼ同じで、１層はＲＤ188土坑とも同じである。＜平面形・規模＞北半分掘りすぎ、南半分カクランで不明だが、直径0.7m程度の円形か。＜断面形・深さ＞約25cm。＜壁・底＞壁～底Ⅳ層。底は、稲株痕などを掘ってしまっているため、凹凸著しいが、断面図に記したように直線的であったと思う（ただし平らではなかったようである）。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞覆土と今回の調査の類例から、平安時代の可能性がある。全体図では、ＲＢ019掘立柱建物跡の柱穴と並んでいるように見えるが、間隔や断面形・深さが異なり、偶然と思う。

ＲＤ188土坑（第35図、写真図版35）

＜位置・検出状況＞東区中央東、－１Ｉ15～16ｌグリッド。Ⅳ層面ジョレンによって黒土で明瞭に検出したが、大部分が水道管に壊されていた。ただし、残った部分の平面形はそれらしく（円形の一部）、当初から土坑に違いないと考え、半裁（カクラン除去）した結果確信し、土坑と認定した。＜重複＞ないと思う。前述のように西側水道管によって壊されている。検出面～底まで黒い小さな円い植物痕（稲株？）が認められる。＜図・精査状況＞セクションポイントＡの位置、断面図と平面図合わない（理由不明）。完掘時の掘りすぎで（稲株痕等全ての黒いものを除去）、平面形は検出時に比べて不整形になってしまった。＜覆土＞他土坑と同じクロボク土再堆積にⅣ層粒子混じる単層。ＲＤ187土坑１層と同じ。＜平面形・規模＞東半分掘りすぎ、西半分カクランで不明だが、直径0.75m程度の円形か。＜断面形・深さ＞約15cm。＜壁・底＞壁～底Ⅳ層。底は、稲株痕などを掘ってしまっているため、凹凸著しいが、断面図に記したようにほぼ平らであったようである。＜出土遺物＞なし。＜時期・

所見＞覆土と今回の調査の類例から、平安時代の可能性がある。全体図では、ＲＢ019掘立柱建物跡の柱穴と並んでいるように見えるが、間隔や断面形・深さが異なり、偶然と思う。

ＲＤ189土坑（第35・44図、写真図版35）
＜位置・検出状況＞東区中央南、－１Ｉ24ｊグリッド。Ⅳ層面ジョレンで検出。一部ＲＧ039溝跡と重複しているが、溝跡覆土が黒色土なのに対し本土坑の検出面の覆土は明るい色であったため、明瞭に区別できた。半裁した結果、浅かったが、底がしっかりしていたので土坑と認定。規模が小さいのが気になるが。＜重複＞ＲＧ039溝跡と重複し、検出状況と覆土から、本土坑の方が新しいと判断。検出面～底まで黒い小さな円い植物痕（稲株？）が認められる。＜図・精査状況＞溝跡との新旧関係は検出面で見通しを持っていたが、よりはっきりさせるため、溝跡の一部まで掘った（サブトレンチ）。＜覆土＞三層に分かれ、１層は今回の調査では他には見られない灰黄褐色の独特の色の土である（流れてきた汚砂？）。２層は、１層と３層の中間的で、焼土粒混じる。３層は、黒土で、溝覆土の再堆積土のようである。＜平面形・規模＞0.65×0.6ｍ程度の隅丸方形。＜断面形・深さ＞約13㎝。＜壁・底＞壁～底砂質Ⅳ層。底は、比較的平らだが、変色しているところがある。＜出土遺物＞土師器29ｇ出土（第44図95・96掲載）。＜時期・所見＞土器から、９世紀後半～10世紀初めか。

ＲＤ190土坑（第35・44図、写真図版35）
＜位置・検出状況＞東区東端、－１Ｉ15ｐグリッド。Ⅳ層面ジョレンによって黒褐色土で検出。周囲の疑似現象と同様の土だったため、土坑かどうか疑っていたが、半裁した結果、深く、柱痕跡が明瞭に確認され、柱穴とわかった。しかし、疑似現象の疑いを持っていたこともあり、新人の作業員に任せ、いい加減に斜めに掘ってしまっていたため、柱穴とわかった時点で改めて水糸を張って半裁したのだが、中央より大分北側にずれてしまい、断面に認められる柱痕跡は不明瞭である。＜重複＞ない。検出面～中場辺りまで黒い小さな円い植物痕（稲株？）が認められる。＜図・精査状況＞上述のように、不慣れな作業員に任せてしまったこともあり、南側（半裁時）掘りすぎてしまった。＜覆土＞四層に分かれたが、３層は自然堆積土（Ⅳ層）の可能性がある。４層は柱痕跡、１・２層は柱固めの土と思われる。２・４層は今回の調査でよく見られたⅡ層とⅣ層の混土で、逆に１層は特徴的で、黒褐色土だが砂礫を顕著に含む。しかし、後述のように、本土坑の壁～底にⅤ層は認められないので、この砂礫は柱を固めるためにわざわざ他から持ってきた可能性が高い。＜平面形・規模＞直径0.6ｍ程度の不整円形。平面図では、中場～底が半円形になっているが、これは南側を掘りすぎたためで、実際には円形になっていたはずである。＜断面形・深さ＞Ｔ～Ｙ字形。約55㎝。＜壁・底＞壁～底Ⅳ層だが、検出面－30㎝より下は、水がたまっていたせいで、酸化鉄が付着し、底は白色化している。＜出土遺物＞土師器275ｇ出土（第44図97・98掲載）。＜時期・所見＞土器から、９世紀後半～10世紀初か。本土坑は、形や覆土から柱穴であることは間違いないが、これと並んで建物跡を構成する柱穴を見つけることはできなかった。本土坑の南側は、汚土が広がり、そのために確認されなかった可能性もなくはないが。北側に存在するＲＡ050住居跡に関係する可能性もあろう。

5　溝　　跡（第36・37・44図、写真図版36～38）

東区に１条、西区に１条検出した。時期はいずれも古代（以降）と思われる。西区のそれは、北側の第８・９次調査区（当センター報告書第494集）から続くＲＧ039溝跡で、総延長60ｍを超し、上

幅1.5m、深さ50cmを超える立派なものである。

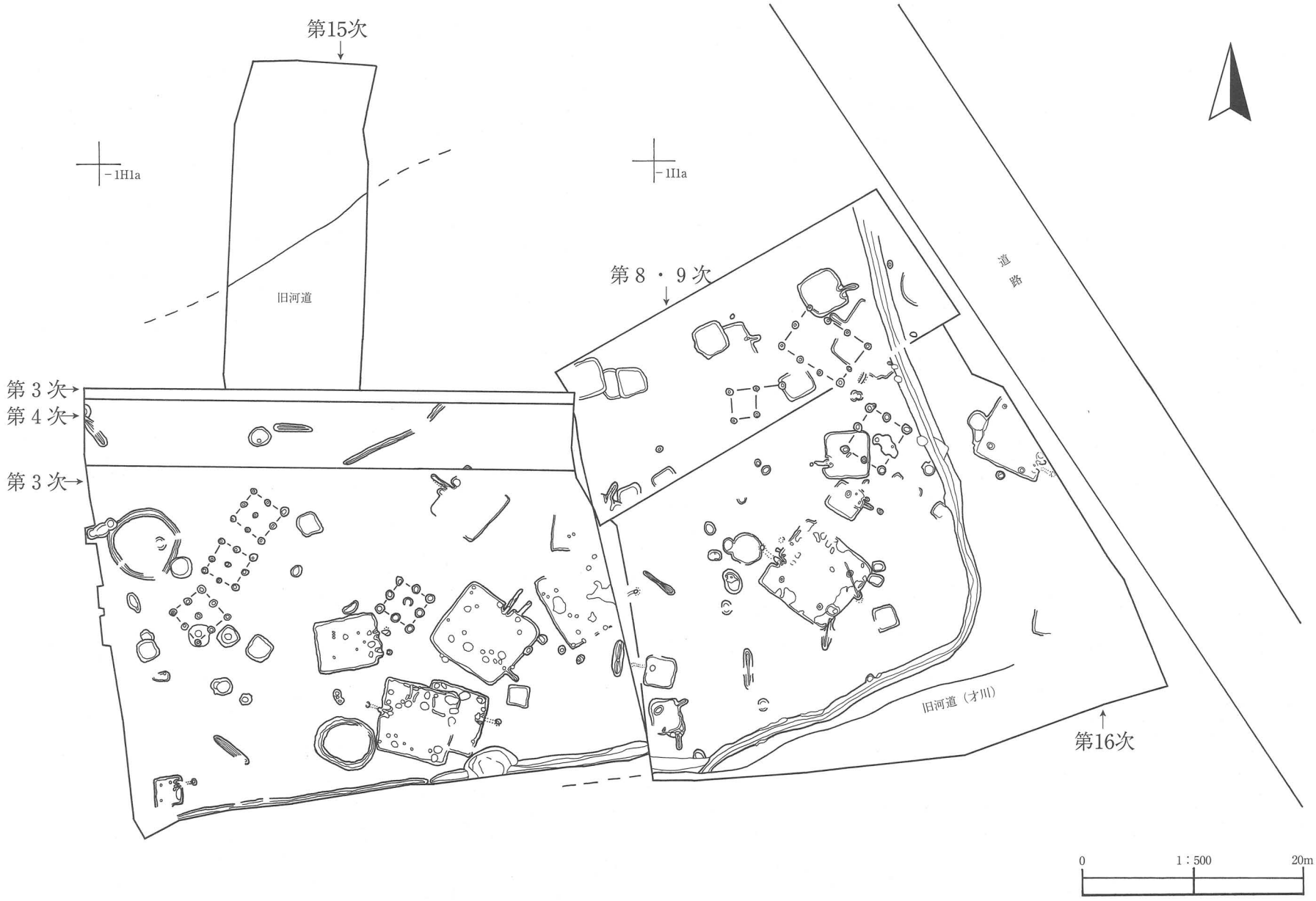
ＲＧ039溝跡（第36・37・44図、写真図版36・37・50）
＜位置・検出状況＞東区の北東端から南西端に続く。－１Ｉ９ｋ～１Ｉ３ｃグリッド。北側は、第８・９次調査区（当センター報告書第494集）からの続きを想定していたこともあり、重機による掘削時にＶ層面で明瞭に検出。南西隅は、現代の水路（「飯岡才川」）の北側に隣接するため、あふれ出した汚水で汚れており、ジョレン等で丁寧に検出して、やっと確認した。調査時には、南西側は、このまま西側に隣接する第３次調査区（当センター報告書第494集）で検出されたＲＧ012溝跡に続くものと考えていたのだが、図上で合わせてみると、うまく繋がらない（第５図）。調査による不手際（グリッドのズレ）かと考えたが、今回調査したＲＧ039は、その南西端で南側に曲がっているようであり、そこから西に向かって見えるのは現代の溝跡（カクラン）である。したがって、たとえ図面上でずらしても、ＲＧ012が、この現代の溝跡に繋がる可能性はあっても、ＲＧ039溝跡に続く可能性は低いということになる。合点しにくいが、このように考えてＲＧ012溝跡とは別物として報告することにした。**＜重複＞**北東から南西の順に、重複遺構とその遺構が本溝跡に対して古いか新しいか列挙していく。ＲＡ018住居跡（第８・９次調査結果により古）、ＲＤ174土坑（新旧不明）、ＲＤ189土坑（検出状況と覆土から、新）。これら以外に土坑状に見えるのは、溝跡壁の崩落あるいはカクランで、ＲＤ186土坑とは重複してなかった。溝跡南東隅から北側は、宅地時の汚染土で汚れており、除去するまで溝跡は見えなかった。汚土の北端～西端に沿うように、近世末以降の道あるいは水路跡が認められ（幅40cm程度）、覆土は黒褐色土だが検出面で明らかに本溝跡より新しいことが分かった。南西隅、現代の溝跡に一部壊されている。**＜図・精査状況＞**平面図は、光波測距を基に小縮尺（1/50）で作成したため、断面図（1/20作成）と照合していない。**＜覆土＞**カクラン南西から北東に向けて点々と六ヶ所にトレンチを入れて断面図を作成したが（Ａ～Ｆ）、南半は低いため水の影響を受けやすく、全く認められなかったのはＦ－Ｆ´断面だけである。水の影響によって、本来同じものを別の土として扱っている可能性があるが、現状で判断せざるを得ない。東西に延びるＡ～Ｃ断面では、ほぼ同じで、中位の酸化鉄層を挟んで上層はクロボク土が粘土化しつつある層、下層は暗青灰色粘土で、上部に汚土のあったＤ断面は、これら三層が混ざったような単層、低位から高位へ移りつつあるＥ断面では、下部はＤ断面と同じ粘土、上部は、壁崩落土も見られるが、基本はクロボク再堆積土である。最も高い位置にあるＦ断面には下部粘土層は認められないが、同じ場所に相当するような黒土が見られる。上部はＥ断面と基本的に同じと思うが、基本土層の関係で砂礫を多く含む土になっている（明るさで分層）。**＜走向・規模＞**東側は、北北西から南南東に向かい、川（飯岡才川）の手前で、向きを南西に変え、しばらく川に沿い、今回の調査区の南西端で南南西に再び向きを変え川に合流するようである。北東端～汚土の北側までは直線的、汚土部分は蛇行、その南西側～ＲＤ189土坑までは再び直線的で、その後南西端までは蛇行する。規模は、北側第８・９次調査区（当センター報告書第494集）を合わせると、全長約66ｍで、さらに北側に続く。検出時の幅は1.8ｍ以下で、削平されている（汚土）部分は狭い。**＜断面形・深さ＞**水につかる部分はカマボコ形で、高い方に行くほどＶ字形に近くなる。北側の高いところは深く約60cm、南側は55～30cm程度で、汚土のすぐ北側は70cm、汚土部分は削平ひどく30cm、そこからＲＤ189土坑までは60cm、そこから南西端まで40cmである。**＜壁・底＞**北東端から２ｍ南までは、壁～底全て砂礫（Ｖ）層、その南～西壁に円い壁の崩れが見られるところまで、検出面はⅣ層礫露頭、その下～15cmまでの壁はⅥ層、その下～底Ⅴ層、そこからＲＤ186土坑までは、壁上－40cmまではⅣ層、その下～底Ⅴ層（底は砂礫層）、これより南は壁～底全

て砂質Ⅳ層だが、汚土の少し北までは、底には礫が露頭し、南側は、水につかっていたせいで、酸化鉄が付着したり、底が白色粘土化し、汚土部分は、検出面から酸化鉄が付着し白色化、そこからＲＤ189土坑までは、検出面－25cm以下は酸化鉄が付着し白色化。ここから南西端までは、検出面－10cm以下は酸化鉄が付着し白色化。底は、Ｅ断面のところが狭く鋭角的で、他は円いが、平らな場所はない。北東端から汚土までは、底は、砂礫層で掘りにくかったためか、細く円い。汚土の南西端～ＲＤ189土坑までの底は、比較的平らである。Ａ・Ｂ断面では、削平のせいか浅く、壁～底砂質Ⅳ層だが、４ｂ層より下の壁には酸化鉄がびっしり付着し、底は青灰色に変色。Ｃ断面では、ほぼ同じだが、あまり削平されていないのか上場が広く、壁の上部にはⅢ層も残っている。上部に汚土のあったＤ断面は、検出時にＡ・Ｂ断面の４ｂ層まで削平したことになるのか壁は上まで酸化鉄が付着し、壁～底はＡ・Ｂ断面より白い。Ｅ断面も、壁～底砂質Ⅳ層で、５層より下の壁は酸化鉄が付着し、底は白く礫が露頭し、一部砂（Ⅴ）層である。最も高い位置にあるＦ断面は、壁～底砂質Ⅴ（砂礫）層。**＜その他＞**調査時、雨が降ると汚土より南側は水がたまった。**＜出土遺物＞**土師器2,611ｇ（第44図99～102掲載）、須恵器1,111ｇ（同35・36掲載）、焼粘土塊（写真図版50の５）出土。**＜時期・所見＞**土器から、９世紀後半～10世紀初めか。覆土からは、古代以降の可能性がある。覆土から判断する限り、常時流水があったようには考えにくく、南側に水が淀んでいるのが常態であったのではないか。今回（特に北東側）の調査結果は、北側に隣接する第８・９次調査区（当センター報告書第494集）のそれとほぼ同じで、「わずかに水が流れた痕跡を残すが、水路というよりは区画溝の可能性のほうが高いように思う」「出土遺物から、平安時代（９世紀後半～10世紀はじめ）前半に機能した溝と思われる」（p.44）、との所見が示されている。なお、別物と判断した、西側に隣接する第３次調査区（当センター報告書第494集）で検出されたＲＧ012溝跡の記載とも符合する（pp.60～61）。

ＲＧ062溝跡（第37図、写真図版38）

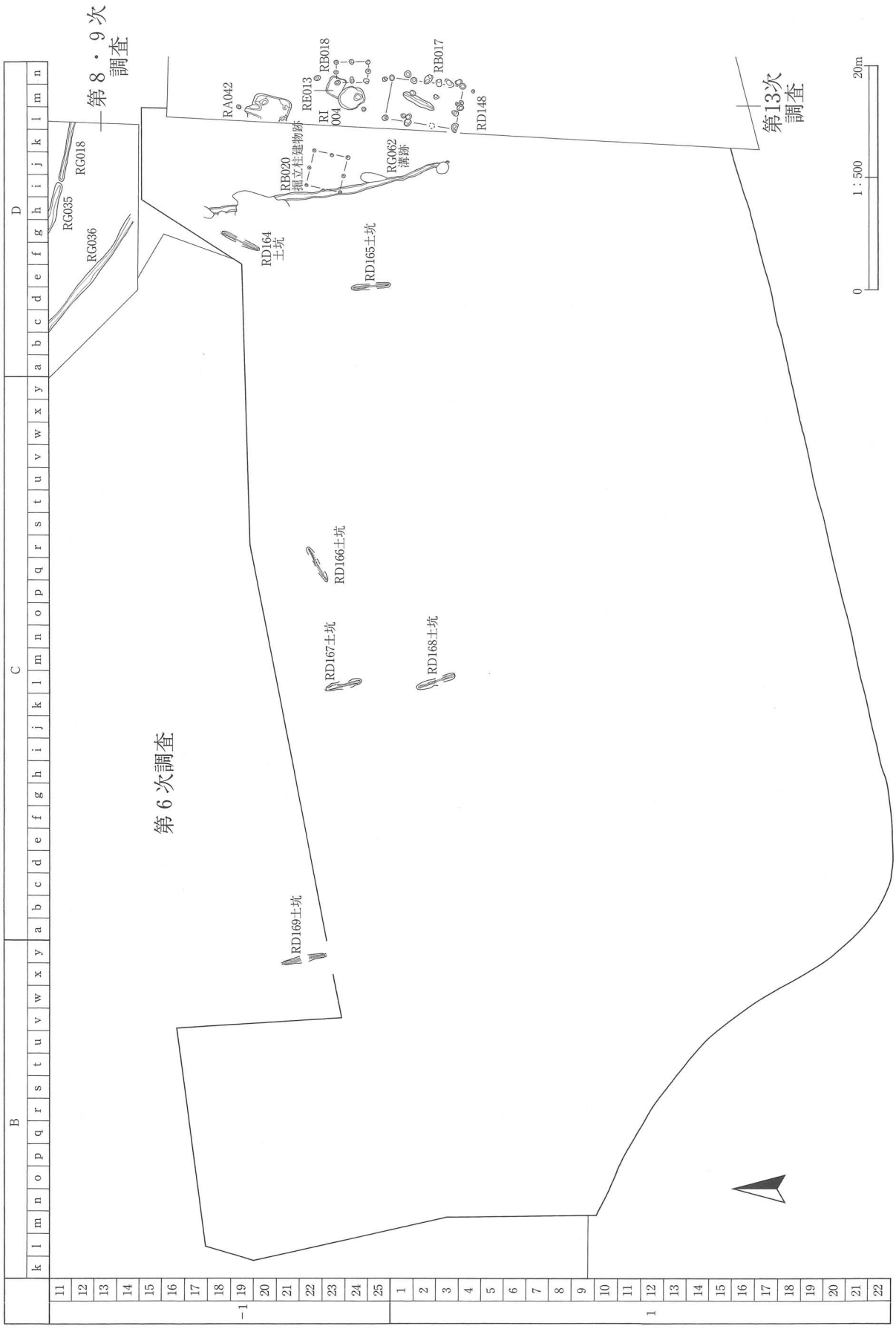
＜位置・検出状況＞西区北東端、－１Ｄ18ｈ～１Ｄ３ｊグリッド。重機による掘削時にⅣ層面で明瞭に検出。覆土はⅡ層再堆積土で、カクランと明瞭に異なり、古代の遺構と思われた。調査時には、北側の第８・９次調査区（当センター報告書第494集）で検出されたＲＧ036溝跡の続きと考えていたが、図上で合わせてみると、うまく繋がらない（第７図）。ＲＧ036の走向がより東に向かっているためである。ＲＧ036が調査区境で逆“く”字状に曲がれば、繋がる可能性もあるが、両者の間はカクランが多く、不明である。今回は別遺構として扱うことにした。**＜重複＞**ＲＢ020掘立柱建物跡と重複するが、重複が分かったのは両者を精査した後のため、新旧関係は不明（詳細はＲＢ020参照）。北側は、近世末以降の土坑墓で壊され、また、その上にあった木を伐採した時にカクランを受けている。南側は、削平のため途中で消失。宅地跡だったため、その他にも所々カクランを受けている。検出面～底まで黒い小さな円い植物痕（稲株？）が認められる。**＜図・精査状況＞**平面図は、光波測距を基に小縮尺（1/50）で作成したため、断面図（1/20作成）と照合していない。**＜覆土＞**カクランのため細かく分かれるが、実際にはⅣ層粒子含むⅡ層再堆積土の単層らしい。ＲＧ036溝跡の覆土に似るようだ（当センター報告書第494集）。**＜走向・規模＞**北北西－南南東。規模は確認された範囲では21ｍ程度。検出時の幅は25cm以下。南側は、第13次調査区（当センター報告書第494集）に続くはずだが、第13次調査区では溝跡は検出されていない（第４・７図）。**＜断面形・深さ＞**逆カマボコ形。断面図をとった辺りだけ深く約20cm、他は10cm程度。断面形と深さは、ＲＧ036溝跡とほぼ同じ（当センター報告書第494集）。**＜壁・底＞**壁～底砂質Ⅳ層。壁は、上面カクランを受けているせいか、だらだらしてはっきりしない。**＜出土遺物＞**なし。**＜時期＞**覆土からは、古代以降の可能性あり。

第5図　東区周辺の遺構

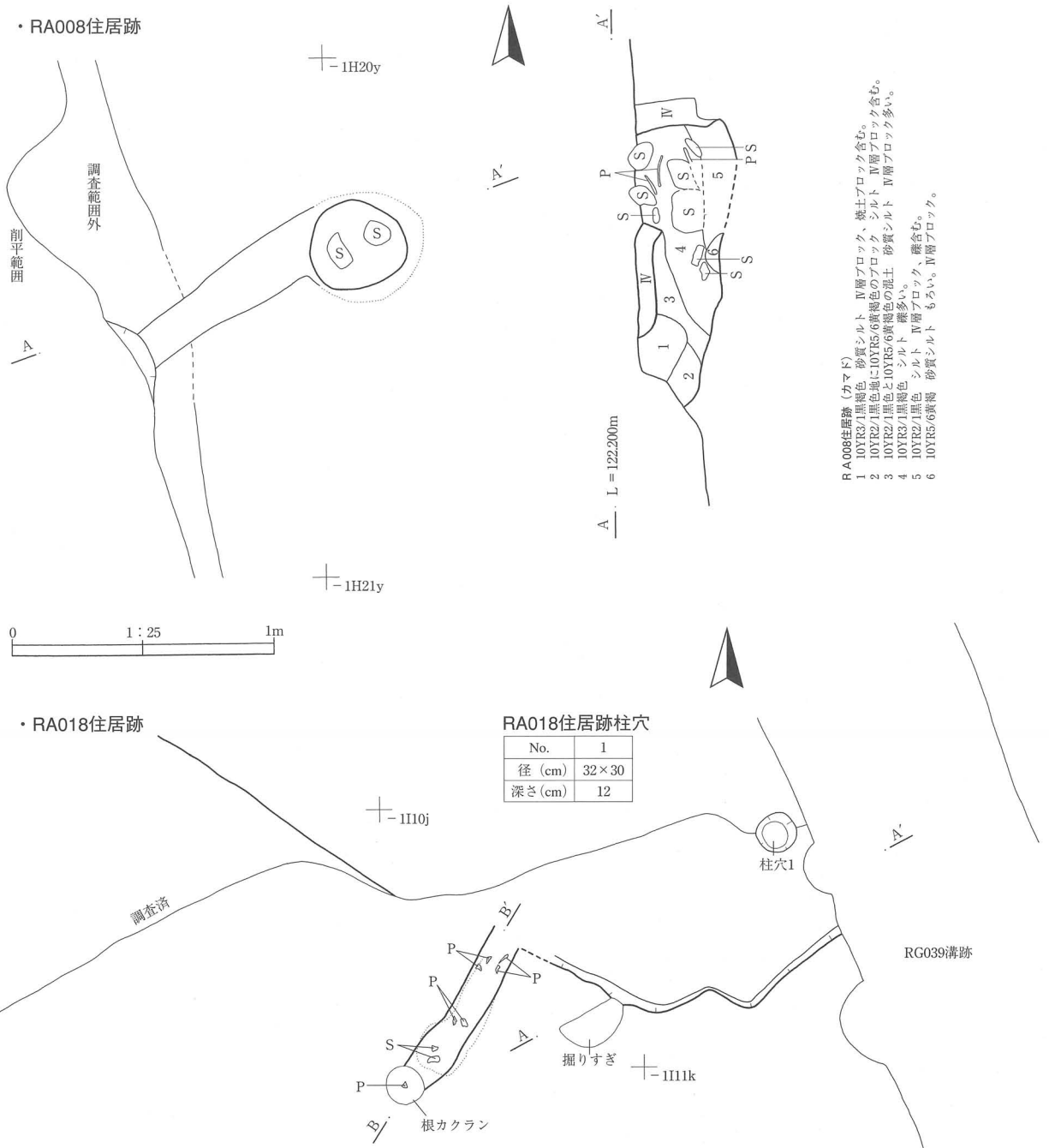


H
I
u v w x y a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y
6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 1 2 3 4 5
−1
1
カクラン
カクラン
カクラン
カクラン
汚れた土の範囲
トレンチ
トレンチ
トレンチ
旧河道
前回調査区
RA051 住居跡
RA050 住居跡
RA049 住居跡
RA048 住居跡
RA047 住居跡
RA046 住居跡
RA045 住居跡
RA008 住居跡
RA018 住居跡
RB009 掘立柱建物跡
RB019 掘立柱建物跡
RG039 溝跡
RD172 土坑
RD190 土坑
RD186 土坑
RD188 土坑
RD174 土坑
RD187 土坑
RD175 土坑
RD176 土坑
RD170 土坑
RD160 土坑
RD161 土坑
RD189 土坑
RD185 土坑
RD183 土坑
RD184 土坑
RD182 土坑
RD171 土坑
RD181 土坑
RD177 土坑
RD173 土坑
RD180 土坑
RD163 土坑
RD162 土坑
RD179 土坑
RD178 土坑
0
1：400
10m

第６図　東区全体図


第8・9次
調査
第13次
調査
第6次調査
RA042
RE013
RB018
RI
004
RB017
RD148
RB020
掘立柱建物跡
RG062
溝跡
RG018
RG035
RG036
RD164
土坑
RD165土坑
RD166土坑
RD167土坑
RD168土坑
RD169土坑
0
1:500
20m

第7図　西区全体図



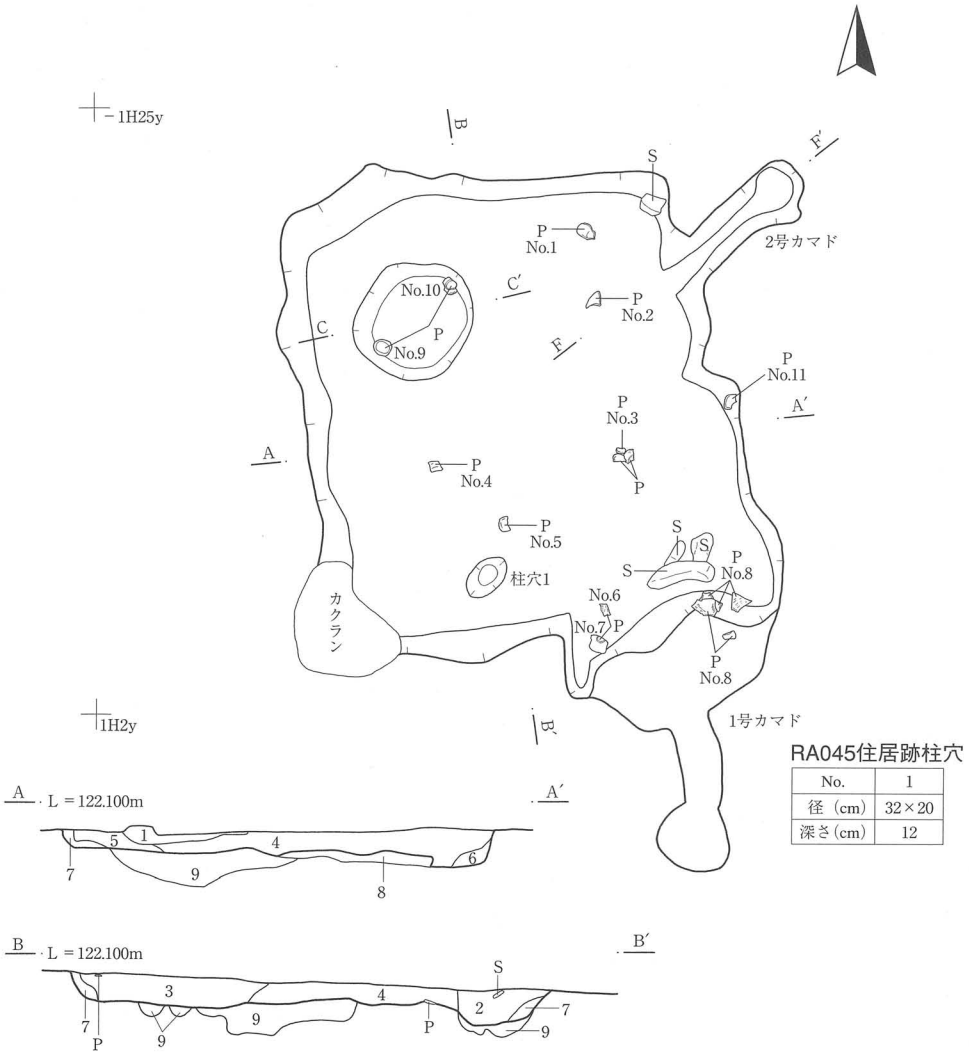
RA008住居跡（カマド）
1　10YR3/1黒褐色　砂質シルト　Ⅳ層ブロック、焼土ブロック含む。
2　10YR2/1黒色地に10YR5/6黄褐色のブロック　シルト　Ⅳ層ブロック含む。
3　10YR2/1黒色と10YR5/6黄褐色の混土　砂質シルト　Ⅳ層ブロック多い。
4　10YR3/1黒褐色　シルト　礫多い。
5　10YR2/1黒色　シルト　Ⅳ層ブロック、礫含む。
6　10YR5/6黄褐　砂質シルト　もろい。Ⅳ層ブロック。

RA018住居跡
1　10YR3/2黒褐色　砂　Ⅳ層粒子多く、焼土粒、ブロック含む。
2　7.5YR3/1黒褐色　砂　焼土粒含む。
3　10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　砂　Ⅳ層粒子多い。
4　10YR2/1黒色　シルト　根カクラン。

RA018住居跡カマド煙道
0　10YR2/1黒色地に10YR5/6黄褐色散る　シルト　根カクラン。
1　10YR3/1黒褐色　シルト
2　10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　シルト　Ⅳ層粒子、土器多い。
3　10YR5/6黄褐色地に10YR3/1黒褐色のブロック　砂質シルト　Ⅳ層ブロック最多。
4　10YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色の粒子混じる　シルト　Ⅳ層粒子、土器多い。

第8図　RA008・018住居跡

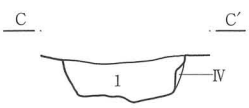
・RA045住居跡

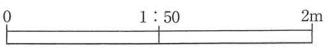


RA045住居跡柱穴

No.	1
径（cm）	32×20
深さ（cm）	12

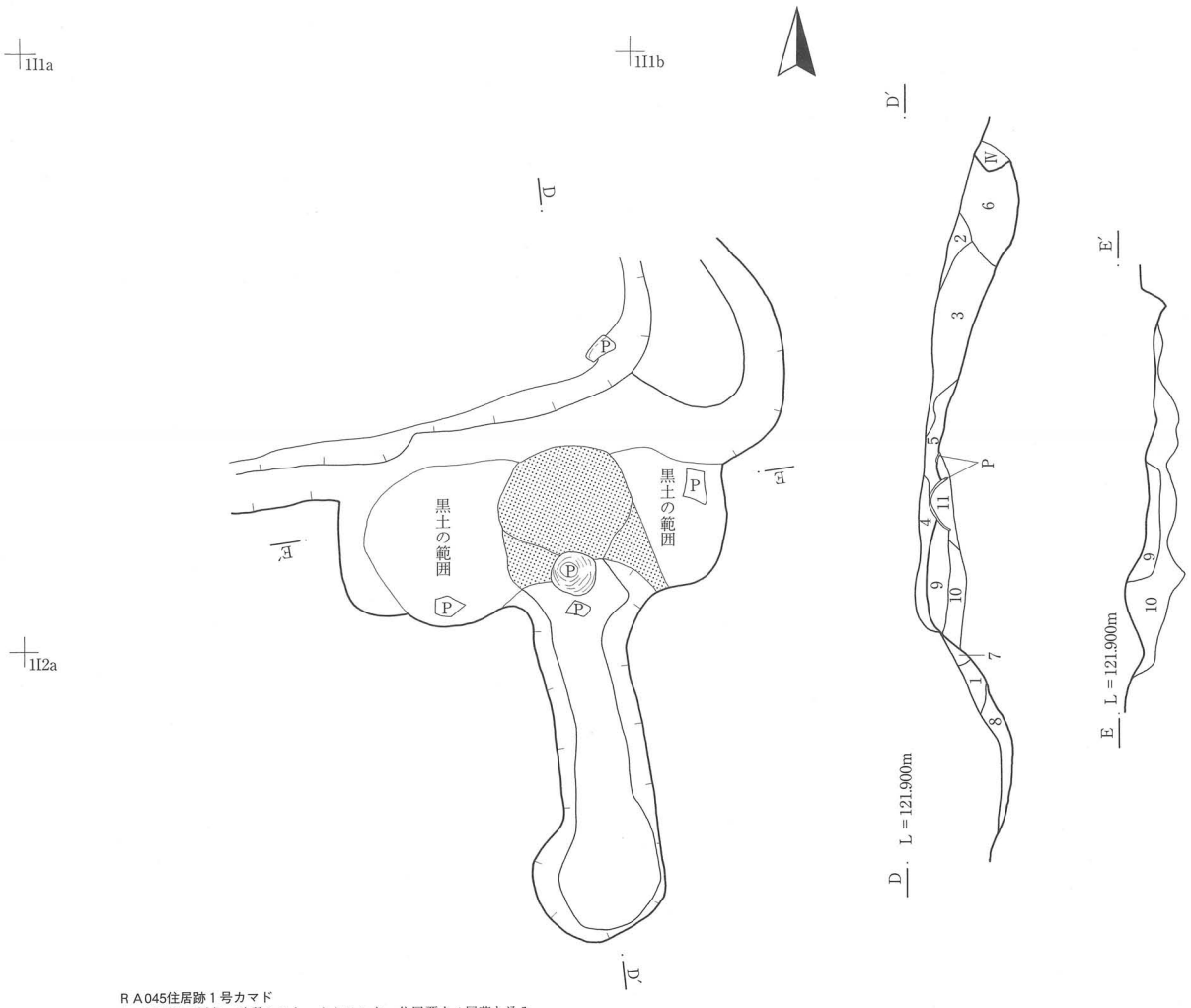
RA045住居跡
1　10YR4/2灰黄褐色　砂質シルト　硬く締まる。4層が耕作土でカクランを受けたもの。
2　10YR2/2黒褐色　砂質シルト　4層に似るが、カクランか。
3　10YR2/2黒褐色地に10YR5/6黄褐色ブロック　砂質シルト　カクランを受けているが、Ⅳ層ブロック多い。
4　10YR2/2黒褐色　砂質シルト　Ⅳ層粒子、ブロック、炭化物含む。
5　10YR2/1黒色　砂質シルト　Ⅳ層粒子、ブロック含む。
6　7.5YR2/1黒色　砂質シルト　Ⅳ層粒子、焼土粒多い。
7　10YR2/2黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　砂？　壁崩落土。
8　10YR5/6黄褐色地に10YR2/2黒褐色混じる　砂　貼床？　上面が床らしい。
9　10YR5/6黄褐色地に10YR3/1黒褐色の霜降り状ブロック　砂質シルト　掘り方埋土。



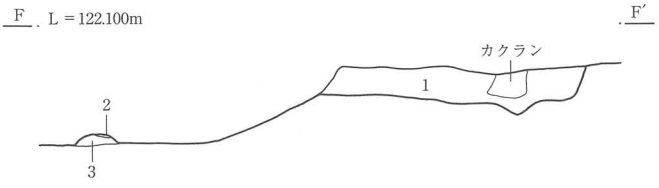


RA045住居跡内土坑
1　10YR3/1黒褐色地に霜降り状に10YR5/6黄褐色ブロック　砂質シルト　硬く締まる。Ⅳ層ブロック多く、炭化物、焼土粒含む。底に酸化鉄。

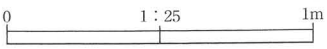
第9図　RA045住居跡（1）



RA045住居跡1号カマド
1　10YR2/1黒色　砂質シルト　カクランか、住居覆土4層落ち込み。
2　10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　砂質シルト　Ⅳ層粒子含む。根によるカクランらしい。
3　10YR2/1黒色と10YR4/3にぶい黄褐色の混土　砂質シルト　Ⅳ層粒子含む。
4　7.5YR2/1黒色　砂質シルト　焼土粒含む。焚口焼土覆土。
5　10YR3/3暗褐色と7.5YR4/4褐色の混土　砂質シルト　硬く締まる。焼土粒、Ⅳ層粒子多い。
6　10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　砂質シルト　Ⅳ層粒子多い。3層とほとんど同じだが、より明るい。
7　10YR5/6黄褐色地に10YR3/2黒褐色混じる　砂　8層と同じか。
8　7層と同じか、Ⅳ層が所々カクランを受けたものと思う。
9　5YR3/6暗赤褐色　砂　焚口焼土。
10　10YR5/6黄褐色地に10YR3/1黒褐色の霜降り状混土　砂　カマド掘り方埋土。
11　10YR4/3にぶい黄褐色　砂質シルト　Ⅳ層汚れ再堆積。カマド掘り方埋土？

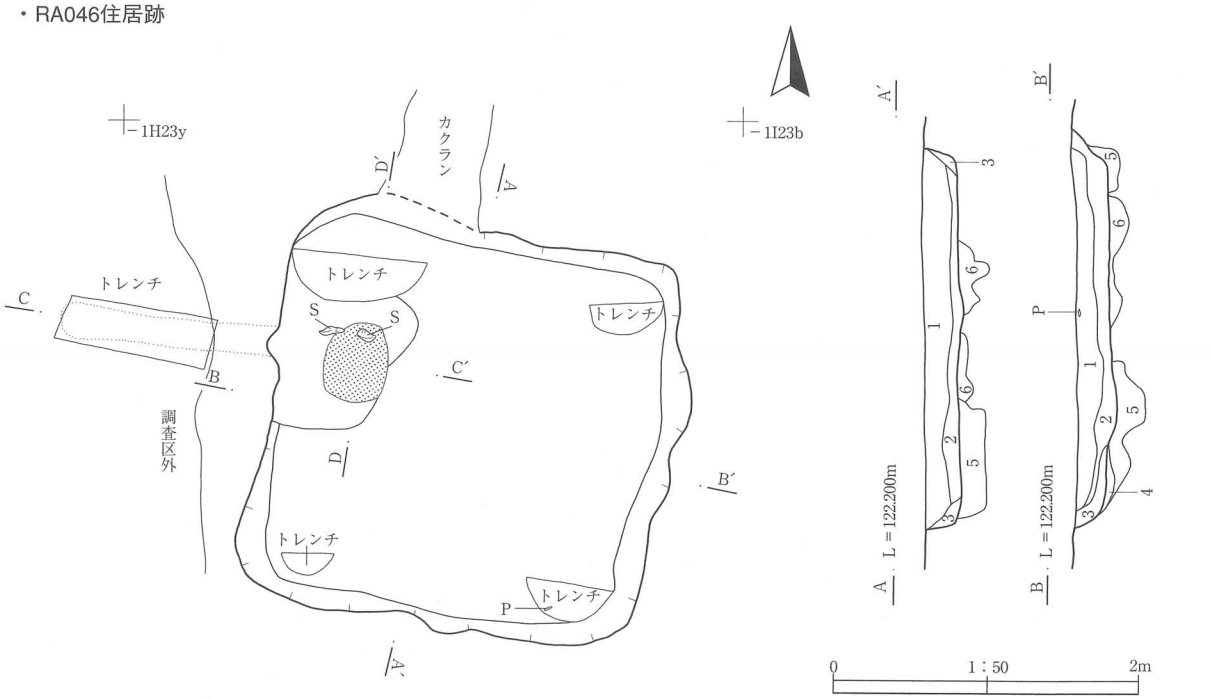


RA045住居跡2号カマド
1　10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　砂質シルト
2　7.5YR4/4褐色　砂　焚口焼土の残骸。
3　7.5YR2/1黒色　砂質シルト　炭化物多い。

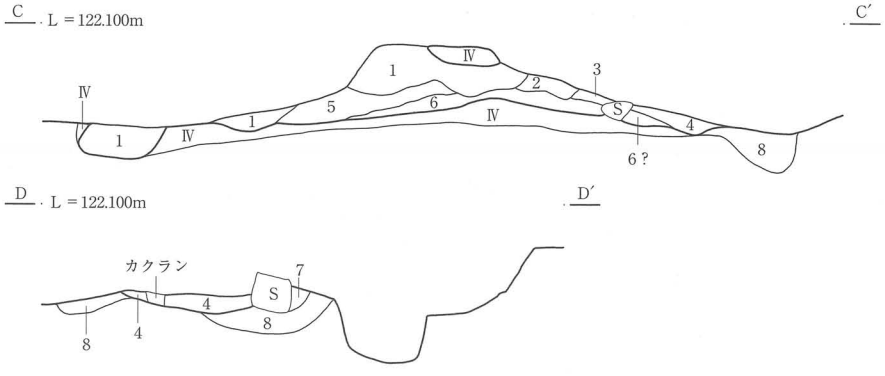


第10図　RA045住居跡（2）

・RA046住居跡



RA046住居跡
1　10YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色散る　砂質シルト　硬く締まる。Ⅳ層粒子多い。
2　10YR2/1黒色　シルト　硬く締まる。Ⅳ層粒子、ブロック含む。
3　10YR2/1黒色と10YR5/6黄褐色の霜降り状混土　砂質シルト　硬く締まる。Ⅱ、Ⅳ層再堆積混土。埋め戻し？
4　10YR5/6黄褐色　砂　カマド袖（上の3層の続きか）。
5　10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　砂、シルト　掘り方埋土。
6　10YR4/4褐色と10YR5/6黄褐色の混土　砂　掘り方埋土。

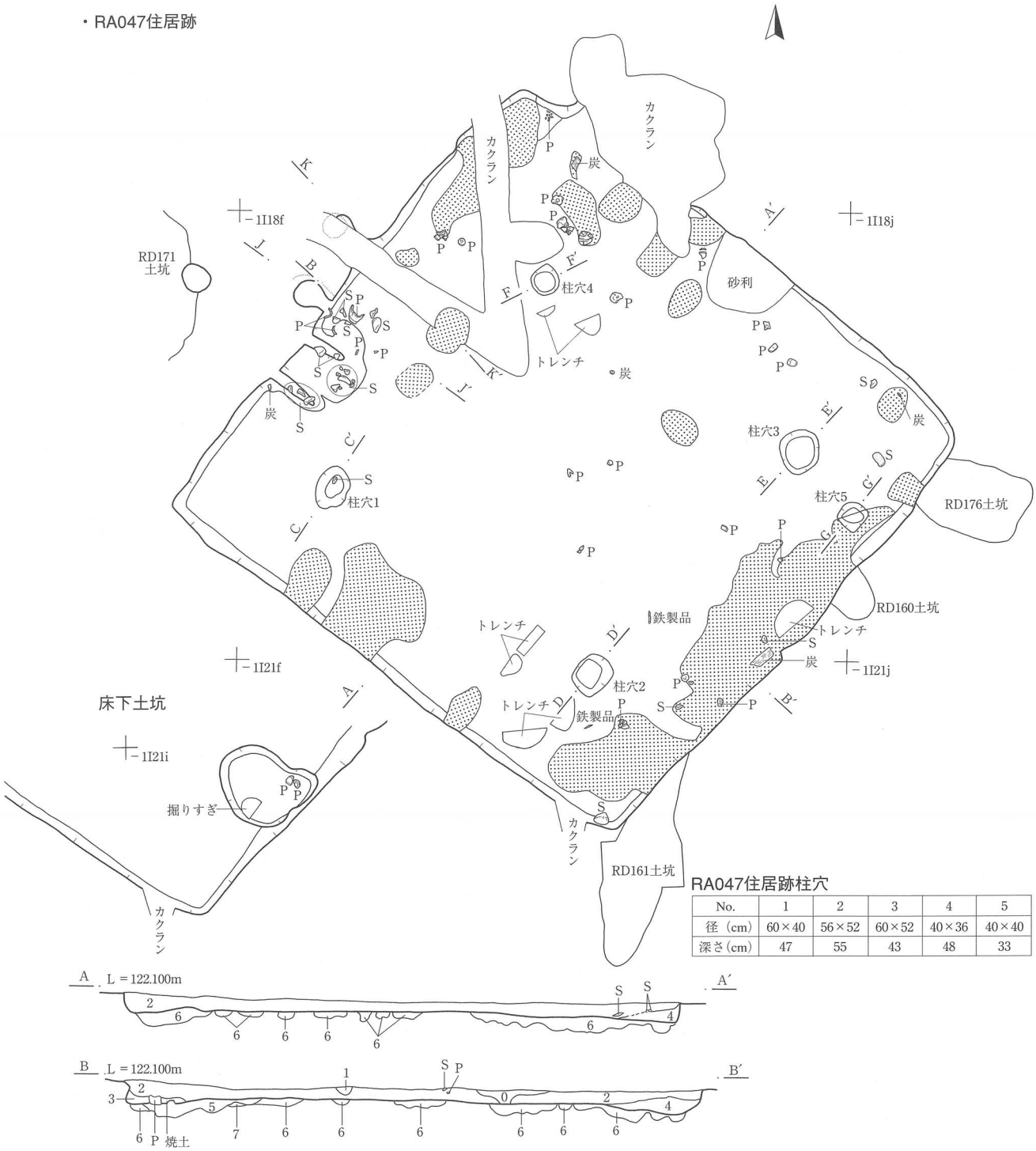


RA046住居跡カマド
1　10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の霜降り状混土　砂　Ⅳ層粒子多く、焼土ブロックわずかに含む。
2　10YR5/6黄褐色　砂　Ⅳ層が崩れたものと思うが、Ⅳ層そのものに見える。
3　10YR3/1黒褐色　砂
4　5YR4/4にぶい赤褐色　砂　Ⅳ層砂が焼けたもの。焼土だが、混入物多い。
5　10YR5/6黄褐色　砂　2層に同じ。
6　5YR4/4にぶい赤褐色、10YR5/6黄褐色、10YR3/1黒褐色の混土　砂　焼土粒多い。煙道天井が落盤したものと思う。
7　10YR4/4褐色　砂　汚れⅣ層再堆積。カマド袖礫掘り方埋土。
8　10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の霜降り状混土　砂　住居掘り方埋土。

0　1：25　1m

第11図　RA046住居跡

・RA047住居跡



RA047住居跡柱穴

No.	1	2	3	4	5
径（cm）	60×40	56×52	60×52	40×36	40×40
深さ（cm）	47	55	43	48	33

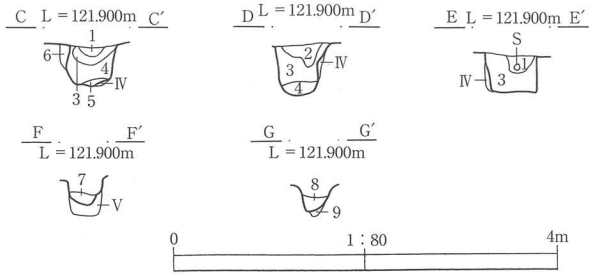
RA047住居跡
0　カクラン。1層が変質して硬くなったもの。上面に砂利。
1　10YR3/2黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　砂質シルト　Ⅳ層粒子、焼土粒多い。
2　10YR2/1黒色　砂質シルト
3　10YR3/2黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　砂質シルト　Ⅳ層粒子、焼土粒多い。カマド崩土。
4　10YR2/1黒～3/1黒褐色地に7.5YR4/4褐色～7.5YR3/1黒褐色の焼土　砂　Ⅳ層粒子混じる黒褐色土（2層？）が火を受けたもの。
5　10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の霜降り状混土　砂　5層より黒土の割合多く、焼土粒含む。
6　10YR5/6黄褐色地に10YR2/1黒色～3/1黒褐色の霜降り状混土　砂　壁際ほど黒っぽいブロック。掘り方埋土。
7　5YR4/4にぶい赤褐色　砂　焼土。

0　1：80　4m

第12図　RA047住居跡（1）

遺物出土状況

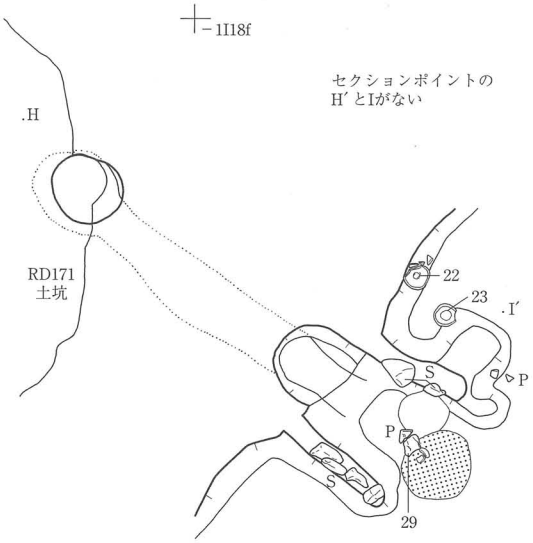
第13図　RA047住居跡（２）



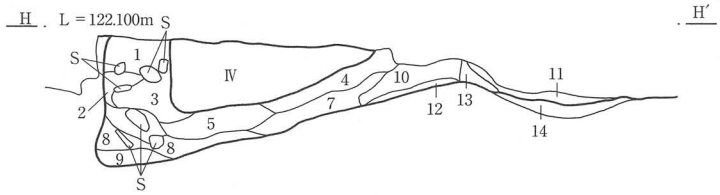
・RA047住居跡柱穴

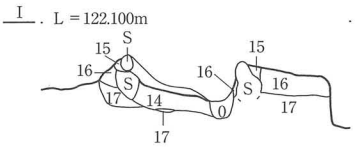
RA047住居跡柱穴
1　10YR2/1黒色地に10YR5/6黄褐色散る　砂質シルト　Ⅳ層粒子含む。
2　10YR5/6黄褐色　砂　Ⅳ層再堆積。埋め戻し？
3　10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の霜降り状混土　砂　掘り方埋め土。
4　10YR5/6黄褐色地に10YR3/1黒褐色のブロック　砂　掘り方埋め土。3層よりずっと明るい。
5　10YR3/1黒褐色と10YR4/4褐色の混土　シルト　もろい。
6　10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の霜降り状混土　砂質シルト　住居掘り方埋め土。
7　N2/黒と7.5YR4/4褐色の混土　粘土　礫多く含む。酸化鉄付着。
8　10YR2/1黒色と10YR5/6黄褐色の霜降り状混土　砂　Ⅱ層とⅣ層の混土。埋め戻した土？
9　10YR5/2灰黄褐色地に10YR2/1黒色のブロック　砂　砂層が水で変色したもの。掘りすぎ？

・RA047住居跡
1号カマド

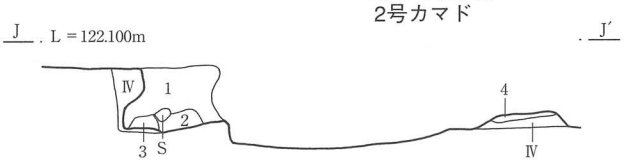


RA047住居跡1号カマド
0　10YR3/1黒褐色　シルト　粘性強い。カクラン穴と思う。
1　10YR3/1黒褐色　砂　Ⅳ層粒子、礫含む。
2　10YR5/6黄褐色地に10YR3/1黒褐色混じる　砂　Ⅳ層汚れ再堆積。
3　10YR4/2灰黄褐色地に細かい10YR5/6黄褐色のブロック　砂質シルト　Ⅳ層粒子多い。
4　10YR4/3にぶい黄褐色　砂　Ⅳ層粒子多い。
5　10YR3/1黒褐色地に細かい10YR5/6黄褐色ブロック　砂質シルト　Ⅳ層粒子、焼土粒含む。
6　10YR3/1黒褐色　砂質シルト　Ⅳ層粒子、礫多い。
7　10YR2/2黒褐色　砂　Ⅳ層粒子、焼土粒含む。
8　10YR3/1黒褐色と10YR2/1黒色の混土　シルト　もろい。礫含む。
9　10YR2/1黒色　シルト　粘性あり。もろい。礫含む。
10　10YR3/1黒褐色地に5YR5/8明赤褐色のブロック　シルト　細かい焼土ブロック多い。Ⅳ層粒子含む。
11　10YR4/2灰黄褐色　シルト　Ⅳ層粒子、焼土粒、ブロック含む。
12　7.5YR3/2黒褐色　砂　焼土粒最も多い。
13　10YR4/2灰黄褐色と10YR5/6黄褐色の混土　シルト　Ⅳ層汚れ再堆積。天井が落盤したもの？
14　5YR4/8赤褐色　砂　焼土。
15　5YR3/2暗赤褐色　砂　カマド袖石掘り方埋土（Ⅳ層？）が熱で変化。
16　10YR4/3にぶい黄褐色　砂　焼土粒、黒褐色土混じる。カマド袖本体。
17　10YR5/6黄褐色地に10YR3/1黒褐色霜降り状に混じる　砂質シルト　住居掘り方埋土。

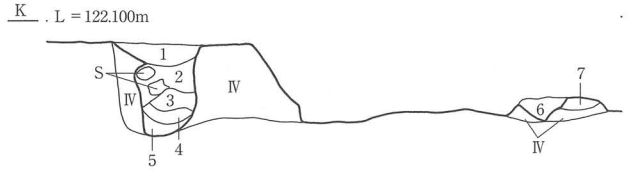




・RA047住居跡
2号カマド

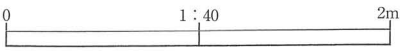


・RA047住居跡
3号カマド



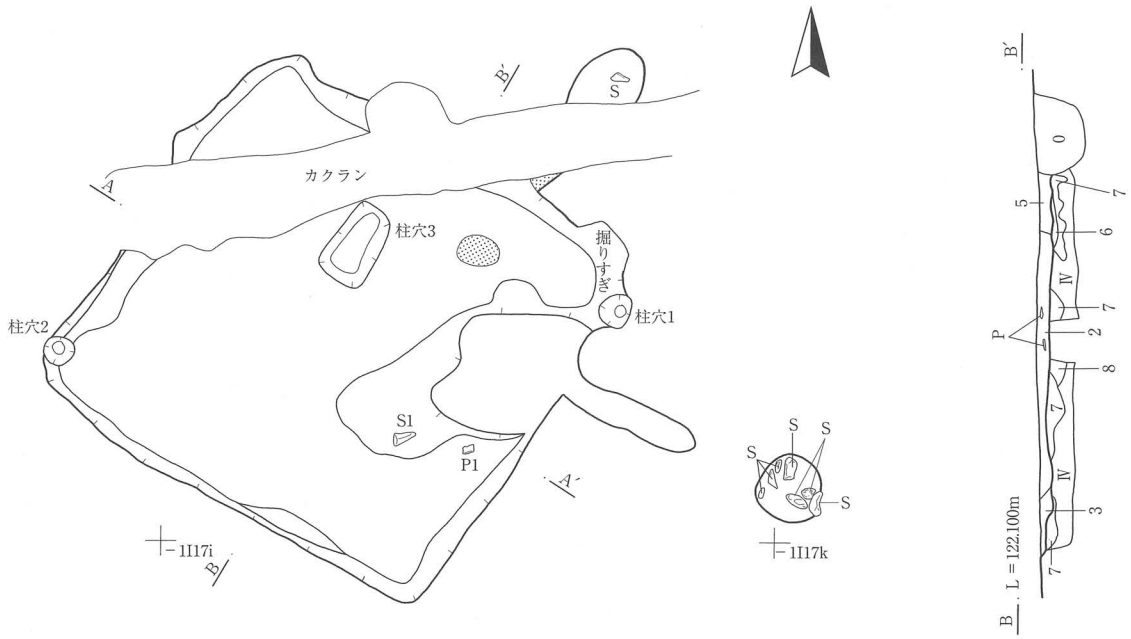
RA047住居跡2号カマド
1　10YR3/2黒褐色　砂質シルト　Ⅳ層粒子多い。
2　10YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色ブロック　砂質シルト　Ⅳ層ブロック含む。
3　7.5YR3/1黒褐色　シルト　粘性あり。
4　5YR3/2暗赤褐色　砂　硬く締まる。焼土。

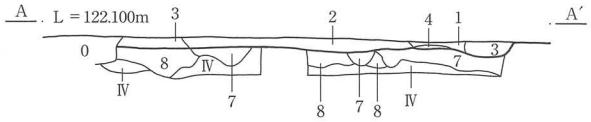
RA047住居跡3号カマド
1　10YR3/1黒褐色地に霜降り状に10YR5/6黄褐色ブロック　砂質シルト　Ⅳ層ブロック多い。この煙道を壊している水道管埋土によく似る。
2　10YR3/2黒褐色地に霜降り状に10YR5/6黄褐色の細かいブロック　砂質シルト　汚れⅣ層再堆積。
3　10YR3/1黒褐色地に霜降り状に10YR5/6黄褐色ブロック　砂質シルト　粘性ややあり。2層と、カクランを受けて色が違うだけ？
4　7.5YR2/1黒色　シルト　ややもろい。焼土粒含む。
5　10YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色ブロック　シルト　粘性あり。ややもろい。Ⅳ層ブロック含む。
6　5YR4/4にぶい赤褐色　シルト　もろい。焼土粒多い。7層がカクランを受けたもの。
7　5YR4/4にぶい赤褐色　砂　焼土。



第14図　RA047住居跡（3）

・RA048住居跡

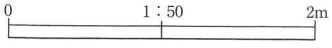




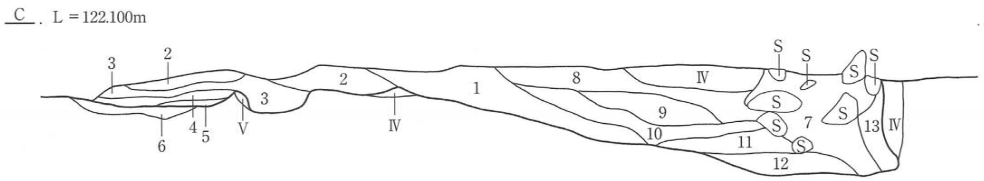
RA048住居跡柱穴

No.	1	2	3
径（cm）	64×58	44×40	58×54
深さ(cm)	32	18	14

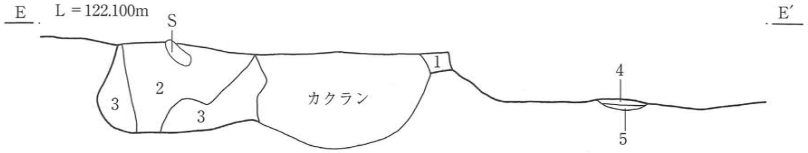
RA048住居跡
0　10YR2/1黒色と10YR5/6黄褐色の霜降り状混土　水道管埋設によるカクラン。
1　10YR3/1黒褐色　砂　汚れⅣ層再堆積に焼土粒、炭化物含む。
2　10YR2/2黒褐色地に細かい10YR5/6黄褐色ブロック　砂　Ⅳ層ブロック多く、炭化物もわずかに含む。
3　10YR2/2黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　砂　Ⅳ層ブロック非常に多い。
4　10YR2/2黒褐色　砂　炭化物多い。焼土粒も含む。
5　10YR2/1黒色　砂　土器含む。当初はカクランの一部と考えていた。
6　10YR4/4褐色　砂質シルト　粘性あり。汚れⅣ層。床（掘りすぎ）。
7　10YR3/2黒褐色と10YR5/6黄褐色の霜降り状混土　砂質シルト　住居掘り方埋土。
8　10YR5/6黄褐色地に10YR4/2灰黄褐色のブロック　シルト　住居掘り方埋土。



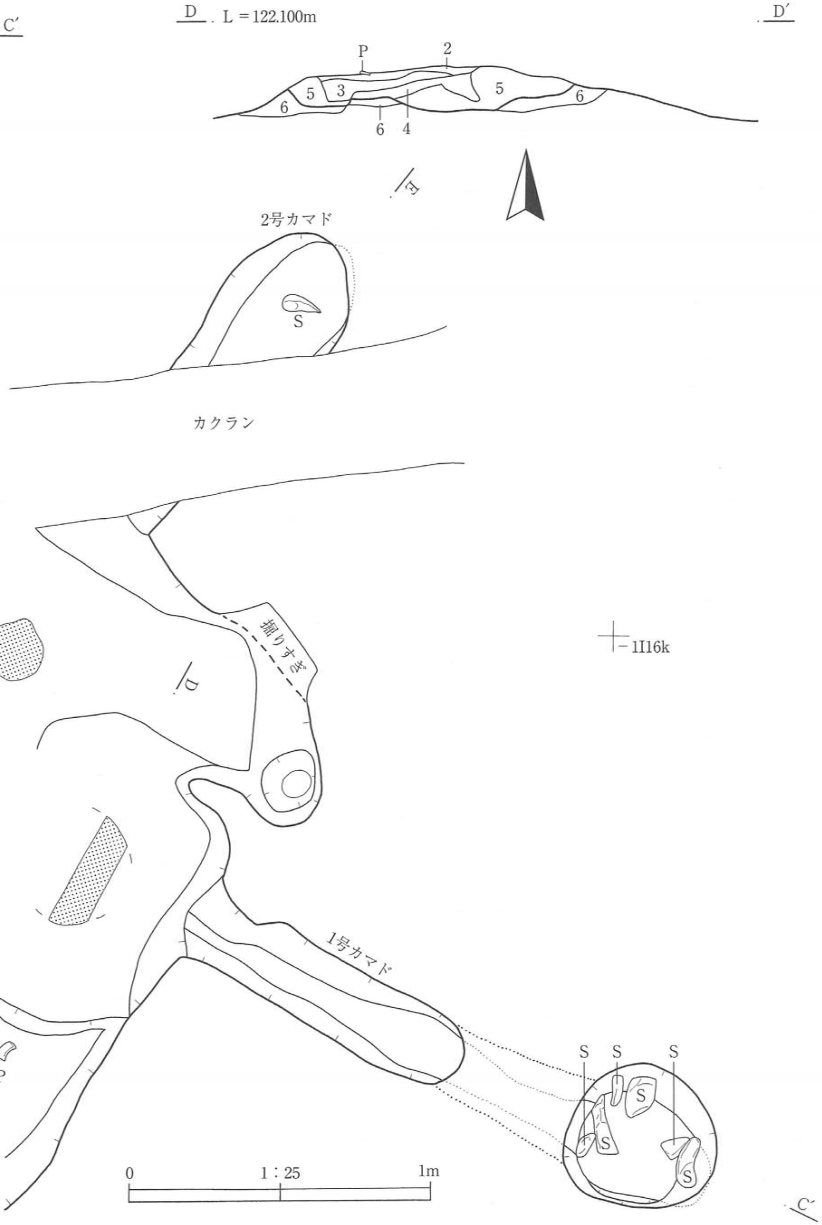
第15図　RA048住居跡（1）



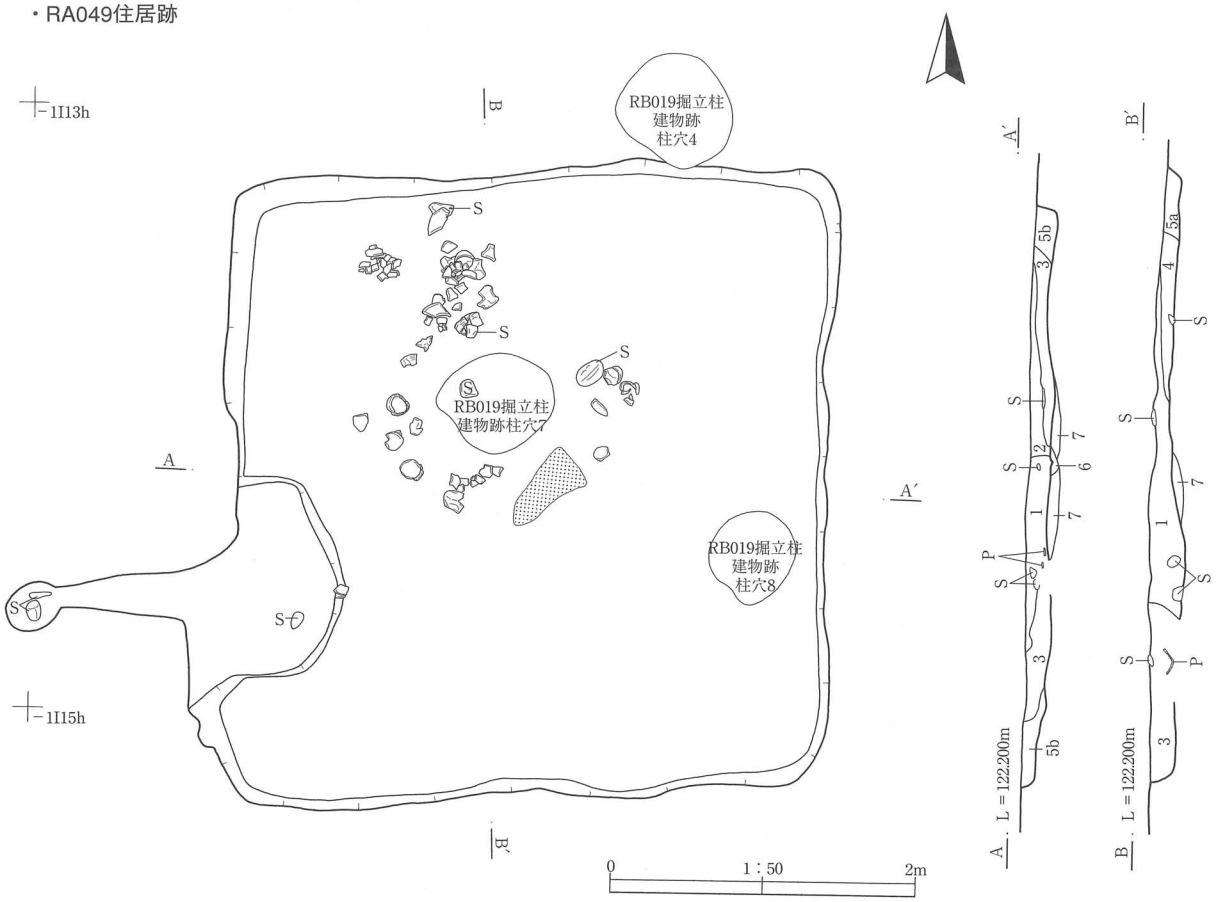
RA048住居跡1号カマド
1　10YR2/1黒色　砂質シルト　焼土粒、Ⅳ層ブロック含む。
2　7.5YR4/6褐色　砂質シルト　焼土粒多く、Ⅳ層粒子、炭化物含む。
3　10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　シルト　もろい部分あり。炭化物多く、Ⅳ層粒子、焼土粒含む。
4　7.5YR3/4暗褐色　砂質シルト　焼土粒非常に多い。カマド焚口だったらしい。
5　10YR4/4褐色と10YR3/1黒褐色の混土　砂質シルト　Ⅳ層汚れ再堆積に焼土粒含む。カマド袖崩土。
6　10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の霜降り状混土　砂質シルト　住居掘り方埋土。
7　10YR3/1～3/2黒褐色　砂質シルト　礫多く、Ⅳ層粒子含む。
8　10YR2/1黒色地に10YR5/6黄褐色散る　砂質シルト　Ⅳ層粒子含む。
9　10YR2/1黒色と10YR4/4褐色粒子で混じる　砂質シルト　Ⅳ層粒子多い。
10　10YR2/1黒色地に10YR5/6黄褐色散る　砂質シルト　8層に似る。
11　10YR5/6黄褐色　砂　Ⅳ層再堆積。
12　10YR2/1黒色（以下、雨で図面の文字が消え判読できない）　シルト　粘性あり。
13　10YR3/1黒褐色（以下、雨で図面の文字が消え判読できない）

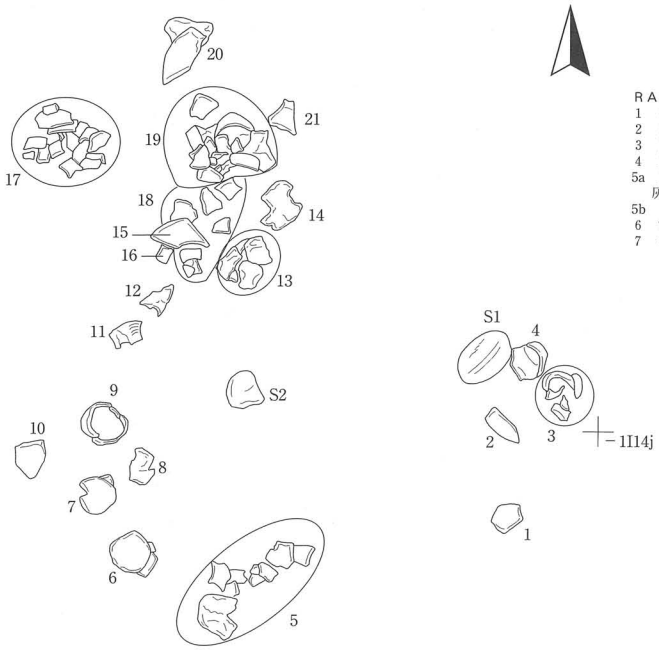


RA048住居跡2号カマド
1　（雨で図面の文字が消え判読できない）　砂質シルト　硬く締まる。Ⅳ層粒子多く、焼土粒含む。
2　（雨で図面の文字が消え判読できない）　砂質シルト　硬く締まる。粘性ややあり。Ⅳ層粒子、焼土粒、炭化物含む。
3　（雨で図面の文字が消え判読できない）　砂質シルト　硬く締まる。Ⅳ層粒子、ブロック多い。
4　（雨で図面の文字が消え判読できない）　砂　硬く締まる。焼土。
5　（雨で図面の文字が消え判読できない）　砂質シルト　住居掘り方埋土。



・RA049住居跡



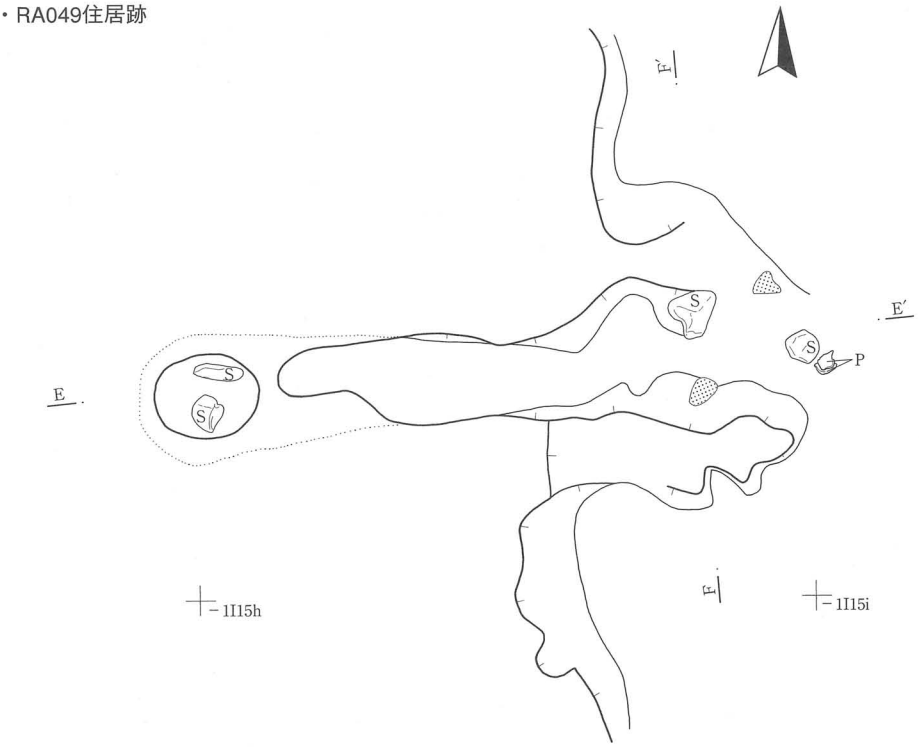


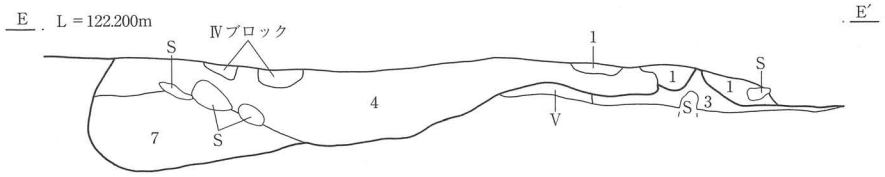
RA049住居跡
1　10YR2/1黒色　砂　礫、砂利多量に含む。
2　10YR3/1黒褐色　砂質シルト　Ⅳ層粒子多量に含む。
3　10YR2/1黒色　砂　層上を中心に多量の土器含む。礫も含む。
4　10YR2/1黒色　砂質シルト　Ⅳ層ブロック、粒子多量に含む。
5a　10YR2/1黒色地に細かい10YR5/6黄褐色の粒子散る　砂質シルト　5b層に似るが、上面に灰白色火山灰を含み、基本的な色調が黒い。
5b　10YR3/1黒褐色地に細かい10YR5/6黄褐色の粒子散る　砂質シルト　Ⅳ層粒子多く含む。
6　7.5YR3/1黒褐色地に7.5YR4/4褐色混じる　シルト　7層が焼けたもの（焼土あった）。
7　10YR2/1黒色と10YR5/6黄褐色の霜降り状混土　シルト　掘り方埋土。

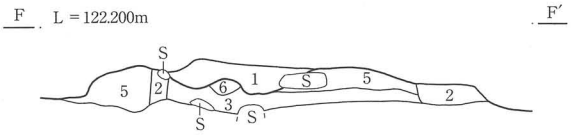
0　1：25　1m

第17図　RA049住居跡（１）

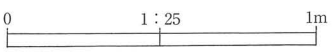
・RA049住居跡





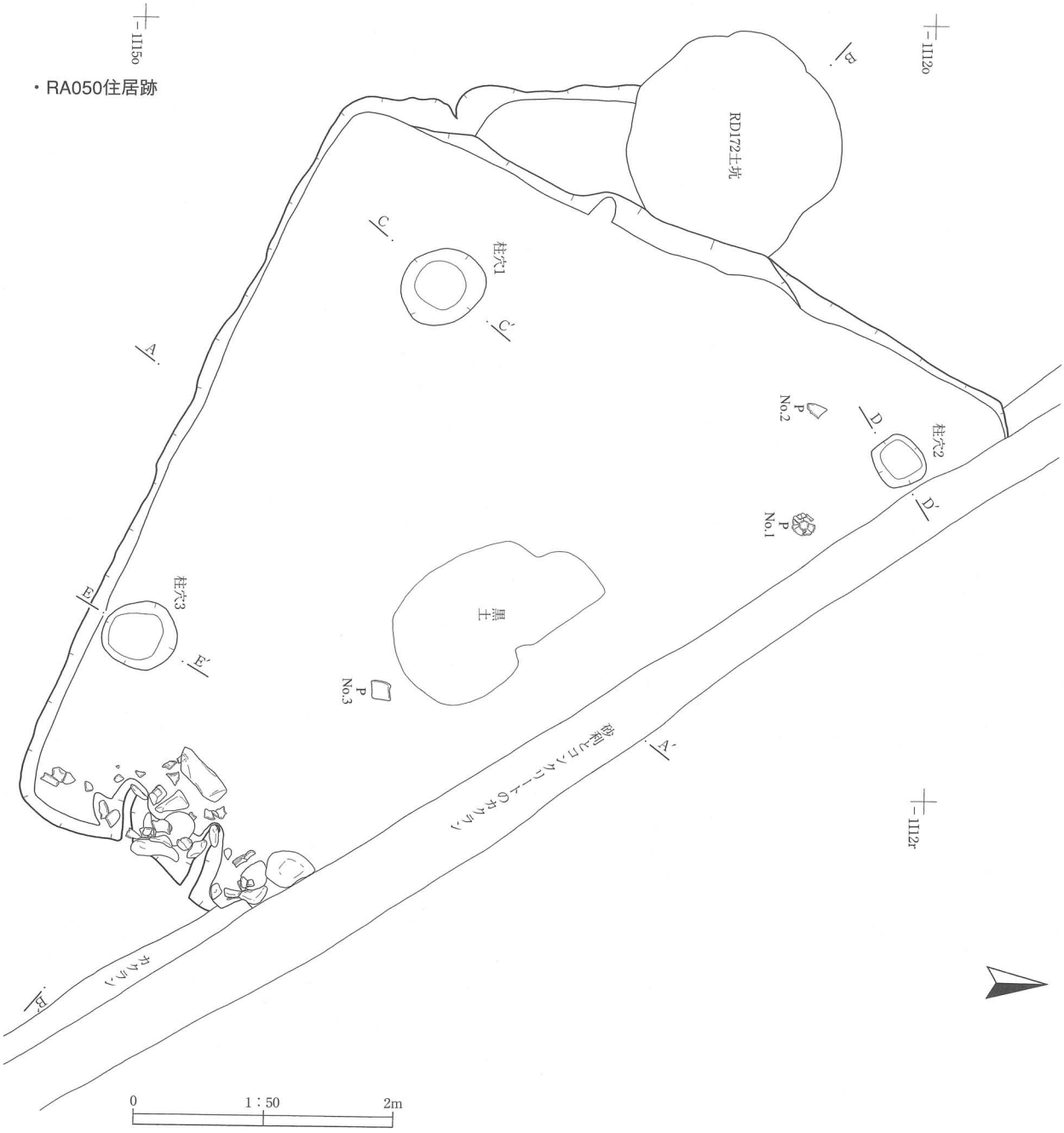


RA049住居跡カマド
1　7.5YR2/1黒～3/1黒褐色　砂質シルト　焼土粒多く、炭化物含む。
2　10YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色混じる　砂　シルト　カマド袖崩土。
3　7.5YR3/2黒褐色　砂　ややもろい。焼土粒多い。焚き口焼土らしい。
4　7.5YR3/1黒褐色　砂　Ⅳ層粒子多い。
5　10YR3/3暗褐色　砂　汚れⅣ層再堆積。カマド袖らしい。
6　5YR3/2暗赤褐色　砂　焼土。
7　10YR2/1黒色　シルト　ややもろい。上面中心に礫含む。



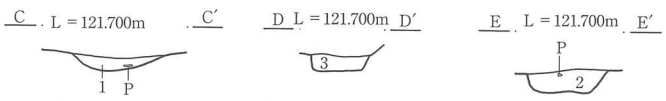
第18図　RA049住居跡（２）

・RA050住居跡



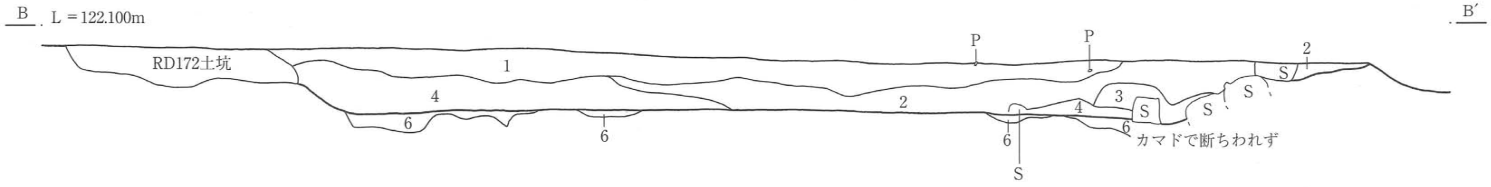
RA050住居跡柱穴

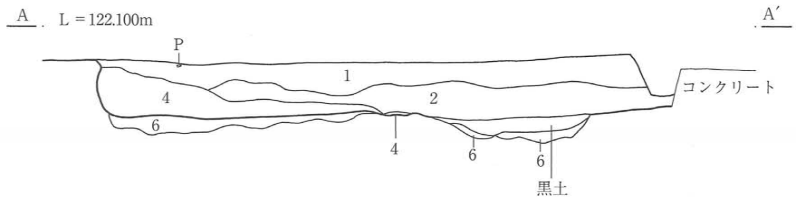
No.	1	2	3
径（cm）	64×56	44×40	58×54
深さ（cm）	12	13	15

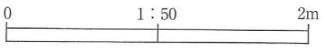


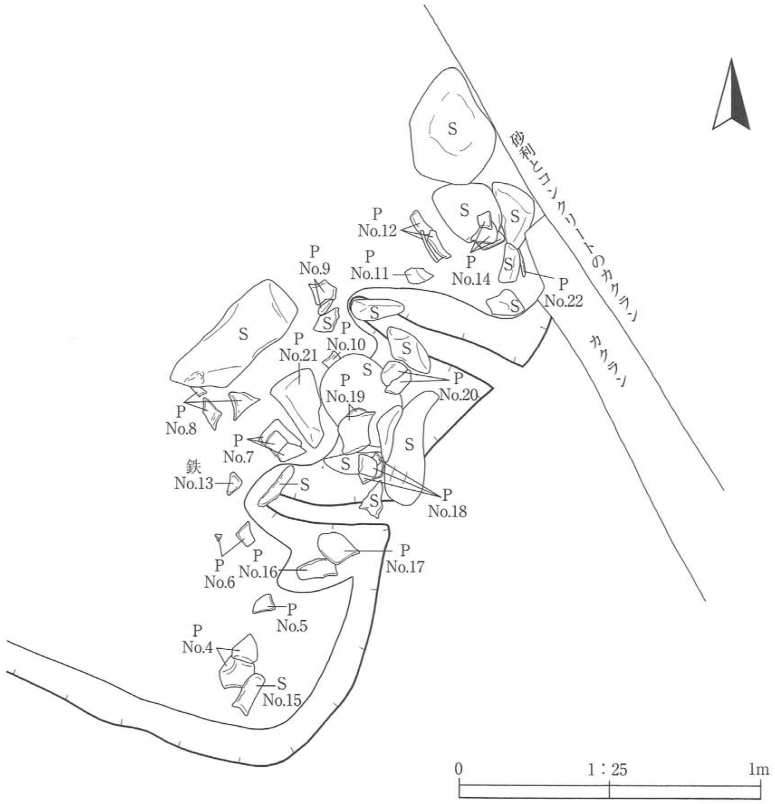
RA050住居跡柱穴
1　10YR2/1黒色　砂質シルト　Ⅳ層粒子、土器含む。
2　10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　砂　下部は掘りすぎ？　単なる根穴の可能性もある。
3　10YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色の霜降り状混土　シルト　埋め戻したような土。

第19図　RA050住居跡（1）







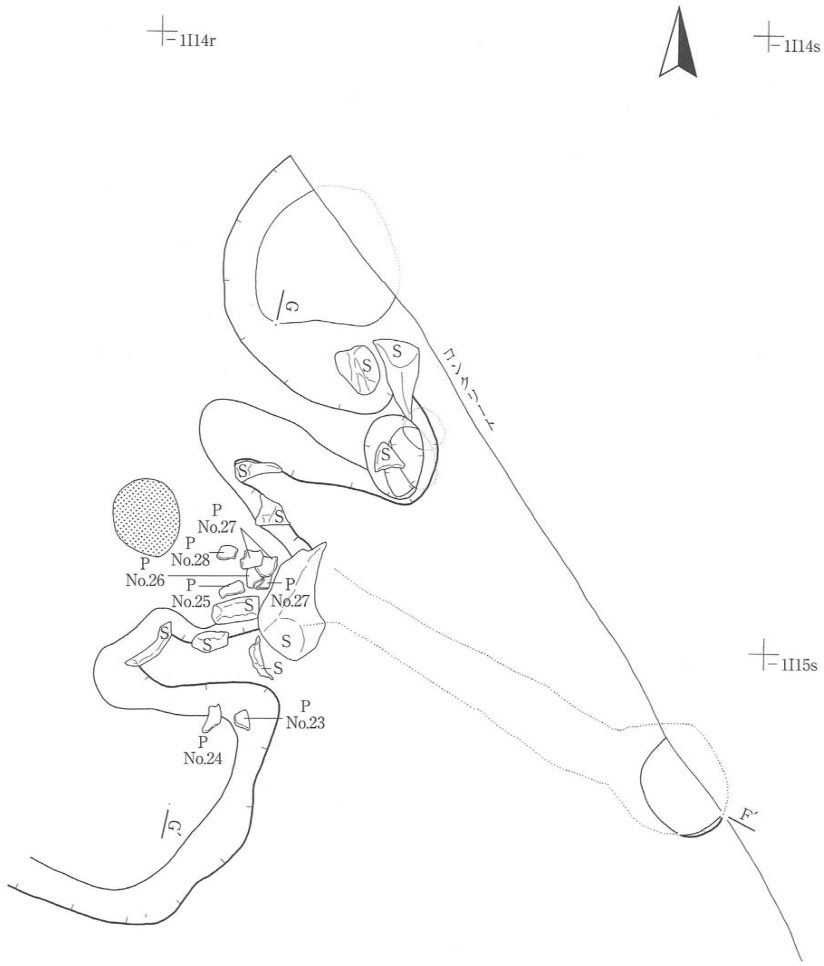


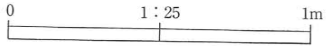
RA050住居跡
1　10YR2/1黒色　シルト　Ⅳ層粒子含む。
2　10YR2/1黒色地に10YR5/6黄褐色散る　シルト　Ⅳ層粒子、ブロック多い。
3　10YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色散る　シルト　2層に似るが、より黒く、焼土粒、炭化物顕著。
4　10YR3/2黒褐色地に10YR5/6黄褐色散る　シルト　Ⅳ層粒子、ブロック最も多い。
5　10YR2/1黒色　シルト　硬く締まる。1層と同じ？　カマド上穴の覆土？、カクラン？
6　2.5Y5/2暗灰黄色、7.5YR5/8明褐色地に10YR3/1黒褐色のブロック　砂　掘り方埋土。

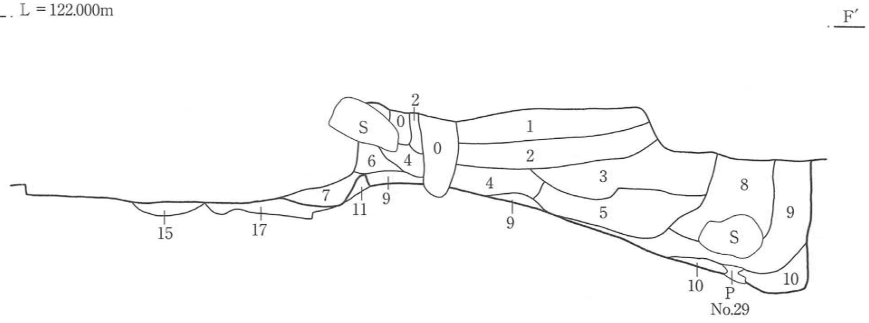
第20図　RA050住居跡（2）

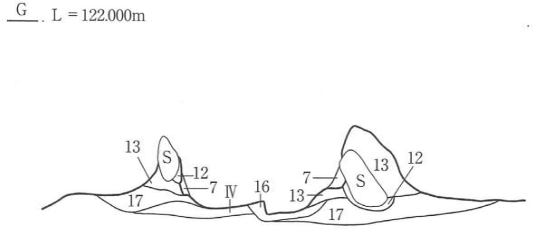
第21図　RA050住居跡（3）

RA050住居跡カマド
0　10YR2/1黒色　砂質シルト　硬く締まる。カクラン。
1　5YR4/4にぶい赤褐色　砂　焼土粒多い。天井の崩れ？
2　10YR3/1黒褐色と10YR5/4にぶい黄褐色の混土　砂質シルト　Ⅱ、Ⅳ層混土に炭化物、焼土粒含む。
3　汚れているが、Ⅳ層と思う。8層との境は、火を受けて赤く変色。
4　2層に同じ。
5　5YR4/4にぶい赤褐色と10YR5/6黄褐色の混土　シルト　Ⅳ層再堆積土に焼土粒多く混じる。3層が崩れたような土。天井崩落土？
6　7.5YR3/1黒褐色　シルト　焼土粒含む。7層と同じか。
7　7.5YR2/1黒色　シルト　焼土粒多い。
8　10YR3/2黒褐色（上部中心）と10YR2/1黒色の混土　シルト　Ⅱ、Ⅳ層混土。
9　10YR3/2黒褐色地に7.5YR4/3褐色の混土　シルト　8層とほとんど同じだが、焼土粒含み、より黒い。
10　7.5YR4/1褐灰色地に7.5YR5/6明褐色のブロック　シルト　粘性あり。もろい。酸化鉄も多い。
11　10YR3/1黒褐色　シルト　17層と同じらしい。
12　10YR3/1黒褐色と10YR4/2灰黄褐色の混土　シルト　ややもろい。カマド袖礫掘り方埋土。
13　10YR4/3にぶい黄褐色　砂質シルト　カマド袖本体。
14　7.5YR4/2灰褐色の混土　砂　13層が火を受けたもの。
15　7.5YR3/1黒褐色　砂　焚口焼土。17層が火を受けたものらしい。
16　10YR2/1黒色　シルト　ややもろい。17層の一部らしい。
17　10YR5/6黄褐色地に10YR2/1黒色、10YR4/1褐灰色混じる　シルト　住居床掘り方埋土。

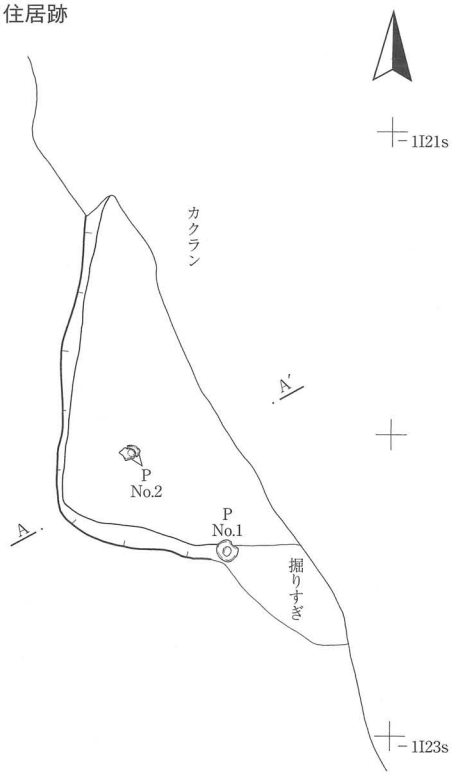


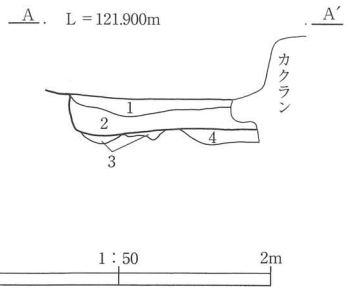






・RA051住居跡



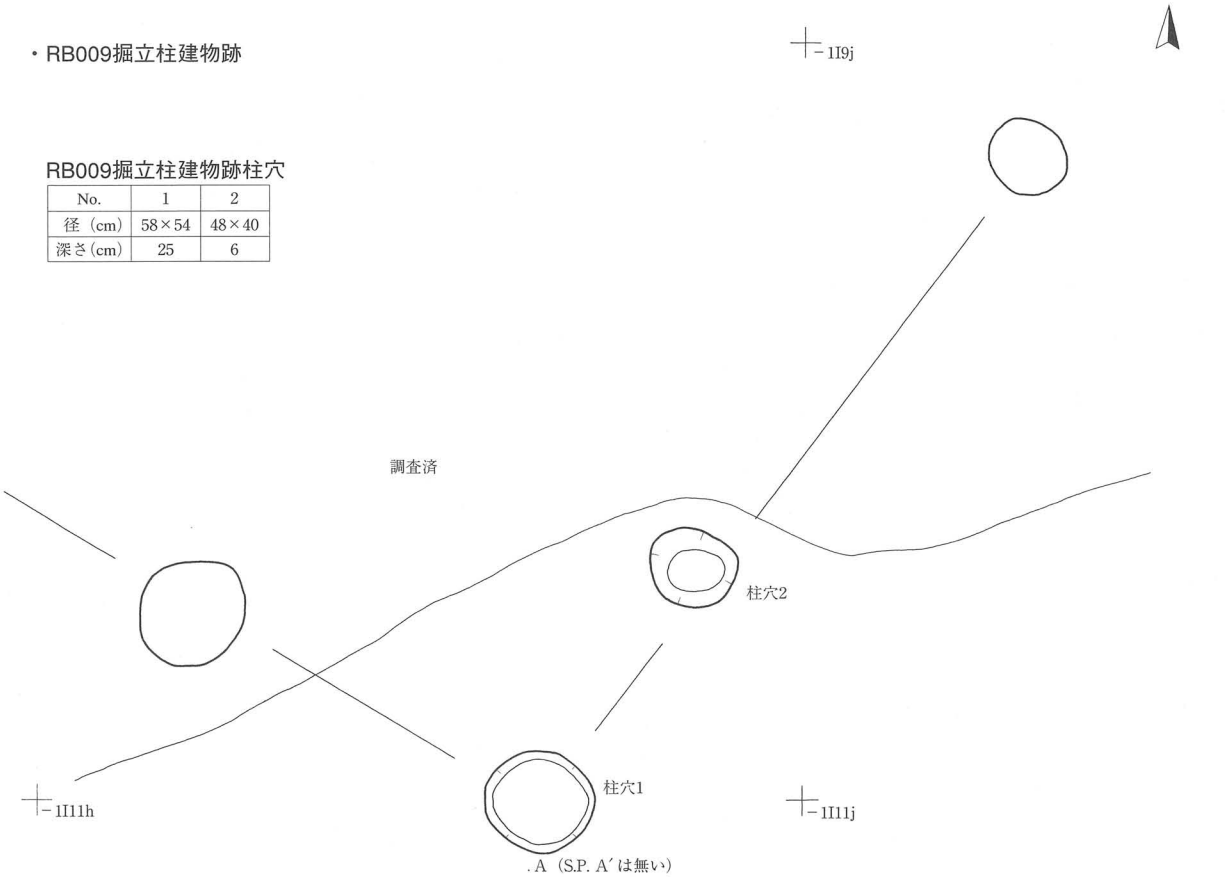


RA051住居跡
1　10YR3/2黒褐色地に10YR5/6黄褐色散る　シルト　変色したⅣ層ブロック、カクラン含む。
2　10YR2/1黒色地に7.5YR5/6明褐色のブロック　シルト　酸化鉄ブロック含む。
3　2.5Y5/1黄灰色地に2.5Y3/1黒褐色のブロック　砂　砂層に変質した黒褐色土のブロック。掘り方埋土。
4　10YR6/6明黄褐色地に2.5Y3/1黒褐色のブロック　砂　3層と同じと思うが酸化鉄多い。

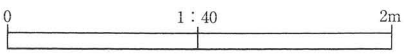
・RB009掘立柱建物跡

RB009掘立柱建物跡柱穴

No.	1	2
径（cm）	58×54	48×40
深さ（cm）	25	6

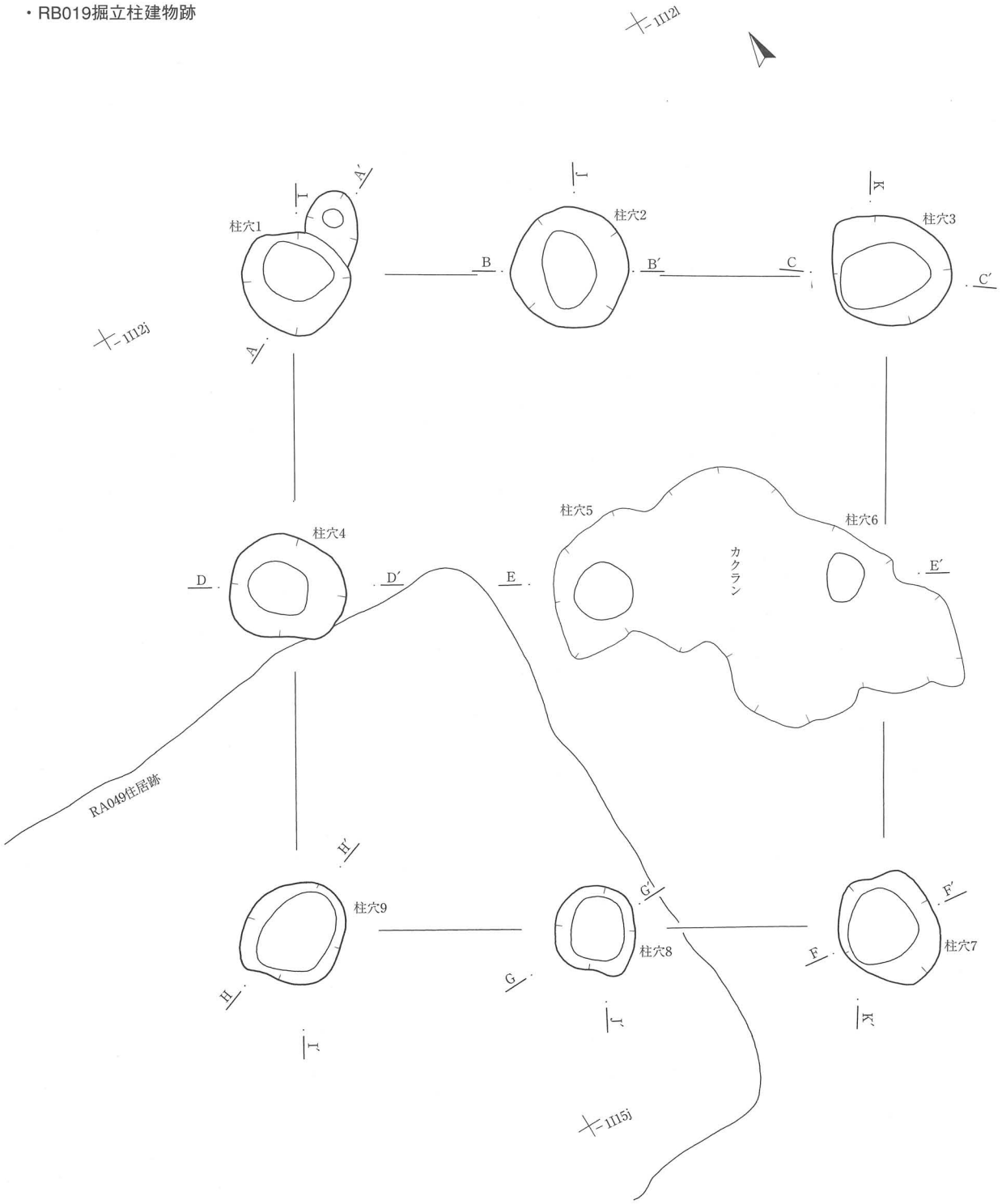


RB009掘立柱建物跡
1　10YR3/1黒褐色地に10YR4/3にぶい黄褐色のブロック　砂　Ⅳ層粒子、砂利含む。
2　Ⅴ層砂利層が根によるカクランを受けたもの。



第22図　RA051住居跡、RB009掘立柱建物跡

・RB019掘立柱建物跡

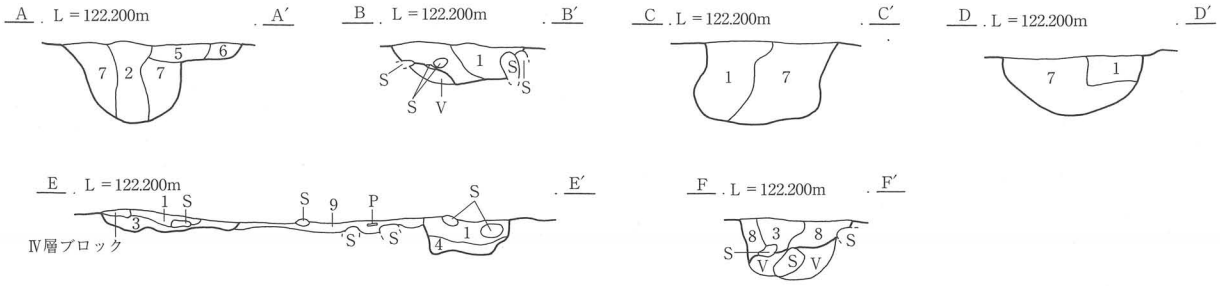


RB019掘立柱建物跡柱穴

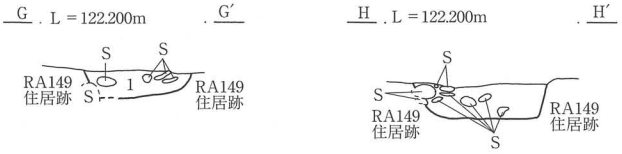
No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9
径（cm）	72×64	80×76	84×72	76×68	−	−	76×64	62×54	76×64
深さ(cm)	37	21	43	38	11	23	24	16	32

0　1：40　2m

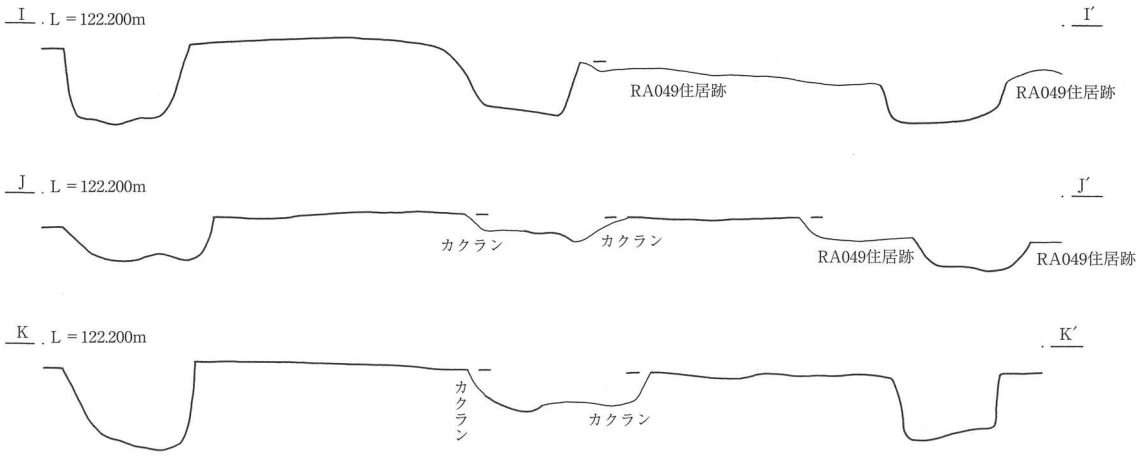
第23図　RB019掘立柱建物跡（1）

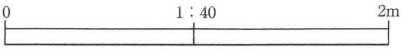


RB019掘立柱建物跡　柱穴1～6・9
1　10YR2/1黒色　シルト　砂礫混じり。柱痕跡？
2　10YR2/1黒色　シルト　砂礫多い。柱痕跡？
3　10YR3/1黒褐色　砂質シルト　Ⅳ層粒子多い。
4　10YR1.7/1黒色　シルト　1層とほとんど同じだが、より黒い。
5　10YR4/2灰黄褐色と10YR5/6黄褐色の混土　砂質シルト　Ⅳ層粒子多い。砂礫混じり。
6　10YR3/1黒褐色　シルト　Ⅳ層粒子混じる。
7　10YR2/1黒色と10YR5/6黄褐色の混土　砂　砂礫多い。掘り方埋め土。
8　10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の霜降り状混土　シルト　Ⅳ層埋め戻し土。掘り方埋め土。
9　10YR5/6黄褐色地に10YR3/1黒褐色混じる　砂質シルト　Ⅱ層の落ち込み。



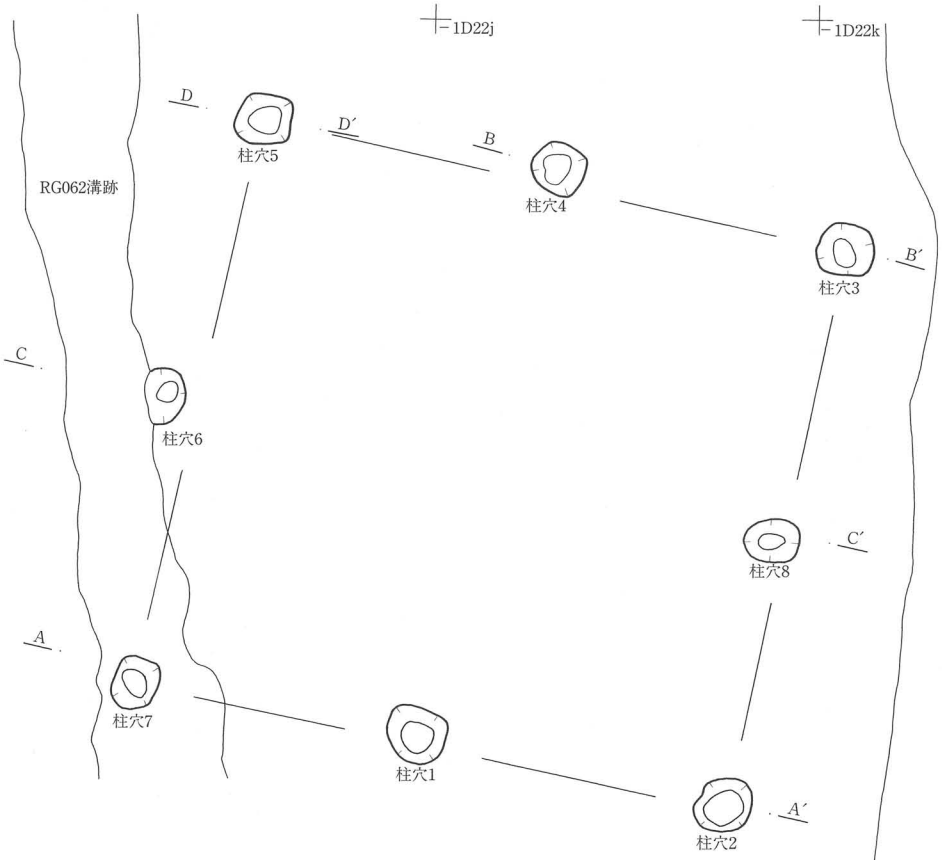
RA049住居跡内　柱穴7・8
1　10YR3/2黒褐色　シルト　多量の礫、砂利含む。Ⅳ層粒子含む。
2　10YR2/1黒色　シルト　粘性強い。多量の礫、砂利含む。





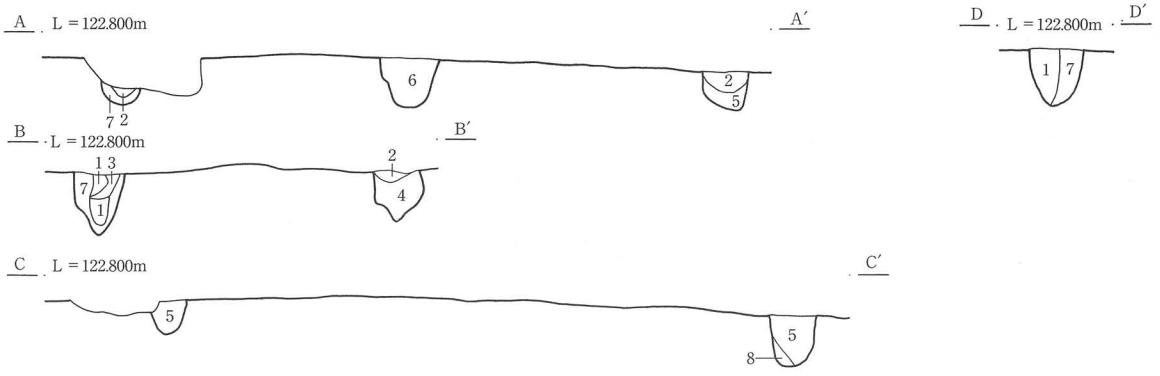
第24図　RB019掘立柱建物跡（2）

・RB020掘立柱建物跡

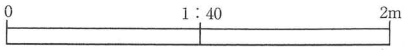


RB020掘立柱建物跡柱穴

No.	1	2	3	4	5	6	7	8
径（cm）	34×30	32×30	32×32	30×30	32×30	30×（22）	30×28	30×24
深さ（cm）	26	22	18	32	32	31	16	30

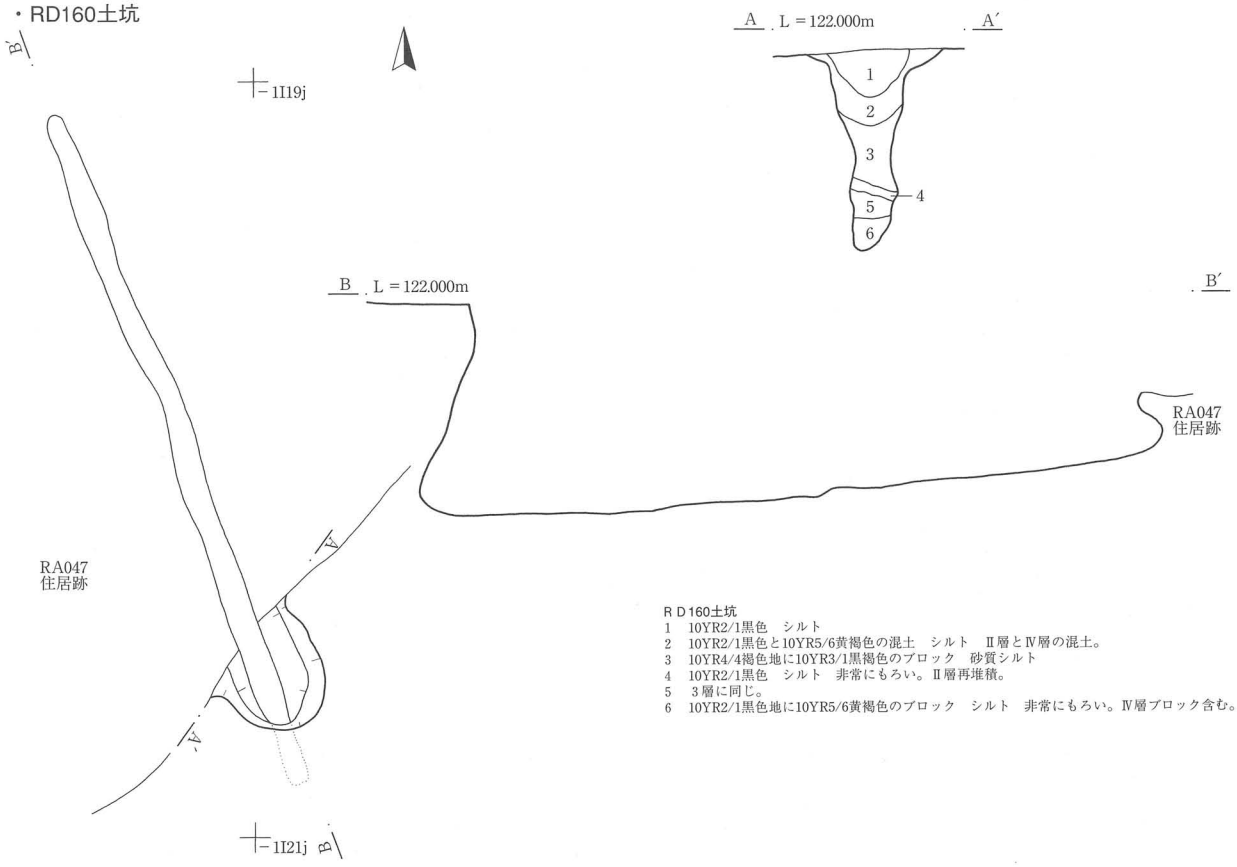


RB020掘立柱建物跡
1　10YR2/1黒色　砂質シルト　柱痕跡？
2　10YR1.7/1黒色地に10YR5/6黄褐色ブロック　シルト　粘性強い。　Ⅱ層再堆積にⅣ層ブロック含む。
3　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性強い。汚れⅣ層ブロック。
4　10YR2/1黒色地に細かい10YR5/6黄褐色の粒子散る　シルト　Ⅱ層再堆積に多量のⅣ層粒子散る。
5　10YR4/4褐色と10YR3/1黒褐色の混土　砂質シルト　Ⅱ層とⅣ層の混土。
6　10YR2/1黒色地に10YR5/6黄褐色のブロック　砂質シルト　粘性強い。Ⅱ層とⅣ層の混土。
7　10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の霜降り状混土　シルト　柱掘り方埋土。
8　10YR2/1黒色　砂　非常にもろい。



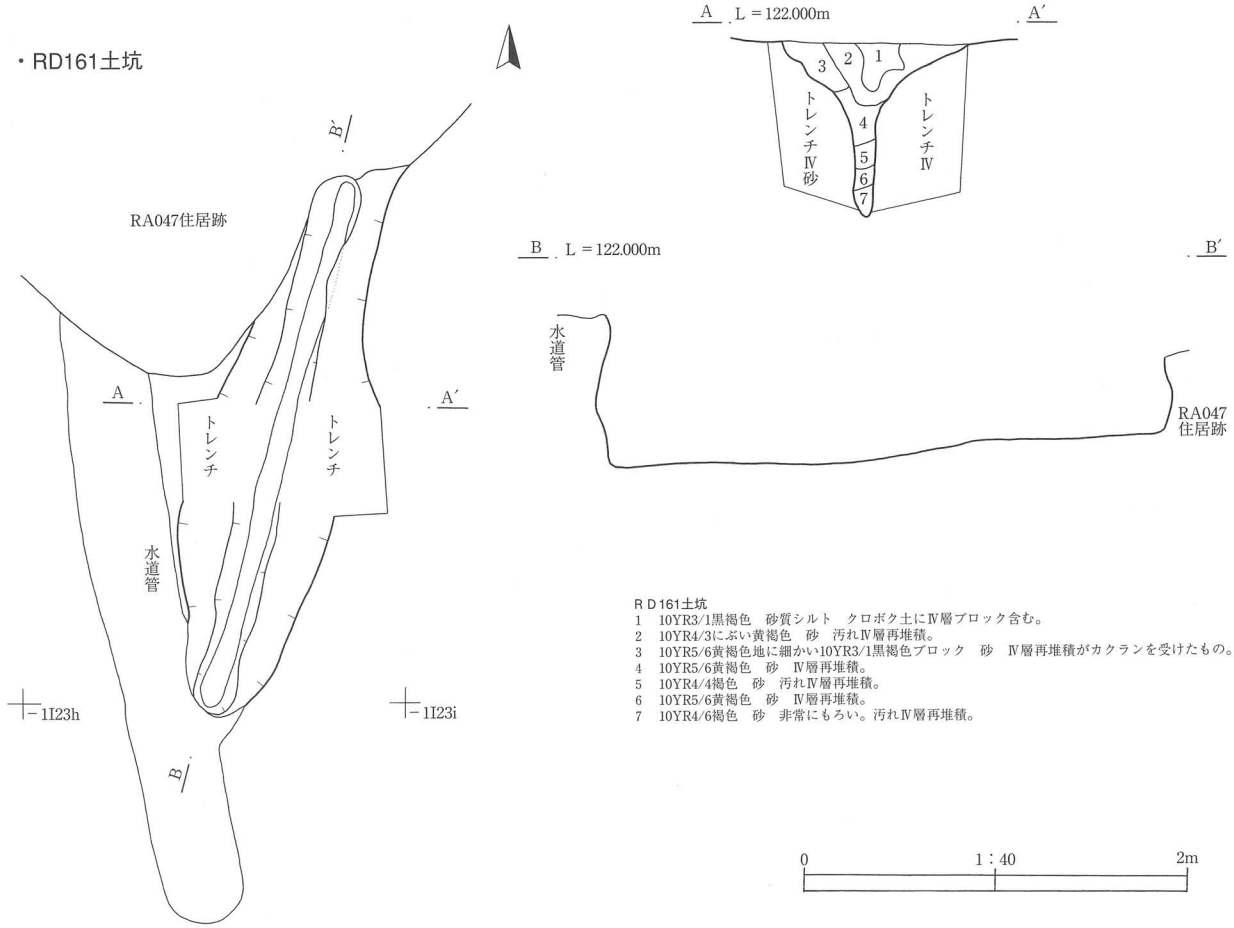
第25図　RB020掘立柱建物跡

・RD160土坑



RD160土坑
1　10YR2/1黒色　シルト
2　10YR2/1黒色と10YR5/6黄褐色の混土　シルト　Ⅱ層とⅣ層の混土。
3　10YR4/4褐色地に10YR3/1黒褐色のブロック　砂質シルト
4　10YR2/1黒色　シルト　非常にもろい。Ⅱ層再堆積。
5　3層に同じ。
6　10YR2/1黒色地に10YR5/6黄褐色のブロック　シルト　非常にもろい。Ⅳ層ブロック含む。

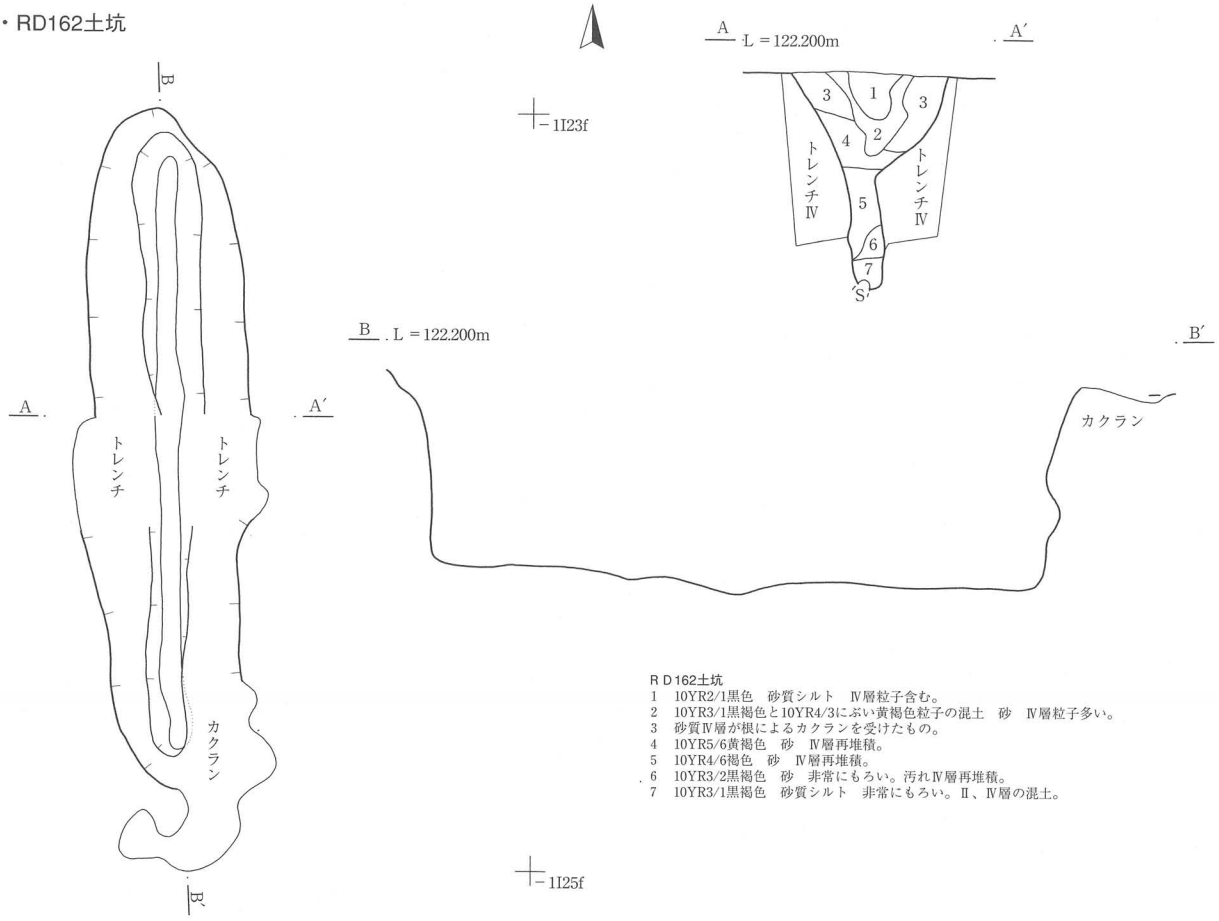
・RD161土坑



RD161土坑
1　10YR3/1黒褐色　砂質シルト　クロボク土にⅣ層ブロック含む。
2　10YR4/3にぶい黄褐色　砂　汚れⅣ層再堆積。
3　10YR5/6黄褐色地に細かい10YR3/1黒褐色ブロック　砂　Ⅳ層再堆積がカクランを受けたもの。
4　10YR5/6黄褐色　砂　Ⅳ層再堆積。
5　10YR4/4褐色　砂　汚れⅣ層再堆積。
6　10YR5/6黄褐色　砂　Ⅳ層再堆積。
7　10YR4/6褐色　砂　非常にもろい。汚れⅣ層再堆積。

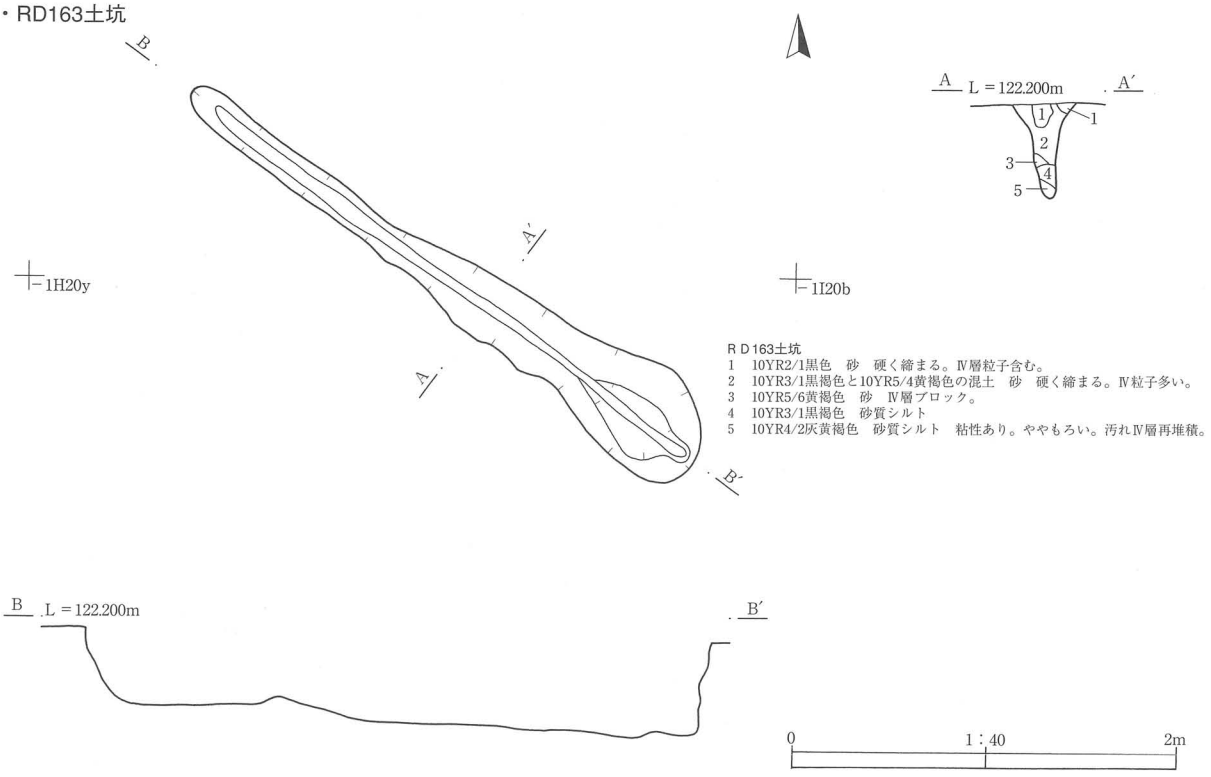
第26図　RD160・161土坑

・RD162土坑



RD162土坑
1　10YR2/1黒色　砂質シルト　Ⅳ層粒子含む。
2　10YR3/1黒褐色と10YR4/3にぶい黄褐色粒子の混土　砂　Ⅳ層粒子多い。
3　砂質Ⅳ層が根によるカクランを受けたもの。
4　10YR5/6黄褐色　砂　Ⅳ層再堆積。
5　10YR4/6褐色　砂　Ⅳ層再堆積。
6　10YR3/2黒褐色　砂　非常にもろい。汚れⅣ層再堆積。
7　10YR3/1黒褐色　砂質シルト　非常にもろい。Ⅱ、Ⅳ層の混土。

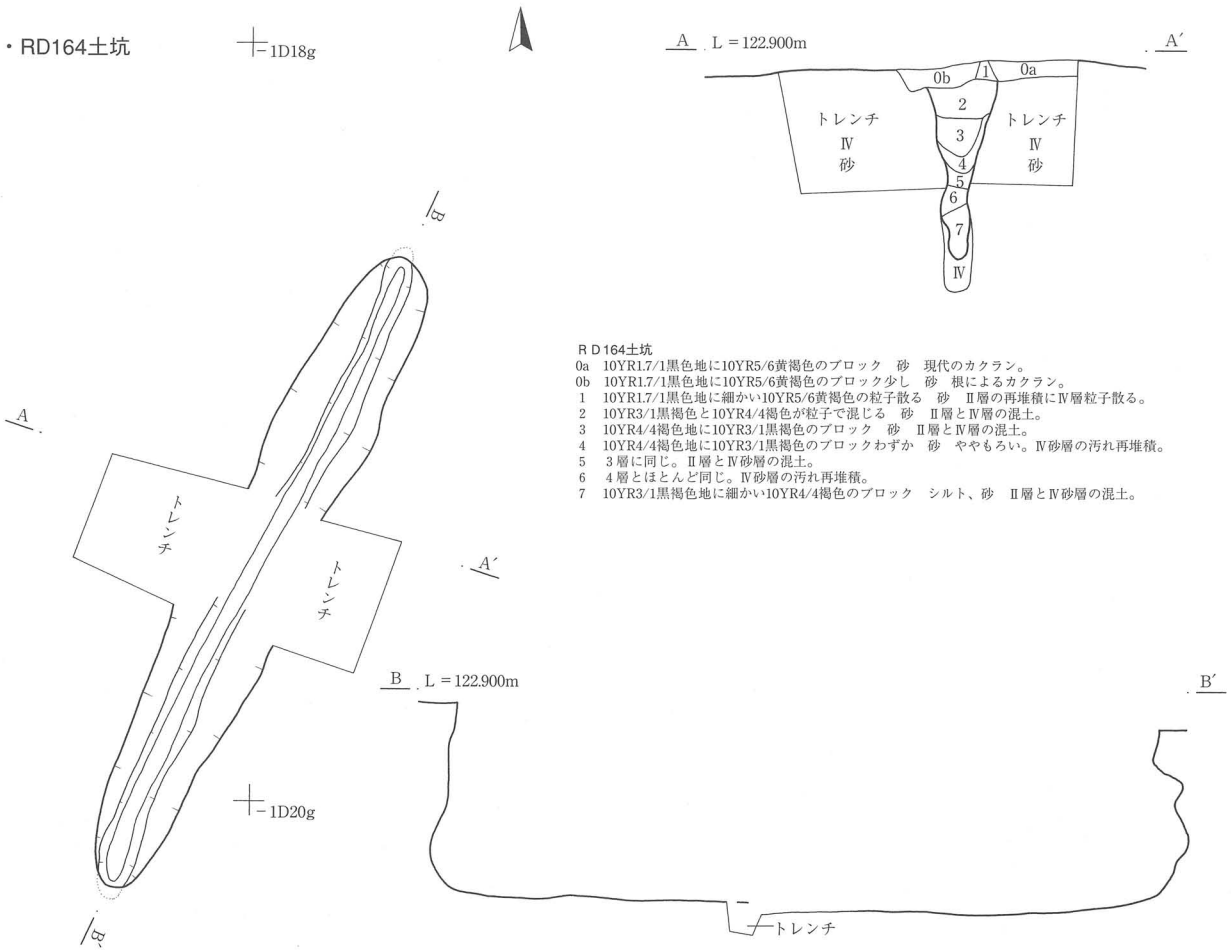
・RD163土坑



RD163土坑
1　10YR2/1黒色　砂　硬く締まる。Ⅳ層粒子含む。
2　10YR3/1黒褐色と10YR5/4黄褐色の混土　砂　硬く締まる。Ⅳ粒子多い。
3　10YR5/6黄褐色　砂　Ⅳ層ブロック。
4　10YR3/1黒褐色　砂質シルト
5　10YR4/2灰黄褐色　砂質シルト　粘性あり。ややもろい。汚れⅣ層再堆積。

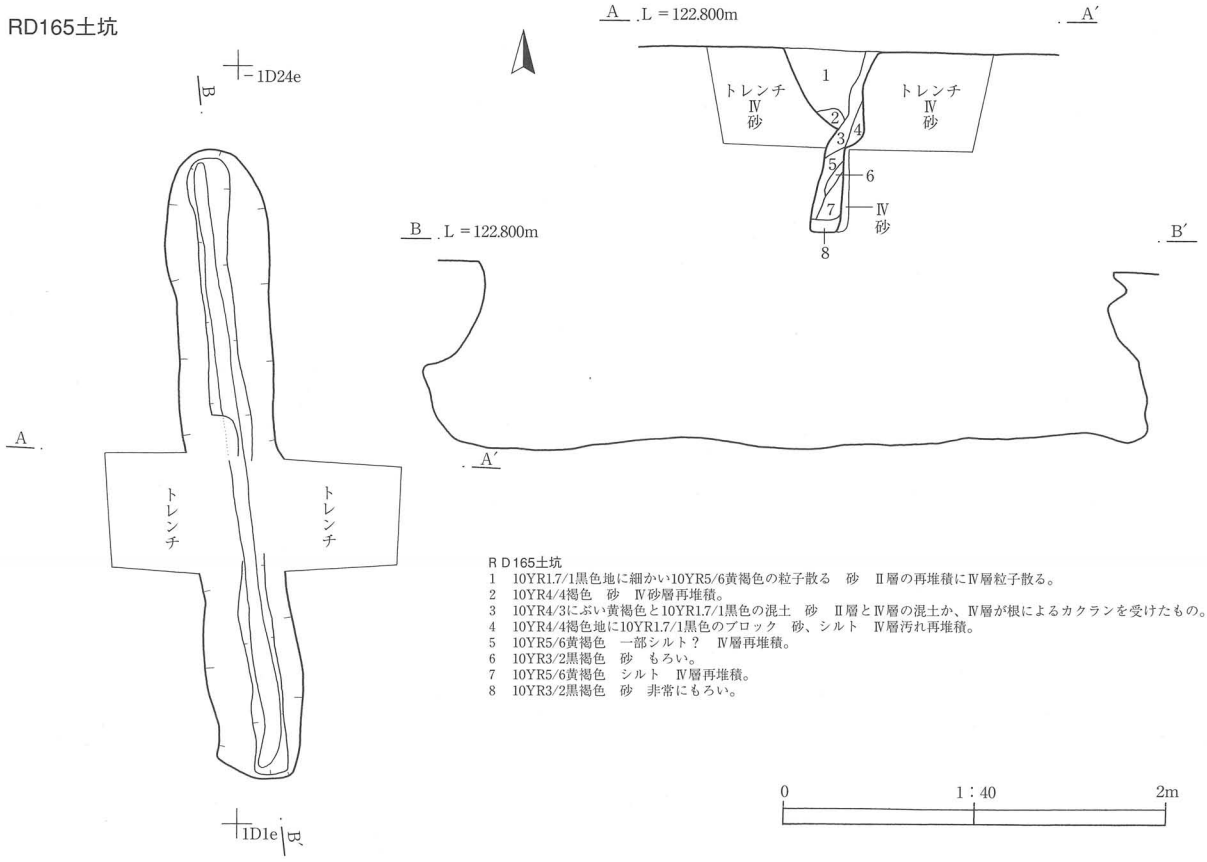
第27図　RD162・163土坑

・RD164土坑



RD164土坑
0a　10YR1.7/1黒色地に10YR5/6黄褐色のブロック　砂　現代のカクラン。
0b　10YR1.7/1黒色地に10YR5/6黄褐色のブロック少し　砂　根によるカクラン。
1　10YR1.7/1黒色地に細かい10YR5/6黄褐色の粒子散る　砂　Ⅱ層の再堆積にⅣ層粒子散る。
2　10YR3/1黒褐色と10YR4/4褐色が粒子で混じる　砂　Ⅱ層とⅣ層の混土。
3　10YR4/4褐色地に10YR3/1黒褐色のブロック　砂　Ⅱ層とⅣ層の混土。
4　10YR4/4褐色地に10YR3/1黒褐色のブロックわずか　砂　ややもろい。Ⅳ砂層の汚れ再堆積。
5　3層に同じ。Ⅱ層とⅣ砂層の混土。
6　4層とほとんど同じ。Ⅳ砂層の汚れ再堆積。
7　10YR3/1黒褐色地に細かい10YR4/4褐色のブロック　シルト、砂　Ⅱ層とⅣ砂層の混土。

・RD165土坑

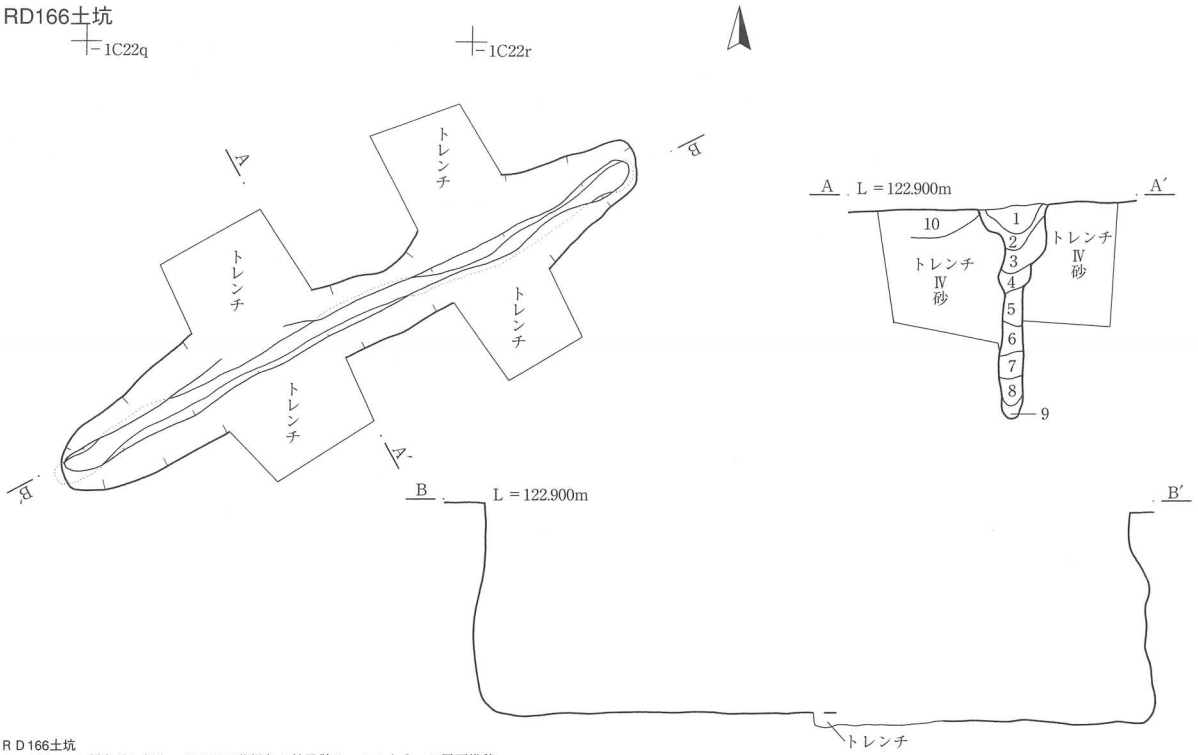


RD165土坑
1　10YR1.7/1黒色地に細かい10YR5/6黄褐色の粒子散る　砂　Ⅱ層の再堆積にⅣ層粒子散る。
2　10YR4/4褐色　砂　Ⅳ砂層再堆積。
3　10YR4/3にぶい黄褐色と10YR1.7/1黒色の混土　砂　Ⅱ層とⅣ層の混土か、Ⅳ層が根によるカクランを受けたもの。
4　10YR4/4褐色地に10YR1.7/1黒色のブロック　砂、シルト　Ⅳ層汚れ再堆積。
5　10YR5/6黄褐色　一部シルト？　Ⅳ層再堆積。
6　10YR3/2黒褐色　砂　もろい。
7　10YR5/6黄褐色　シルト　Ⅳ層再堆積。
8　10YR3/2黒褐色　砂　非常にもろい。

0　1：40　2m

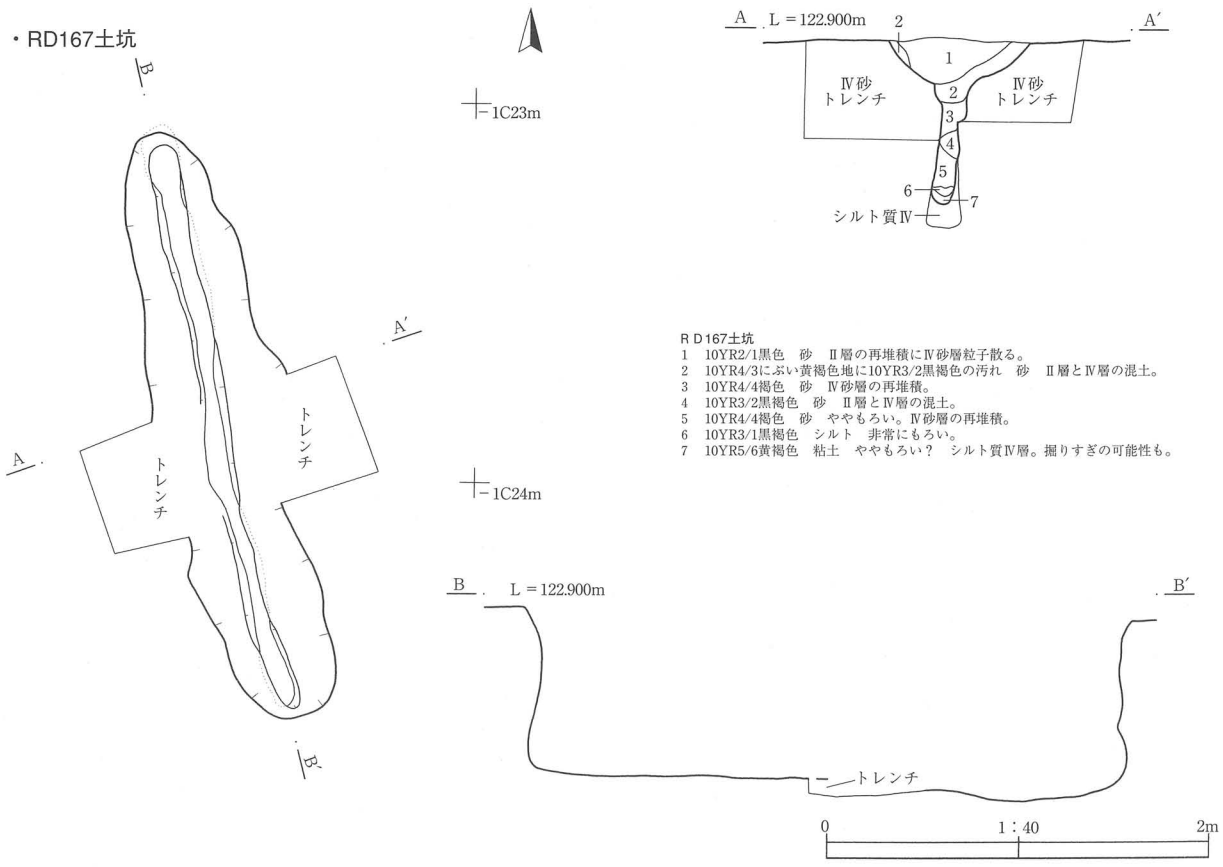
第28図　RD164・165土坑

・RD166土坑



RD166土坑
1　10YR1.7/1黒色地に細かい10YR5/6黄褐色の粒子散る　シルト？　Ⅱ層再堆積。
2　10YR3/1黒褐色と10YR4/3にぶい黄褐色の混土　砂　Ⅱ層とⅣ砂層が粒子で混じる。
3　10YR5/6黄褐色地に10YR1.7/1黒～10YR3/1黒褐色混じる　シルト？　Ⅱ層とⅣ砂層のブロック状混土。
4　10YR5/6黄褐色　砂　Ⅳ砂層再堆積。
5　3層に同じ。砂、シルト　Ⅱ層とⅣ砂層のブロック状混土。
6　10YR2/1黒色地に10YR5/6黄褐色僅かに混じる　シルト　粘性あり。非常にもろい。Ⅱ層、Ⅳ層混じり再堆積。
7　10YR4/4褐色と10YR3/2黒褐色の混土　シルト　非常にもろい。Ⅱ層とⅣ砂層の混土。
8　6層と同じ。もろい。シルト、砂。Ⅱ層、Ⅳ層混じり再堆積。
9　シルト質Ⅳ層。硬く締まる。掘りすぎ。
10　10YR3/3暗褐色　砂　Ⅳ砂層が植物等によって変色したもの。

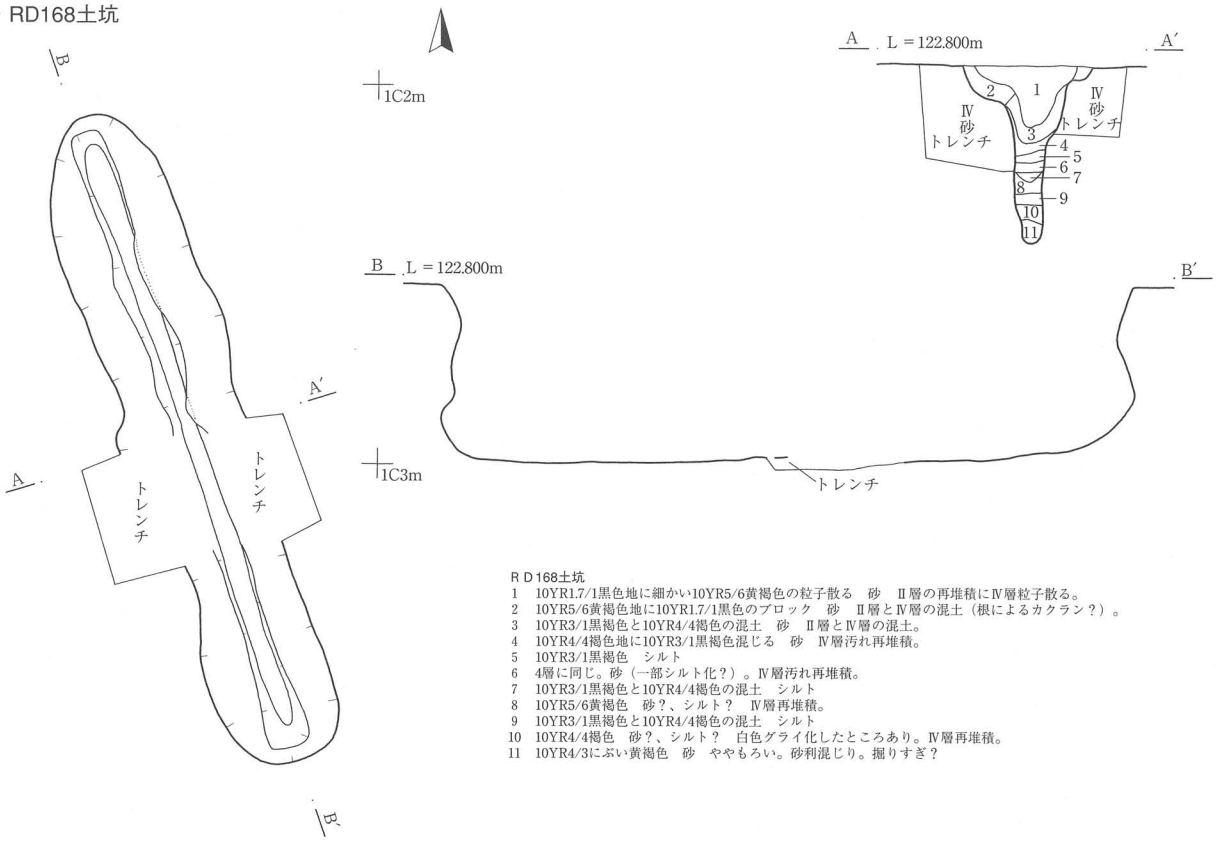
・RD167土坑



RD167土坑
1　10YR2/1黒色　砂　Ⅱ層の再堆積にⅣ砂層粒子散る。
2　10YR4/3にぶい黄褐色地に10YR3/2黒褐色の汚れ　砂　Ⅱ層とⅣ層の混土。
3　10YR4/4褐色　砂　Ⅳ砂層の再堆積。
4　10YR3/2黒褐色　砂　Ⅱ層とⅣ層の混土。
5　10YR4/4褐色　砂　ややもろい。Ⅳ砂層の再堆積。
6　10YR3/1黒褐色　シルト　非常にもろい。
7　10YR5/6黄褐色　粘土　ややもろい？　シルト質Ⅳ層。掘りすぎの可能性も。

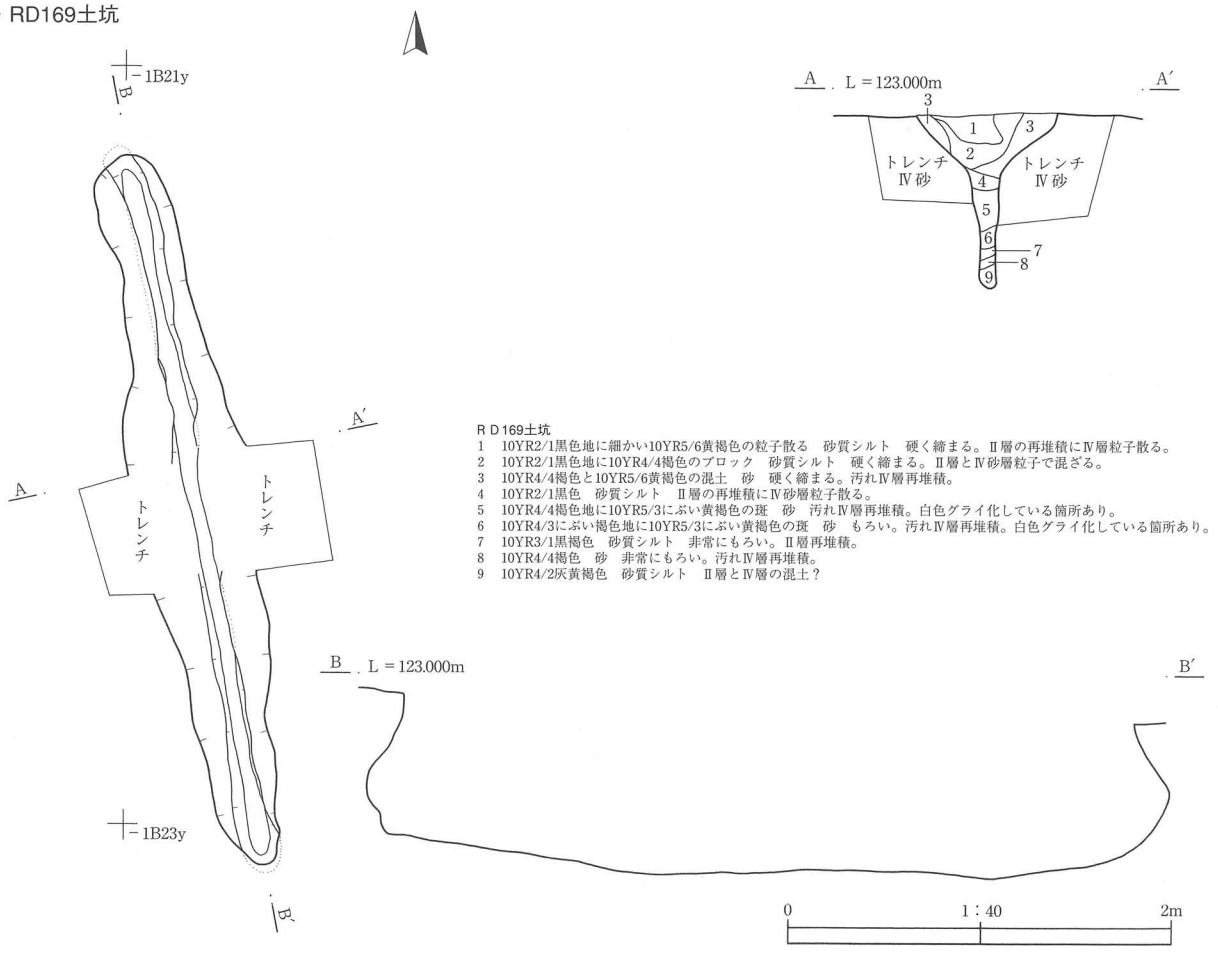
第29図　RD166・167土坑

・RD168土坑



RD168土坑
1　10YR1.7/1黒色地に細かい10YR5/6黄褐色の粒子散る　砂　Ⅱ層の再堆積にⅣ層粒子散る。
2　10YR5/6黄褐色地に10YR1.7/1黒色のブロック　砂　Ⅱ層とⅣ層の混土（根によるカクラン？）。
3　10YR3/1黒褐色と10YR4/4褐色の混土　砂　Ⅱ層とⅣ層の混土。
4　10YR4/4褐色地に10YR3/1黒褐色混じる　砂　Ⅳ層汚れ再堆積。
5　10YR3/1黒褐色　シルト
6　4層に同じ。砂（一部シルト化？）。Ⅳ層汚れ再堆積。
7　10YR3/1黒褐色と10YR4/4褐色の混土　シルト
8　10YR5/6黄褐色　砂？、シルト？　Ⅳ層再堆積。
9　10YR3/1黒褐色と10YR4/4褐色の混土　シルト
10　10YR4/4褐色　砂？、シルト？　白色グライ化したところあり。Ⅳ層再堆積。
11　10YR4/3にぶい黄褐色　砂　ややもろい。砂利混じり。掘りすぎ？

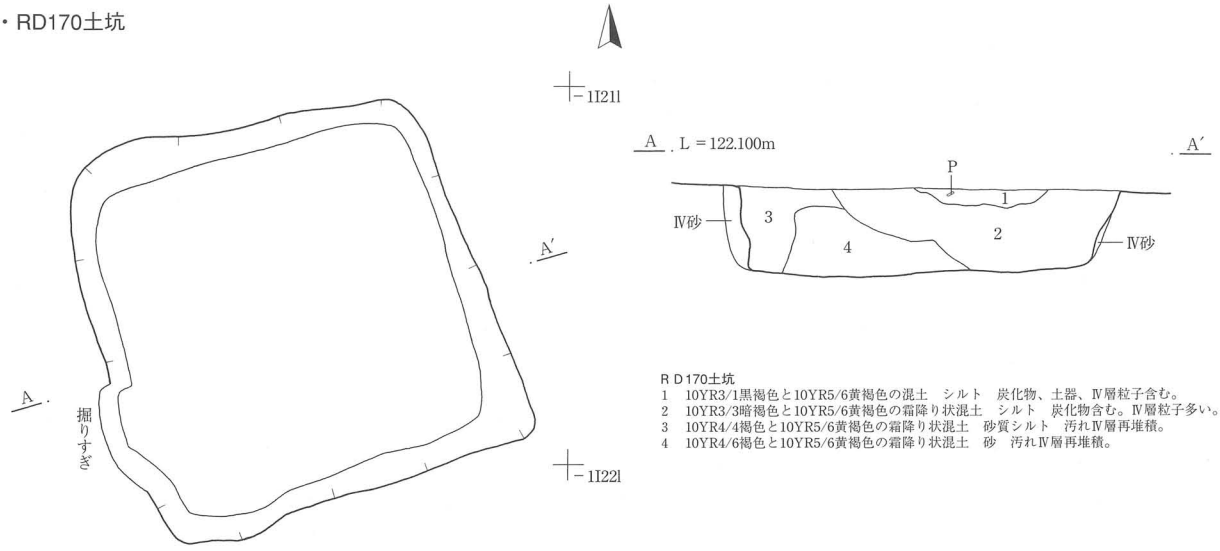
・RD169土坑



RD169土坑
1　10YR2/1黒色地に細かい10YR5/6黄褐色の粒子散る　砂質シルト　硬く締まる。Ⅱ層の再堆積にⅣ層粒子散る。
2　10YR2/1黒色地に10YR4/4褐色のブロック　砂質シルト　硬く締まる。Ⅱ層とⅣ砂層粒子で混ざる。
3　10YR4/4褐色と10YR5/6黄褐色の混土　砂　硬く締まる。汚れⅣ層再堆積。
4　10YR2/1黒色　砂質シルト　Ⅱ層の再堆積にⅣ砂層粒子散る。
5　10YR4/4褐色地に10YR5/3にぶい黄褐色の斑　砂　汚れⅣ層再堆積。白色グライ化している箇所あり。
6　10YR4/3にぶい褐色地に10YR5/3にぶい黄褐色の斑　砂　もろい。汚れⅣ層再堆積。白色グライ化している箇所あり。
7　10YR3/1黒褐色　砂質シルト　非常にもろい。Ⅱ層再堆積。
8　10YR4/4褐色　砂　非常にもろい。汚れⅣ層再堆積。
9　10YR4/2灰黄褐色　砂質シルト　Ⅱ層とⅣ層の混土？

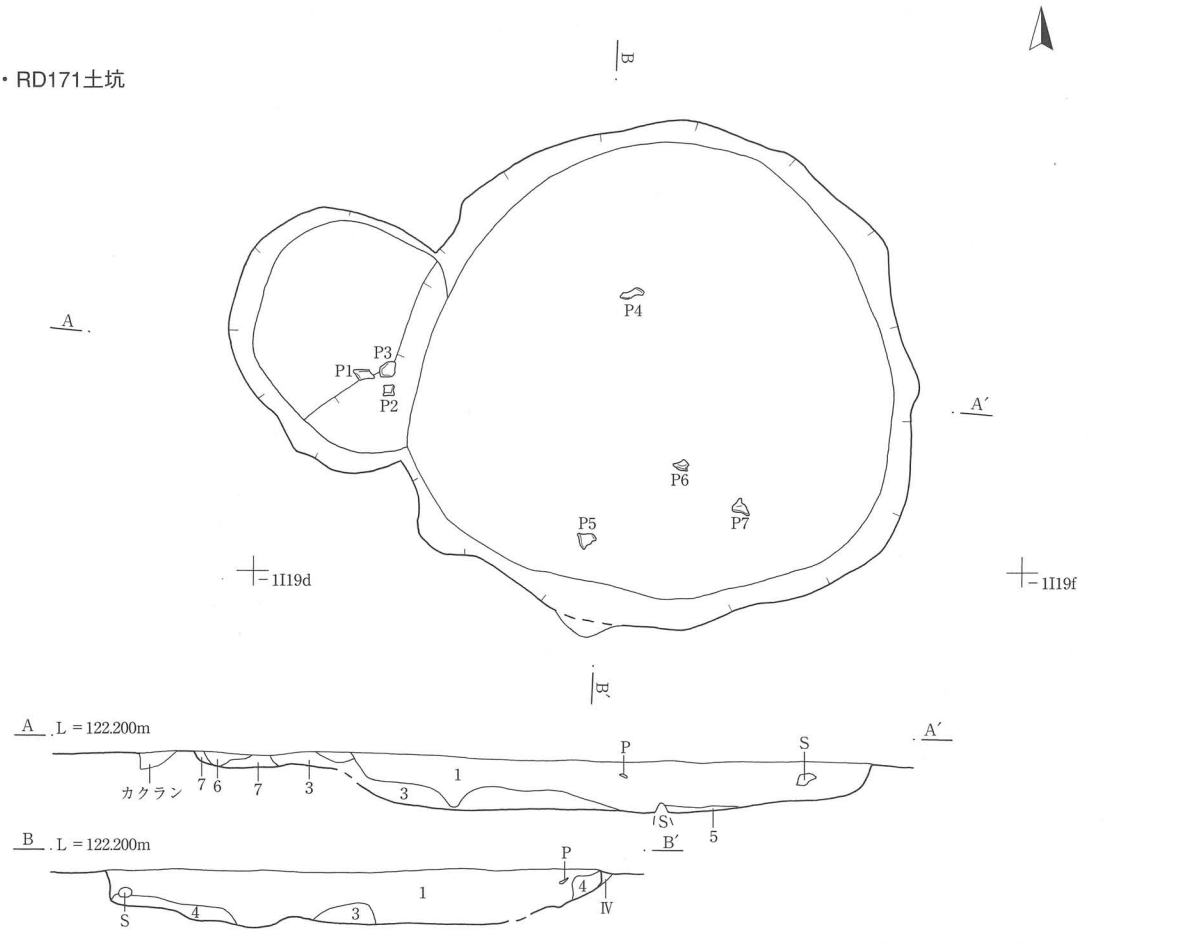
第30図　RD168・169土坑

・RD170土坑

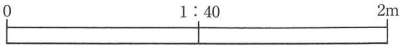


ＲＤ170土坑
1　10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　シルト　炭化物、土器、Ⅳ層粒子含む。
2　10YR3/3暗褐色と10YR5/6黄褐色の霜降り状混土　シルト　炭化物含む。Ⅳ層粒子多い。
3　10YR4/4褐色と10YR5/6黄褐色の霜降り状混土　砂質シルト　汚れⅣ層再堆積。
4　10YR4/6褐色と10YR5/6黄褐色の霜降り状混土　砂　汚れⅣ層再堆積。

・RD171土坑

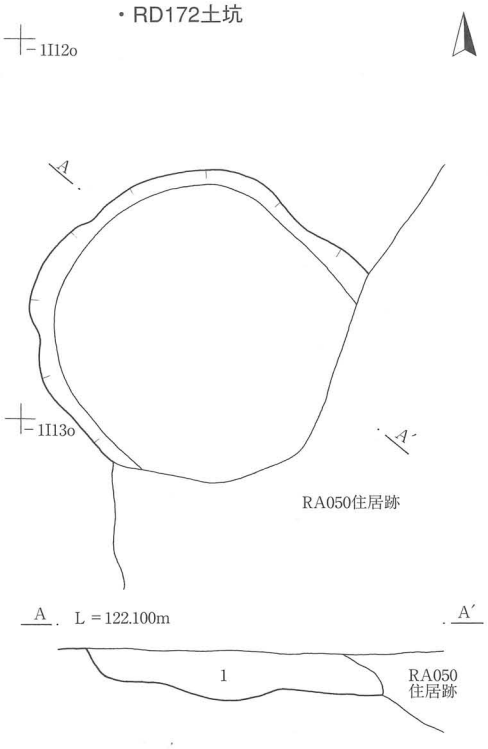


ＲＤ171土坑
1　10YR2/1黒色　シルト　硬く締まる。
2　10YR3/1黒褐色　砂質シルト　Ⅳ層粒子、焼土粒多い。
3　10YR2/1黒色と10YR4/3にぶい黄褐色の混土　シルト　Ⅳ層粒子含む。4層と同じと思うが、より暗い。
4　10YR3/1黒褐色と10YR4/6褐色の混土　シルト　Ⅳ層粒子、ブロック多い（3層より多い）。
5　10YR5/6黄褐色と10YR3/1黒褐色の混土　シルト　汚れⅣ層。床下。
6　10YR3/1黒褐色　シルト
7　10YR3/1黒褐色と10YR4/6褐色の混土　シルト　4層に似る。



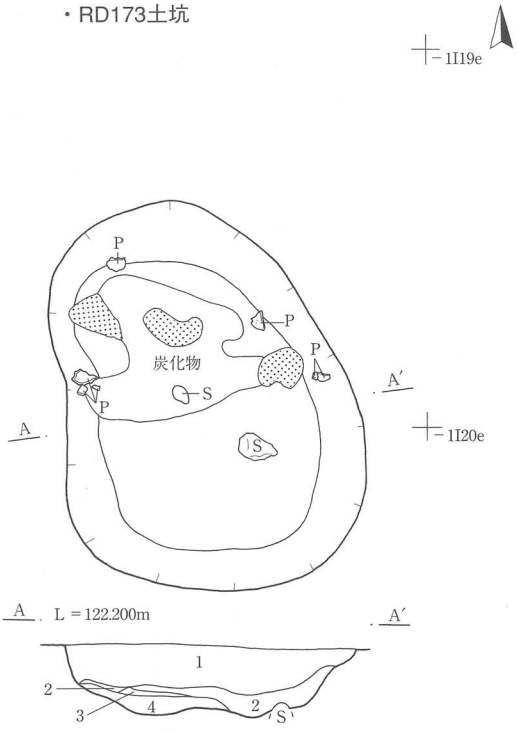
第31図　RD170・171土坑

・RD172土坑



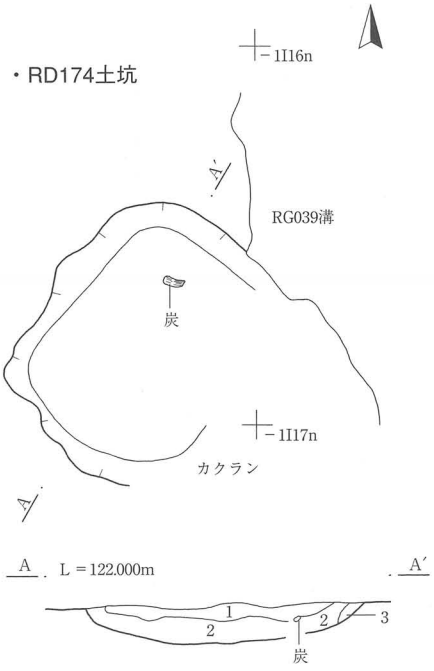
RD172土坑
1　10YR1.7/1黒色　シルト　クロボク土にⅣ層粒子含む。

・RD173土坑



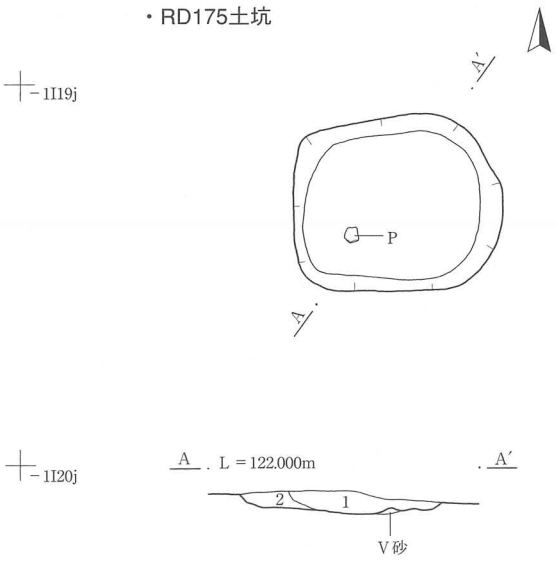
RD173土坑
1　10YR2/1黒色　シルト　根カクランによるⅣ層ブロック含む。
2　10YR5/6黄褐色　砂質シルト　Ⅳ層汚れ再堆積。埋め戻し土。
3　10YR3/1黒褐色　シルト　炭化物多く含み、北側では焼土が認められる。
4　10YR4/1褐灰色と10YR5/6黄褐色の薄い互層　砂、シルト

・RD174土坑

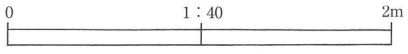


RD174土坑
1　10YR2/1黒色　シルト　やや硬く締まる。Ⅳ層ブロック含む。
2　10YR2/1黒色地に10YR5/6黄褐色のブロック　シルト　上面中心に焼土粒多く、炭化材も見られる。Ⅳ層粒子も1層より多い。
3　Ⅳ層が根によってカクランを受けたもの。

・RD175土坑

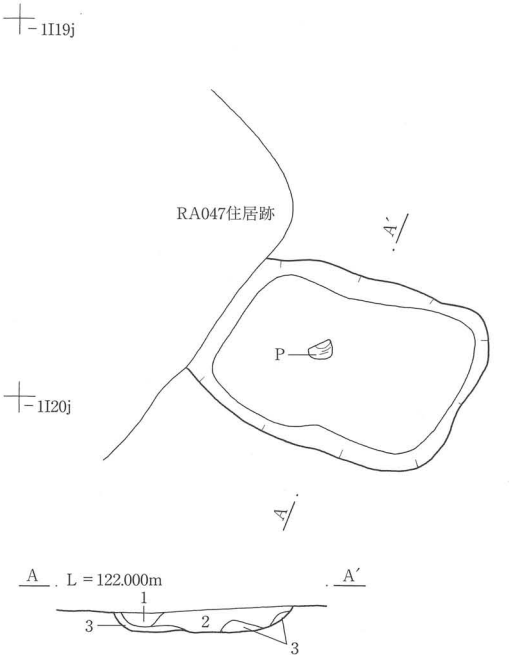


RD175土坑
1　10YR3/1黒褐色　シルト　砂利、Ⅳ層粒子含む。
2　10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の霜降り状混土　シルト、砂　Ⅳ層粒子多い。埋め戻し？



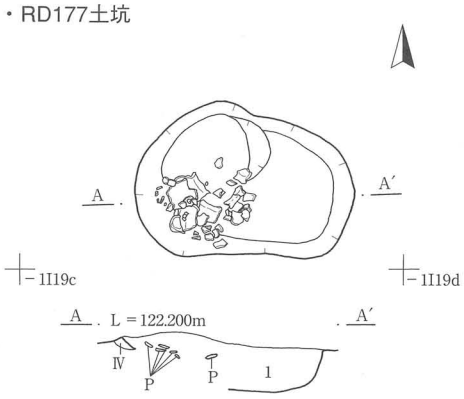
第32図　RD172～175土坑

・RD176土坑



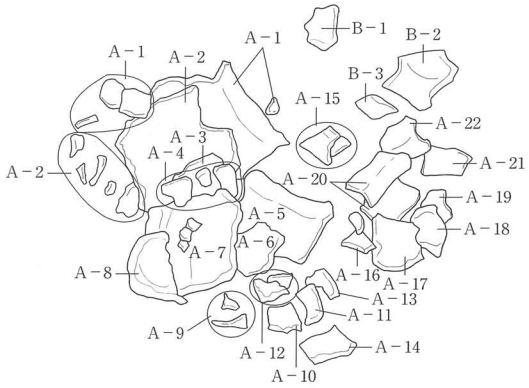
RD176土坑
1　10YR2/1黒色　シルト　炭化物含む。
2　10YR3/1黒褐色　シルト　Ⅳ層粒子含む。
3　10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　シルト　汚れⅣ層再堆積土。

・RD177土坑

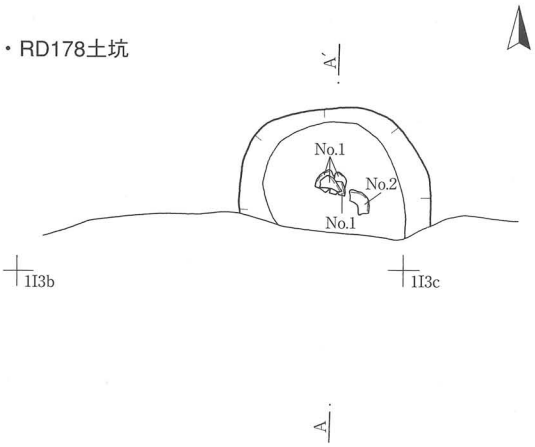


RD177土坑
1　10YR2/1黒色　シルト　多量の土器含む。根カクランによるⅣ層ブロック含む。

RD177土坑遺物微細図

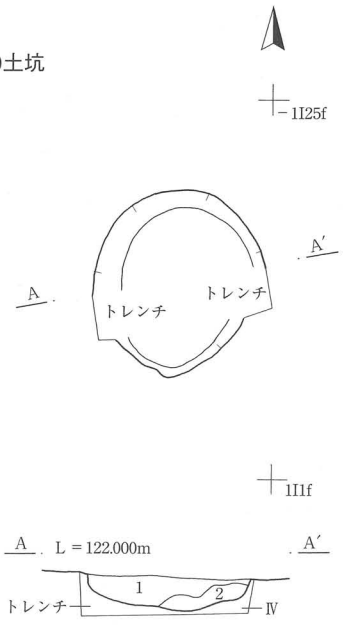


・RD178土坑



RD178土坑
0　10YR4/1褐灰色　シルト　粘性ややあり。カクラン（近現代の溝跡？）。
1　10YR2/1黒色地に10YR4/3にぶい黄褐色のブロック　砂　Ⅳ層粒子多い。
2　10YR2/1黒色　砂質シルト　Ⅳ層ブロック、土器含む。

・RD179土坑

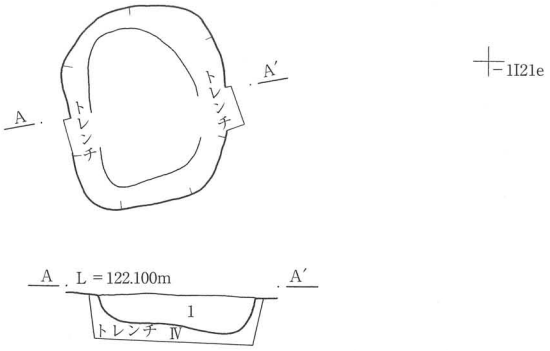


RD179土坑
1　10YR2/1黒色　シルト　根カクランによるか、Ⅳ層ブロック所々に見える。
2　10YR2/1黒色と10YR5/6黄褐色の霜降り状混土　砂質シルト　Ⅳ層が根カクランを受けたような感じ。

0　1：40　2m

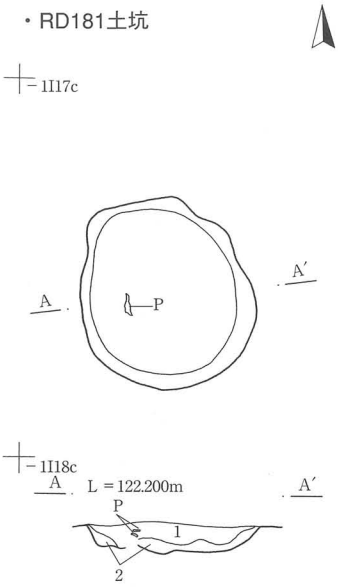
第33図　RD176～179土坑

・RD180土坑



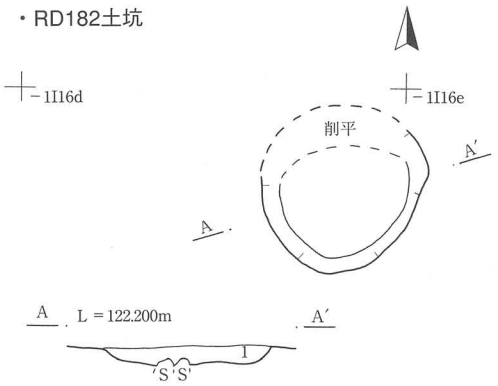
RD180土坑
1　10YR2/1黒色　シルト　クロボク土。

・RD181土坑



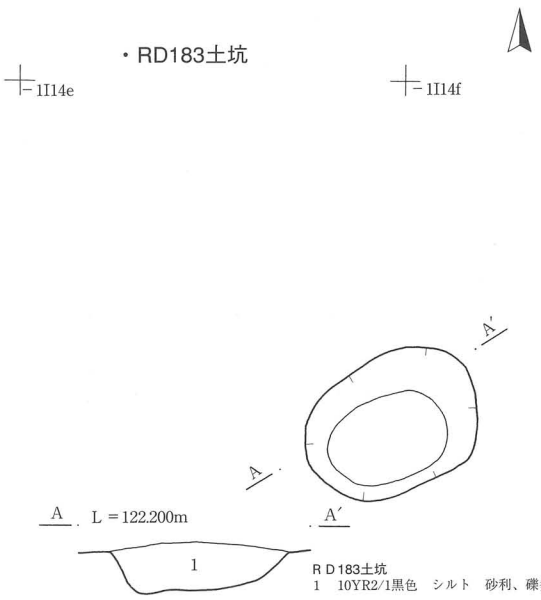
RD181土坑
1　10YR2/1黒色　シルト　土器小片含む。
2　10YR4/1褐灰色と10YR5/6黄褐色の混土　シルト

・RD182土坑



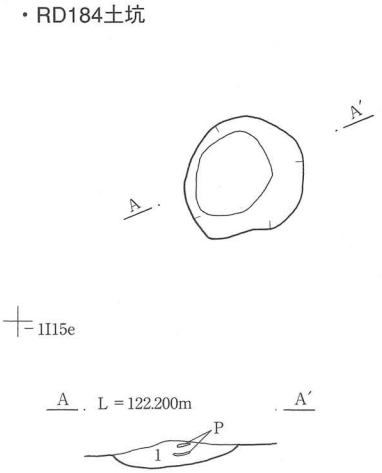
RD182土坑
1　10YR3/1黒褐色　シルト　Ⅳ層粒子多く、砂利も含む。

・RD183土坑



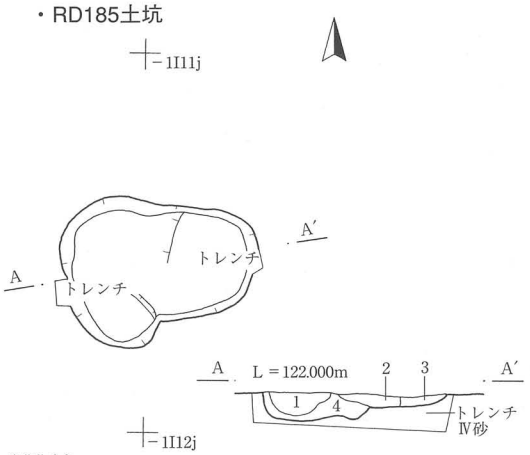
RD183土坑
1　10YR2/1黒色　シルト　砂利、礫多い。

・RD184土坑



RD184土坑
1　10YR2/1黒色　シルト　砂利、礫多い。

・RD185土坑

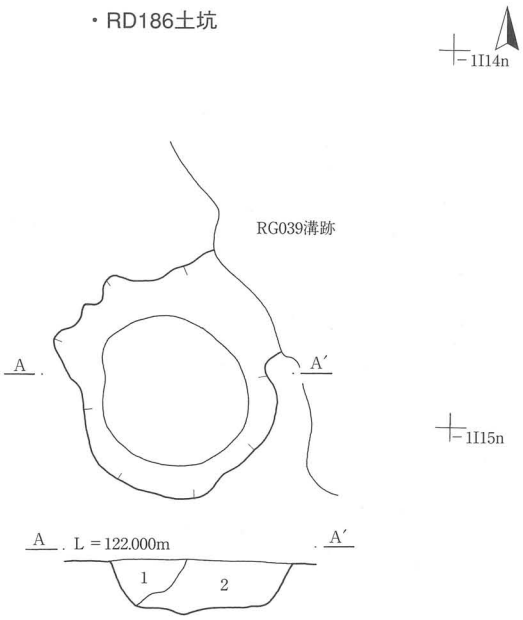


RD185土坑
1　10YR2/1黒色　シルト　クロボク土にⅣ層粒子混じる。
2　10YR2/1黒色　シルト　1層とほとんど同じだが、Ⅳ層粒子多く、より明るい。
3　10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　シルト　クロボク土とⅣ層再堆積土の混土。焼土粒、炭化物含む。
4　10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　砂、シルト　汚れⅣ層再堆積土？　3層に似るが、焼土粒、炭化物含まない。

0　1：40　2m

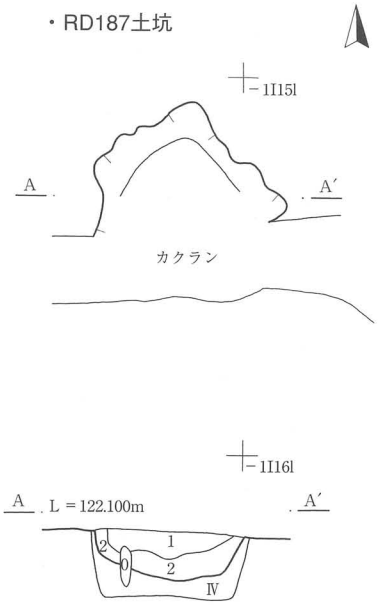
第34図　RD180～185土坑

・RD186土坑



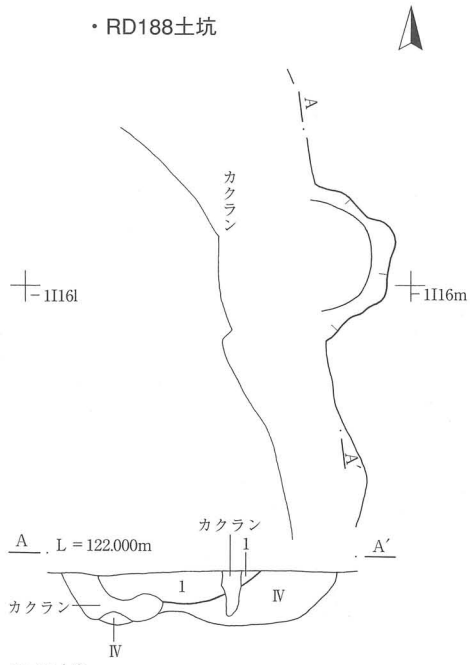
RD186土坑
1　10YR2/1黒色地に10YR5/6黄褐色散る　シルト　やや硬く締まる。Ⅳ層粒子散る。
2　10YR3/2黒褐色と10YR5/6黄褐色の霜降り状混土　シルト　Ⅳ層粒子、ブロック多い。

・RD187土坑



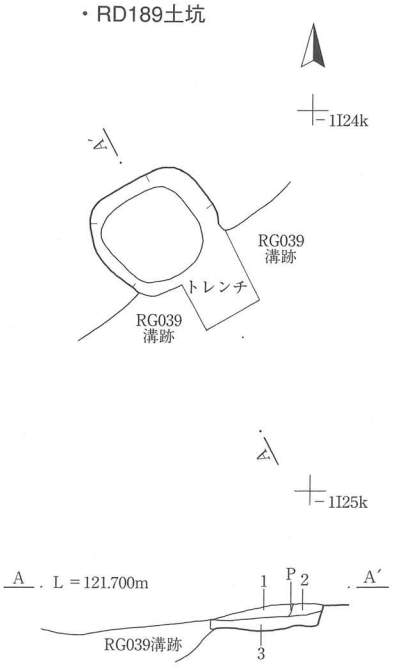
RD187土坑
0　根カクラン（ボソボソした黒土）
1　10YR2/1黒色地に細かい10YR5/6黄褐色のブロック　シルト　Ⅳ層粒子含む。
2　10YR5/6黄褐色地に10YR3/1黒褐色の霜降り状混土　シルト　埋め戻した土？

・RD188土坑



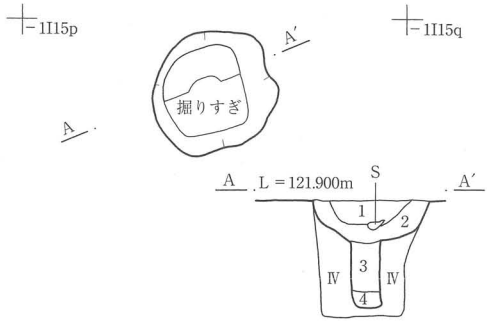
RD188土坑
1　10YR2/1黒色地に10YR5/6黄褐色散る　シルト　クロボク土にⅣ層粒子、ブロック含む。

・RD189土坑

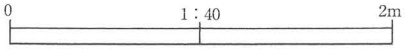


RD189土坑
1　10YR4/2灰黄褐色　砂質シルト
2　7.5YR3/1黒褐色　シルト　焼土粒多い。
3　10YR2/1黒色　シルト　溝覆土の再堆積？

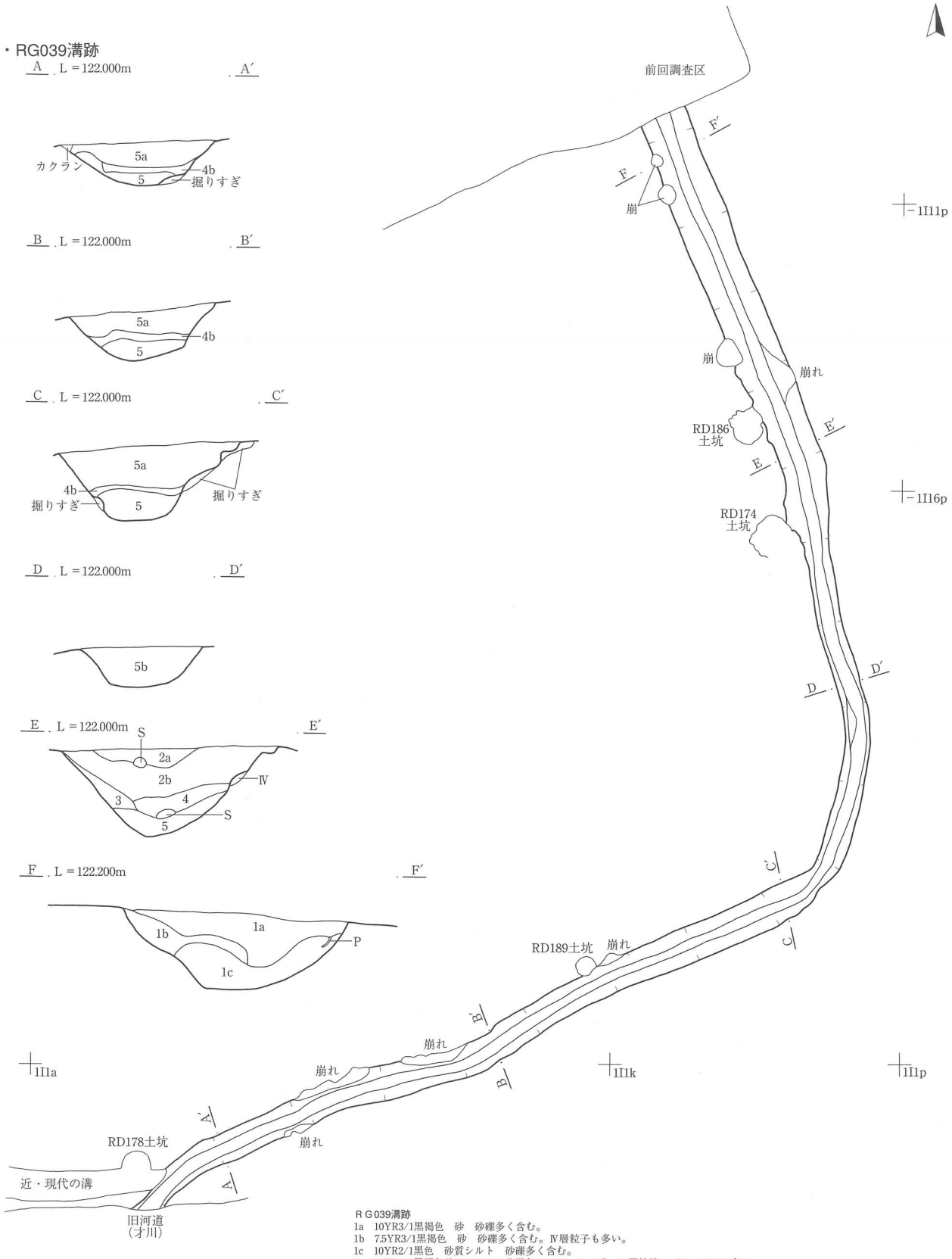
・RD190土坑



RD190土坑
1　10YR3/1黒褐色　砂　もろい。砂利、礫多量に含む。
2　10YR2/1黒色地に10YR5/6黄褐色のブロック　シルト　Ⅱ、Ⅳ層の混土。
3　10YR5/6黄褐色　砂　このすぐ南側には4層があったが、ここは既にⅣ層そのもので、下に4層が斜めに残っていただけか。
4　10YR2/1黒色地に10YR5/6黄褐色の混土　シルト

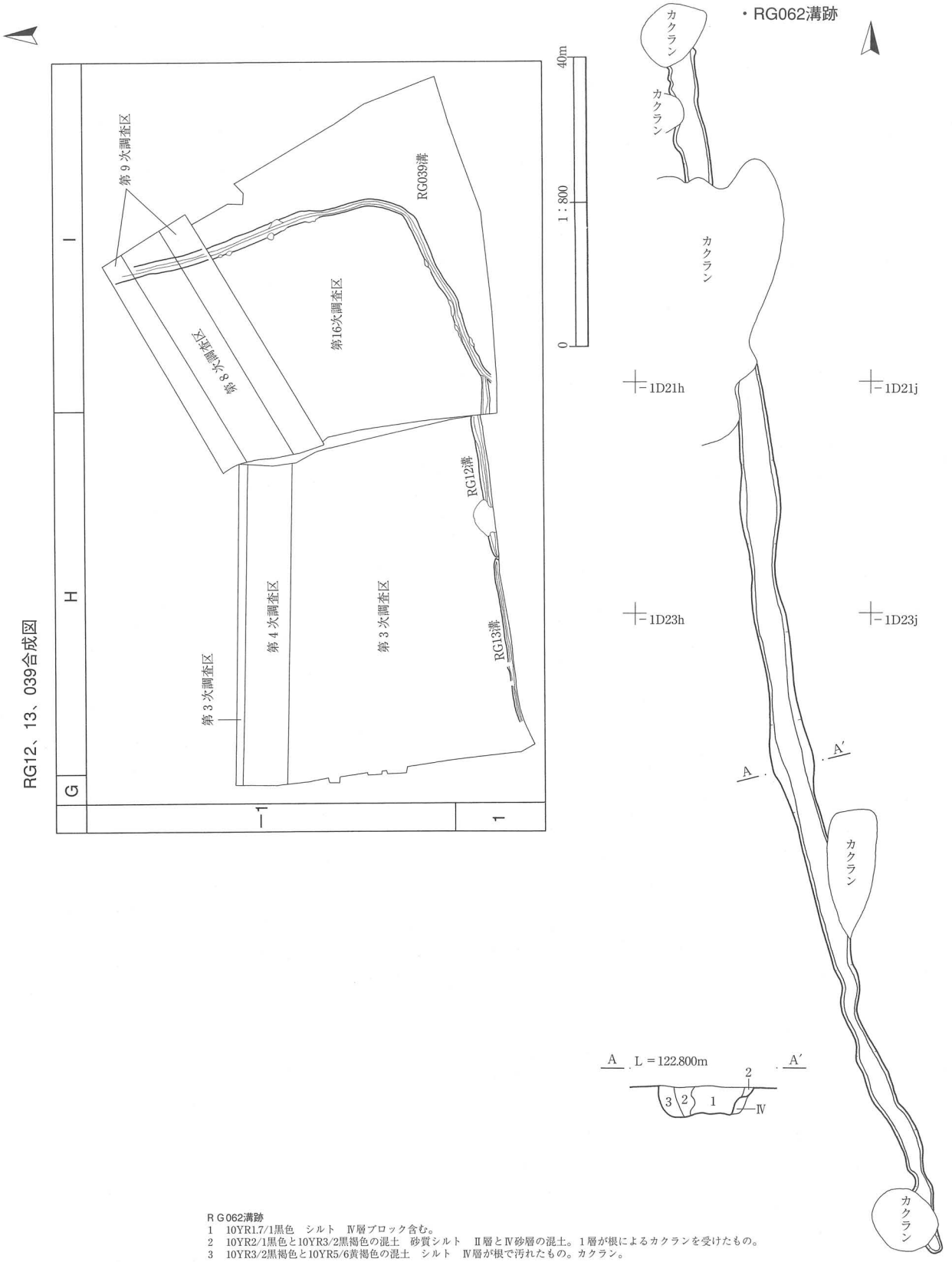


第35図　RD186～190土坑



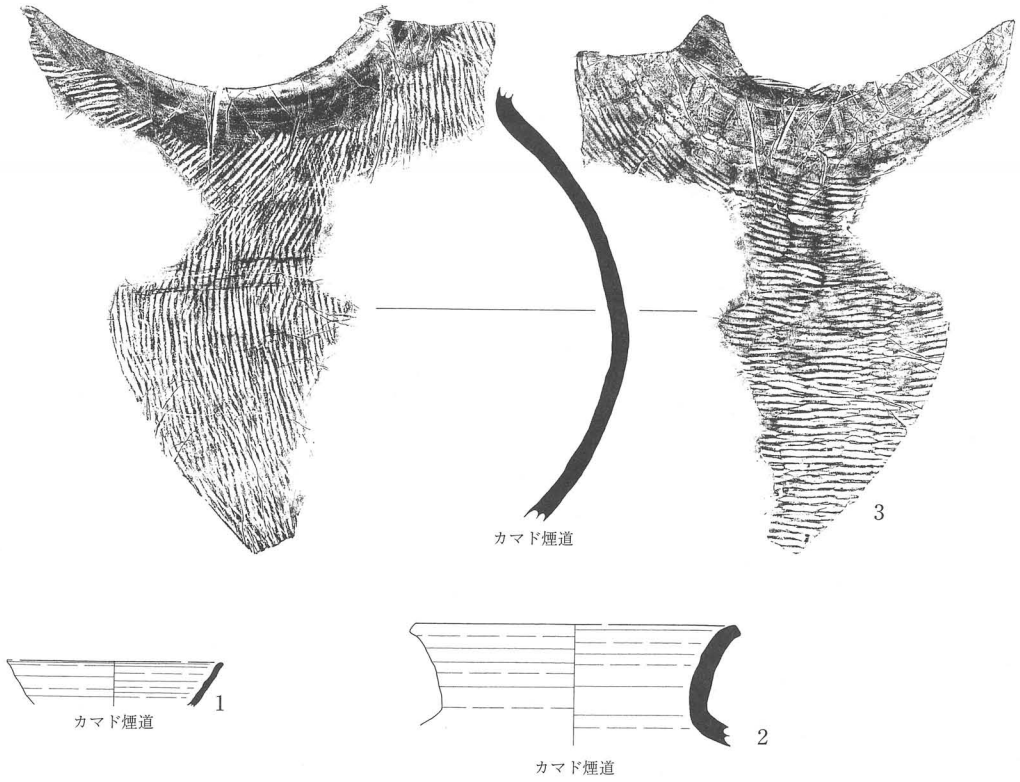
RG039溝跡
1a　10YR3/1黒褐色　砂　砂礫多く含む。
1b　7.5YR3/1黒褐色　砂　砂礫多く含む。Ⅳ層粒子も多い。
1c　10YR2/1黒色　砂質シルト　砂礫多く含む。
2a　10YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色のブロック　砂　Ⅳ層粒子、ブロックやや多い。
2b　10YR3/1黒褐色　シルト
3　10YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色のブロック　シルト　粘性強い。壁が崩れたもの。
4　10YR3/1黒褐色～10YR2/1黒色地に7.5YR5/6明褐色散る　シルト　粘性強い。5a層と同じくらい酸化鉄見える。
4b　2.5Y3/1黒褐色地に7.5YR5/6明褐色のライン　粘土　"湧水線"と思う。
5　2.5Y3/1黒褐色地に7.5YR5/6明褐色散る　粘土　所々に酸化鉄ブロック。
5a　10YR3/1黒褐色　粘土　所々酸化鉄ブロック。
5b　2.5Y3/1黒褐色地に7.5YR5/6明褐色散る　粘土、砂　他より酸化鉄多く、5層と4b層が混じった感じ。

第36図　RG039溝跡（1）

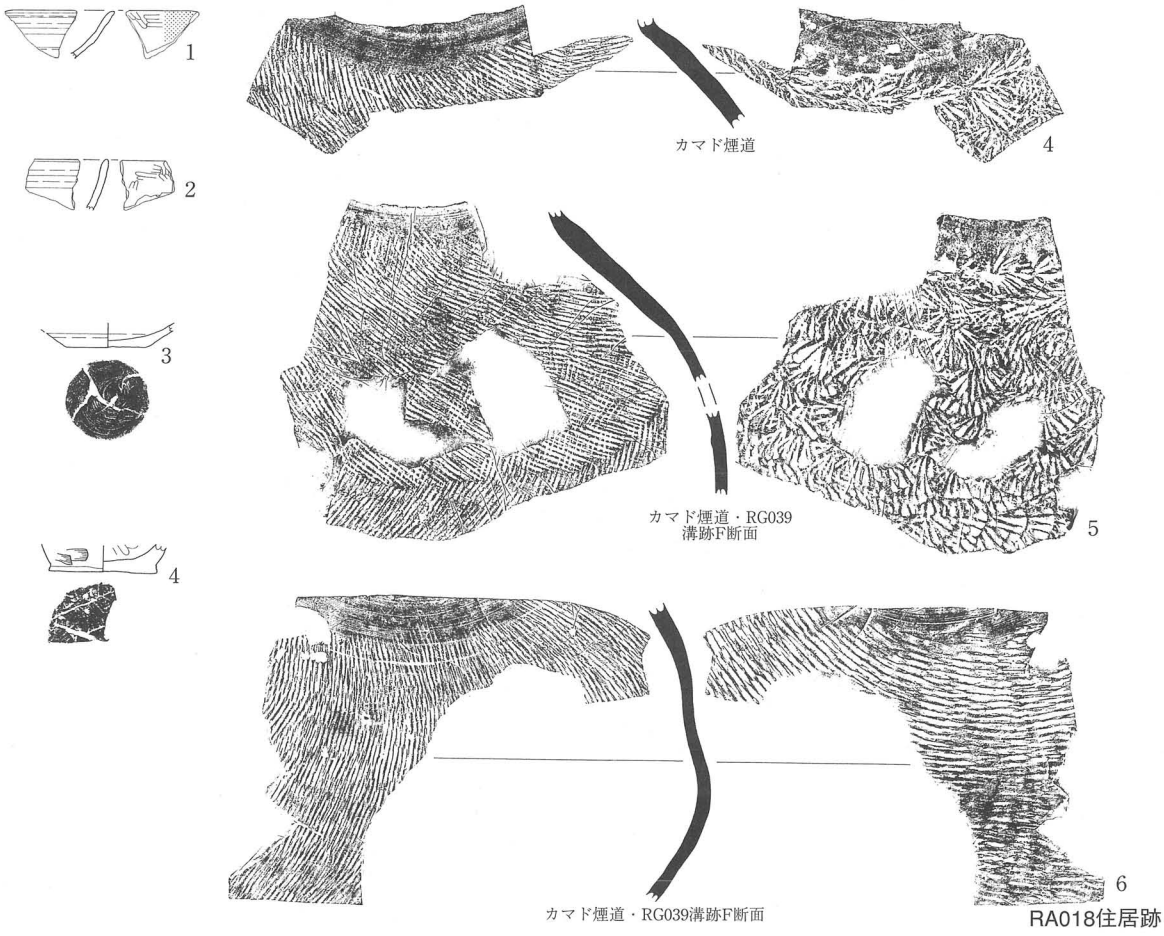


RG062溝跡
1　10YR1.7/1黒色　シルト　Ⅳ層ブロック含む。
2　10YR2/1黒色と10YR3/2黒褐色の混土　砂質シルト　Ⅱ層とⅣ砂層の混土。1層が根によるカクランを受けたもの。
3　10YR3/2黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　シルト　Ⅳ層が根で汚れたもの。カクラン。

第37図　RG039溝跡（2）、RG062溝跡

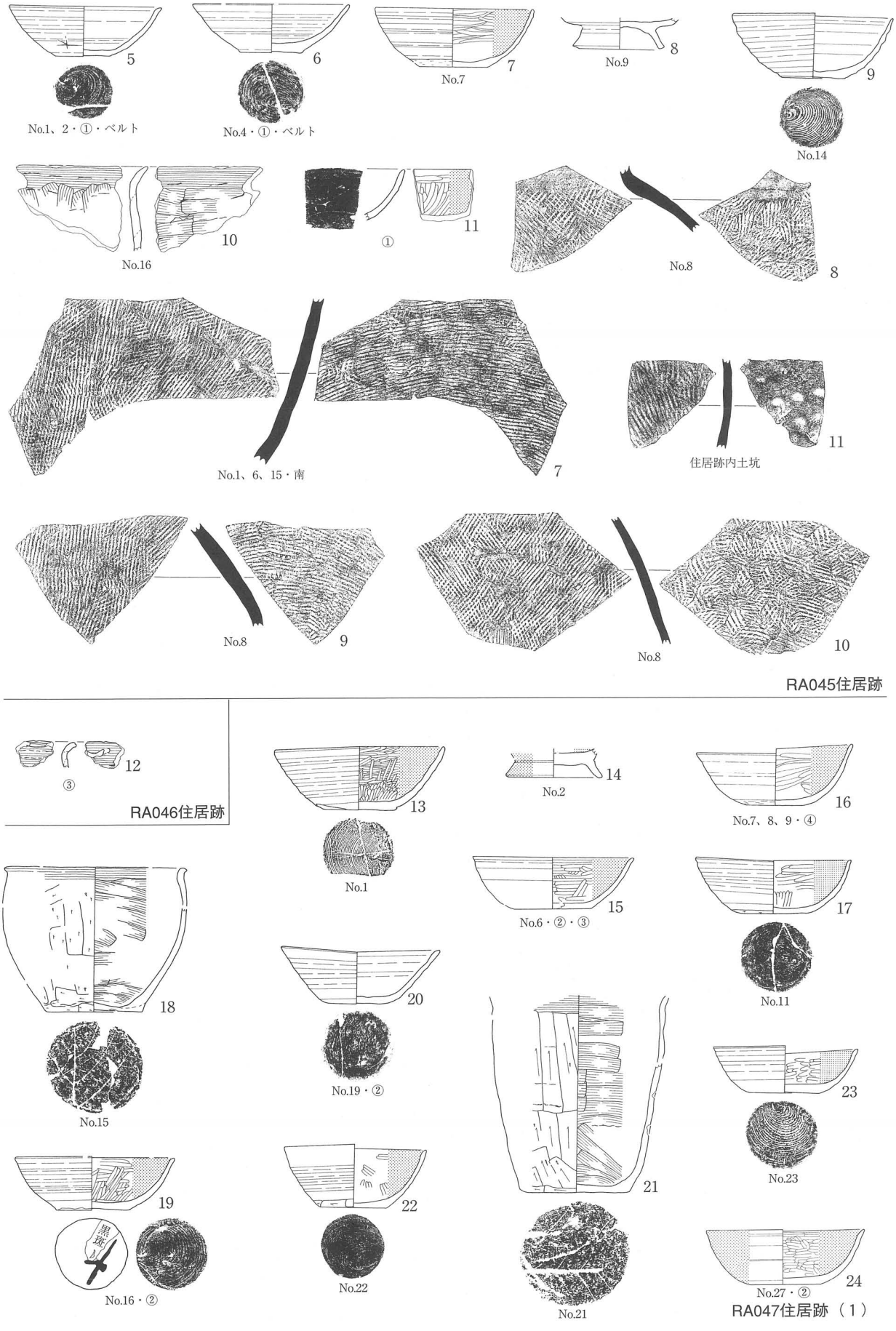


RA008住居跡

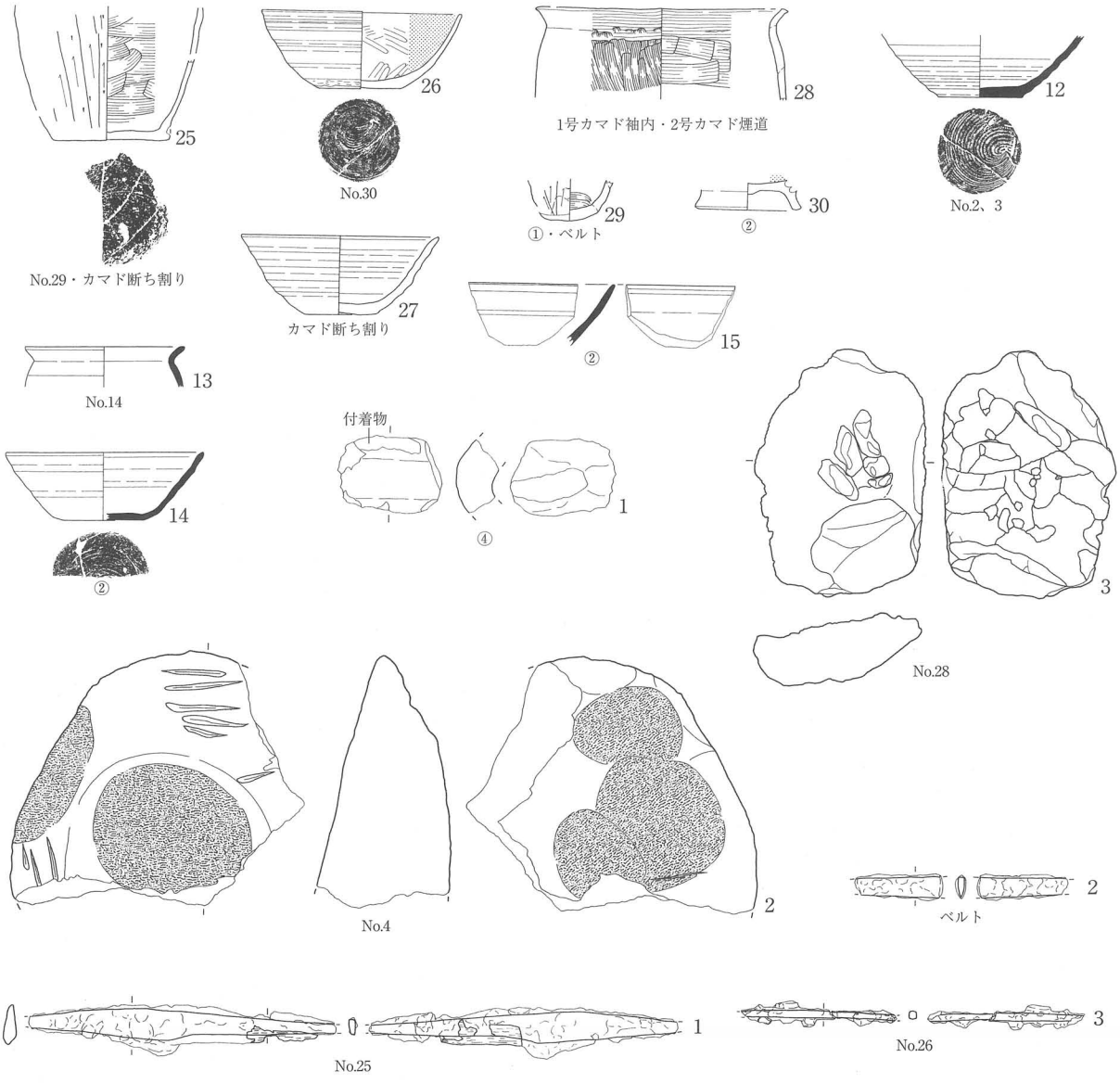


RA018住居跡

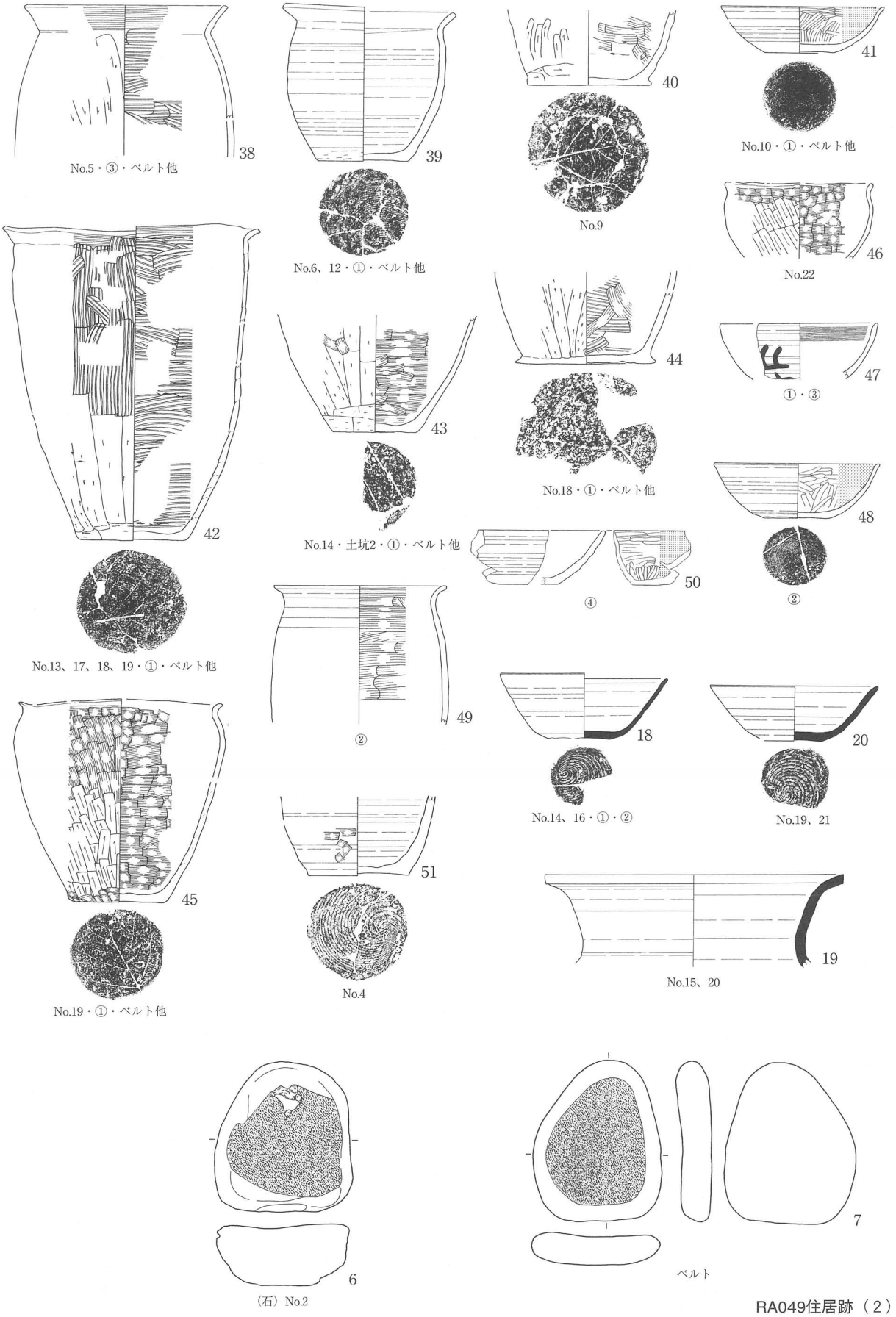
第38図　RA008・018住居跡出土遺物（1：5）



第39図　RA045・046住居跡、RA047住居跡（1）出土遺物（1：5）

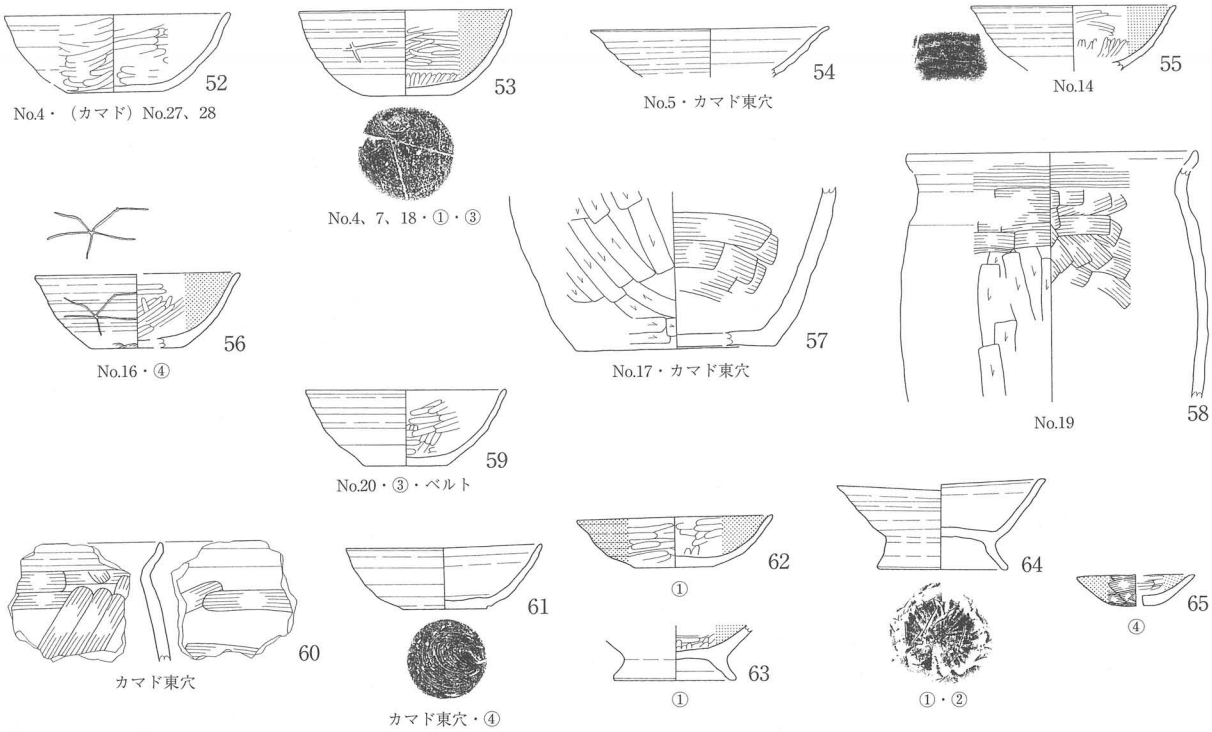


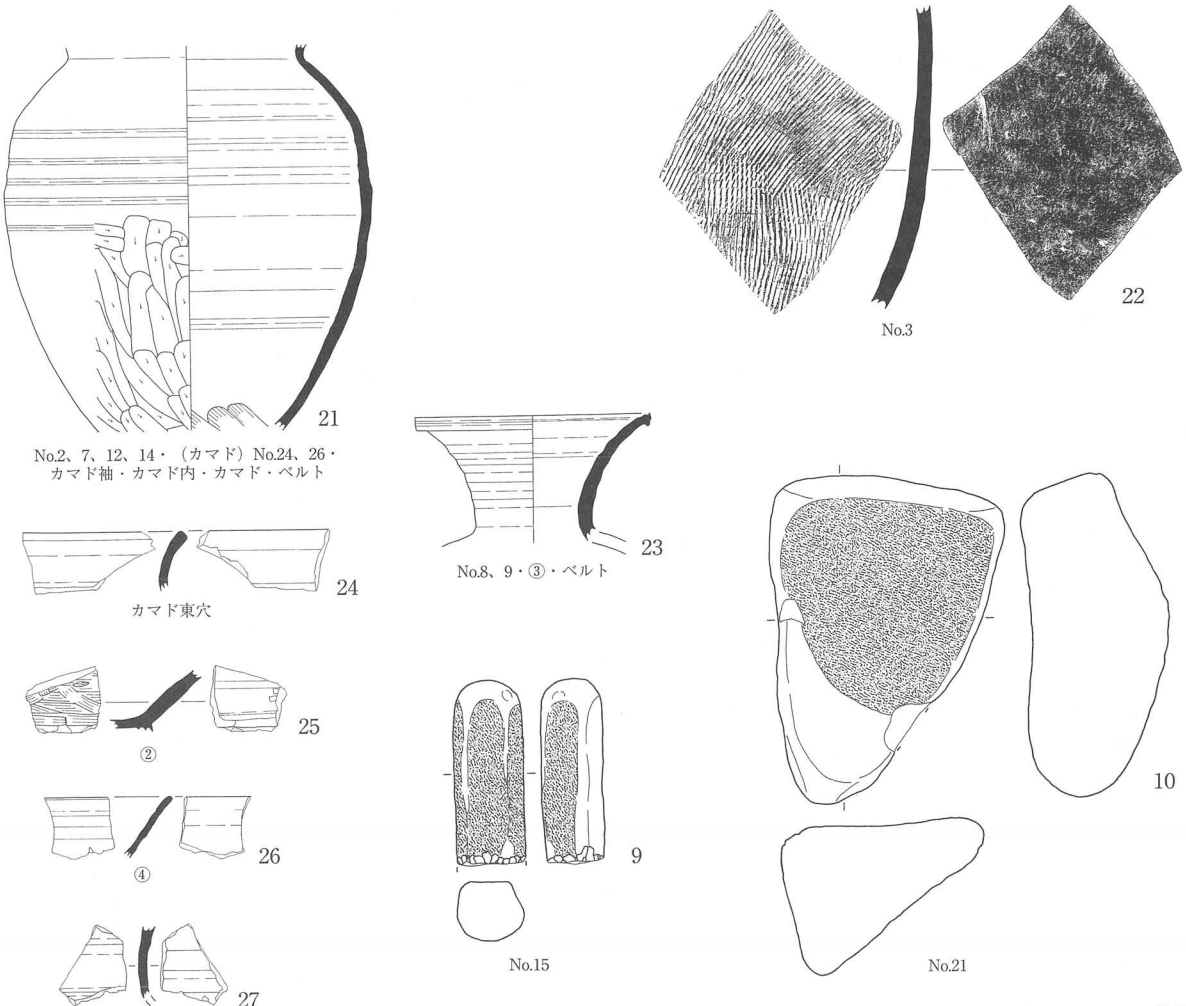
第40図　RA047住居跡（２）、RA048住居跡、RA049住居跡（１）出土遺物（土器・礫石器1：5、土製品・鉄製品1：3）



RA049住居跡（２）

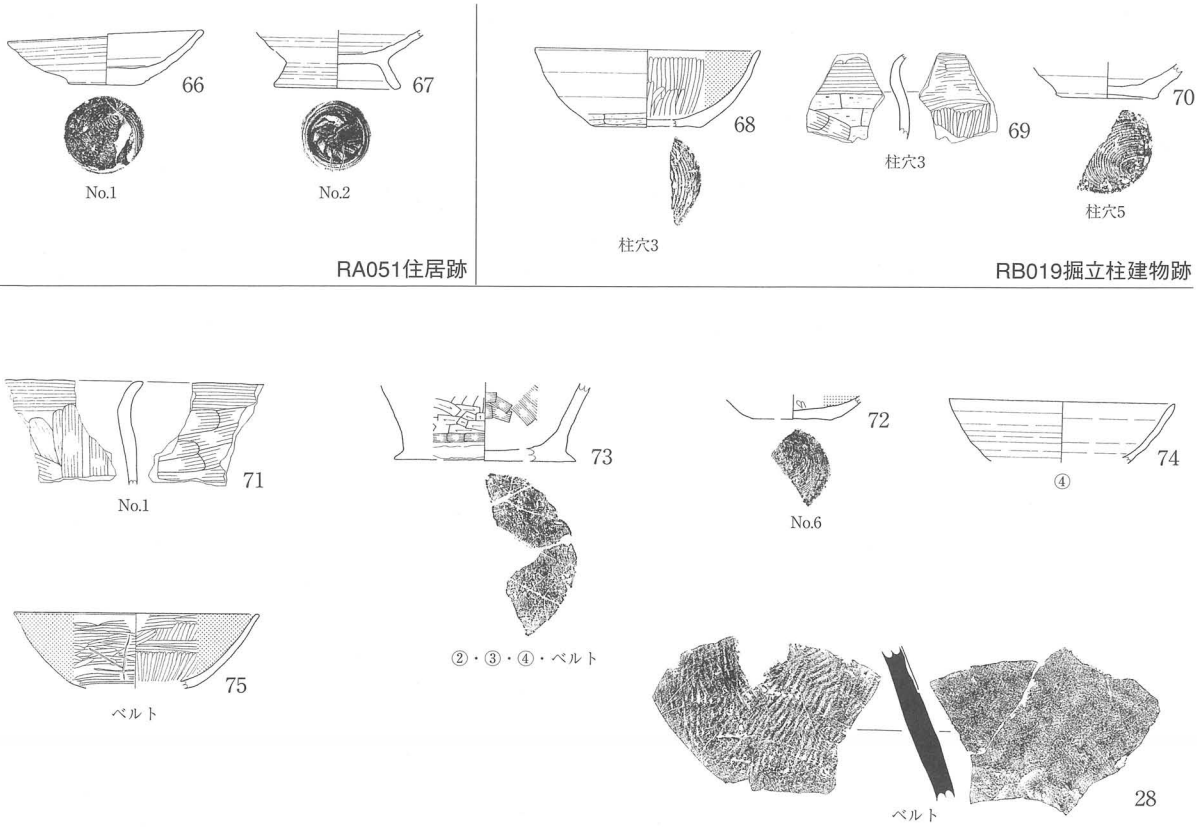
第41図　RA049住居跡（２）出土遺物（1：5）



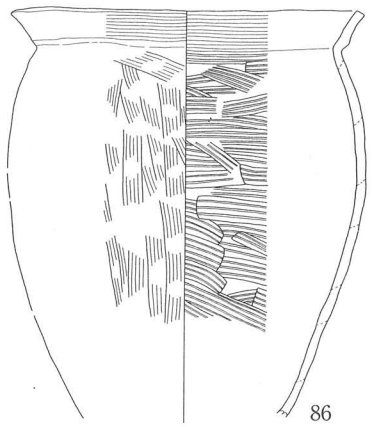


RA050住居跡

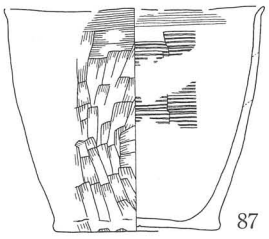
第42図　RA050住居跡出土遺物（1：5）



第43図　RA051住居跡、RB019掘立柱建物跡、RD171・173～176土坑出土遺物（1：5）



A－1・2・3・4・5・7・13・15・16・17・18・19・22・12の下・14の下・17の下・19の下・B－1・1号土坑・RA047住居跡②

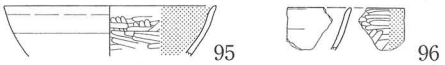


A－14の下・15・B－1、2

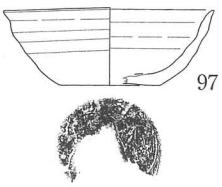
A－1・2・6・7・8・9・22・1の下・12の下・14の下・17の下・B－3

RD177土坑

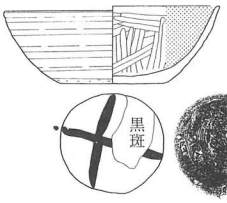
RD181土坑



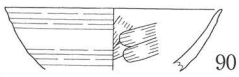
RD189土坑



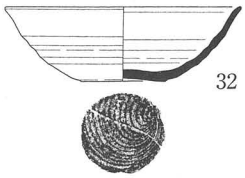
RD190土坑



No.1

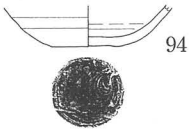


No.2

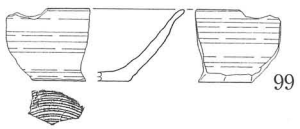


土器No.1

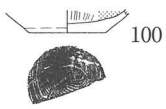
RD178土坑



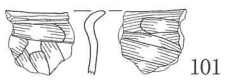
RD183土坑



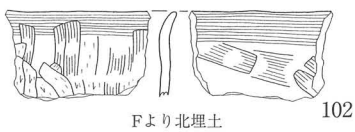
BとCの間埋土



BとCの間埋土

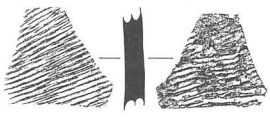


EとFの間埋土



Fより北埋土

DとEの間埋土



Fより北埋土

RG039溝跡

第44図　RD177・178・181・183・189・190土坑、RG039溝跡出土遺物（1：5）

V 遺　　物

今回の調査で出土した遺物は、削平のため、遺構内がほとんどを占める。本章では、遺構出土の遺物も含めたが、それぞれ、その種類の遺物の中で冒頭に掲げている。遺構出土品は、第Ⅳ章の中に遺構ごとの集成図を掲げているので参照していただきたい（第38～44図）。

個々の遺物の記載は、基本的に図と表で行ったので、ここでは概要と表の補足のみ記す。

(a)土師器（第45～53図、写真図版41～45、観察表は図版）

30,996ｇ、大コンテナ（32×42×30㎝）約2.5箱出土。図表の器面調整は、工具よりも“効果”を重視したが、迷うものが多く、甕は胴突出部より上がナデ、下がケズリに見えるものが多い。原則として器形を復元できるもの（1/4周以上）を掲載したが、出土量が少ない遺構や量があっても基準を満たさないものばかりの遺構では、この限りでない。墨書、刻書土器は全て掲載。集落の中心のためか、坏や台付坏の割合が多く、貴重品？の胎土には金雲母が顕著。51の底、65が注目される。

以下、表の補足。16の出土割合、９が4/14、７、８、④が3/14、ベルトが1/14。34は底厚く、出土割合、７が12/25、１が8/25、８が3/25、ベルト他が2/25。35の出土割合、２が14/33、11とベルト他が8/33、①が2/33、ベルトが1/33。39の出土割合、６が12/22、①が7/22、12が2/22、ベルト他が1/22。42は注記不備とモザイク状に接合し、出土割合不明（17と①が多い）。外、使用状況窺わせる帯状変色（赤、灰色）、スス。ハケメ薄く（上ナデ？）、外面頸部にもハケメ状痕跡。53の出土割合、18が10/23、４が7/23、①が3/23、７が2/23、③が1/23。86の取り上げ、Ａ－１・２・３・４・５・７・13・15・16・17・18・19・22、12の下、14の下、17の下、19の下、Ｂ－１、土坑名のみ、ＲＡ047住②で、出土割合不明瞭だが、１と２が5/20、５が2/20程度と多く、ＲＡ047は1/200程度。87の取り上げ、Ａ－１・２・６・７・８・９・22、１の下、12の下、14の下、17の下、Ｂ－３、土坑名のみで、出土割合不明瞭だが、７が1/5、８が1/6程度と多い。88の出土割合、Ｂ－２が7/15、Ｂ－１とＡ－15が3/15、Ａ－14の下が2/15。

(b)須恵器・須恵質製品（第53～59図、写真図版45～48、観察表は図版）

9,027ｇ、大コンテナ（32×42×30㎝）約0.5箱出土した。掲載基準。最低限部位が特定できる破片を掲載し、大甕の胴部破片は最小限にとどめたが、土師器と同様、この限りでないものもある。

以下、表の補足。21の取り上げ位置、２（1/5占）、７（1/5占）、12（1/6占）、14、24、26、カマド袖、カマド内、カマド、ベルトである（割合多いものは示した）。23の出土割合、８が4/9、９とベルトが2/9、③が1/9。37は、割口の様子が似ているので掲載したが、古代ではないようである。

(c)土製品（第60図、写真図版50、観察表は写真図版）

フイゴ羽口１点、不明製品１点、焼粘土塊３点とその延長で捉えられるもの１点出土（全点掲載）。

(d)石器（第60図、写真図版49・50、観察表は写真図版）

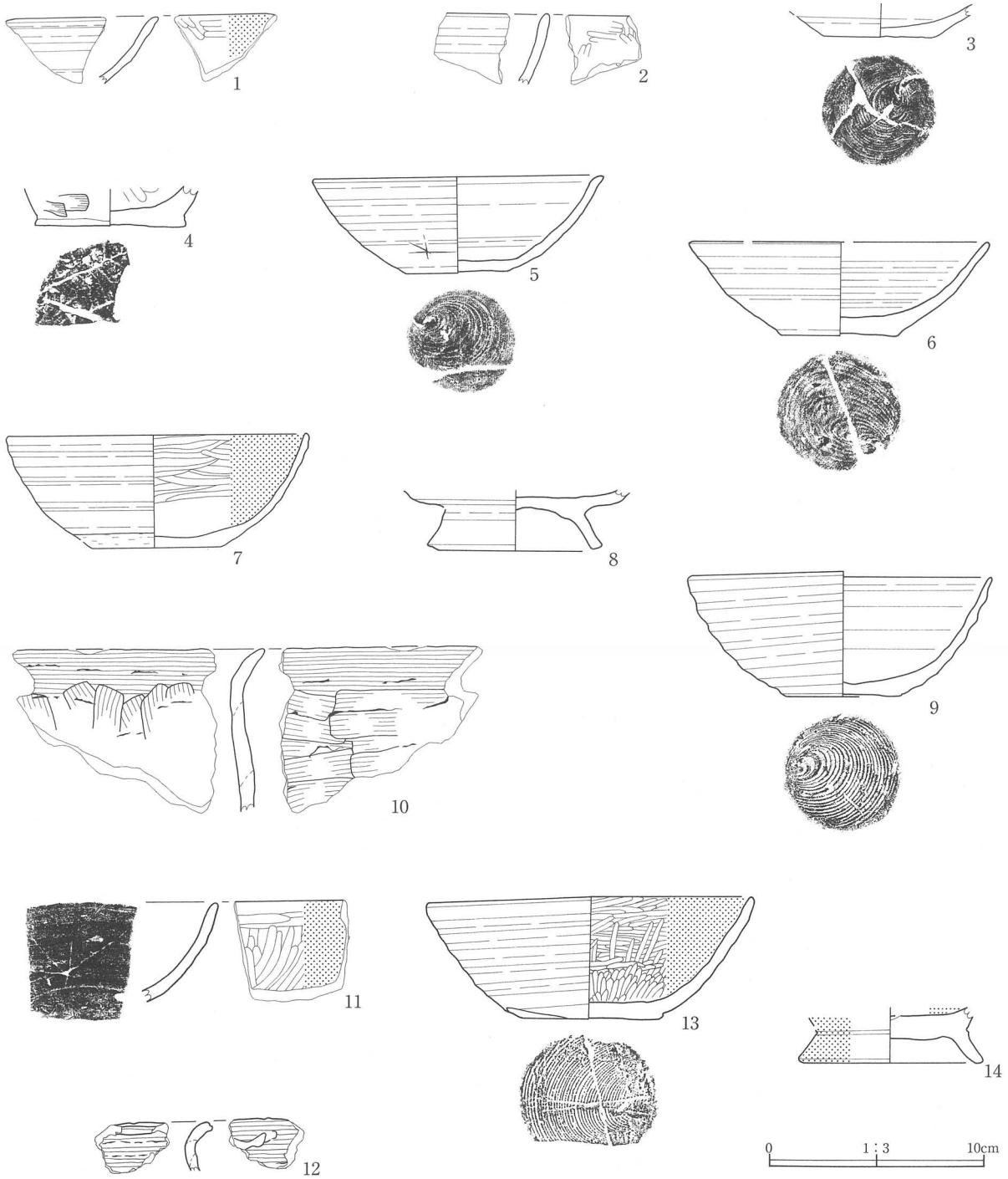
縄文時代の掻・削器類と思われる不定型剥片石器１点のほかは、砥石（の可能性のある礫石器）のみで、砥石類は平安時代の可能性が高い。不明瞭なものも含め全て掲載した。

(e)鉄製品（第60図、写真図版51、観察表は写真図版）

刀子２点、釘？１点、鉄滓２点出土し、全点掲載した。

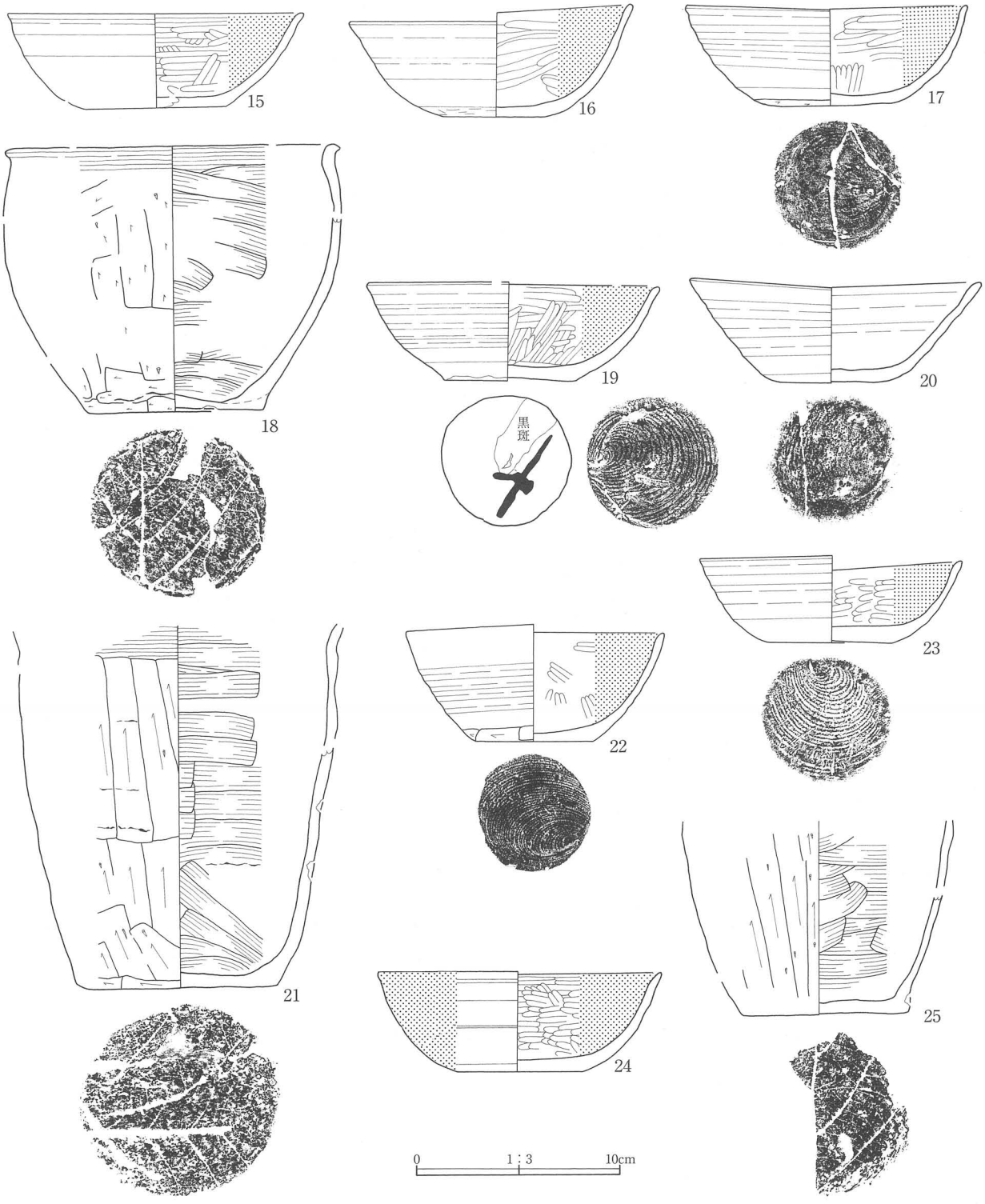
(f)自然遺物、その他

ＲＡ047住居跡、ＲＤ170・174土坑から炭化材が出土し、樹種は個々の遺構記載を参照いただきたいが、クリがほとんどである。なお、親指以下の微小な炭化材については取り上げてきていない。



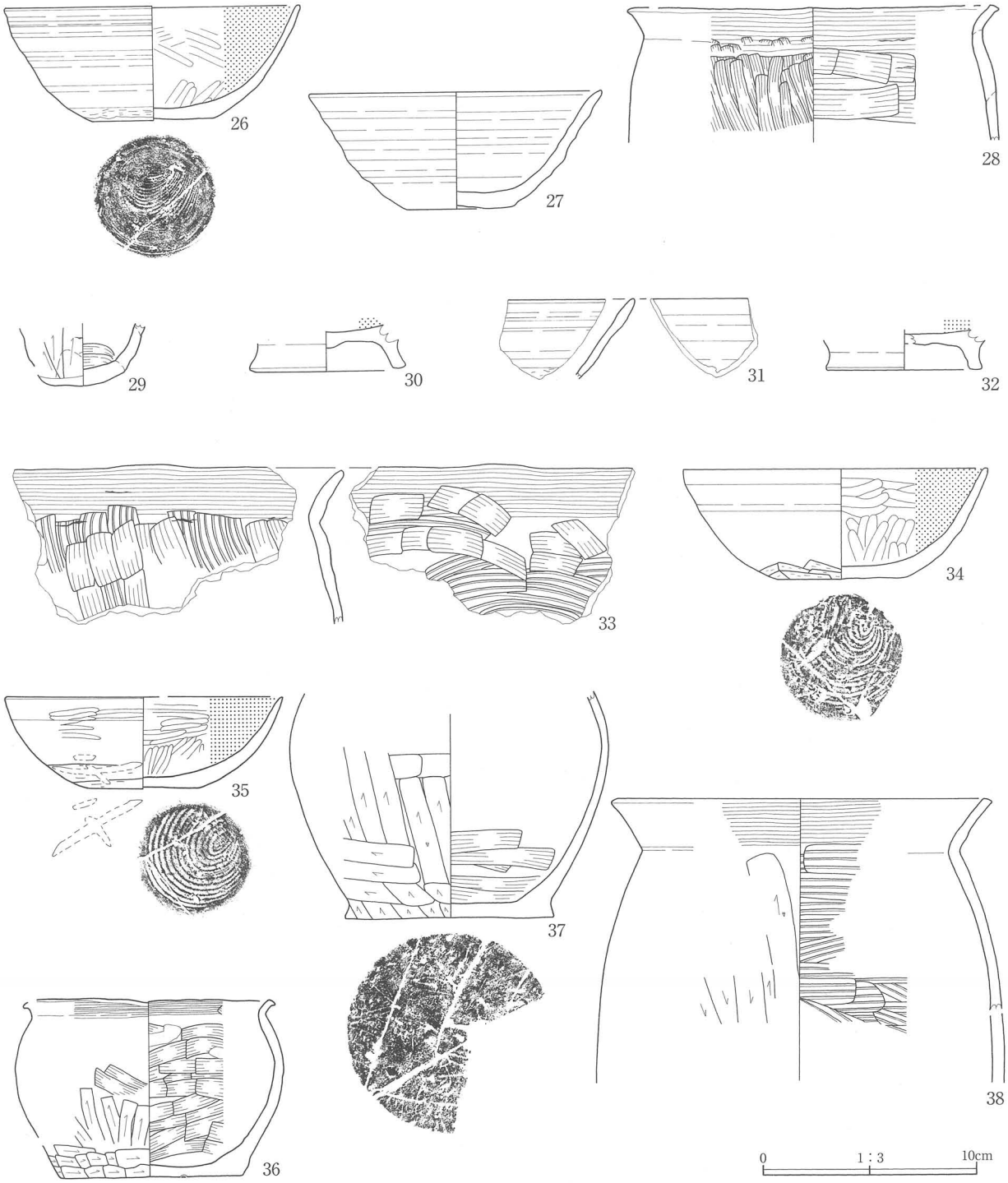
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
1	RA018住居跡	坏・口縁	小片	ロクロナデ（摩耗）	ヘラミガキ？	内面黒色処理	
2	RA018住居跡	坏・口縁	小片	ロクロナデ	ヘラミガキ？		
3	RA018住居跡	坏・底	一周	ロクロナデ？（摩耗）／底回転糸切	ヘラミガキ	外面黒斑？	
4	RA018住居跡	甕・底	1/5周	ヘラケズリ／底木葉痕	ヘラナデ		
5	RA045住居跡No.1（1/2占）,2、①、ベルト	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底回転糸切	ロクロナデ　（ススト？）	刻文・注記不備で他割合不明	
6	RA045住居跡No.4、①、ベルト（6/10占）	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底回転糸切	ロクロナデ	外面ススト・4が3/10、①1/10	
7	RA045住居跡No.7	坏	2/3周以下	ロクロナデ→底回転ヘラケズリ	ミガキ	内面黒色処理・外底黒斑	
8	RA045住居跡No.9	・台	台一周	ロクロナデ？（摩耗）	ロクロナデ？（摩耗）	胎土金雲母目立つ	
9	RA045住居跡No.14	坏	一部欠損	ロクロナデ／底回転糸切	ロクロナデ？（摩耗）	胎土白砂目立つ・外ススト	
10	RA045住居跡No.16	甕	1/5周	口縁ヨコナデ→ヘラナデ	ハケメ→ヘラナデ？（摩耗）	輪積痕顕著	
11	RA045住居跡①	坏・口縁	小片	ロクロナデ（摩耗）	ヘラミガキ（内面黒色処理）	刻書・胎土金雲母目立つ	
12	RA046住居跡③	甕・口縁	小片	ヨコナデ？（摩耗）	ヘラナデ	胎土砂多い	
13	RA047住居跡No.1	坏	2/3周以下	ロクロナデ／底回転糸切	ヘラミガキ（残りよく光沢）	内面黒色・外整形雑・厚い	
14	RA047住居跡No.2	・台（粉々）	一周	ロクロナデ	摩耗	内外面黒色処理	

第45図　土師器（1）



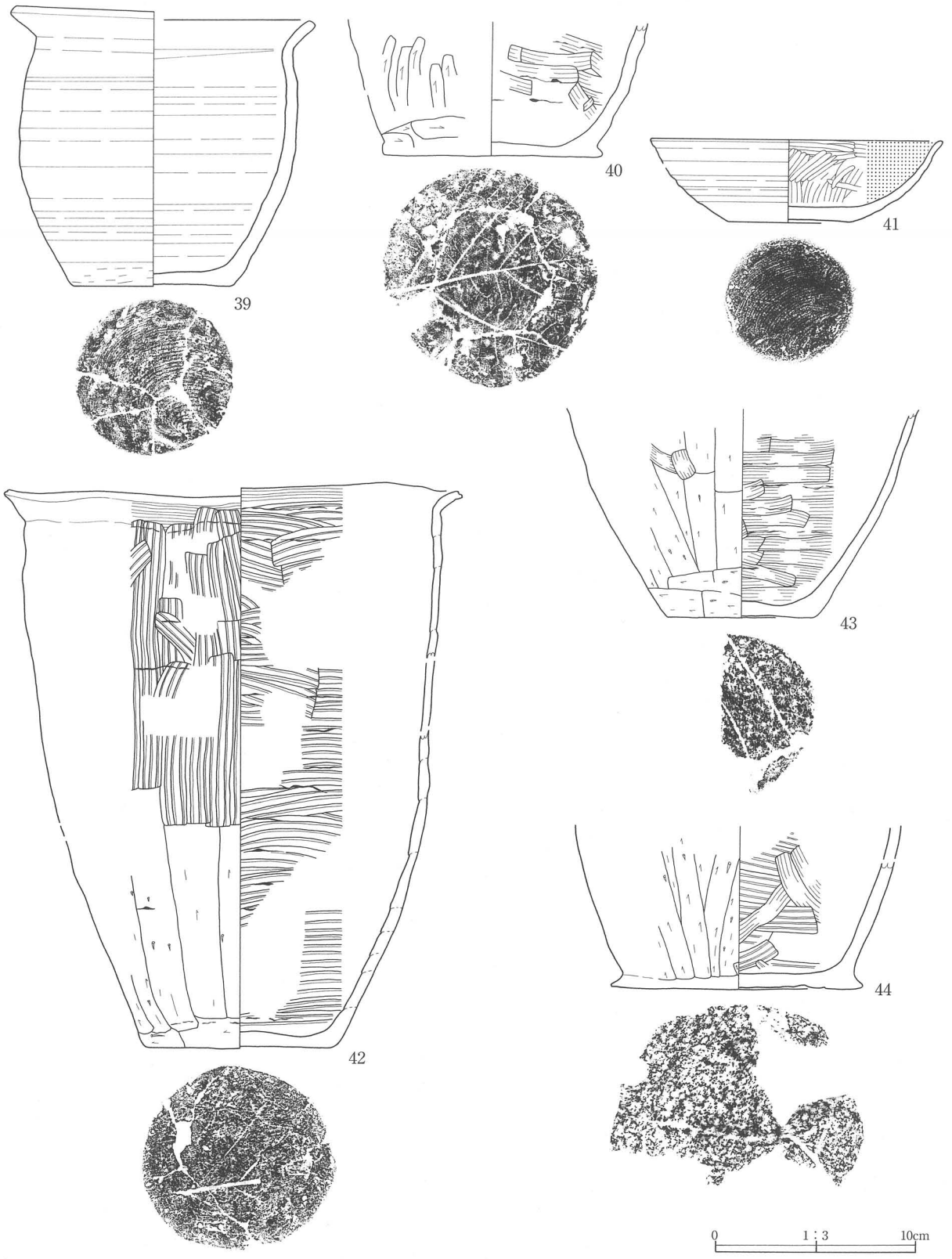
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
15	RA047住居跡No.6、②（最多）③	坏	2/3周以下	ロクロナデ→底までヘラミガキ	ヘラミガキ	内外黒色・注記不備で割合不明	
16	RA047住居跡No.7,8,9、④、ベルト	坏	一部欠損	ロクロナデ→底回転ヘラケズリ	ヘラミガキ（摩耗）	内面黒色処理・外底黒斑	p.72
17	RA047住居跡No.11	坏	一部欠損	ロクロナデ／底ヘラケズリ	ヘラミガキ（やや摩耗）	内面黒色処理	
18	RA047住居跡No.15	甕	底のみ一周	上ヘラナデ？、下ケズリ？→口縁ヨコナデ	ヘラナデ	外底木葉痕、黒斑・外赤く変色	
19	RA047住居跡No.16（3/4占める）、②	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底回転糸切	ヘラミガキ	内面黒色処理・外黒斑	
20	RA047住居跡No.19（3/5占める）、②	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底回転糸切？	ロクロナデ	外面摩耗ひどい	
21	RA047住居跡No.21	甕	ほぼ一周	口縁ヨコナデ？・上ヘラナデ？、下ケズリ？	ヘラナデ　（・内底上ススト？）	外底木葉痕、黒斑・外赤変色	
22	RA047住居跡No.22	坏	一部欠損	ロクロナデ→底上回転ヘラケズリ	ヘラミガキ？	外底回転糸切痕	
23	RA047住居跡No.23	坏	一部欠損	ロクロナデ／底回転糸切	ヘラミガキ	浅い	
24	RA047住居跡No.27（4/5占める）、②	坏	一部欠損	ロクロナデ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	内外面黒色処理・やや厚い	
25	RA047住居跡No.29（5/6占める）、カマド断割	甕・胴～底	1/3周以下	ヘラケズリ／底木葉痕	ヘラナデ	外摩耗剥落	

第46図　土師器（2）



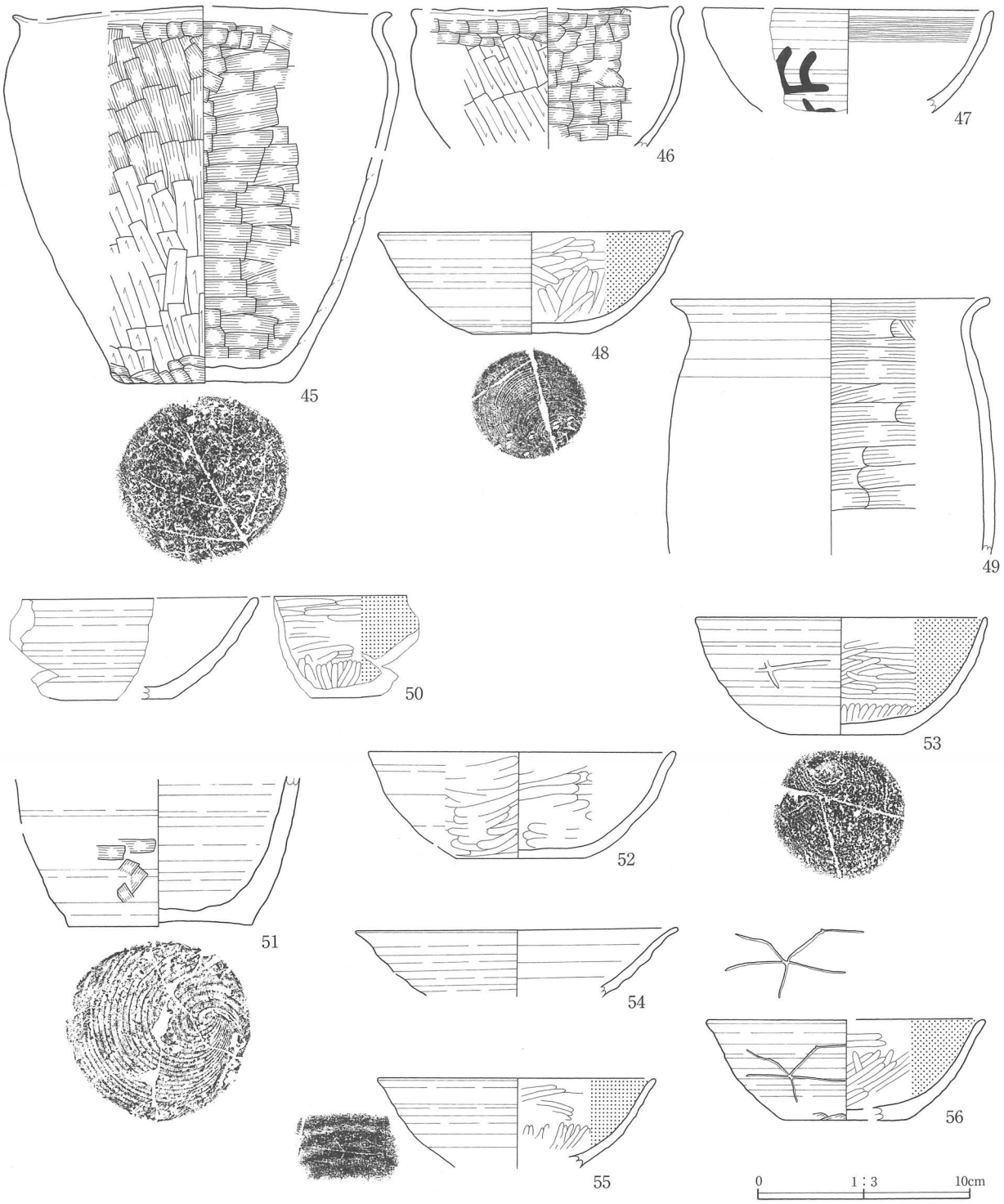
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
26	RA047住居跡No.30	坏	一部欠損	ロクロナデ→底回転ヘラケズリ	ヘラミガキ	内面黒色処理・外黒斑・摩耗	
27	RA047住居跡カマド断ち割り	坏	1/3周	ロクロナデ→底ヘラケズリ？	ロクロナデ？（摩耗）	外底粘土まくれ痕・外も摩耗	
28	RA047住居跡1号カマド袖内、2号カマド煙道	甕・口縁	1/3周	ヘラナデ→口縁ヨコナデ	ヘラナデ？	外面スス付着	
29	RA047住居跡①、ベルト（4/5占める）	小型	底のみ一周	ヘラケズリ／底指ナデ？	指ナデ？	胎土砂混入・整形雑	
30	RA047住居跡②	・台	一周	ロクロナデ？	ヘラミガキ？	胎土金雲母・外底黒斑	
31	RA048住居跡④、ベルト（5/6占める）	坏・口縁	小片	ロクロナデ	ロクロナデ	摩耗	
32	RA048住居跡④	・台	1/3周	ロクロナデ	ヘラミガキ	内面黒色処理・胎土金雲母	
33	RA048住居跡カクラン	甕・口～胴	1/3周以下	ハケメ→口縁ヨコナデ、胴ヘラナデ？	（外面に同じ？）	赤く変色・ハケメ薄い	
34	RA049住居跡No.1,7,8、ベルト他	坏	一部欠損	ロクロナデ、回転糸切→底上ヘラケズリ	ヘラミガキ（黒色処理）	外底黒斑、回転ヘラケズリでない	p.72
35	RA049住居跡No.2,11、①、ベルト、ベルト他	坏	一部欠損	ロクロナデ、回転糸切→回転ヘラケズリ？	ヘラミガキ（黒色処理）	外光沢（ミガキ？）・底厚い	p.72
36	RA049住居跡No.3（16/17占める）、②	変形甕	底のみ一周	胴下ヘラケズリ、口ヨコナデ→ヘラナデ？	ヘラナデ	内帯状変色、スス？・外底滑らか	
37	RA049住居跡No.5	甕・胴～底	2/3周以下	ヘラケズリ／底木葉痕	ヘラナデ	赤く変色	
38	RA049住居跡No.5、③、ベルト他（割合不明）	甕・口～胴	1/3周以下	ヘラケズリ→口縁ヨコナデ	ハケメ→口縁ヨコナデ	外帯状変色、下部スス付着	

第47図　土師器（3）



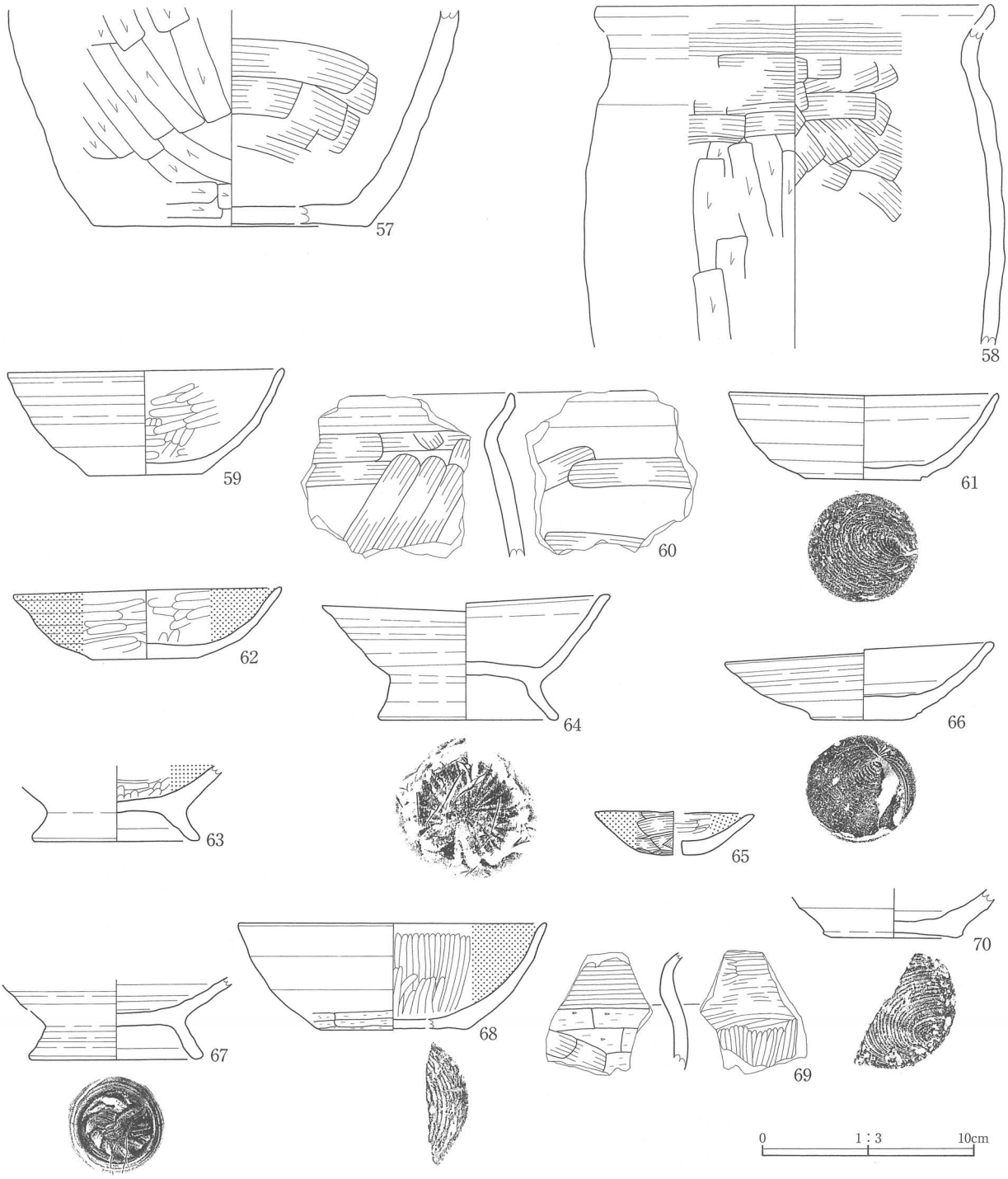
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
39	RA049住居跡No.6,12、①、ベルト他	甕	下半一周	ロクロナデ／底回転糸切	ロクロナデ	赤く変色、外摩耗	p.72
40	RA049住居跡No.9	甕・胴～底	底のみ一周	ヘラナデ？／底木葉痕	ヘラナデ？（輪積痕）	内外スス、外縦帯状に赤い	
41	RA049住居跡No.10（3/5）、①（1/5）、ベルト他	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底静止糸切？	ヘラミガキ（内面黒色処理）	外底黒斑	
42	RA049住居跡No.13,17,18,19、①、ベルト他	甕	一部欠損	ヘラナデ？→口縁ヨコナデ	ハケメ？→口縁ヨコナデ	底木葉痕・輪積痕多数	p.72
43	RA049住居跡No.14、①、ベルト他、ＲＢ019柱９	甕・胴～底	1/3周	ヘラナデ？／底木葉痕	ヘラナデ（輪積痕多数）	注記剥れ割合不明・外赤変色	
44	RA049住居跡No.18（5/8）、①（2/8）、ベルト他	甕・胴～底	1/2周	ヘラケズリ、ハケメ？／底木葉痕	ハケメ→ナデ（底）	砂底？・外吹きこぼれ	

第48図　土師器（４）



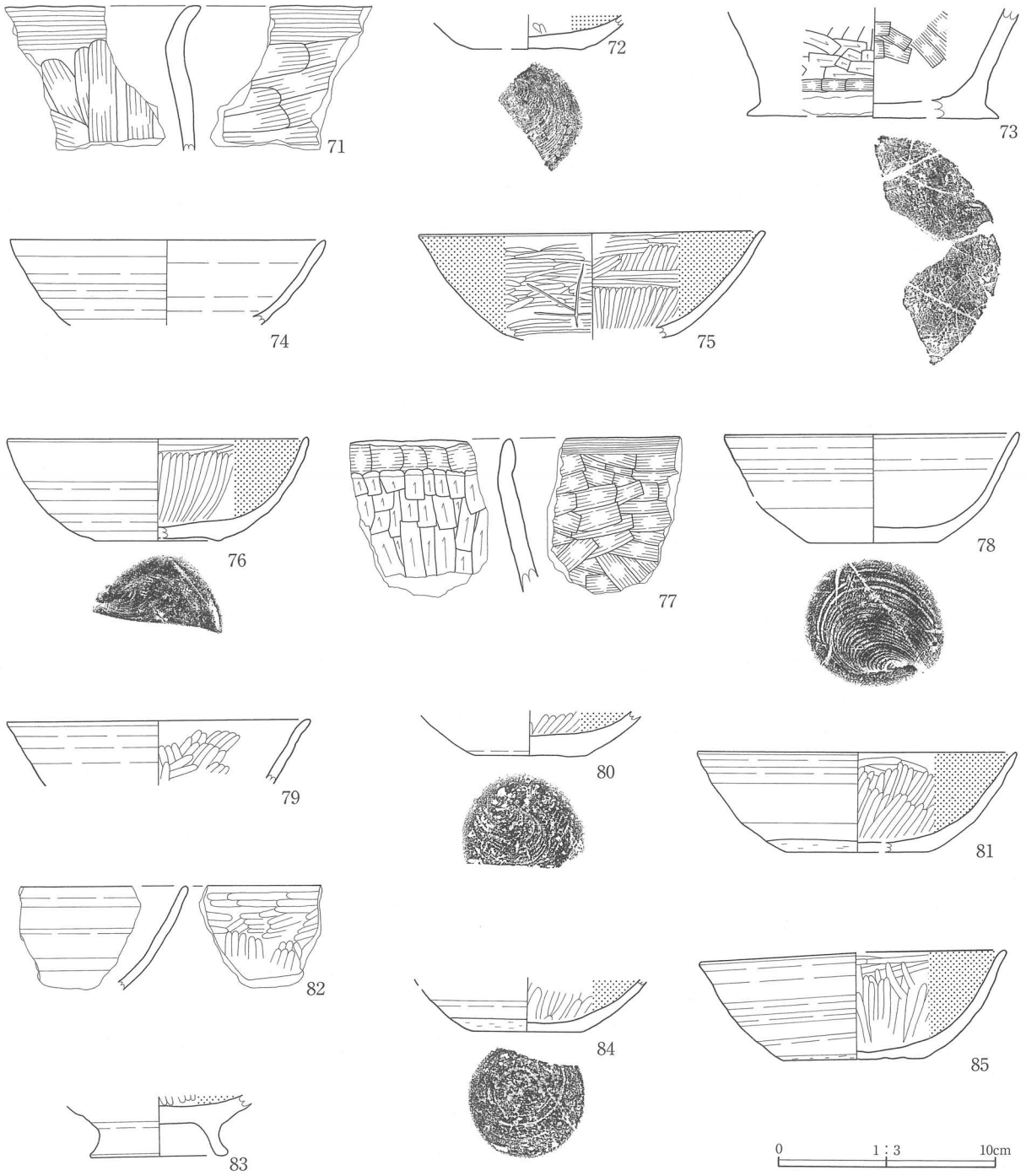
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
45	RA049住居跡No.19（16/19）、①、ベルト他	甕	胴下半一周	ヘラケズリ→口ヨコナデ／底木葉痕	ハケメ→口縁ヨコナデ	内外スス・ハケメ浅い	
46	RA049住居跡No.22	甕・口～胴	1/4周	上ヘラナデ？、下ケズリ？→口縁ヨコナデ	ヘラナデ？→口縁ヨコナデ	内面調整不明瞭	
47	RA049住居跡①,③（3/5占める）	坏・口～胴	1/3周以下	ロクロナデ	ヘラミガキ（黒色処理？）	墨書	
48	RA049住居跡②	坏	2/3周以下	ロクロナデ／底回転糸切	ヘラミガキ（黒色処理）	外底黒斑、小豆粒大不明圧痕	
49	RA049住居跡②	甕・口～胴	1/4周以下	頸ロクロナデ／胴不明	口ロクロナデ？→ヘラナデ	外赤く摩耗・内口帯状スス	
50	RA049住居跡④	坏	1/6周	ロクロナデ／底摩耗	ヘラミガキ（黒色処理）	二次焼成？	
51	RA049住居跡No.4	甕・胴～底	底一周	ロクロナデ？／底回転糸切	ロクロナデ	赤く焼けている	
52	RA050住居跡No.4、（カマド）No.27,28	坏	底のみ一周	全面ヘラミガキ	ヘラミガキ	胎土金雲母多・27と28が2/7	
53	RA050住居跡No.4,7,18、①、③	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底回転糸切→ヘラケズリ	ヘラミガキ（黒色処理）	胎土金雲母多	p.72
54	RA050住居跡No.5、カマド東穴（2/3占める）	坏・口～胴	2/3周以下	ロクロナデ	ロクロナデ	肌色・ゆがみ	
55	RA050住居跡No.14	坏・口～胴	1/3周以下	ロクロナデ	ヘラミガキ（黒色処理）	弱い刻書・胎土金雲母多	
56	RA050住居跡No.16（3/5占める）、④	坏	1/3周以下	ロクロナデ／底ヘラケズリ	ヘラミガキ（黒色処理）	刻書・胎土金雲母少し	

第49図　土師器（5）



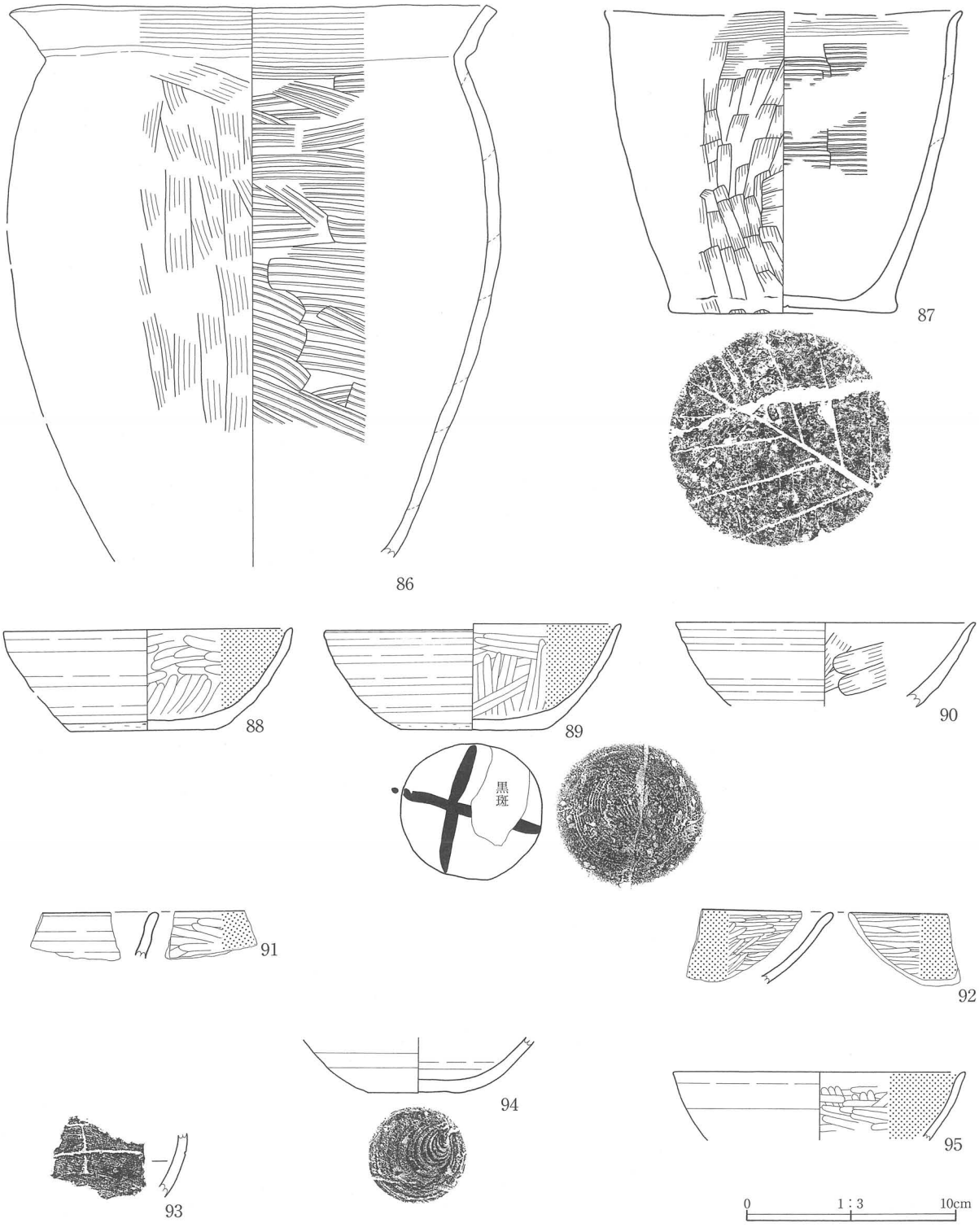
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
57	RA050住居跡No.17（2/3占）、カマド東穴	甕・胴～底	1/4周以下	ヘラケズリ（底も）	ヘラナデ	胎土砂多	
58	RA050住居跡No.19	甕・口～胴	1/4周以下	頸ロクロナデ／胴ヘラナデ（下ケズリ？）	ヘラナデ？（調整見えない）	内外スス付着	
59	RA050住居跡No.20（6/9占）、③、ベルト	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底回転糸切→ヘラケズリ	ヘラミガキ（黒色処理）	金雲母・③2/9占める	
60	RA050住居跡カマド東穴	甕・口～胴	1/5周	頸ロクロナデ？／胴ヘラナデ？	ヘラナデ？	調整見えない	
61	RA050住居跡カマド東穴（5/6占める）、④	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底回転糸切	ロクロナデ？		
62	RA050住居跡①	坏	底のみ一周	ロクロナデ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	内外面黒色処理	
63	RA050住居跡①	台付坏・台	底上一周	ロクロナデ？	ヘラミガキ（黒色処理）	胎土精選	
64	RA050住居跡①（29/30占める）、②	台付坏	一部欠損	ロクロナデ	ロクロナデ？	金雲母・内外摩耗ひどい	
65	RA050住居跡④	？（天地逆？）	1/3周	ヘラミガキ（ナデ？・黒色処理剥落）	ヘラミガキ	内外黒色処理・中央貫通孔	
66	RA051住居跡No.1	坏（浅い）	一部欠損	ロクロナデ／底回転糸切	ロクロナデ？（調整見えない）	内外摩耗・橙色	
67	RA051住居跡No.2	・台	一周	ロクロナデ？（滑らか）	ロクロナデ	胎土精選	
68	RB019掘立柱建物跡柱穴3	坏	1/5周	ロクロ→ヘラミガキ／底回転糸切	ヘラミガキ（黒色処理）		
69	RB019掘立柱建物跡柱穴3	坏・口～胴	小片	ヘラナデ?（摩耗）	ヘラミガキ（黒色処理）		
70	RB019掘立柱建物跡柱穴5	坏・底	1/3周以下	ロクロナデ？／底回転糸切	ロクロナデ（→ヘラミガキ？）	調整見えない・内面光沢	

第50図　土師器（6）



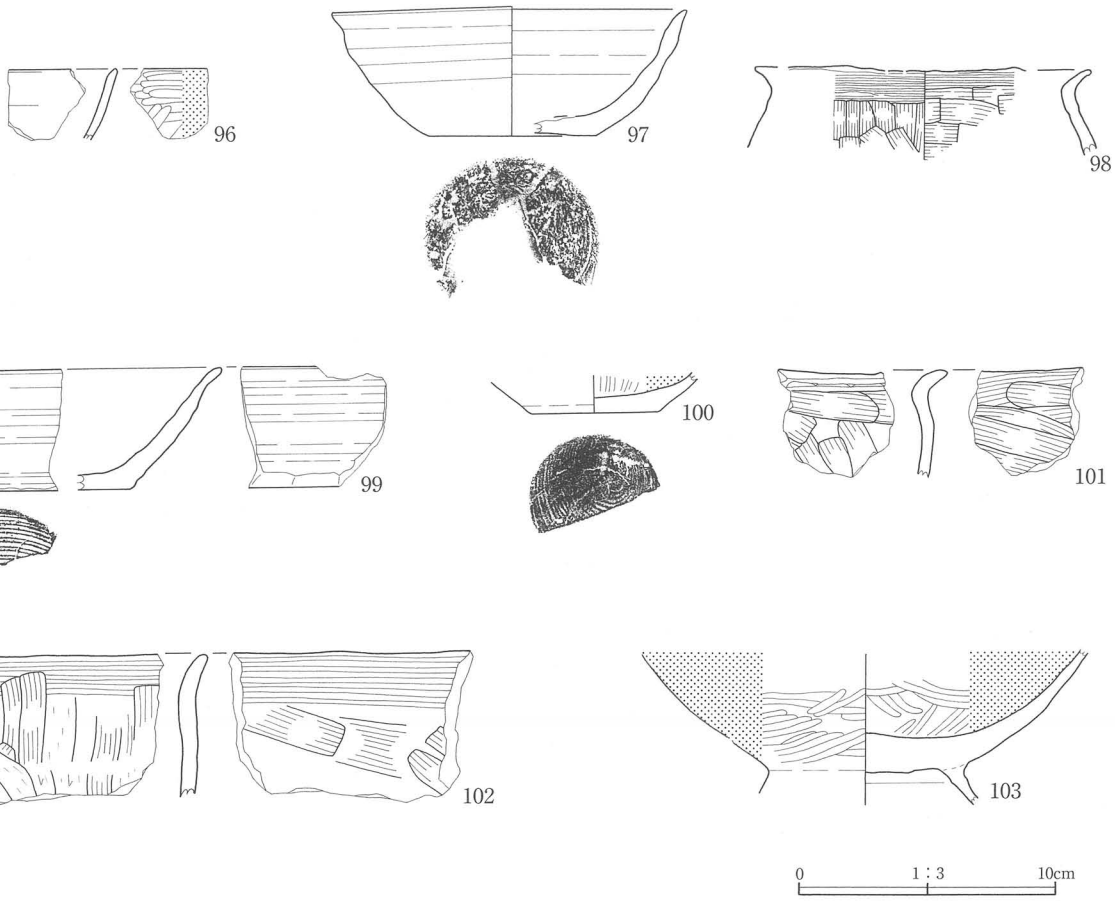
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
71	RD171土坑No.1	甕・口～胴	1/6周以下	胴ヘラナデ→口ヨコナデ？	胴ヘラナデ→口ヨコナデ	調整見えにくい	
72	RD171土坑No.6	坏・底	1/4周以下	ロクロナデ？／底回転糸切	ヘラミガキ（黒色処理）	胎土金雲母少	
73	RD171土坑②,③（4/15）,④、ベルト（6/15）	甕・底	1/3周	ヘラナデ？／底木葉痕	ヘラナデ？（摩耗）	②3/15、④2/15の出土割合	
74	RD171土坑④	坏・口～胴	1/5周以下	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土精選・金雲母・摩耗	
75	RD171土坑②（3/4占める）、ベルト	坏	1/4周以下	全面ヘラミガキ	ヘラミガキ	内外面黒色処理	
76	RD173土坑No.4	坏	1/3周	ロクロナデ／底回転糸切	ヘラミガキ（黒色処理）	金雲母・外摩耗、底粘土まくれ	
77	RD173土坑・2～4層	甕・口縁	小片	ヘラナデ？	ヘラナデ		
78	RD173土坑焼土山中	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底回転糸切	ロクロナデ→ヘラミガキ？	内面黒色処理剥落？	
79	RD173土坑焼土山中	坏・口縁	1/4周未満	ロクロナデ	ロクロナデ（滑らか）	胎土金雲母多	
80	RD173土坑	坏・底	2/3周以下	摩耗／底回転糸切	ヘラミガキ（黒色処理）	底厚い・内外摩耗	
81	RD174土坑	坏	1/3周以下	ロクロナデ／底回転ヘラケズリ	ヘラミガキ（黒色処理）	内外やや摩耗	
82	RD174土坑	坏・口～胴	1/6周以下	ロクロナデ	ヘラミガキ	胎土金雲母	
83	RD174土坑にからむカクラン	台付坏・台	底のみ一周	ロクロナデ？（摩耗ひどい）	黒色処理？（摩耗ひどい）		
84	RD175土坑No.1（2/3占める）、RD175土坑	坏・胴～底	2/3周以下	ロクロナデ？／底回転ヘラケズリ	ヘラミガキ（黒色処理）	内外摩耗	
85	RD176土坑No.1、RD176土坑、RD178土坑No.2	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底回転ヘラケズリ	ヘラミガキ（黒色処理剥落？）	No.1（5/10）、2（2/10）	

第51図　土師器（7）

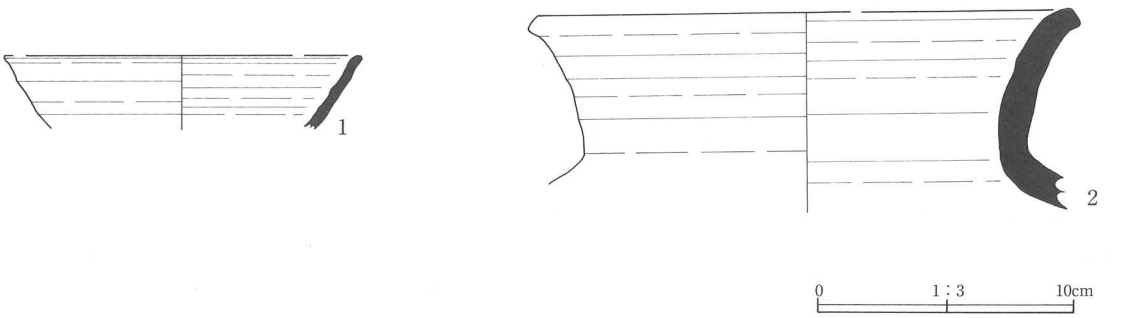


No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
86	RD177土坑A-1·2·5ほか、RA047住居跡②	甕・口～胴	2/3周以下	ヘラナデ→口縁ヨコナデ	ハケメ→口縁ヨコナデ	胴、外下部、内中央ススp.72	
87	RD177土坑A-1·2·6·7·8·9·22ほか	変形甕	底のみ一周	ハケメ→口縁ヨコナデ／底木葉痕	ハケメ→口ヨコナデ、底指？ナデ	内面帯状変色、ススp.72	
88	RD177土坑A-14の下・15、B-1·2	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底回転ヘラケズリ	ヘラミガキ（黒色処理）	外底黒斑p.72	
89	RD178土坑No.1（9/10占める）、RD178土坑	坏	一部欠損	ロクロナデ／底回転ヘラケズリ	ヘラミガキ（黒色処理）	胎土砂多・外底黒斑	
90	RD178土坑No.2	坏・胴～底	1/3周	ロクロナデ？（摩耗ひどい）	ロクロナデ→ヘラナデ？	胎土精選・内外摩耗	
91	RD178土坑	坏・口縁	小片	ロクロナデ	ヘラミガキ（黒色処理）		
92	RD183土坑	坏・口縁	小片	ヘラミガキ（黒色処理）	ヘラミガキ（黒色処理）		
93	RD183土坑	坏・胴	小片	ロクロナデ？（摩耗）	ヘラミガキ？（摩耗・黒色処理）	刻書・胎土金雲母	
94	RD183土坑	坏・胴～底	底のみ一周	ヘラナデ？／底回転糸切	ロクロナデ		
95	RD189土坑	坏・口～胴	1/3周以下	ロクロナデ？（やや摩耗）	ヘラミガキ（黒色処理）	96と同一個体？	

第52図　土師器（8）

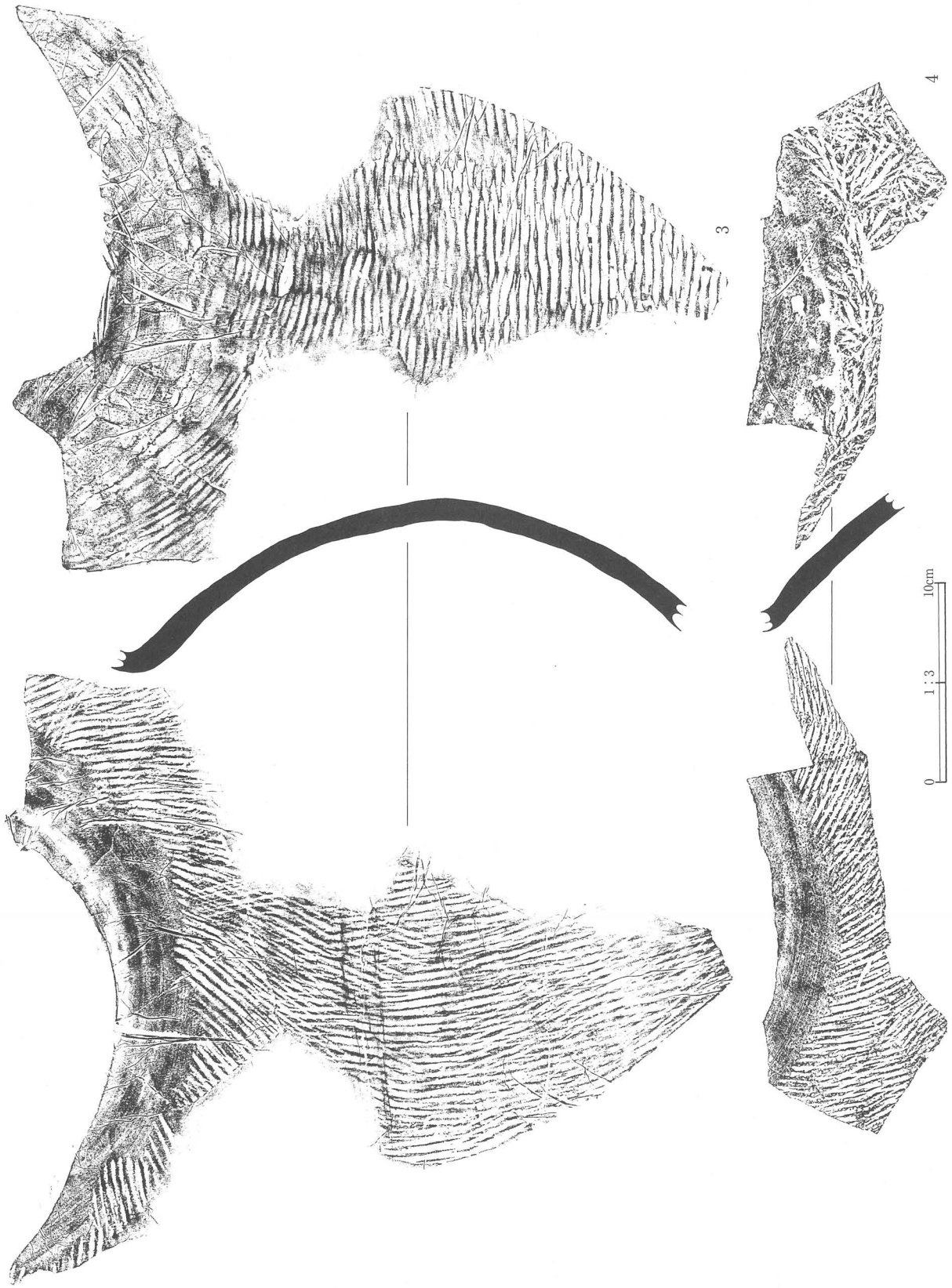


No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
96	RD189土坑	坏・口縁	小片	ロクロナデ？（やや摩耗）	ヘラミガキ（黒色処理）	95と同一個体？	
97	RD190土坑	坏	2/3周以下	ロクロナデ？／底ヘラケズリ	ロクロナデ？（摩耗）	橙色・内外摩耗	
98	RD190土坑	甕・口縁	1/4周以下	ヘラナデ→口縁ヨコナデ	（ヘラナデ？→）口縁ヨコナデ		
99	RG039溝跡BとCの間覆土	坏	1/5周以下	ロクロナデ？／底回転糸切	ロクロナデ？（摩耗）	内外摩耗	
100	RG039溝跡BとCの間覆土	坏・胴～底	2/3周以下	ロクロナデ？／底回転糸切	ヘラミガキ？（摩耗・黒色処理）	内外摩耗ひどい	
101	RG039溝跡EとFの間覆土	甕・口縁	小片	ヘラナデ→口縁ヨコナデ	ヘラナデ→口縁ヨコナデ		
102	RG039溝跡Fより北覆土	甕・口～胴	1/4周以下	頸ヘラナデ？、胴ヘラケズリ？	ヘラナデ→口縁ヨコナデ		
103	-II16p付近	台付坏・底	底のみ一周	ヘラミガキ（黒色処理）	ヘラミガキ（黒色処理）	胎土精選、金雲母多	



No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
1	RA008住居跡カマド煙道	坏・口縁	1/4周	ロクロナデ	ロクロナデ	雑物混入	
2	RA008住居跡カマド煙道	甕・口縁	1/4周	ロクロナデ	ロクロナデ		

第53図　土師器（９）、須恵器（１）

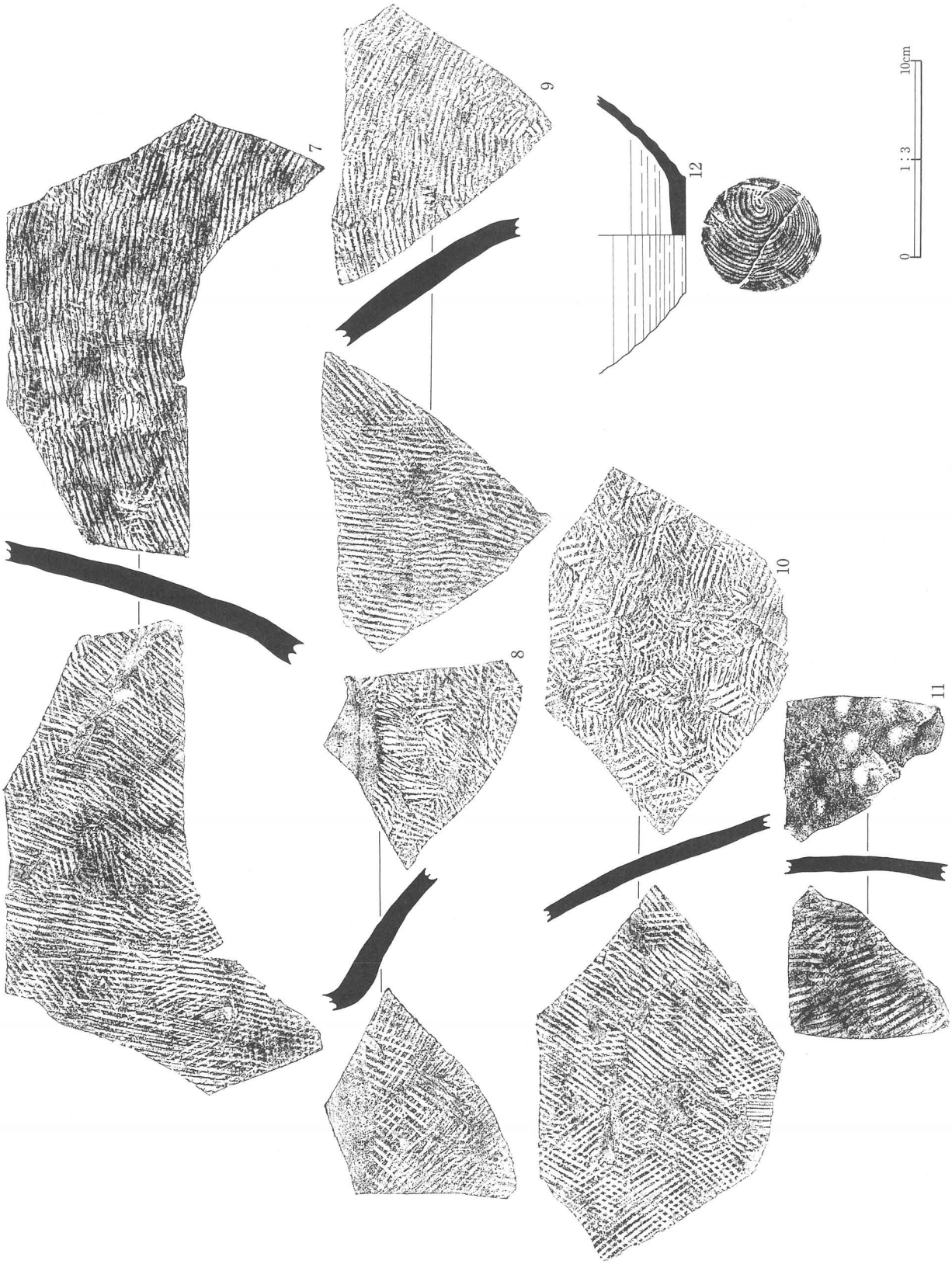


No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
3	RA008住居跡カマド煙道	甕・肩	1/3周以下	頸ロクロナデ→胴平行タタキ目	胴平行タタキ目状当て具痕	当て具痕→頸指ナデ？	
4	RA018住居跡カマド煙道、RA018住居跡（1/10）	甕・肩	1/4周以下	頸ロクロナデ→胴平行タタキ目	胴平行タタキ目状当て具痕	「煙道」で取り上げ9/10	

第54図　須恵器（２）

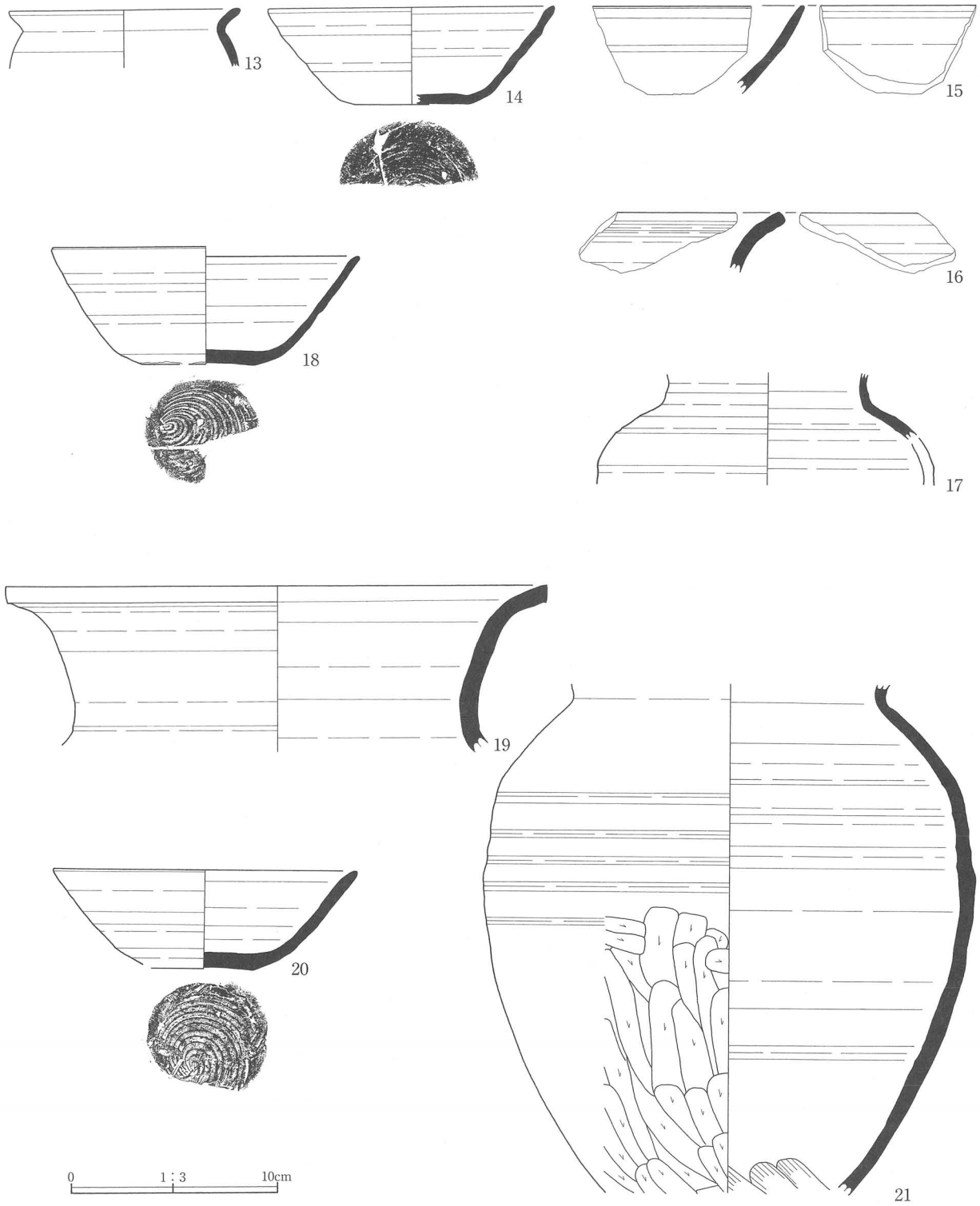
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
5	RA018住居跡カマド煙道、RG039溝跡F断面	甕・肩	1/5周以下	頸ロクロナデ→胴平行タタキ目	胴平行タタキ目状当て具痕	RG039出土1/4占める	
6	RA018住居跡カマド煙道、RG039溝跡F断面	甕・肩？	1/4周以下	頸ロクロナデ→胴平行タタキ目	胴平行タタキ目状当て具痕	RG039出土1/10占・歪み	

第55図　須恵器（3）



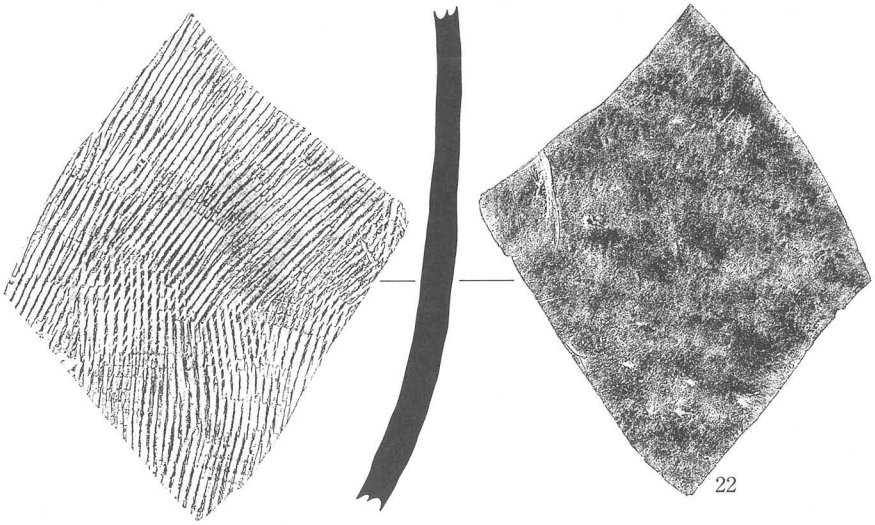
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
7	RA045住居跡No.1、6、15、南	甕・胴	1/4周以下	平行タタキ目	平行タタキ目状当て具痕	1と6が2/10、15と南が3/10	
8	RA045住居跡No.8	甕・胴	小片	頸ロクロナデ→胴平行タタキ目	（外面に同様）当て具痕		
9	RA045住居跡No.8	甕・胴	小片	平行タタキ目	平行タタキ目状当て具痕		
10	RA045住居跡No.8	甕・胴	小片	平行タタキ目	平行タタキ目状当て具痕		
11	RA045住居跡内土坑	甕・胴	小片	平行タタキ目	凹凸当て具痕	外面変色？	
12	RA047住居跡No.2、3（2/5占める）	坏・胴～底	底のみ一周	ロクロナデ／底回転糸切	ロクロナデ		

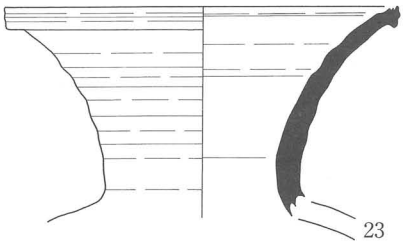
第56図　須恵器（4）

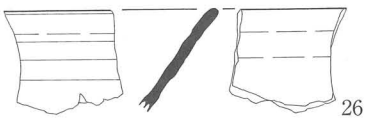


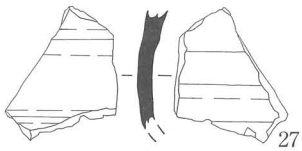
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
13	RA047住居跡No.14	甕？・口縁	1/4周以下	摩耗（ロクロナデ）	摩耗（極めて滑らか）	胎土精選→灰、肌色・土師器？	
14	RA047住居跡②	坏	1/3周以下	摩耗／底回転糸切？	摩耗（極めて滑らか）		
15	RA047住居跡②	坏・口縁	1/5周以下	ロクロナデ	ロクロナデ	内面一部朱色	
16	RA048住居跡②	甕？・口縁	小片	ロクロナデ	ロクロナデ	硬くて重い	
17	RA048住居跡④、ベルト（4/7占める）	壺・肩	1/3周以下	ロクロナデ	ロクロナデ	硬くて重い	
18	RA049住居跡No.14・16、①（5/11占め）・②	坏	2/3周以下	ロクロナデ／底回転糸切	ロクロナデ	16が4/11、14と②が1/11	
19	RA049住居跡No.15、20（2/3を占める）	甕・口縁	1/3周以下	ロクロナデ	ロクロナデ	硬くて重い	
20	RA049住居跡No.19（4/7占める）、21	坏	2/3周以下	ロクロナデ／底回転糸切	ロクロナデ	胎土に黒い粒	
21	RA050住居跡No.2・7・12・14・24、カマド袖ほか	壺・胴	1/3周以下	ロクロナデ→胴下ヘラケズリ	ロクロナデ	硬くて重い	p.72

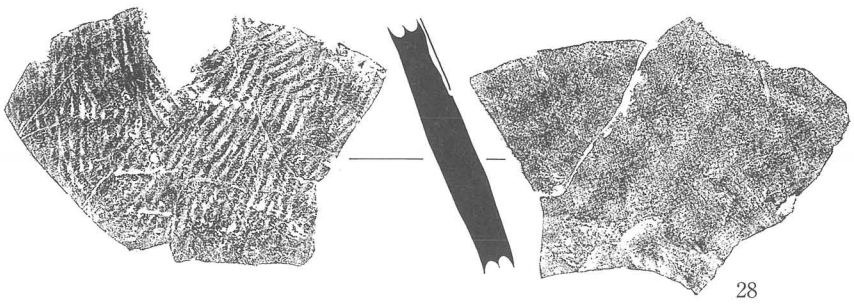
第57図　須恵器（5）







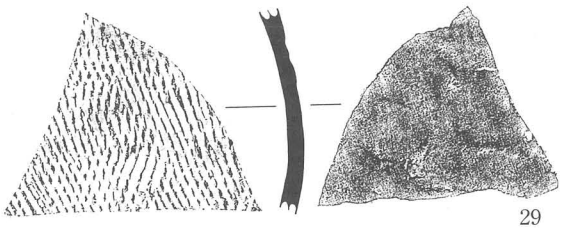


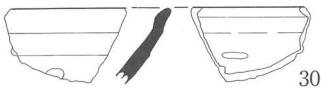


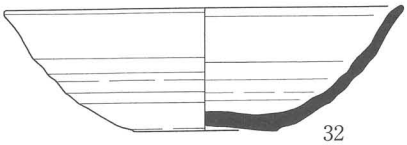
0　1：3　10cm

No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
22	RA050住居跡No.3	甕・胴	小片	平行タタキ目	当て具痕（浅く大きな窪み）	硬くて重い	
23	RA050住居跡No.8･9、③、ベルト	壺・頸	下部一周	ロクロナデ	ロクロナデ	焼成不十分で白～肌色	p.72
24	RA050住居跡カマド東穴	甕？・口縁	小片	ロクロナデ	ロクロナデ	外自然釉・硬くて重い	
25	RA050住居跡②	壺・底	小片	ロクロナデ	ロクロナデ	井戸底・硬くて重い	
26	RA050住居跡④	坏・口縁	小片	ロクロナデ	ロクロナデ	緻密・やや摩耗	
27	RA050住居跡④	壺・頸	小片	ロクロナデ	ロクロナデ	外自然釉・硬くて重い	
28	RD171土坑ベルト	甕・胴	小片	平行タタキ目	当て具痕（浅く大きな窪み）	外摩耗・硬くて重い	

第58図　須恵器（6）

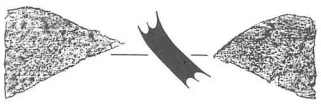

29

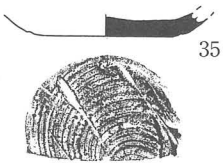

30

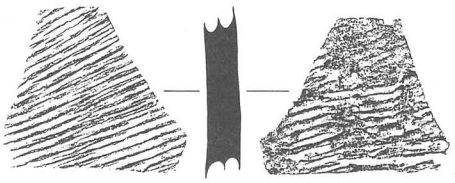

32

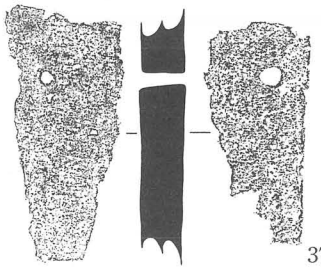
31

33


34


35

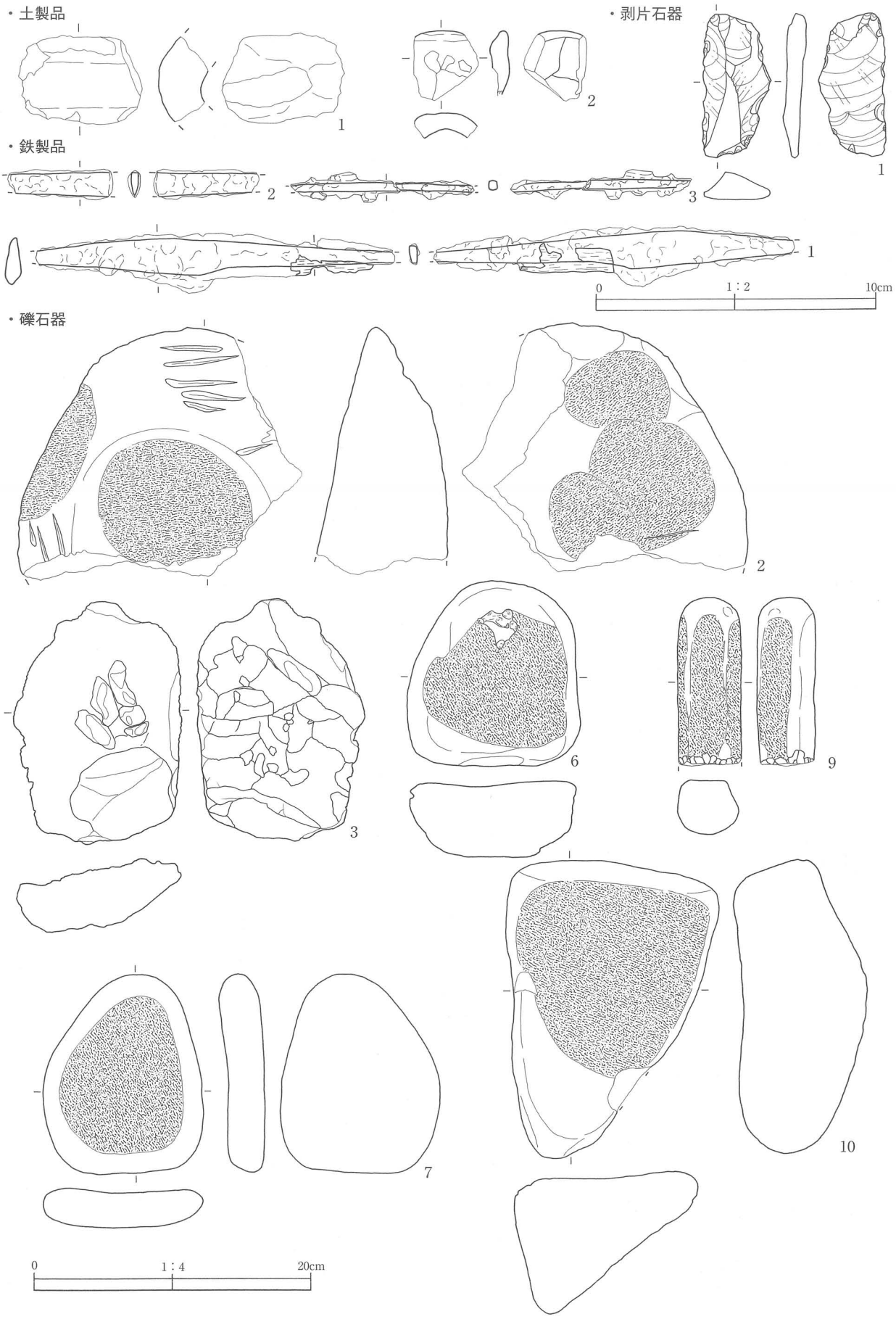

36


37

0　1：3　10cm

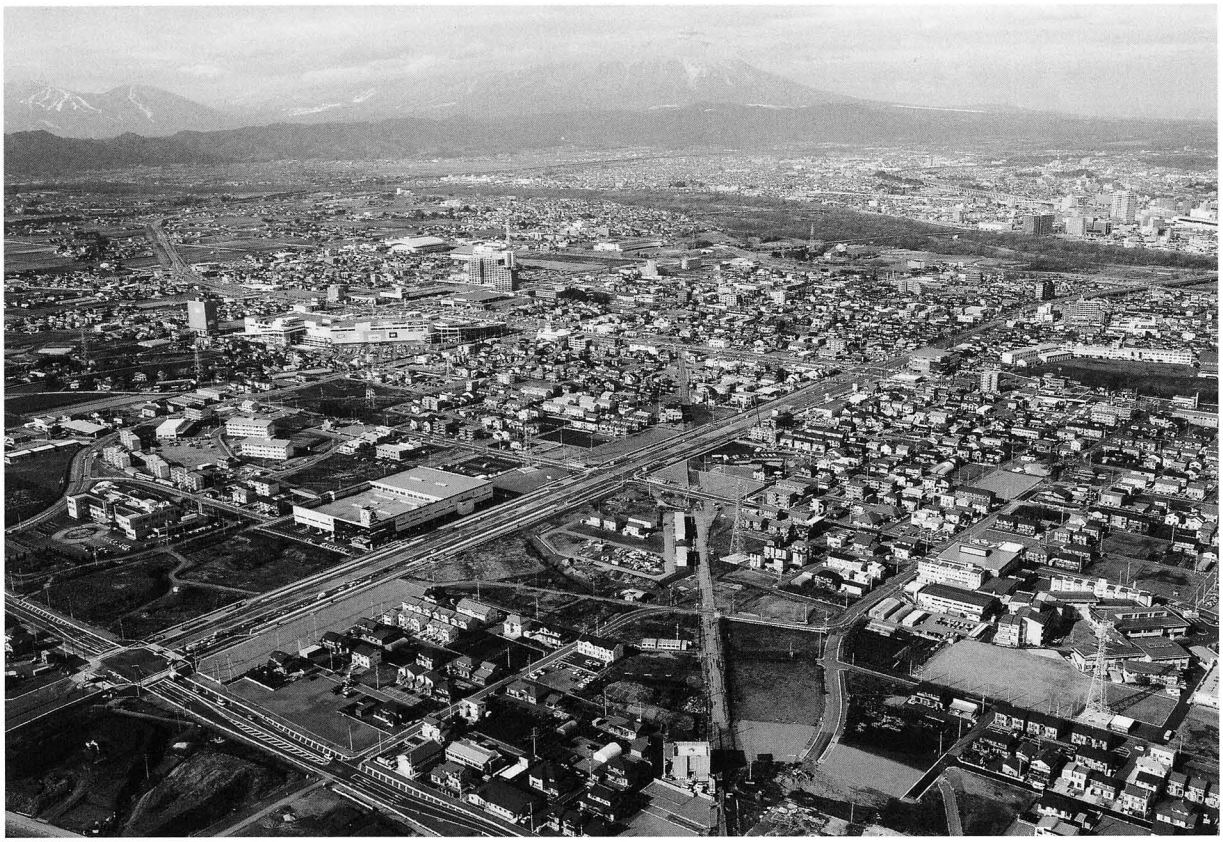
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
29	RD173土坑No.2	甕・胴	小片	平行タタキ目	当て具痕（浅く大きな窪み）	硬くて重い	
30	RD173土坑	坏・口縁	小片	ロクロナデ	ロクロナデ	硬くて重い・内面何か剥落	
31	RD175土坑	坏・口縁	小片	ロクロナデ	ロクロナデ	緻密	
32	RD178土坑土器No.1、RD178土坑	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底回転糸切	ロクロナデ（摩耗）	注記不備で、出土割合不明	
33	RD181土坑	壺・肩	1/4周以下	ロクロナデ？	ロクロナデ	外自然釉・硬くて重い	
34	RD183土坑	甕？・頸	小片	ロクロナデ	ロクロナデ？	外自然釉？・硬くて重い	
35	RG039溝跡DとEの間埋土	坏？・底	2/3周	底回転糸切	ロクロナデ	外変色・硬くて重い	
36	RG039溝跡Fより北埋土	甕・胴	小片	平行タタキ目	平行タタキ目状当て具痕		
37	1I3c付近	後代の瓦？	小片	（滑らか）	ナデ？	内から貫通孔・割口須恵器似る	p.72

第59図　須恵器（7）



第60図　土製品、石器、鉄製品

写　真　図　版



遺跡遠景（南東側上空から）

西区全景

写真図版1　遺跡遠景、西区全景

東区遠景（西側上空から）

東区全景

写真図版２　東区遠景、東区全景

東区調査前風景（南西から）

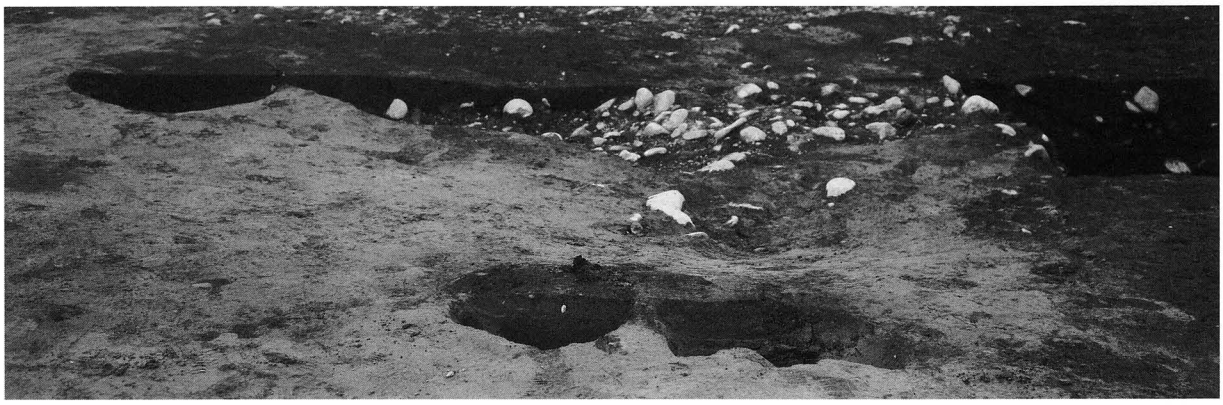
西区調査前風景（西から）

写真図版３　調査前風景（東・西区）

RA008住居跡カマド断ち割り（南から）

RA018住居跡カマド煙道断面（南から）

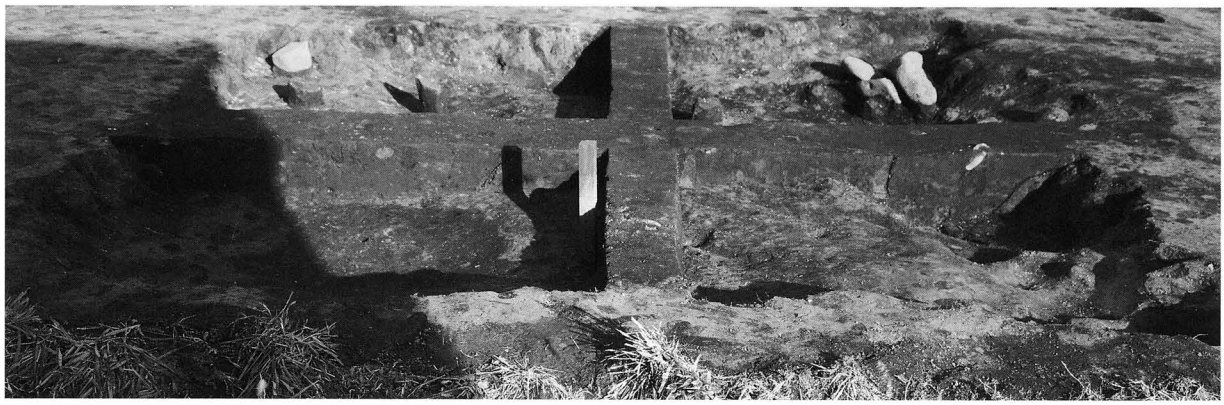
RA018住居跡全景（南東から）



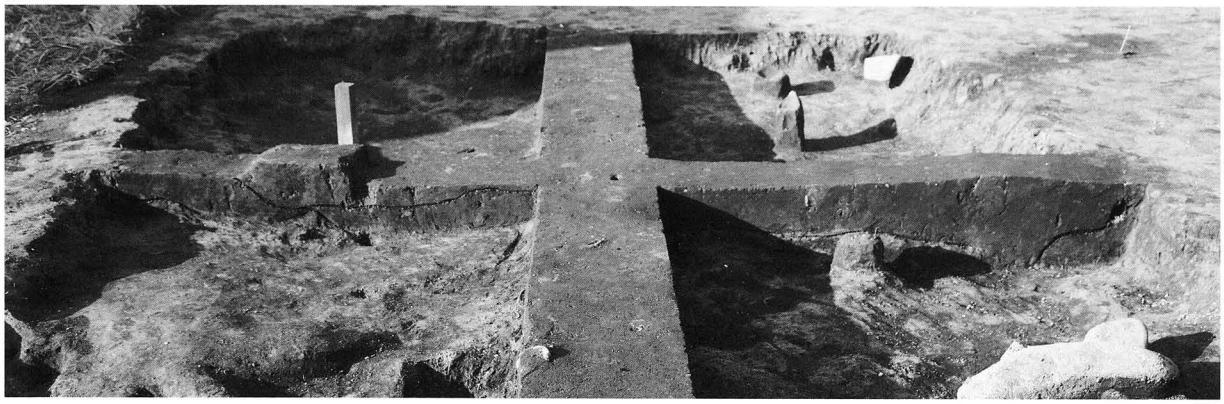
RA018住居跡覆土断面（南から）

写真図版 4　RA008・018住居跡

全景（北から）



覆土断面（南北）

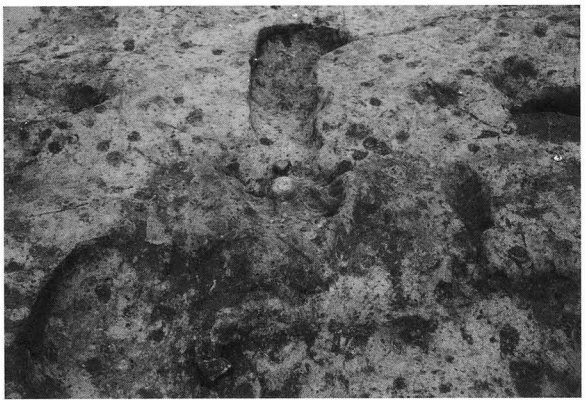


覆土断面（東西）

写真図版５　RA045住居跡（１）

1号カマド全景

1号カマド覆土断面（西から）



1号カマド焚口

1号カマド断ち割り（南北）

1号カマド断ち割り（東西）

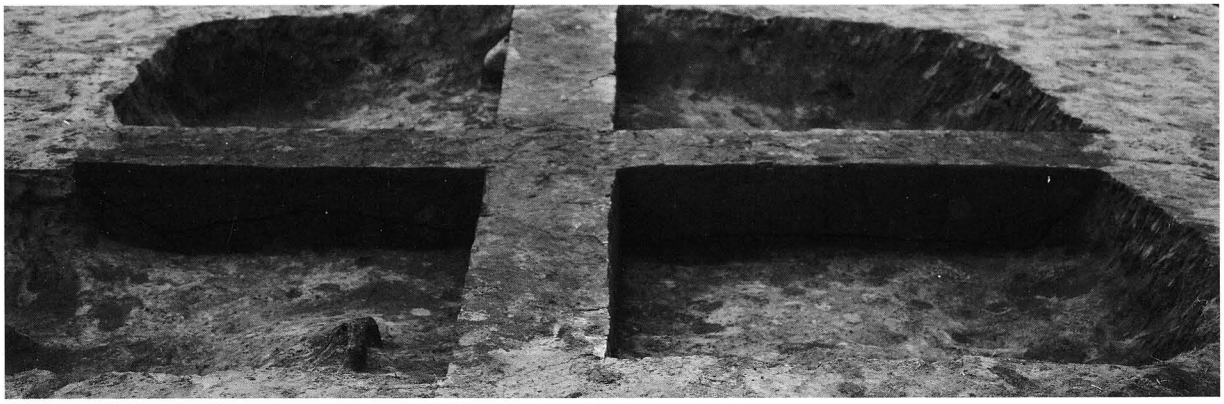
2号カマド断ち割り（南から）

住居内土坑断面（南から）

掘り方（東から）

写真図版6　RA045住居跡（2）

全景（東から）

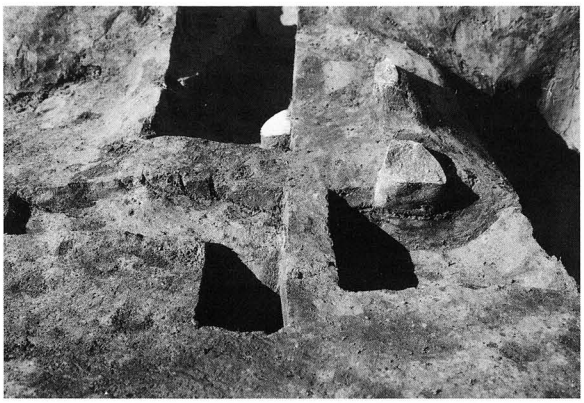


覆土断面（南北）

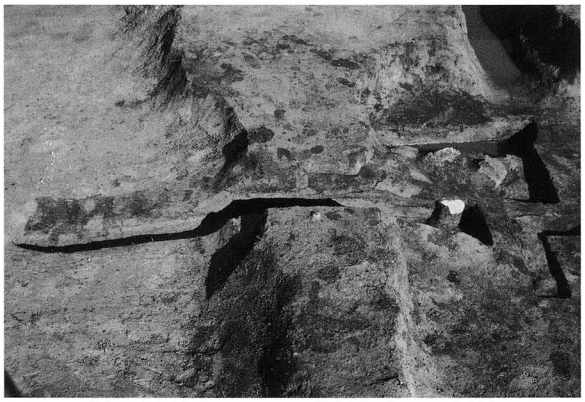
覆土断面（東西）

写真図版７　RA046住居跡（１）

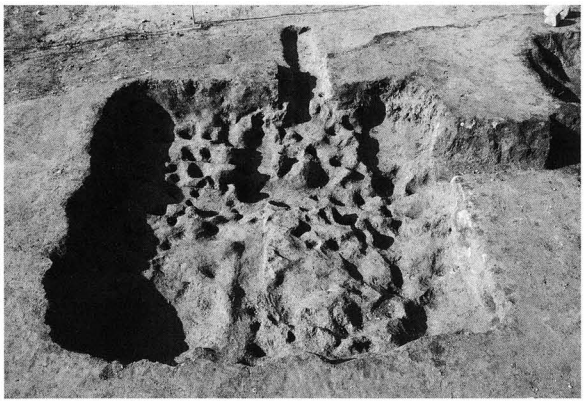
カマド全景



カマド断ち割り（南北）



カマド断ち割り（東西）



掘り方（東から）

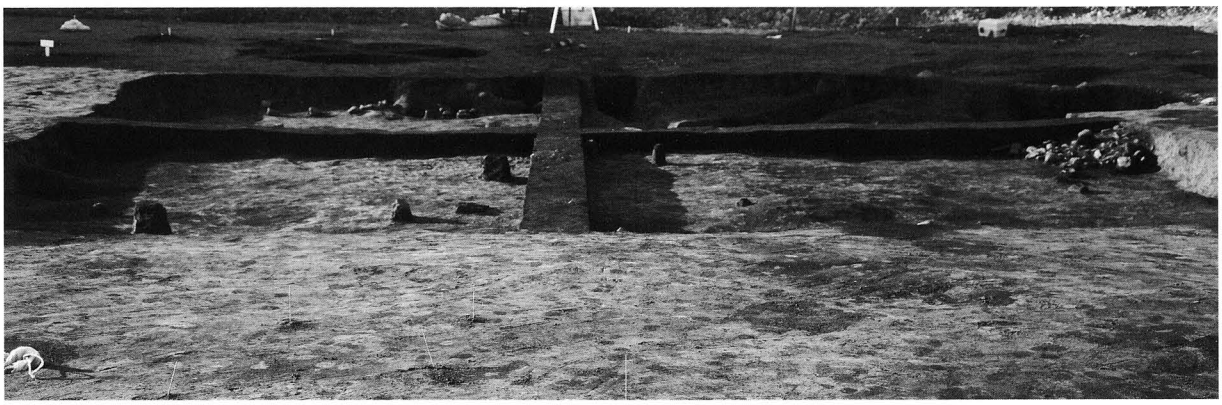
調査風景

現地説明会

写真図版 8　RA046住居跡（２）

全景（南から）

覆土断面（南北）

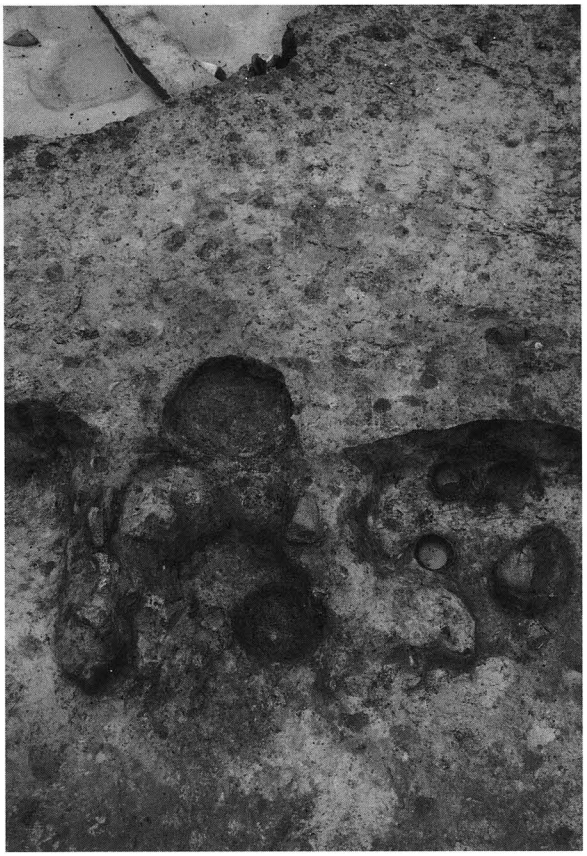


覆土断面（東西）

写真図版 9　RA047住居跡（1）

1号カマド全景（南から）

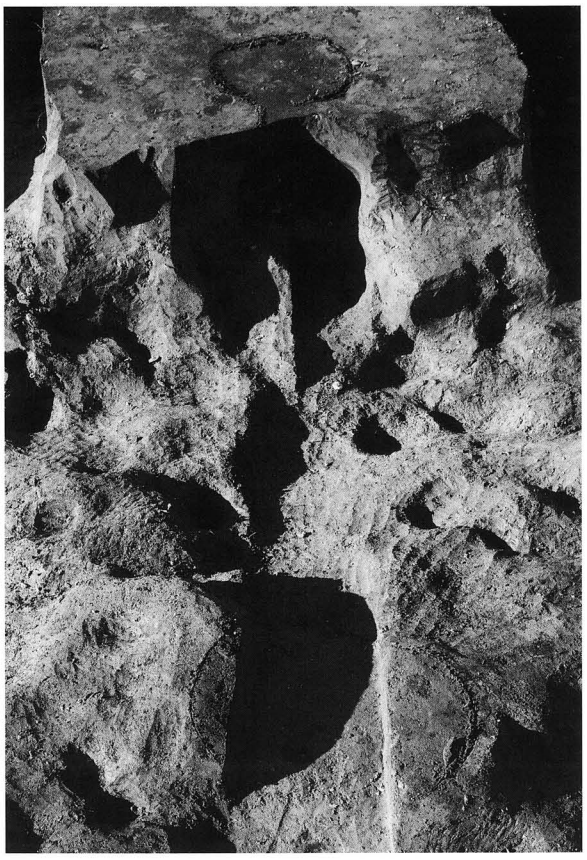
1号カマド断ち割り（南北）



1号カマド平面

1号カマド断ち割り（東西）

2号カマド断面（西から）



2号カマド全景（南から）

写真図版10　RA047住居跡（2）

3号カマド全景（南から）

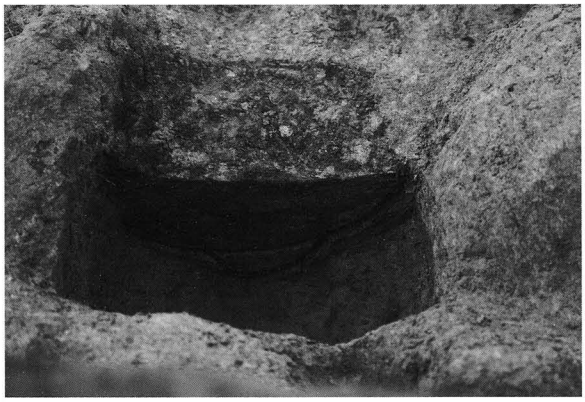
3号カマド断面（西から）

柱穴1

柱穴2

柱穴3

柱穴4



柱穴5

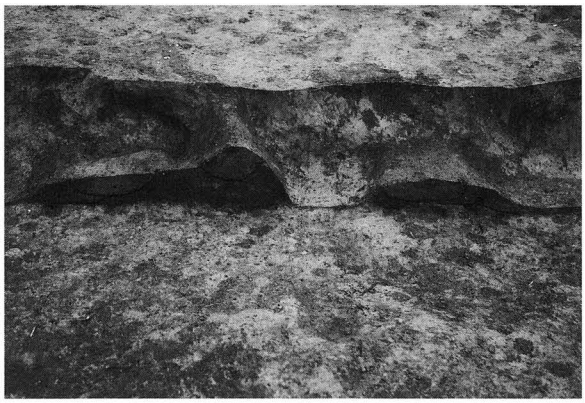
写真図版11　RA047住居跡（3）

全景（南から）

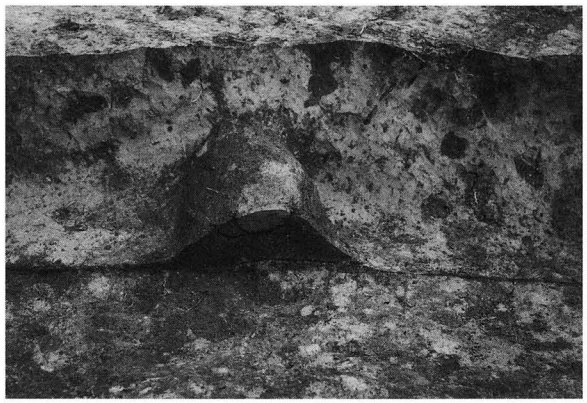
北側遺物出土状況（南から）

東側遺物出土状況（南から）

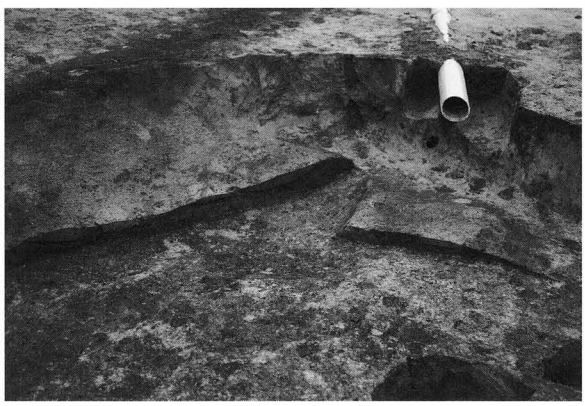
南側遺物出土状況（北から）



西側覆土焼土断面１



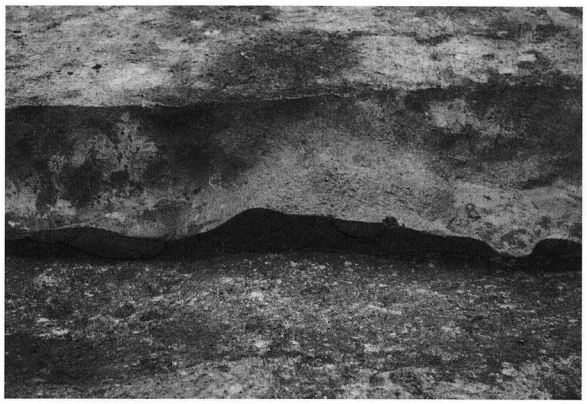
西側覆土焼土断面２



南側覆土焼土断面１

南側覆土焼土断面２

写真図版12　RA047住居跡（４）



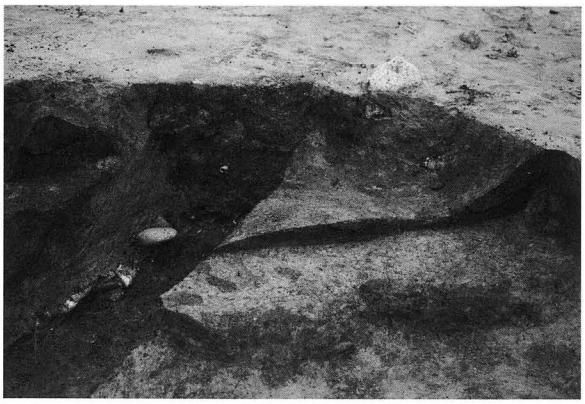
南側覆土焼土断面 3

南側覆土焼土断面 4

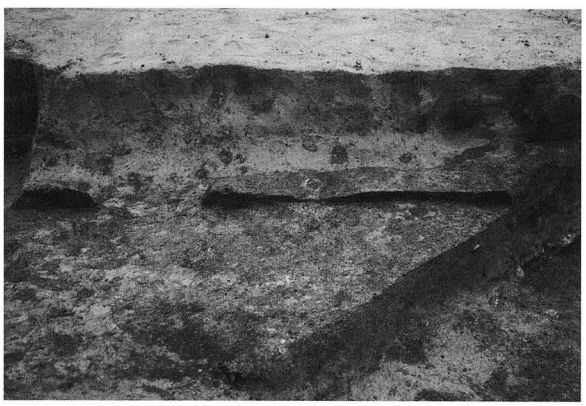
東側覆土焼土断面 1

東側覆土焼土断面 2

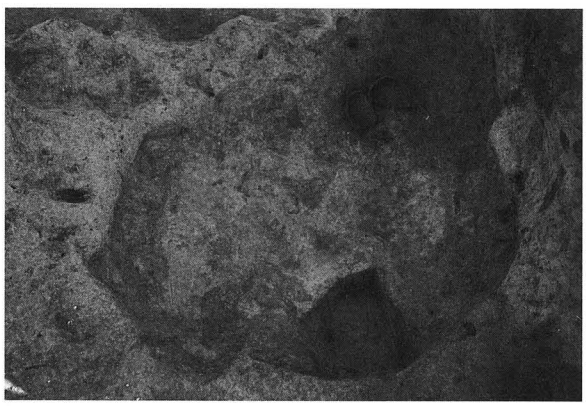
東側覆土焼土断面 3



北側覆土焼土断面 1

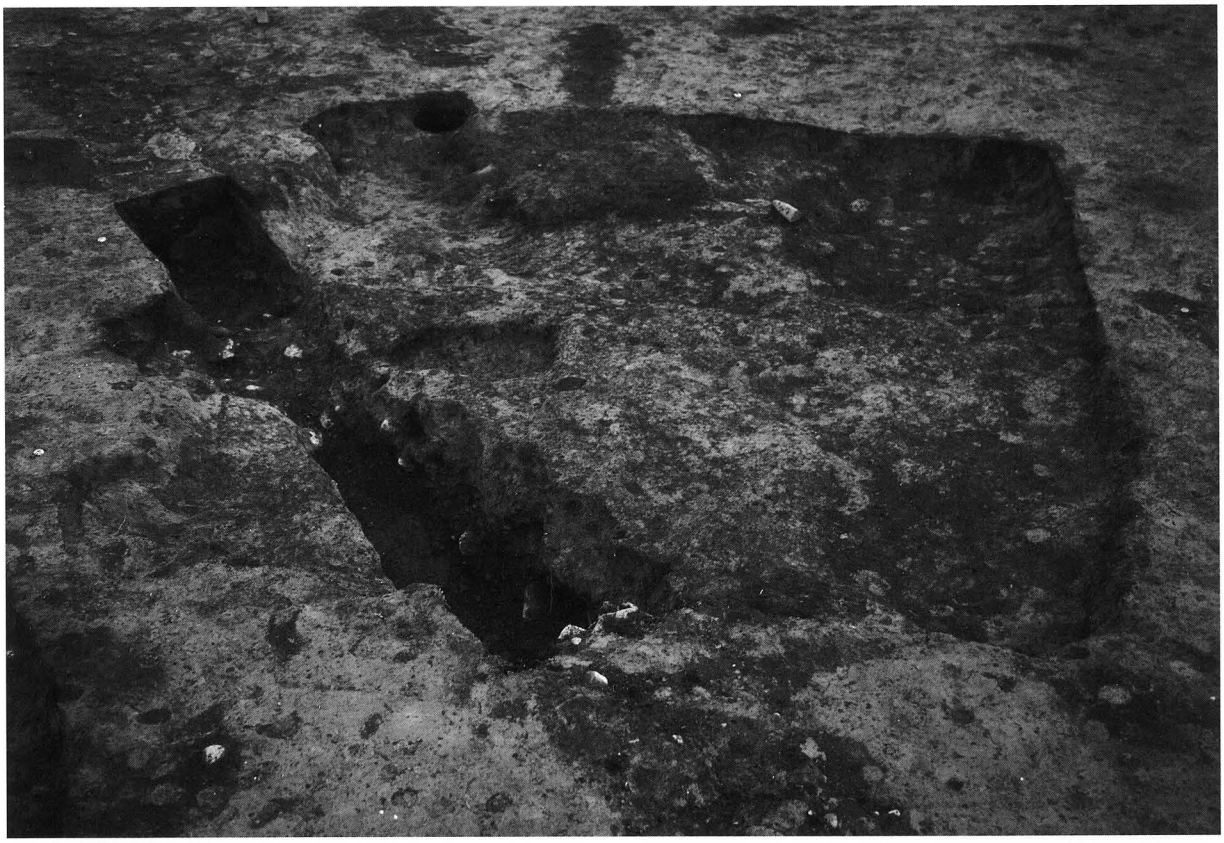


北側覆土焼土断面 2



床下土坑

写真図版13　RA047住居跡（5）



全景（西から）

覆土断面（南北）

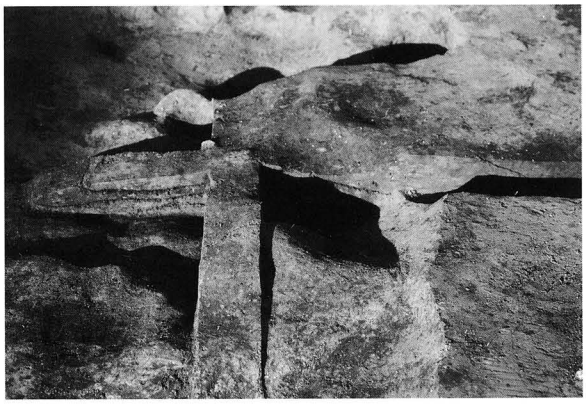
覆土断面（東西）

写真図版14　RA048住居跡（１）

1号カマド平面（西から）

調査風景

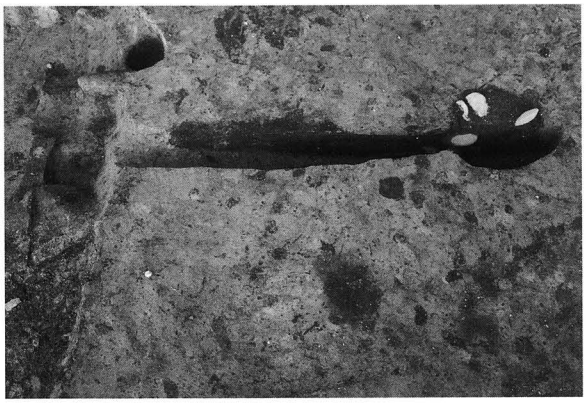
1号カマド覆土断面（南北）



1号カマド覆土断面（東西）

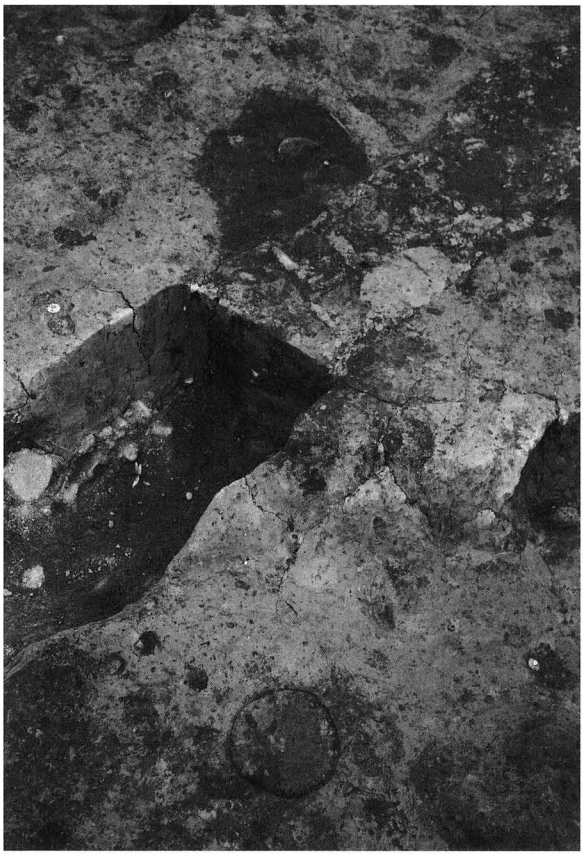
1号カマド全景（西から）

1号カマド断ち割り（南北）



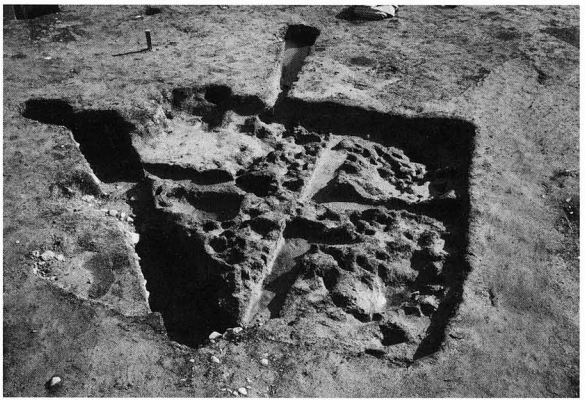
1号カマド断ち割り（東西）

写真図版15　RA048住居跡（２）

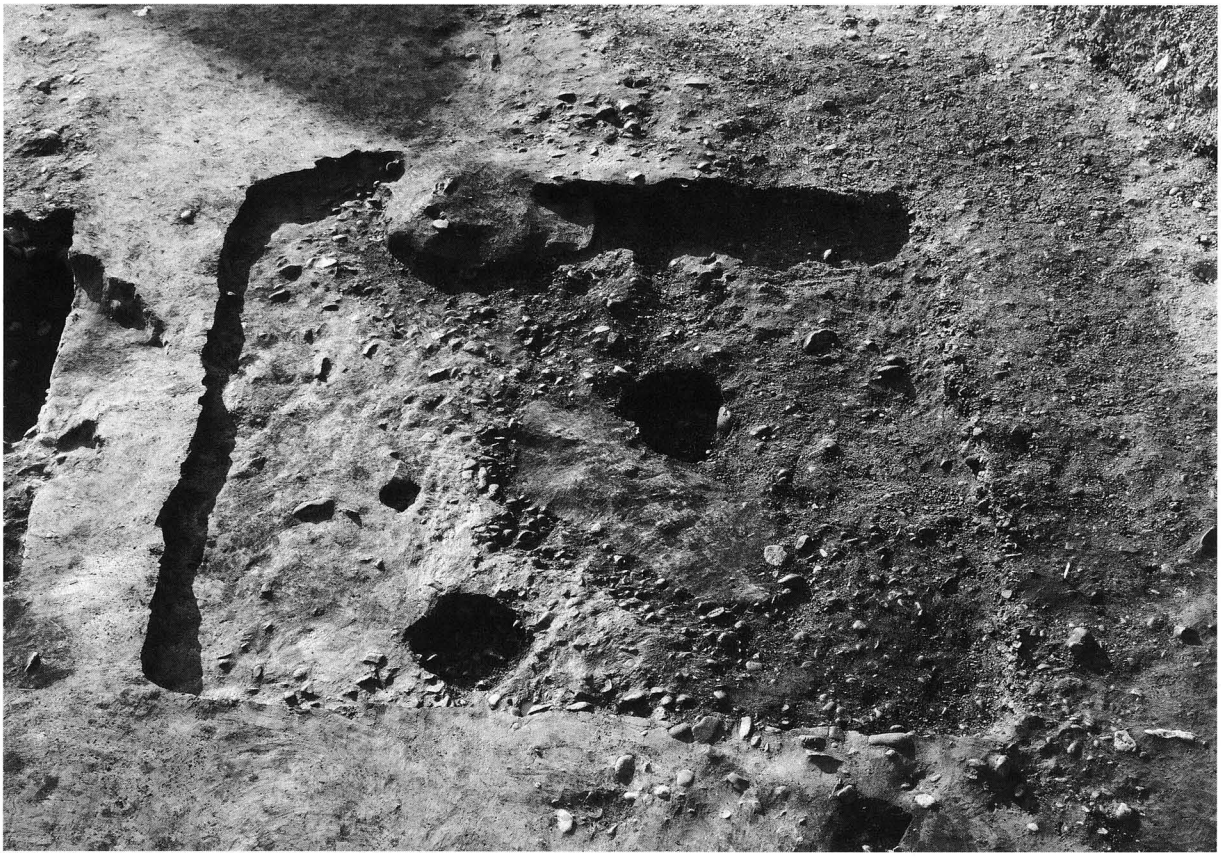


RA048住居跡２号カマド全景（南から）

RA048住居跡２号カマド断ち割り（北西から）

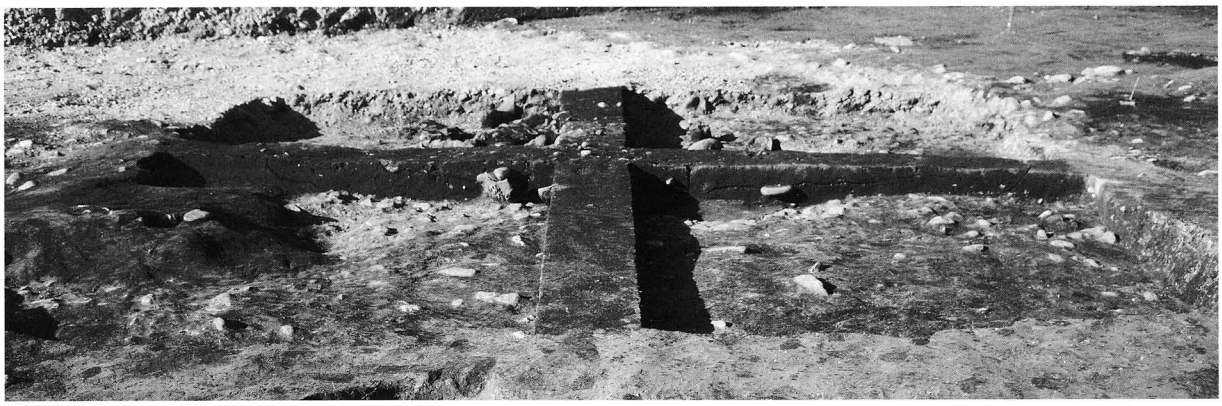


RA048住居跡掘り方（西から）

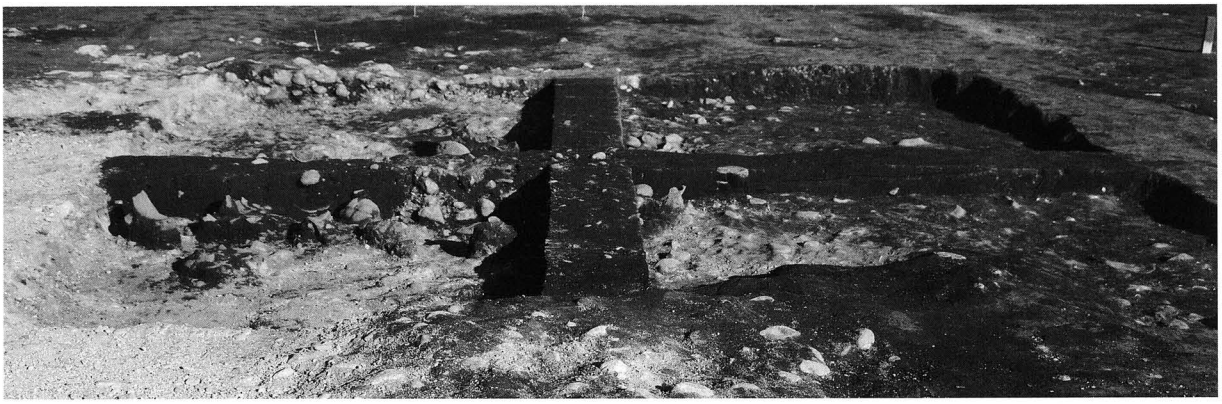


RA049住居跡全景（東から）

写真図版16　RA048住居跡（３）、RA049住居跡（１）



覆土断面（南北）



覆土断面（東西）

カマド平面（東から）

カマド覆土断面（南北）

カマド覆土断面（東西）

写真図版17　RA049住居跡（２）

カマド全景（東から）

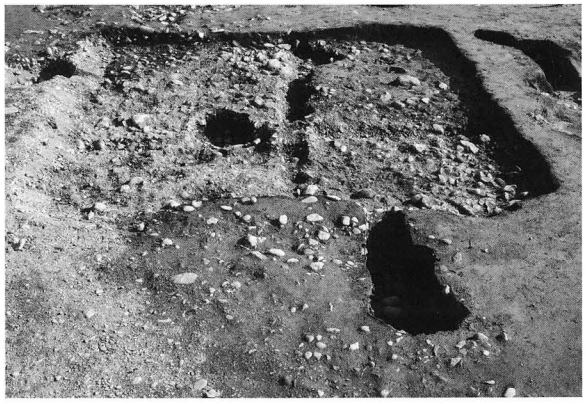
カマド断ち割り（南北）

カマド断ち割り（東西）

遺物出土状況（東から）

遺物出土状況近景（南から）

中央焼土断ち割り（東から）

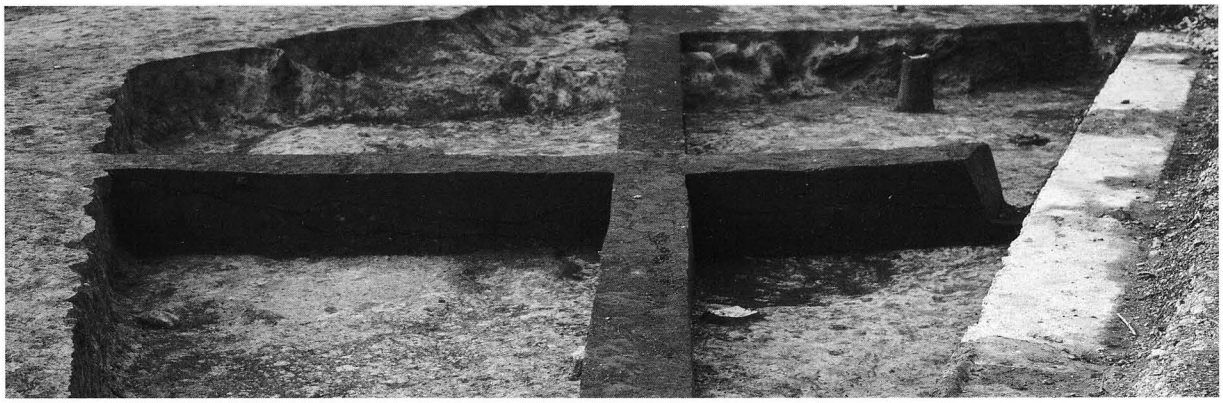


掘り方（西から）

写真図版18　RA049住居跡（３）

全景（北から）

覆土断面（南北）



覆土断面（東西）

写真図版19　RA050住居跡（１）

カマド全景（北から）

カマド近景

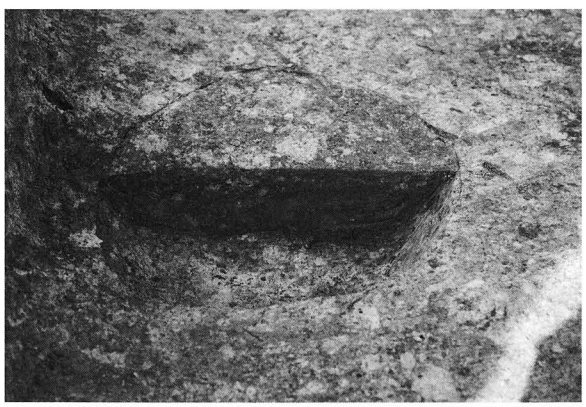
カマド焚口（北から）

カマド覆土断面（南北）

カマド覆土断面（東西）

柱穴１

柱穴２



柱穴３

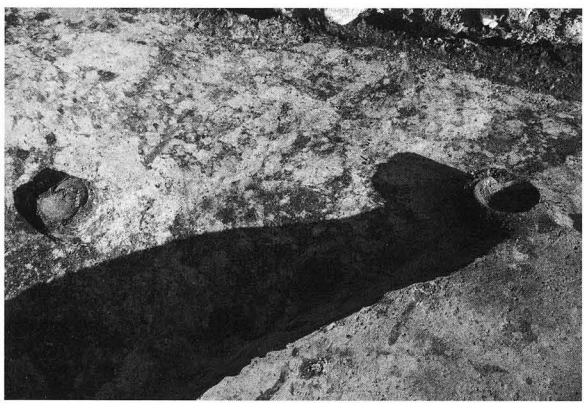
写真図版20　RA050住居跡（２）

RA050住居跡遺物出土状況

RA050住居跡遺物出土状況近景

RA051住居跡全景（西から）

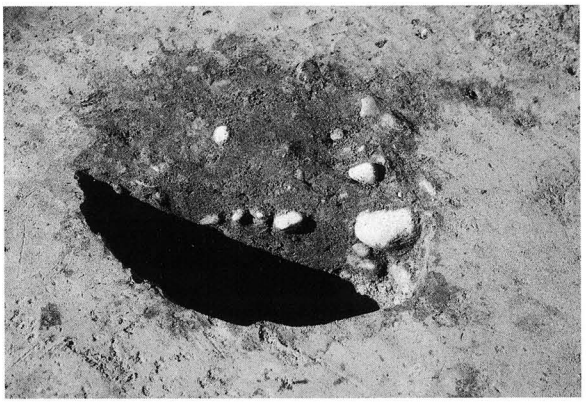
RA051住居跡覆土断面（南から）



RA051住居跡遺物出土状況

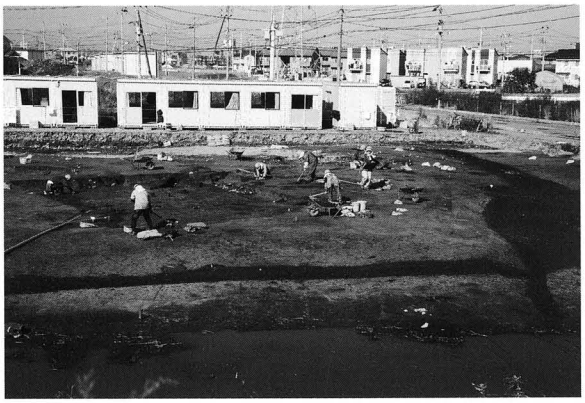
写真図版21　RA050住居跡（３）、RA051住居跡

RB009掘立柱建物跡全景（南東から）



柱穴１

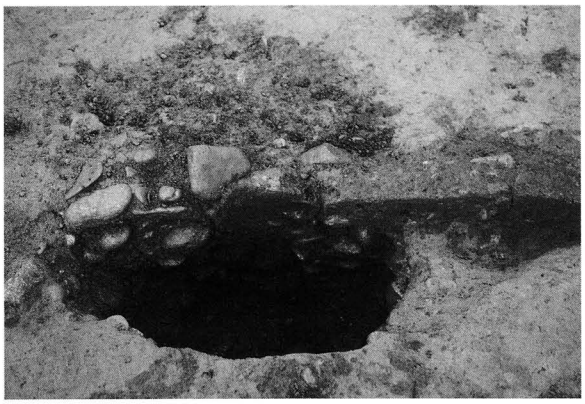
柱穴２



調査風景

RB019掘立柱建物跡全景（東から）

写真図版22　RB009掘立柱建物跡、RB019掘立柱建物跡（１）



柱穴 1

柱穴 2

柱穴 3

柱穴 4

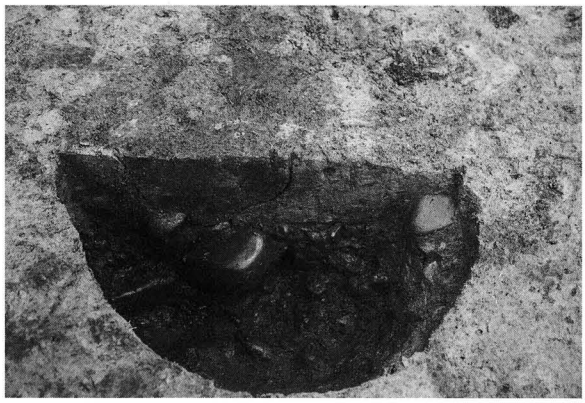
柱穴 5

柱穴 6

柱穴 7

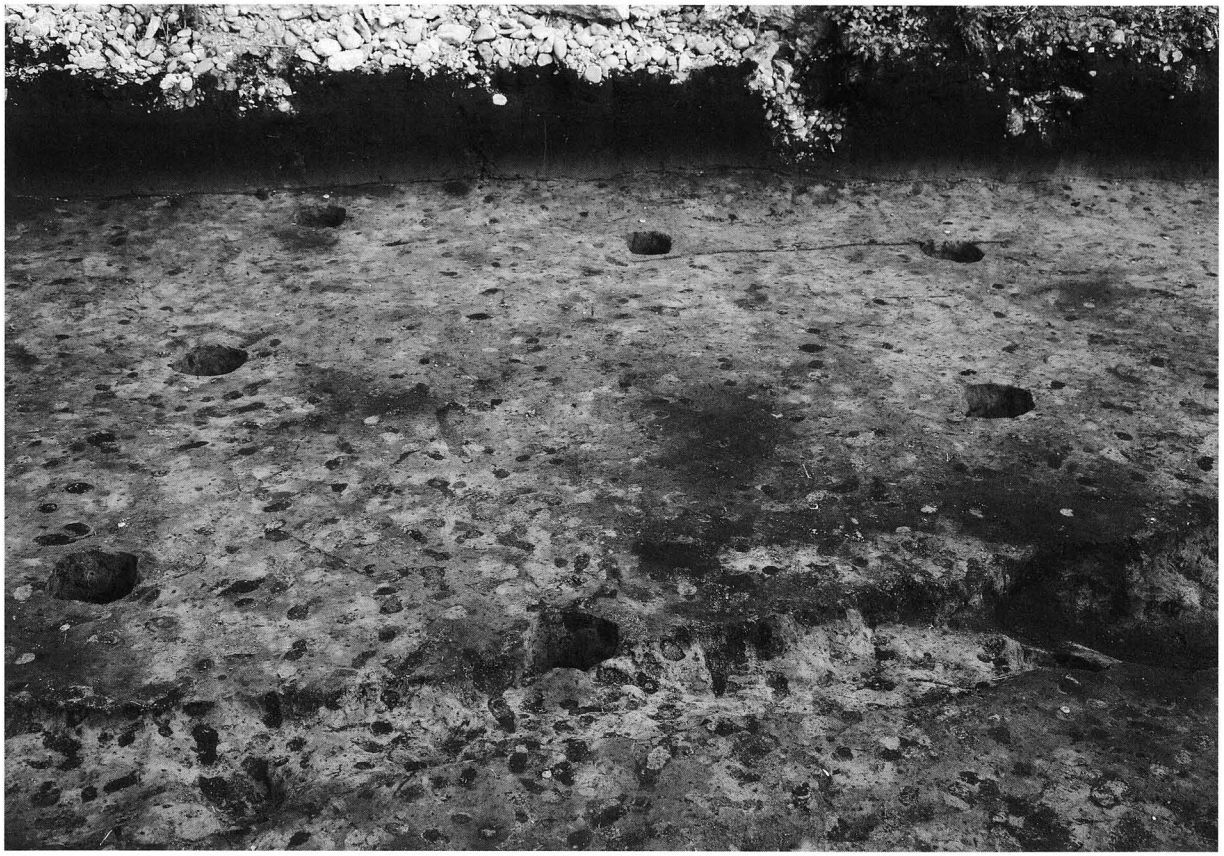
柱穴 8

写真図版23　RB019掘立柱建物跡（２）

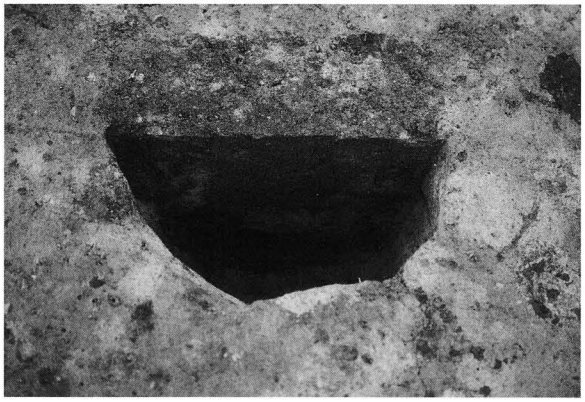


RB019掘立柱建物跡柱穴 9

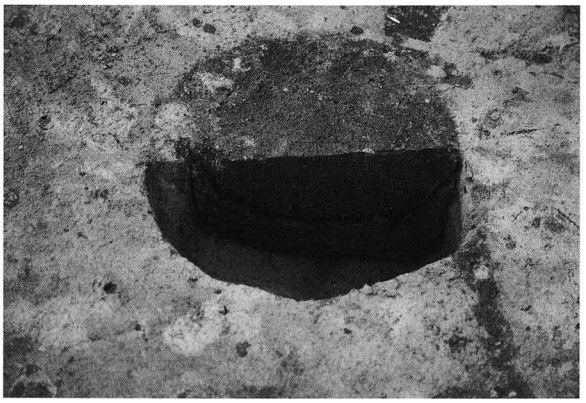
RB019掘立柱建物跡平面



RB020掘立柱建物跡全景（西から）



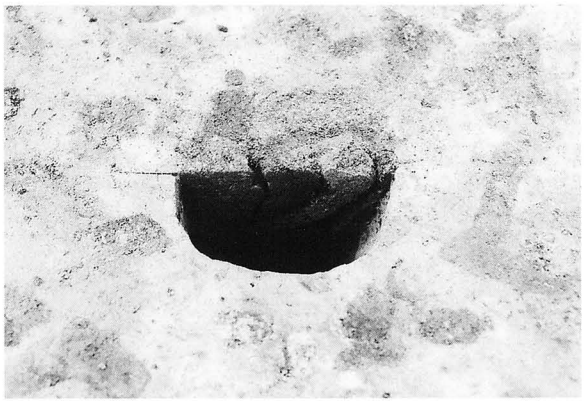
RB020掘立柱建物跡柱穴 1



RB020掘立柱建物跡柱穴 2

写真図版24　RB019掘立柱建物跡（３）、RB020掘立柱建物跡（１）

柱穴 3

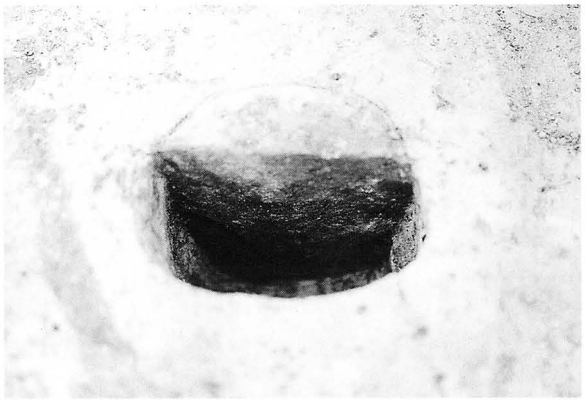


柱穴 4

柱穴 5

柱穴 6

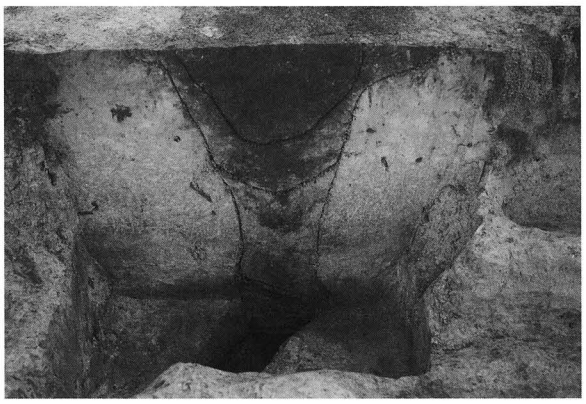
柱穴 7



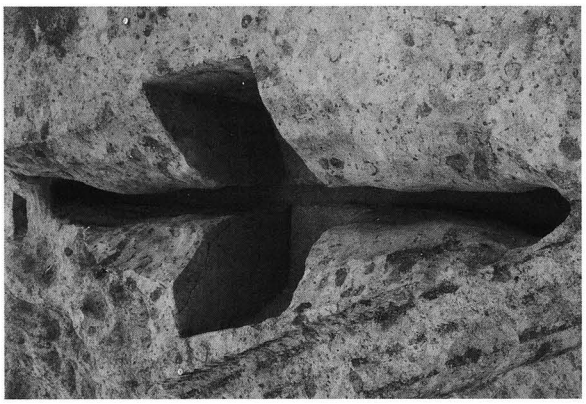
柱穴 8

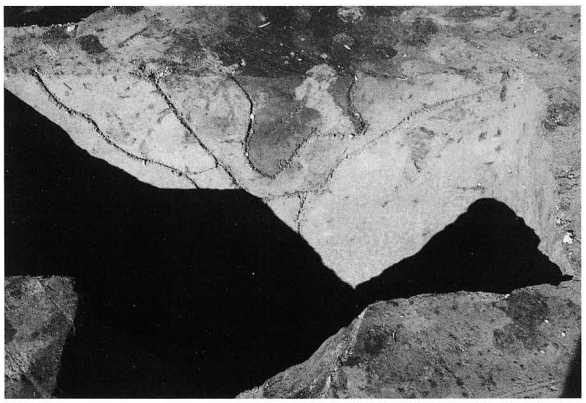
調査風景

写真図版25　RB020掘立柱建物跡（２）

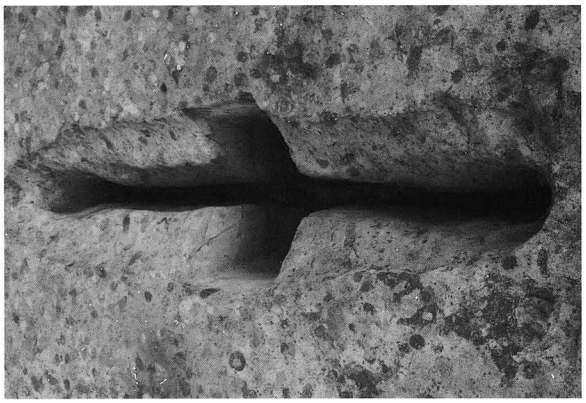


RD160土坑





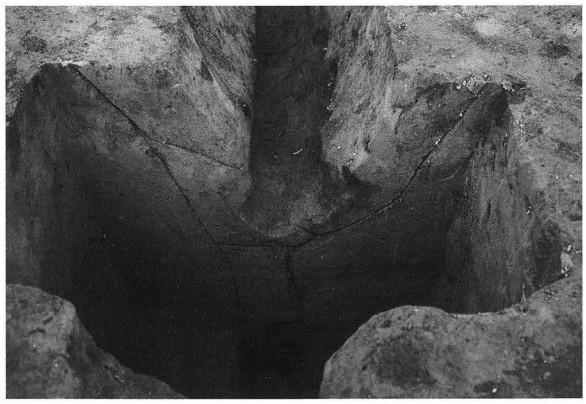
RD161土坑



RD162土坑平面

調査風景

RD162土坑断面



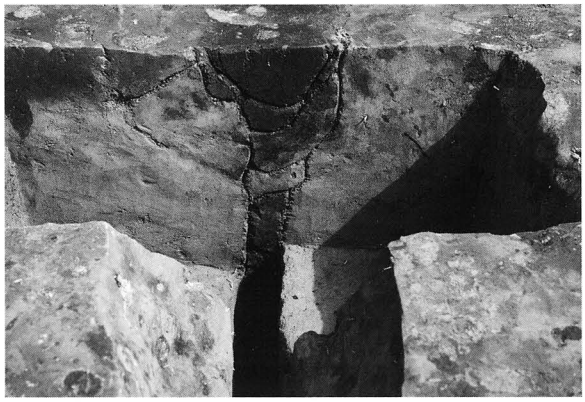
RD162土坑断面付け足し

写真図版26　RD160～162土坑

RD163土坑

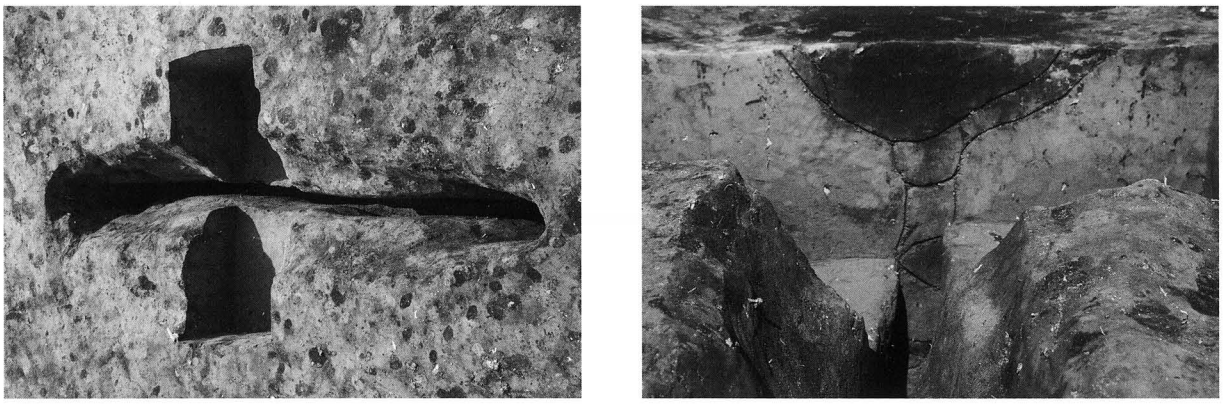
RD164土坑

RD165土坑

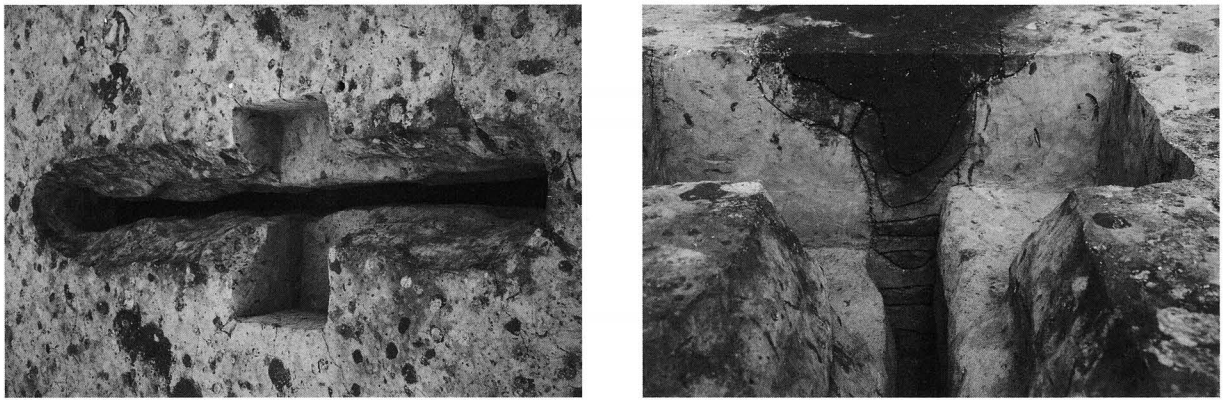


RD166土坑

写真図版27　RD163～166土坑

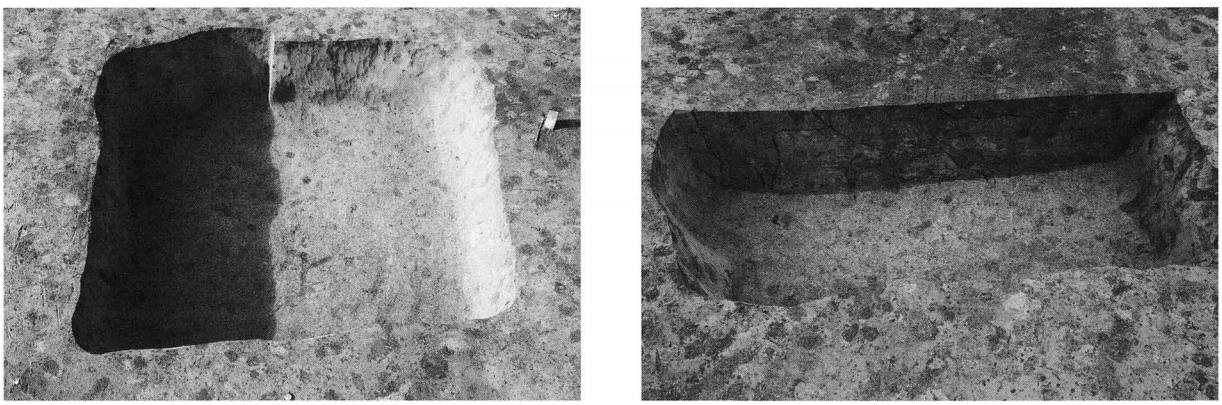


RD167土坑



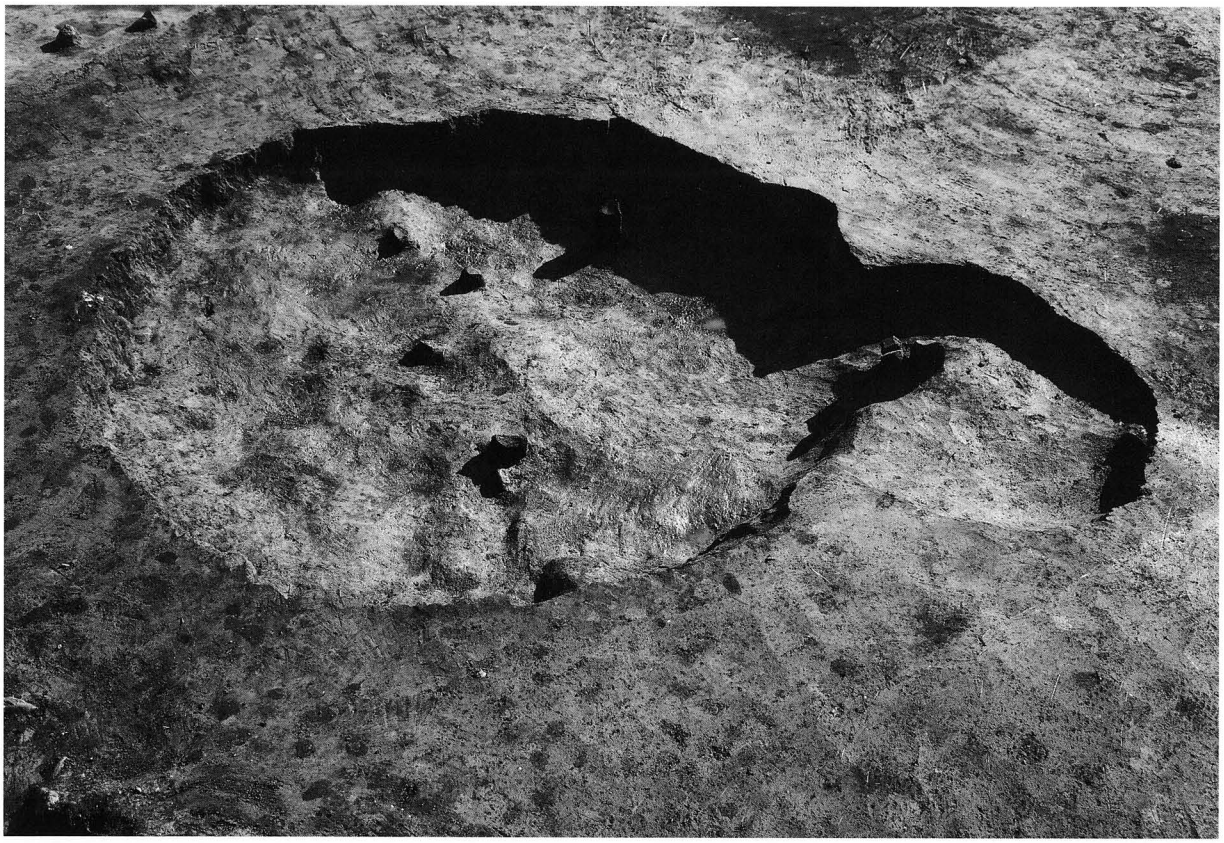
RD168土坑

RD169土坑

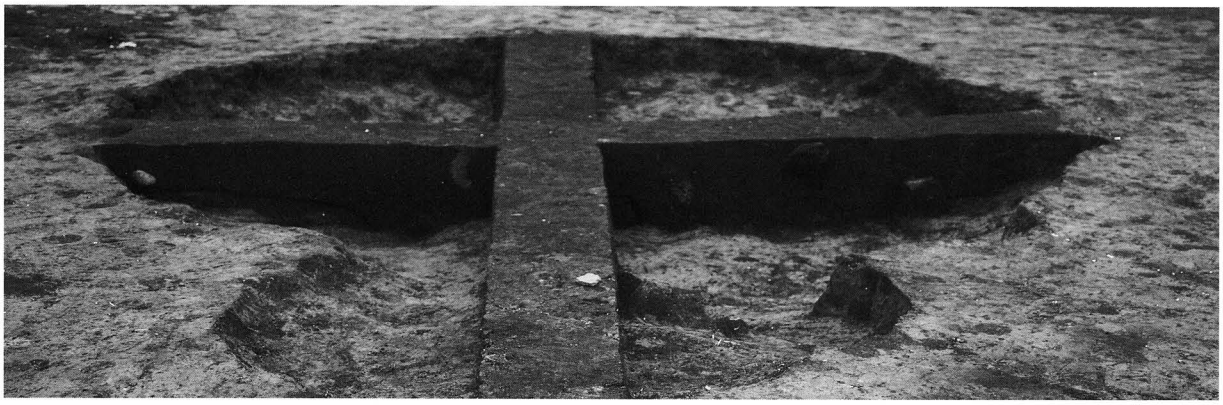


RD170土坑

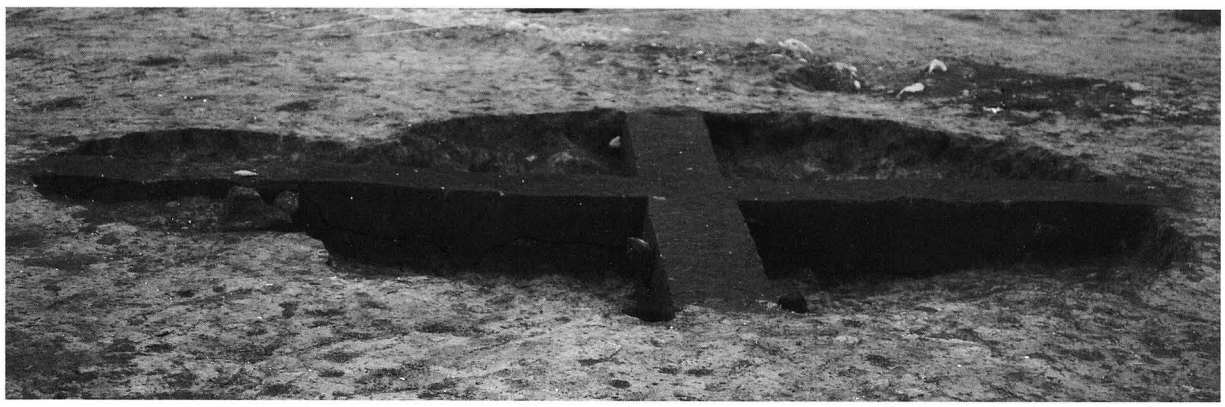
写真図版28　RD167～170土坑



全景（北から）

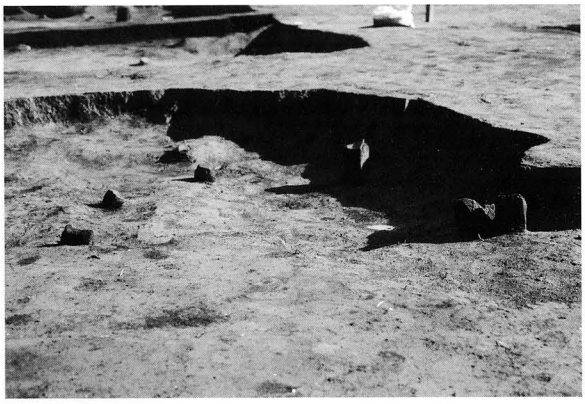


覆土断面（南北）



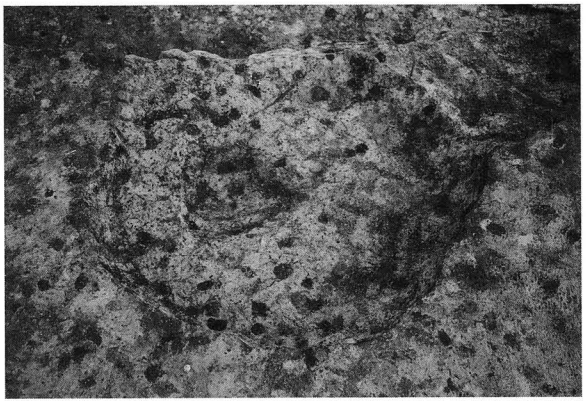
覆土断面（東西）

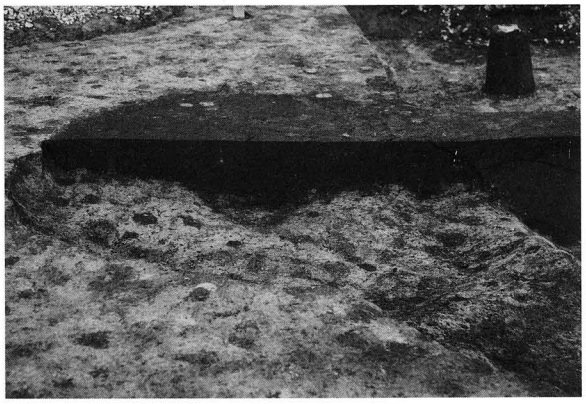
写真図版29　RD171土坑（１）



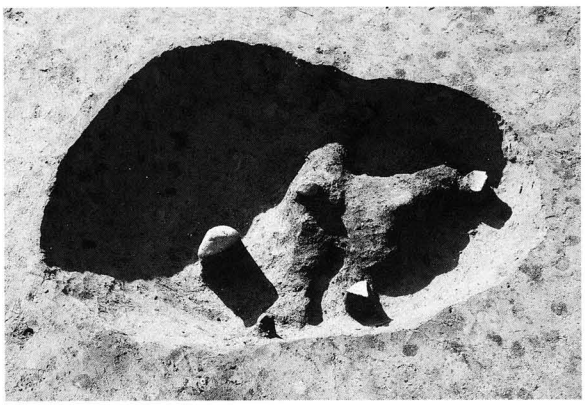
RD171土坑遺物出土状況（北から）

調査風景





RD172土坑



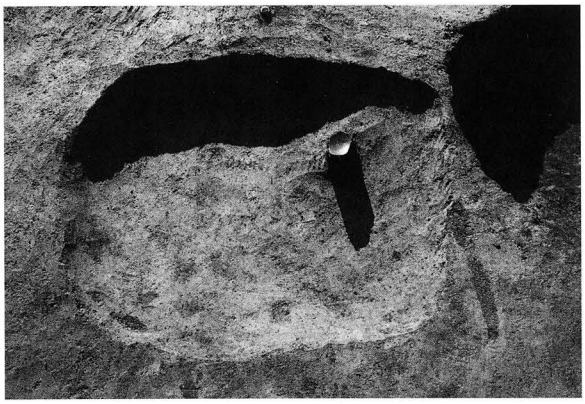
RD173土坑

RD173土坑焼土・炭化物近景（西から）

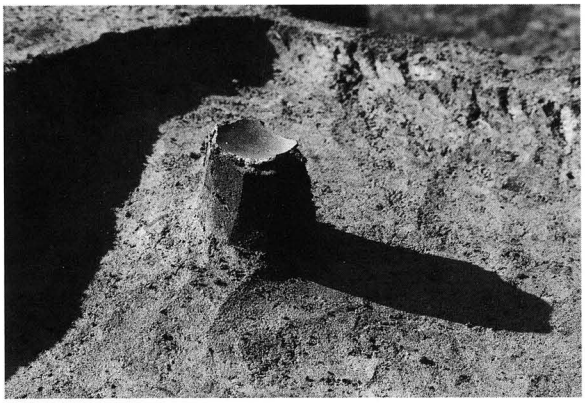
RD173土坑焼土断面（南から）

写真図版30　RD171土坑（２）、RD172・173土坑

RD174土坑

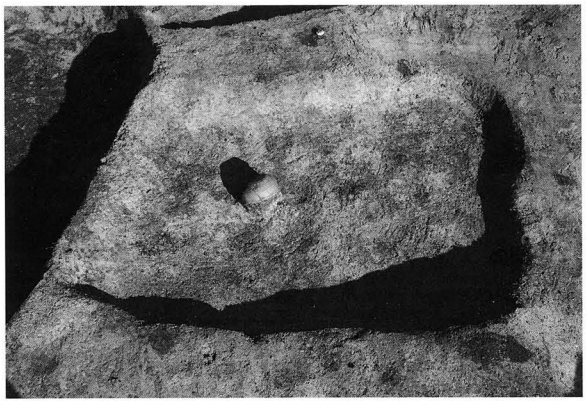
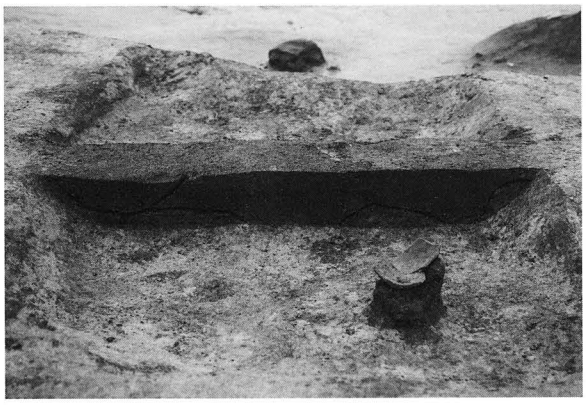


RD175土坑



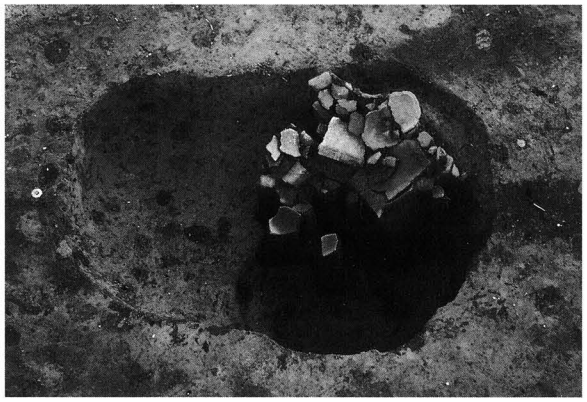
RD175土坑遺物近景

RD176土坑遺物近景

RD176土坑

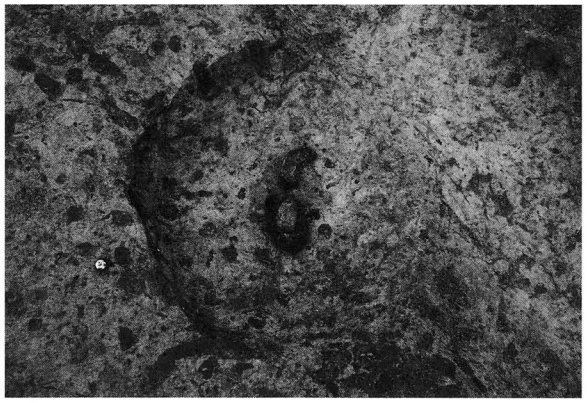
写真図版31　RD174～176土坑



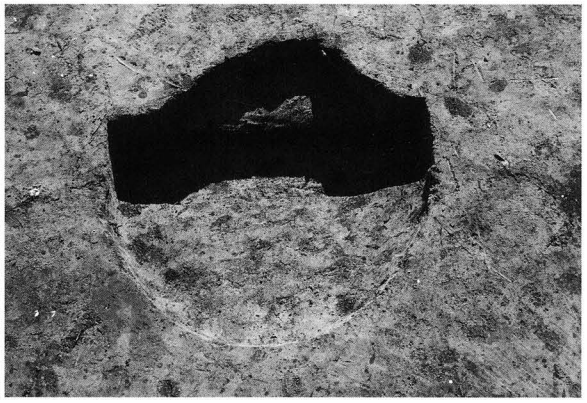
RD177土坑

RD177土坑遺物近景

RD178土坑遺物近景

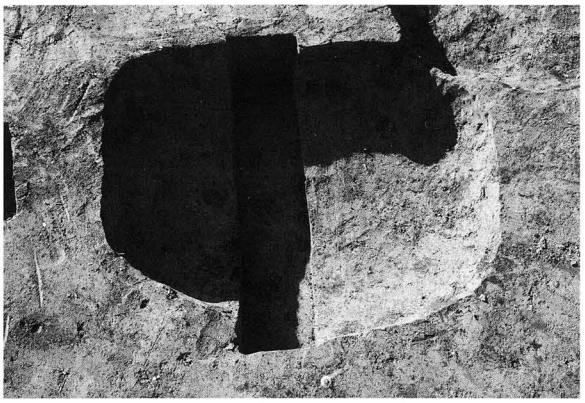


RD178土坑



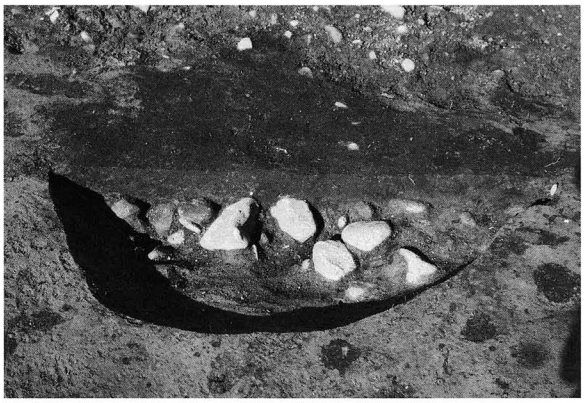
RD179土坑

写真図版32　RD177～179土坑



RD180土坑

RD181土坑

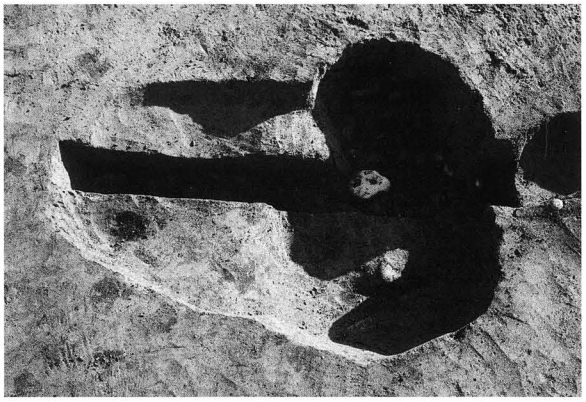


RD182土坑

RD183土坑

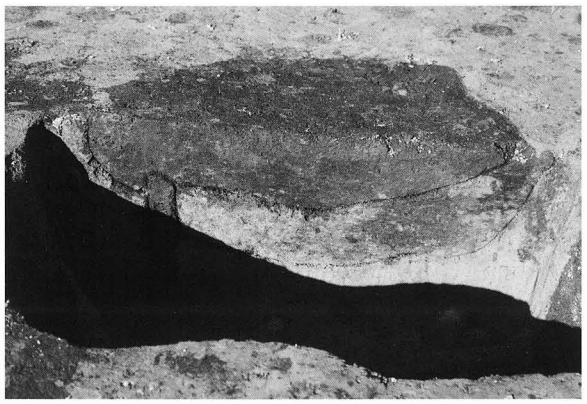
写真図版33　RD180～183土坑

RD184土坑



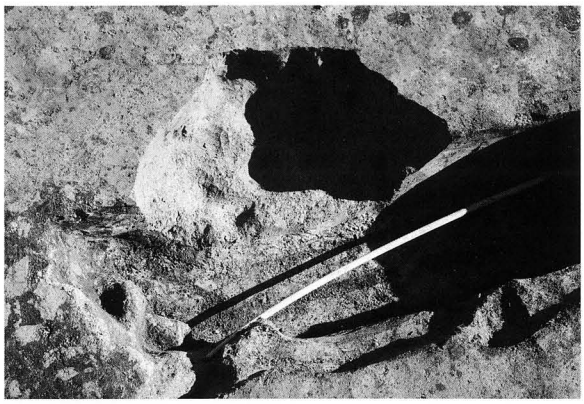
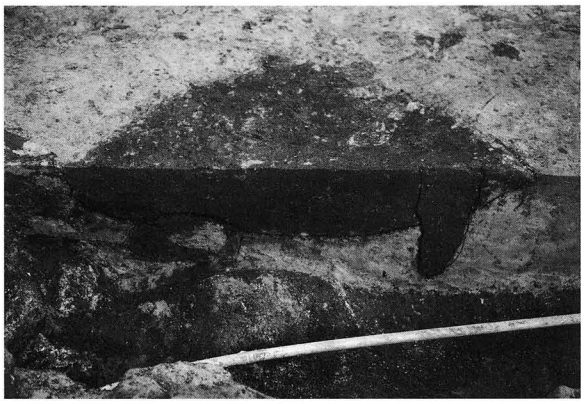
RD185土坑

RD186土坑

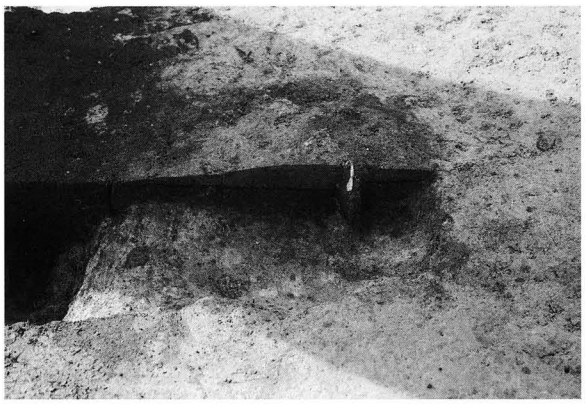


RD187土坑

写真図版34　RD184～187土坑

RD188土坑



RD189土坑

RD190土坑

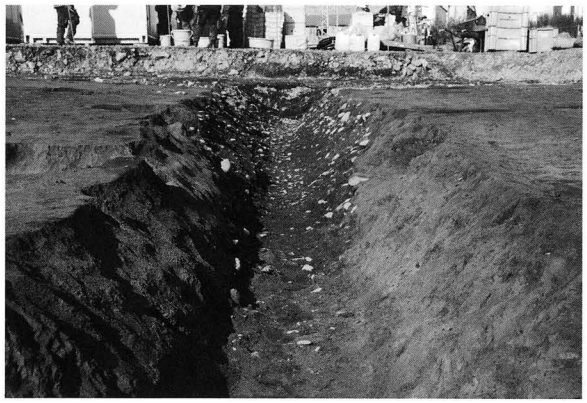
調査風景

写真図版35　RD188～190土坑

平面東側（南から）

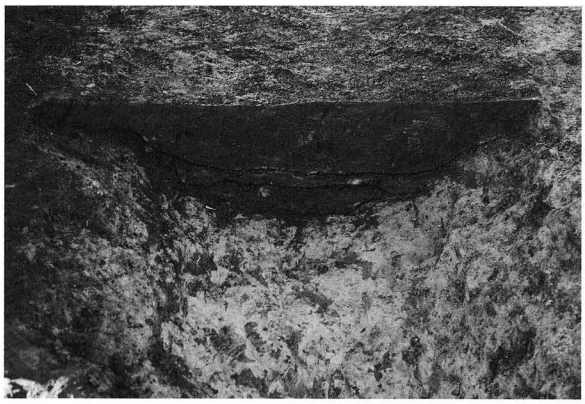
平面西側（南から）

写真図版36　RG039溝跡（１）

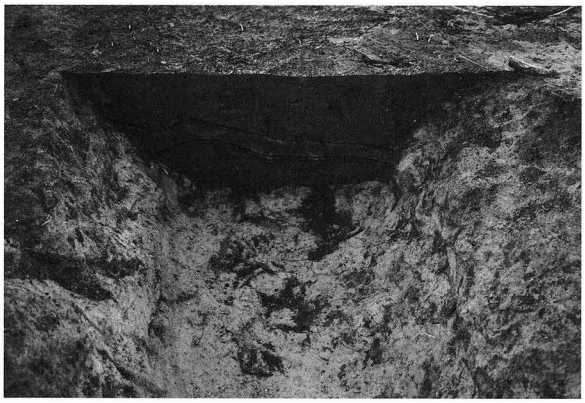


北東側近景（南から）

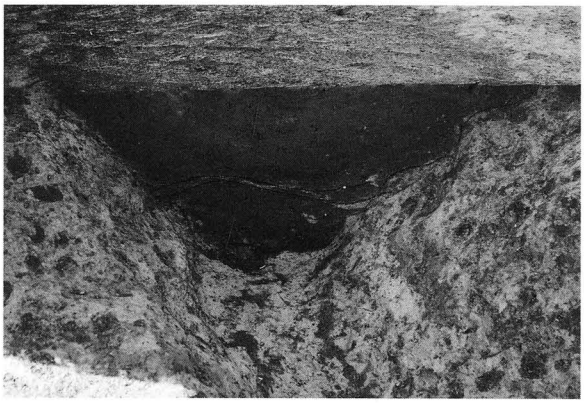
南側近景（東から）



覆土断面A—A′（東から）

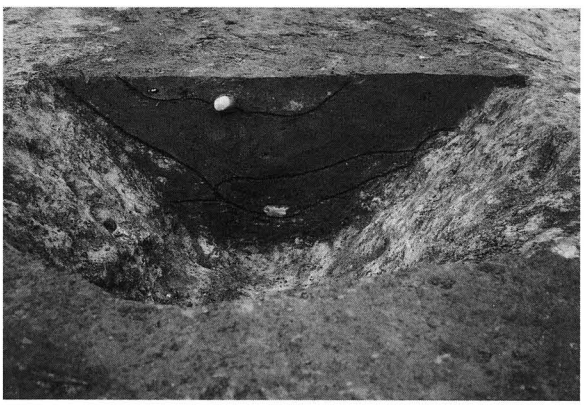


覆土断面B—B′（東から）



覆土断面C—C′（東から）

覆土断面D—D′（南から）



覆土断面E—E′（南から）

覆土断面F—F′（南から）

写真図版37　RG039溝跡（2）

RG062溝跡全景（北西から）

RG062溝跡覆土断面（南から）

調査風景

旧河道（才川）とRG039溝跡（西から）

旧河道（才川）とRG039溝跡（東から）

旧河道（才川）中央トレンチ（南から）

旧河道（才川）東側トレンチ（南から）

写真図版38　RG062溝跡、旧河道（才川）

東区全景（南から）

西区全景東側（南西から）

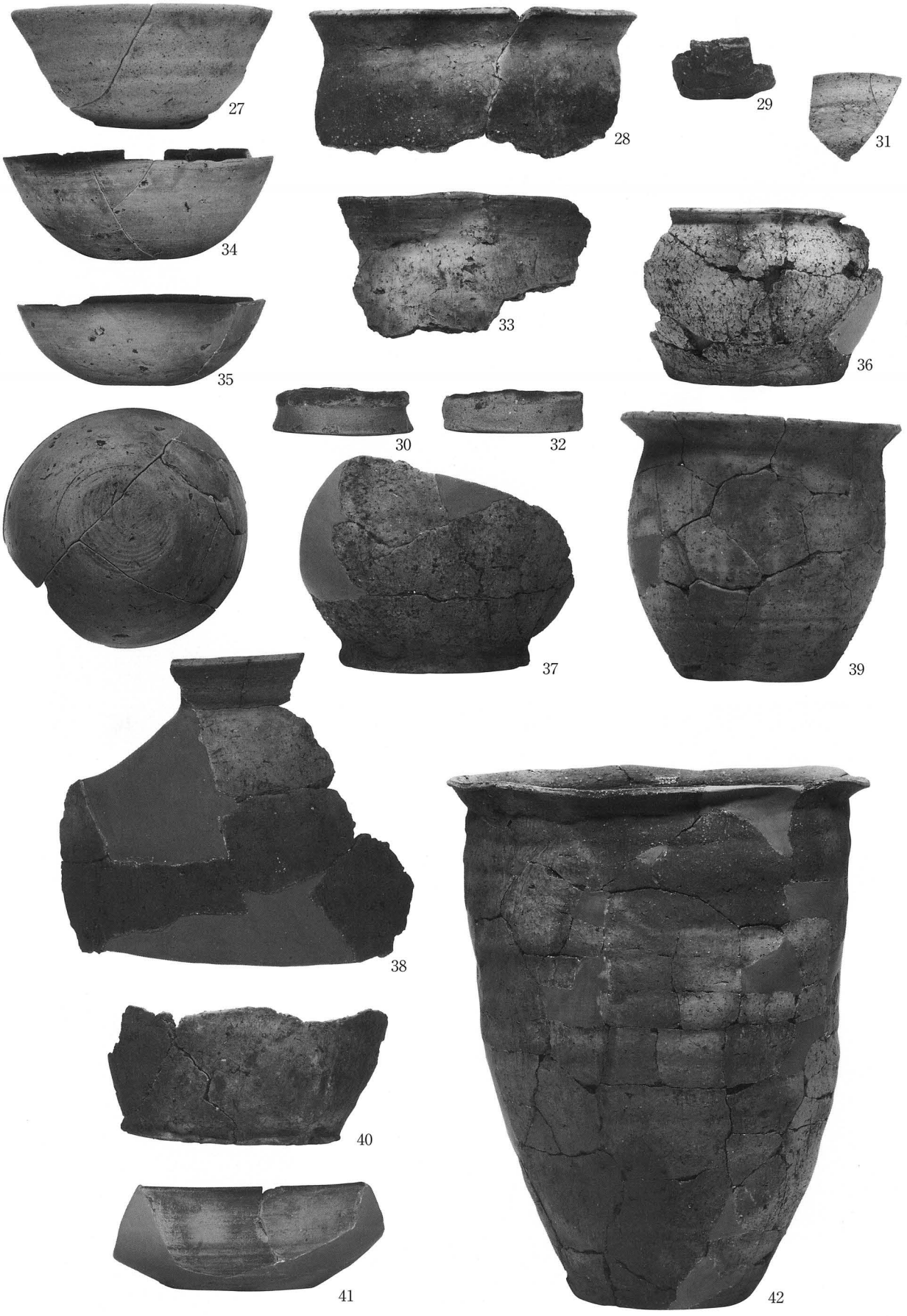
写真図版39　調査区全景（１）

西区全景中央（南西から）

西区全景西側（南から）

写真図版40　調査区全景（２）

写真図版41　土師器（1）

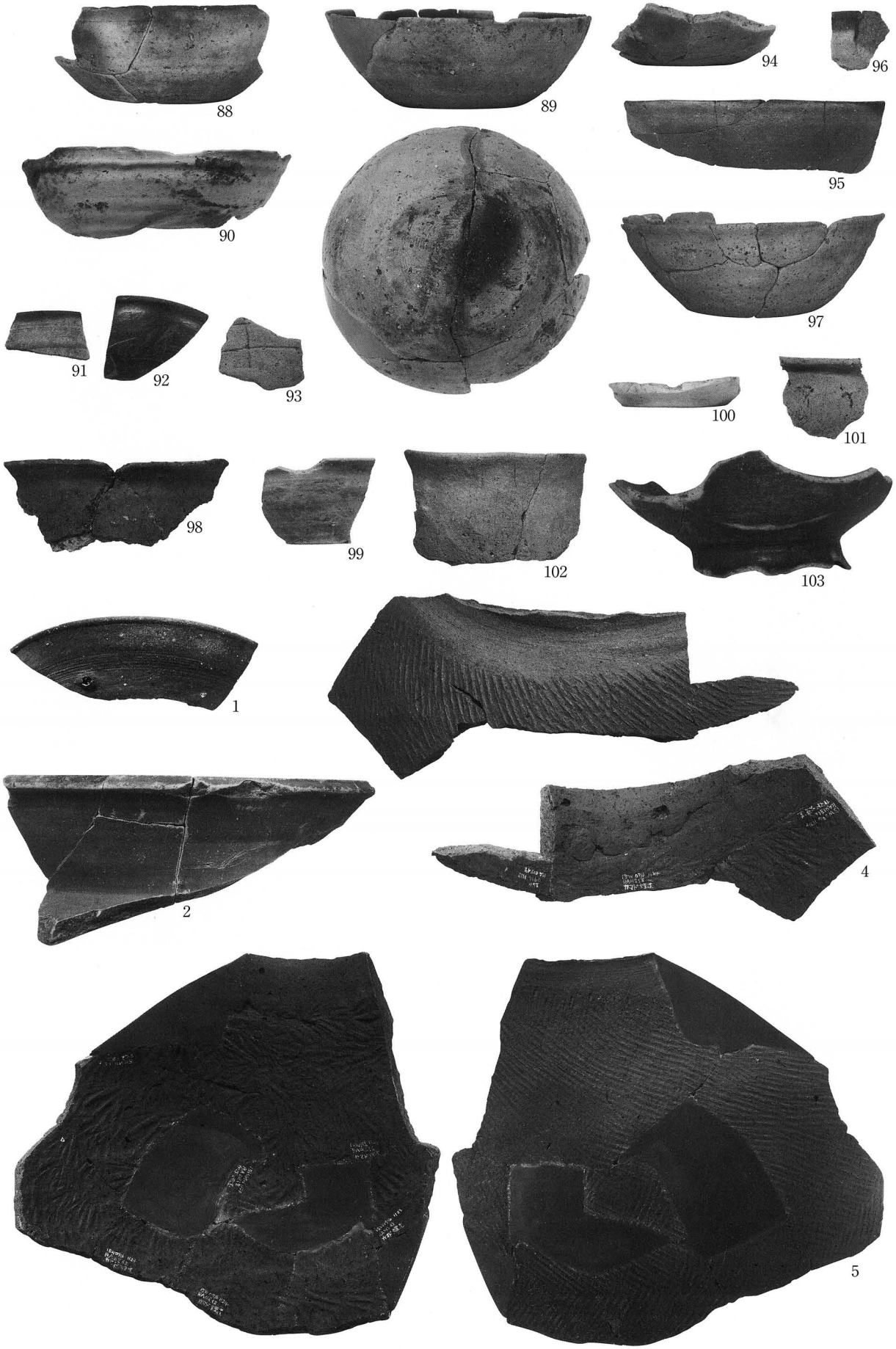


写真図版42　土師器（２）

写真図版43　土師器（３）

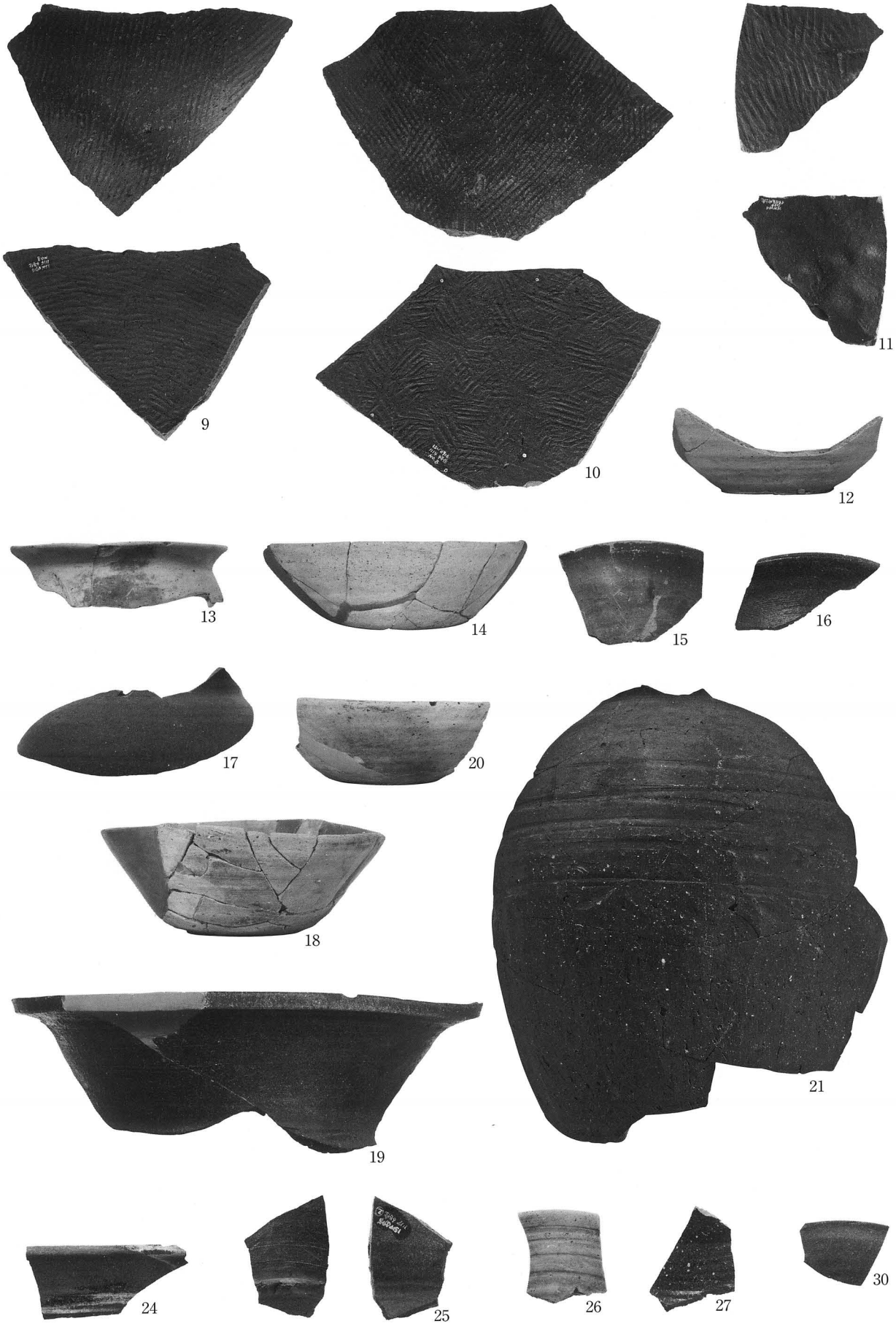
61
62
64
65
63
66
67
68
69
70
72
71
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
87
86

写真図版44　土師器（4）

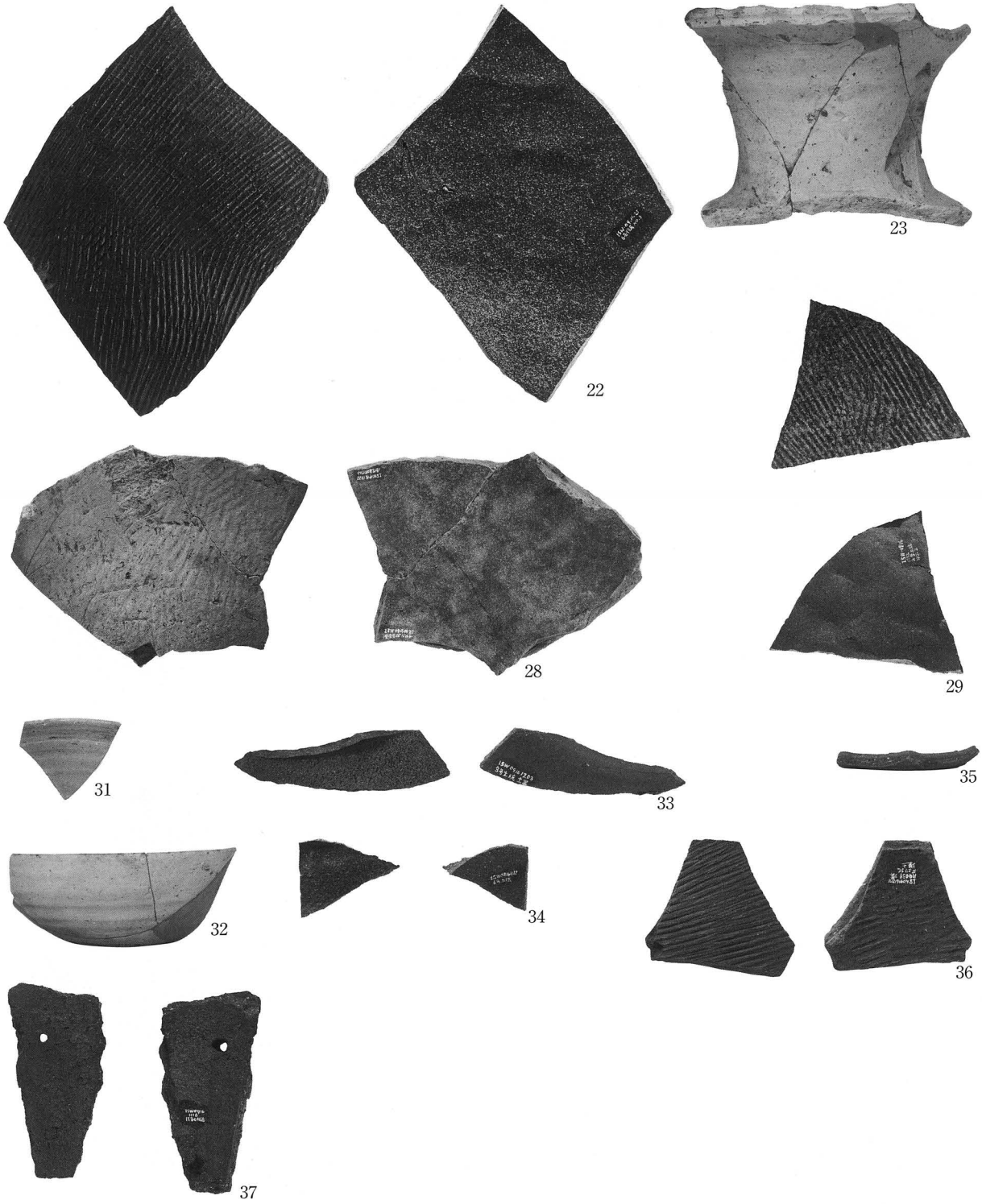


写真図版45　土師器（5）、須恵器（1）

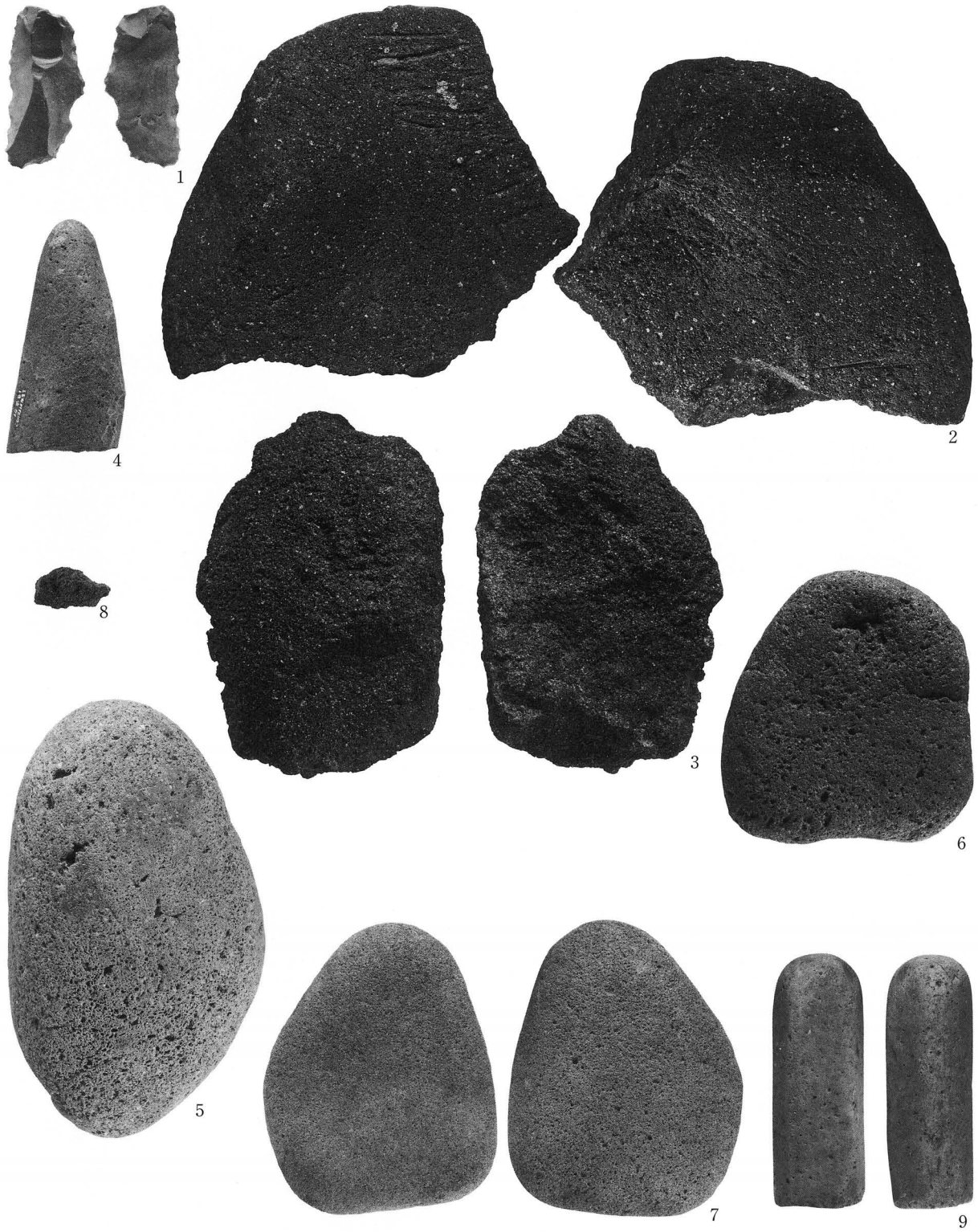
写真図版46　須恵器（2）



写真図版47　須恵器（3）

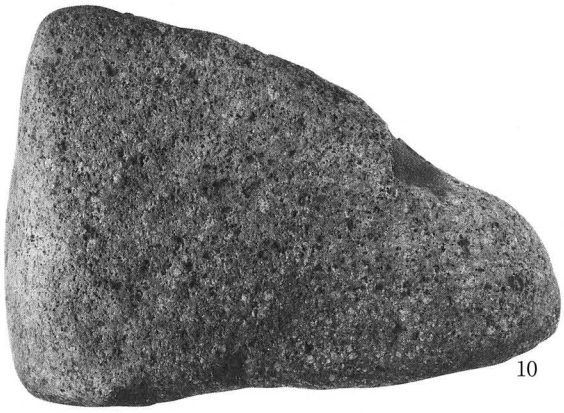


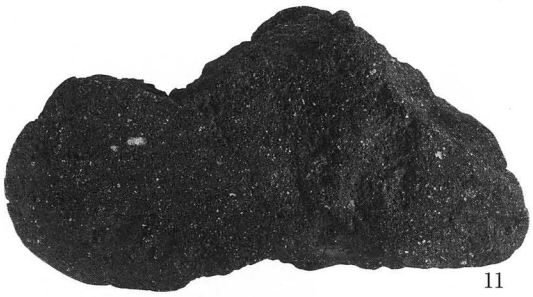
写真図版48　須恵器（4）

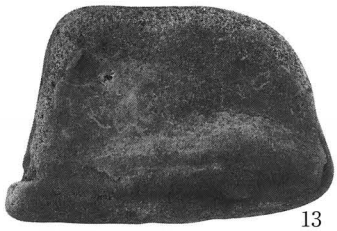


No.	出土地点・層位	器　種	最大計測値cm			重量（g）	石　質（産地）	残存状況	備　考	図の有無	本文記載
			長さ	幅	厚さ						
1	-1I16r付近	掻・削器	5.2	2.4	0.7	13.3	頁岩（奥羽山脈・新生代新第三紀）	完形		60図	
2	RA047住居跡No.4	砥石	22.2	18.0	9.0	1930.5	安山岩（奥羽山脈・新生代第四紀）	欠損	磨面と傷状擦痕・石皿状	60図	
3	RA047住居跡No.28	砥石	17.0	11.7	4.3	527.2	安山岩（奥羽山脈・新生代第四紀）	破片	石皿状	60図	
4	RA048住居跡S1	砥石？？	11.5	5.5	4.2	346.2	未鑑定	欠損	磨面？・棒状		
5	RA049住居跡石No.1	砥石？	21.2	13.0	11.3	3458.7	安山岩（奥羽山脈・新生代第四紀）	完形	磨面？・ラグビーボール状		
6	RA049住居跡(石)No.2	砥石？	13.2	12.0	5.0	1354.3	安山岩（奥羽山脈・新生代第四紀）	完形	磨面→窪み・厚め石皿状	60図	
7	RA049住居跡ベルト	砥石？	14.2	11.3	2.3	665.7	デイサイト（奥羽山脈・新生代新第三紀）	完形	磨面→窪み・石皿状	60図	
8	RA050住居跡No.12	砥石？	3.4	1.4	1.5	4.6	未鑑定だが、安山岩	小片	石皿状？		
9	RA050住居跡No.15	砥石？	11.9	4.5	3.6	393.4	デイサイト（奥羽山脈・新生代新第三紀）	欠損	磨面？・角棒状・欠損面剥離痕？	60図	

写真図版49　石器（1）

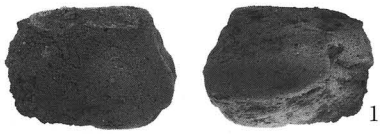

10


11


13

12

No.	出土地点・層位	器　種	最大計測値cm			重量（g）	石　質（産地）	残存状況	備　考	図の有無	本文記載
			長さ	幅	厚さ						
10	RA050住居跡No.21	砥石？	20.2	14.8	9.9	3123.2	デイサイト（奥羽山脈・新生代新第三紀）	完形	磨面→窪み・不整石皿状	60図	
11	RA050住居跡カマド	砥石	20.0	10.5	11.3	1544.2	安山岩（奥羽山脈・新生代第四紀）	破片	磨面→窪み・石皿状		
12	RA050住居跡カマド	砥石	21.0	19.2	11.7	3450.1	安山岩（奥羽山脈・新生代第四紀）	破片	磨面→窪み・石皿状		
13	RD171土坑	砥石？？	12.2	8.2	3.4	443.6	砂岩・頁岩互層（奥羽山脈・新生代新第三紀）	完形	磨面？・板状		


1

2

3

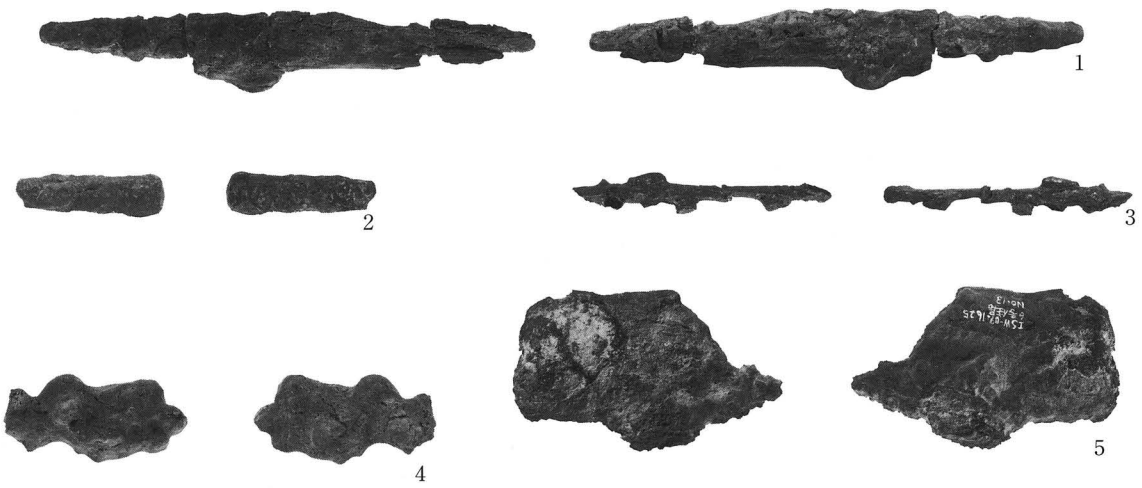
4

5

6

No.	出土地点・層位	種　類	残存状況	重量（g）	特　徴	図の有無	本文記載
1	RA047住居跡④	フイゴ羽口	破片	20.0	外面還元状態で灰色・付着物は鉄さび（後代付着？）	60図	
2	-1I25p付近	不明	破片	3.3	小型土器口縁状・内面指紋・胎土良好・焼成緻密	60図	
3	RA047住居跡②	焼粘土塊	（集合）	120.0	オレンジ色・板状主		
4	RA048住居跡④	焼粘土塊		1.4	表面丸み滑らか		
5	RG039溝跡F断面	焼粘土塊		11.6	表面滑らか・肌色板状だが、やや重い		
6	RA008住居跡カマド煙出	不明		8.5	多孔質で非常に軽い・高温度で焼成？・表面灰色		

写真図版50　石器（2）、土製品



No.	出土地点・層位	種類	残存状況	最大計測値cm			重量（g）	備　考	図の有無	本文記載
				長さ	幅	厚さ				
1	RA047住居跡・No.25	刀子	先端、基部？欠損	12.9	1.3	0.4	17.6	錆び膨れひどい・柄木一部残る	60図	
2	RA047住居跡ベルト	刀子	身破片	3.7	0.9	0.3	3.1		60図	
3	RA047住居跡・No.26	釘？	両端欠損	6.2	0.3	0.3	3.2	錆び膨れひどく、欠損部しっかり接合しない	60図	
4	RA047住居跡③	鉄滓					11.9			
5	RA050住居跡・No.13	鉄滓					60.3	表面赤さび		

写真図版51　鉄製品

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第580集

飯岡才川遺跡第16次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

印　刷　平成23年２月23日
発　行　平成23年２月28日

編　集　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話（019）638－9001

発　行　盛岡市都市整備部盛岡南整備課
〒020-8531　岩手県盛岡市津志田14地割37番地2号
電話（019）651－4111
(財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023　岩手県盛岡市内丸13番1号
電話（019）654－2235

印　刷　有限会社セーコー印刷
〒020-0877　岩手県盛岡市下の橋町2番地23号
電話（019）651－3606

©(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2011